
神の暇つぶし 吸血鬼の饗宴 ~ Le Festin de Vampire.

七篠言平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の暇つぶし 吸血鬼の饗宴
Le Festin de vampire.

【Nコード】

N0560P

【作者名】

七篠言平

【あらすじ】

別に神の手違いという訳でもなく、ただ本当の偶然に死んでしまった主人公は、何時の間にか自らを神と名乗る学校の親友と二人だけで其処に”存在”していた。

彼は転生を許可され、吸血鬼の少女として再び異世界で人生(?)を歩むこととなる。

■ 少しずつ最強系。

■ 主人公の絵が入りました！

【現在全面改定中（6 / 1）】

現在改定中！（前書き）

始めて読みに来た読者様へ：

改定後の本編は後ろにありますので、そちらから読む事をお勧めします^^

現在改定中！

この小説は現在改定中です！

改定前の本編は残しておきますが、改定が終わり次第、改定前の物は消してしまいますよ↑

別の小説として再度投稿しても良かったのですが、読者の皆様の感想や評価が入っているので消すわけにも行きません。なので、この小説の後ろに足して行くことになりました。

読者の皆様には迷惑がかかってしまいましたが、多くの指摘やアドバイスが感想で送られて来る中、それを直さずにはられません！それが、今回の改定の理由です。

これから、この小説をよろしく願います！

Pr - 01 プロローグ（前書き）

どうも、この度ユーザ登録をしてしまった七篠言平と申します。

まだまだ拙作しか書けないと思いますが、37 程度の生暖かい目で見守ってくれると幸いです。

そんなのはイヤーてな方は、ブラウザの戻るボタンを押してみるのが幸せへの近道ですよ（笑）

2011/1/24 追記：

一部の文章、及び改行を改訂しました。

2011/6/1 追記：

再投稿と全面改定を行いました。……とは言っても、プロローグに大きな違いはありません^^；

P r - 0 1 プ ロ ロ ー ゲ

ある夏の夜、一人の少年が塾の屋上へと登って行く。今は既に夜の十時頃、屋上には当然人間の一人も居なく、銀色に輝く満月が屋上を照らしているだけであった。

そんな人気ひとけの無い屋上に一人、先程の少年が軋む鉄扉を押し開け屋上へと出て行く。

彼は名をナカミネ トウジ中峰東次と言い、毎回塾が終わると屋上に月を見に来る、ということが習慣になっていた。彼の友人の多くは全く可笑しい習慣だと笑っていたが、彼自身は、夜空に浮かぶ月を見上げるそのゆつくりと流れる時間が好きなのだ。

いつもと同じ様に、屋上を囲うフェンスに肘をついて月を見上げる。既に夜の十時も過ぎているからか、綺麗に円を描く月は既にかなり高い位置にまで登り夜の町を妖しく照らす。

と、そこで彼はふと、見上げていた月が揺れ動いている事に気が付いた。普通なら有り得ないその現象を疑問に思っ**て**しばし思考に耽る。

屋気楼でも起こったのかと思った彼はそのせい**か**、月ではなく自分が立つ屋上の床が動いている**という事**に全く気付けなかった。

彼の塾が入っている建物は、その新築の様な見た目の割には築十五年**という**実際はかなりの年代物である。更に、上へと二回も建て増ししているため、接合部が弱**ってしまっ**ているのだ。故に、彼の居る屋上はかなり脆いと言えた。

そして彼は遂に、後に歴史に刻まれる事となる大地震に成す術もなく、折れたフェンスと共に地面へと堕ちて行くのであった。

P r - 0 1 プロローグ（後書き）

どうだったでしょうか？

まだプロローグなのでかなり短いですが、見てから後悔したという方は今からでも遅くありません。戻るボタンを押してみるのが幸せへのt（以下略）

感想評価や誤字脱字の報告、改善点やアドバイスなどはいつでも大歓迎しております！

下のWeb拍手からもコメントをお寄せ下さい^^

P r - 0 2 プ ロ ロ グ 2 (前書き)

2 0 1 1 / 1 / 8 追記：

感嘆符（！？）の後にスペースを入れました。
若干の訂正をしました。

2 0 1 1 / 1 / 2 4 追記：

一部の文章を改訂しました。

2 0 1 1 / 6 / 2 追記：

全面改訂、再投を行いました。

Pr - 02 プロローグ 2

何処の世界にも属さない、世界の狭間に存在する空間。気付けばそこに東次は居た。

正確に言うならば、世界の狭間には空間など存在しない筈なのだが。彼は自然と、今自分がいる場所?? 場所と呼ぶ事でさえ正しいのかは分からない?? が世界の狭間だと理解する事が出来た。

足や腕の感覚も全く無く、周囲はどの様な色ともつかない奇妙な色で覆われている。

何時の間にかその奇妙な色の空間は白一色に変わり、手足の感覚も戻っていた。

辺りを見回すと、後方かなり離れたところに人影があり、こちらに近づいてきているのが見える。

先程までは手足と同様に有るのかどうかも分からなかった口を動かし、東次はなんとか声を発した。

「…… あ、此処はっ、何処なんだ？」

その問い掛けに近づいて来ていた人影は立ち止まり、

「きつと分かっているとは思うが、君は死んだんだよ」

と、質問の内容とは的外れではあるが、短くそう言った。

彼はその言葉に驚きはしたものの、これは夢かもしれないという希望を持ち、再びその人影に問おうとする。しかし、それは人影の言葉に阻まれた。

「僕は一応死後の魂を送る職についているんだけどね、今回の死者

のリストを見て驚いたよ。まさかこの地震の日が東次の命日だったとは思ひもしなかった。だからこの世界の狭間に小さい空間を創って魂を呼んだんだよ」

そこで彼は気が付いた。その人影は学校での親友である赤石祐アカイシ ユウのものだという事に。丁度今日も、彼が学校で会った筈の人物だ。

何故ここにいるのか。それともやはり、これはただの夢なのか。疑問は募るばかりだ。

「あ……あれ、何で祐がこんな所に？」

「ああ、言ってなかったけど実はさ、七ヶ月程前に行方不明になっていた時があると思うけど」

「そういえばあつた様な……」

「丁度あの時、神になるスカウトがあつたから乗ったんだよね。…魂の器が既に神になるにも相応しい位あると言ってたな。一時期行方不明になったのは、異世界を旅して信仰集めと修行をしていたから。学校に行かせろーって何度も言っただけど上が聞かなくてね」

「神ってスカウトするものなんだ……しかも縦社会」

東次は呆れたように祐に言い返したが、祐は何食わぬ顔で言葉を続ける。

「あ、一応これは夢じゃないから。だったら今日塾に行っていたであろっ一日もすべて夢ってことになるんだから」

「……じゃあ何？ やっぱり自分死んでる？」

「そうだってさっき言ったじゃないか……因みに、今の東次は魂と精神だけの状態だな。大丈夫、転生させることも出来るんだ。スカウトの時の条件の一つとして挙げられていたんだよ。友達一人まで、って」

その言葉を聞いた東次は、心の内で笑いながら祐に質問を投げかけた。

「じゃあ、ファンタジーな世界とかも大丈夫なのか？」

「もちろんいいぞ？ いわゆるチート、つまり最強とかもやりたいなら、必要な時に天界の手伝いをするという条件付きで許可すると言っていたけど」

「やりますやります！ 祐様、喜んで手伝いをさせて頂きますッ！
！」

祐は、物凄い迫力で迫る東次の様子にかなりうるたえるも、祐様って何さと呟く。

「……じゃあ能力や名前とかは此方で考えるから一思いに生まれ直して来なさいな。悪いけど、流石に能力は自由に決められないよ。それと、見ていて面白いし暇つぶしになりそうだからとか言う神もいるけどいいかな？」

「それでも十二分、本当にありがとうな。二の次三の次に、神様達も楽しませてやるよ！」

そう最後に告げた東次の足下に祐は相当量の神力を消費する陣を描き、言った。

「魂、精神転送、世界番号二三零七九、輪廻転生の輪」

次の瞬間には東次の魂と精神は世界の狭間から消え、祐が『世界番号二三零七九』と言った世界の輪廻転生の輪へと入って行った。

P r - 0 2 プ ロ ロ ー ゲ 2 (後書き)

感想評価や誤字脱字の報告、アドバイスや改善点などをお待ちしております！

感想を送りにくいという方も、下のWeb拍手からコメントを送れますのでどうぞ御気軽に^^

01-01 生誕（前書き）

主人公の名前を考えるのに大体合計三、四時間程かった。疲れ
た……

書くべき文字数として提案してくださった三千文字、思ったより
長くて驚きましたw

2011/1/8 追記：

感嘆符（！？）の後にスペースを入れました。

若干の訂正をしました。

2011/6/3 追記：

全面改定と再投を行いました。所々、セリフや描写に差異が出て
ると思います。

あれからどれ程の刻が経ったのかと、微睡む意識まどろの中で考える。
確か、東次は『世界の狭間』の中に創られたという真っ白な四角い空間にて、神を名乗る祐と話をしていた筈である。

ならば此処は何処なのか。

まさに朝、これから目覚めようとする時の感覚にそっくりだ。

やはりあれは夢だったのかと、そう考えた所で急に辺りが明るくなったのを感じる。例えば瞼を閉じていたとしても、それ位は瞼を通して感じ取る事が出来るからだ。

「来た、女の子だ！ 吸血鬼の間の子なんて数ヶ月ぶりだぞ！」

そこで突然、誰とも分からない男の叫び声が聞こえて来る。

東次はその内容を必至に理解しようとするが、彼が知っている限りのどの言語にも当てはまらなかった。

そして彼は、何故か息が出来ないためについ泣き出してしまう。

記憶の中に『産まれたばかりの赤ん坊は泣くことで呼吸を得る』という物はあったのだが、この状況に全く落ち着けなかったが為に、その様な事一つでさえ思い出すに至らなかった。

「良かった……女の子だってよ。一人目は女の子が欲しいって願いが叶ったじゃないか」

「はあ、ふう……良かったわ。彼方、名前は既に決まっているんでしょう？」

「少し前に神様からのお告げがあったんだそうだよ。名前は『アレ

イシア』にするが良い、と」

嬉しそうに話す二人だが、東次、いや、アレイシアには、それが何の話なのか欠片も理解出来ずにいた。

唯一分かった事は、どうやら異世界に転生する事に成功した様だという事だけ。冷静な判断が出来る様になり、やっと思い出した知識の中から引つ張り出した、産まれたばかりの赤子の視力はあまり良くないという事から推測出来た。

「え？　じゃあ私が前に提案したメルヴィナは採用してくれないの？　神様のお告げじゃ仕方がないか……」

「んー……だったらミドルネームに入れてみるのはどうだ？」

「このままだと少し長いから、呼ぶ時はメルでいいかしらね……？　ふふつ、あなたの名前はアレイシア・メル・ラトロミアよ。よろしくね」

そう言う母親に抱きかかえられたアレイシアは、母親の喋る理解出来ない言語の中から自身がアレイシアと名付けられた事を推測する。

妙に女らしい名前だと疑問に思うも、すぐにその考えは飛んでしまふ。何故なら、これから来る新しい人生に期待を膨らませていたからであつた。

刻は遡り二年前。

イルクス王国外れのベルムと呼ばれる貴族が治める領地にて、後にアレイシアの両親となる二人は出会った。イルクス王国は、多種

族が比較的友好に暮らしている事で有名であり、勿論吸血鬼も言わずもがなである。

二人は、両者共にかなり力のある吸血鬼の貴族として広い範囲で有名だ。ここで言う有名とは別に悪名という訳でもなく、イルクス王国に多種族への平等を訴えた戦争があった時に、非常に活躍したと言っただけの話である。

彼らが出会ったのは、お遊び感覚で参加したパーティーで偶然同じワイングラスを取ろうとした所からであり、互いに遠慮しあうも何時の間にか意気投合して仲良くなって行った、というものだ。

ちなみに二人共、人間で言う十四歳程度の身体をしているが、実際の年齢は母が百二十四歳、父が百二十七歳だ。吸血鬼は所謂エルフなどと同じく長寿な種族としても知られている為、実年齢が見た目の十倍という者でさえかなりいるのであった。

????そんな中で比較的年齢が近い二人だからこそ、互いに惹かれ合っ行ってたという節もあるのかもしれない。

彼らはパーティーの参加後暫くしてから吸血鬼が多く集うイルクス国内の街、クラードに居を共にし始め、結婚時には家名をラトロミアに変更する事となる。

家名がラトロミアになったのは実は、アレイシアの名前を決めた神による仕込みだったという事は誰も知らない。

アレイシアが産まれてから二日後の夜。出産のパーティーを催す事となり、流石貴族、と言わせる様な屋敷の中庭には続々と人が集まって来ていた。

貴族でありながらもあまり格差を気にしない二人が催す物だから

か、その人混みの中にはちょっとした他所行きの服を着た平民も混じっている。

??? 勿論その平民も、吸血鬼の中の一だ。

その中庭の隅、料理が積まれている机が直線状に並べられているその場所に、母のナディアと父のオーラス、そして二人の間には今日の主賓とも言えるアレイシアが籠の中で寝かせられていた。

オーラスは、穏やかな寝息を立てるアレイシアの腕に触れる。確かに存在する命に、彼はふと笑みを零した。

丁度その頃、アレイシアは夢を見ていた。他でもなく、それは神が念話の応用で見せている物だ。

「う……またか？　ここは何処だ？」

「こんにちは、転生は無事に成功した様で何よりだわ」

「……誰？」

アレイシア
東次は前回の時と同じく真っ白の四角い空間に居るものだから、てつきり祐が来ると思っていたのだが。目の前に立つ黒髪で緋色のドレスを着た美人さんは、そんな期待を大きく裏切ってくれた。

「ああ、私？　一応神界で最近あまり仕事無いワルキューレやつてますが何か？　祐に念話で伝える事だけ伝えろって頼まれたから」

「……そうですか。で、その伝える事とやらは？」

「えっと、気付いて居ないみたいだけどまず、あなたは吸血鬼の女の子として産まれました。都合があつて今は東次の姿を取らせているけど」

そう告げた美人さんの言葉に絶望の表情を浮かべた東次^{アレイン}だったが、すぐに立て直す。

「何で女に産まれなければ……やけに女らしい名前だと思ったけど、それ位は決められないのか？」

「ごめんっ！ その辺りはランダムで決めないといけないって決まりだったから」

「まあ、いいか……な？ いいのか？ ……で、祐が言っていた能力にはどの様な物が？」

^{アレイン}

東次は、そう言えば祐が能力もこちらで決めると言っていたのを思い出し、まずは聞いて見る事にした。

その言葉に、彼女は一度考える様な仕草を取ると、何かを思いついた様に話し出す。

「能力はですね……………矛盾を操る程度の能力に決まりました！」

「ちょ、その言い方は…………東の方の世界じゃ無いだろ！」

「あれ？ おかしいな…………祐がこうやって言うてアイツは喜ぶって言つてたけど？」

「誰が喜ぶかいつ！ ……っと、待て…………？」

某東の方の物語の様な能力発表に突っ込むも、よくよく考えて見ればかなり強力な能力であると言う事に気付き、問いてみる。

「……その能力ではどんな事ができるんだ？」

「この世でパラドックスと言われていた事を現実にしたたり、最強まで究めれば存在を消したり、無から物を創り出したりも出来るわ。勿論、始めは全然使いこなせないと思うけど。始めから使いこなせる能力を創れるほど神は全能でも無いし」

「分かった、ありがとう。精々頑張って使いこなして見せますよ」

笑いながらそう言う東次^{アレシア}に軽くどういたしましてと返し、そう言えばと思い出した様に続ける。

「産まれた時点の魔力、気を一般的な吸血鬼の十倍ほど、本来持ち得ない筈の微量の霊力、妖力、神力も使えるからそれも試してみるといいわよ。訓練すれば増やせる……らしいし？ 何歳でも好きな時に強く念じれば不老になれる上に、体も死にくくなるからね」

「うーん……何かサービスが良すぎないか？ かえって怪しいんだけど」

「いーのいーの！ こっちとしては神界の勢力強化にもつながるし、見えていて娯楽にもなるから」

かなり焦って怪しむ誤解を解こうとするが、東次も彼女同様^{アレシア}、思いついた様に言う。

「そう言えば、佑もそんな事言ってたっけ？ 必要な時に協力すれ

ばいいんだつたよね」

「あ、そうよ。必要な時は私から念話で呼ぶから。……と、そろそろ時間だから、じゃあね！」

「あ、待てって！ 貴女の名前は何て……！！」

そこまで言いかけた所で急に意識が遠のき、名前を聞きそびれてしまう。

次に会う事があつたら絶対に聞くと決心し、彼は消えてゆく意識に身を任せた。

01-01 生誕（後書き）

アドバイスや誤字脱字の報告、感想評価をお待ちしております！
勿論、Web拍手からコメントを送っても大丈夫ですよ。
気軽に送ってやってくれると幸いです^^

01-02 魔法魔術の学習書（前書き）

この辺りはまず、アレイシアが十二歳になるまでは地の文、説明文が多くなると思いますが、展開を早めるためにどうしても会話を多く挟めませんので、ご了承ください。

2011/1/8 追記：

感嘆符（！？）の後にスペースを入れました。
若干の訂正をしました。

2011/6/4 追記：

全面改定と再投を行いました！ 結構変わってる場所も出て来ます。

アレイシアが産まれてから三ヶ月が経ったある日。

少しずつだがこちらの世界での生活に慣れて来ていたアレイシアは、今日もいつも通りに???母親の乳を飲んでいた。

始めはやたらと授乳を嫌い、すぐに赤ん坊らしからぬ驚愕的な速度のハイハイで逃げていたのだが。どうしても空腹だけには抗えず、母乳を仕方無く飲まざるを得なかった。

最近では慣れて来たとは言え、やはり未だ進んで飲む気にはなれない。

その様な変わらない毎日を過ごして行く中で一つ、気付いたことがあった。それは言語の習得速度だ。

誰だって、幼い頃の言語学習の早さには目を見張る物がある。しかもその学習には、言語を習得しようとする必要も無く、気付けば何時の間にかその言語を使いこなせる様になっていた、と言う感覚だろう。

もともと習得しようと思う必要の無い事を『習得しようとする意思』と共に学習すればどうなるか。答えは単純、学習速度が飛躍的に高まるという事だけだ。

例えば、母親が己を指差して何かを喋ったとすれば、この場合は『母親』の意味を持つ言葉、或いは母親自身の名前ではば間違いないだろう。このような思考回路を既に持っていたアレイシアは、生後一ヶ月を過ぎる頃には日常会話がある程度成り立つ様になっていたのである。

お陰で周りからは、神童だの邪神の生まれ変わりだの、もてはやされたり恐れられたりと大変だ。尤も、声帯の発達が人間より速かったと言うのも理由の一つだろう。

「ふふっ、アレイシアはきつと将来美人になるわよ」

「そんなこというなっ！」

「あらあら怒っちゃって、かわいいわね」

このような対話は毎日の様に繰り返されている。しかし、普通なら喋る事もままならいであろう赤子相手に会話をする母親というのはもの凄くシニールに映る事だろう。

実際、屋敷の使用人達が休憩時間に雑談していると『アレイシア様とナディア様の会話』という話題で持ち切りだ。

最近では、父の書斎にある本を漁って母が簡単な本を読み聞かせている為に、更に言語を覚える速度は上がっている。

ただ、アレイシアは現在大きな悩みを抱えていた。それは、言語習得に伴う口調だ。

元々男として生きて来た身としては、女口調で喋るのは憚られる。学習中の言語の中には日本語で言う『僕』『私』などの性別によって使い分けられる事の多い一人称の単語も多く存在した為に、その悩みは尚更強いものとなっていたのだ。

今は妥協策として、一人称を『私』とし、中性的な口調で喋る様にしている。最悪気は進まないが、少しずつでも女口調に移行すれば良いだろう。何より吸血鬼の生は永いのだから、あまり急ぐ必要は無いのであった。

ちなみに、最近アレイシアは髪が伸び目立つ様になって来たため、その綺麗な黒髪は誰から来たものだろうねと父と母で話をしている事もある。

父は茶髪、母は金髪であり、親族に黒髪の人誰も居ない。こればかりはアレイシアも疑問に思ったのだが、どうせ神の悪戯だろうと軽い気持ちで切り捨てた。

ある日の夜、アレイシアが産まれてから二年が経ったその日、彼女は始めて町の外に出た。何故かと言うと、誕生日に欲しい物としてアレイシアは珍しく本をねだったからだ。

アレイシアが住んでいる町、クラードには図書館や本屋は少なく本を求めるなら隣町であるラ・レティルに行くのが普通となっていた。

ラ・レティルにはこのイルクス王国で一番大きな図書館があり、本屋も充実している。まさに学問の町、と言った感じだ。多くの魔法魔術研究者達が貴重な文献を求めてこの町を訪れる。

馬車に揺られて到着した、町の中心部にあるこの町でも有数の本屋にて。両親とアレイシアは激闘を繰り広げていた。何故なら？
??

「母様！ あの本でもいいか？」

「あああ……アレイシアちゃん、ちょっと待って待って！ ……つてそれは魔導書じゃない！」

「……まあ、買ってあげてもいいんじゃないかな？ 君もアレイシアの大きな魔力に気付いていただろう？ どう成長するか見守るのも良いと思うし」

「そうは言っても、だってまだ二歳よ？ ……ほら、またあそこの店員さんが睨んでいるじゃない!!」

産まれてから一年程で走る事も出来る様になっていたアレイシアのせいで、先程からこの様な事がずっと続いている。

そのため、いつ店長が出て来て店を追いつ出されるか分からない恐怖に耐えながら、両親はアレイシアの買い物に付き合わされている状態なのだ。

「じゃ、母様。この四冊の本でよろしく」

床に積んである本の山に両手を置いて笑うアレイシアに促され、本のタイトルを見てみると????

『魔法魔術超初心者用 前編』魔導の心得』

『魔法魔術超初心者用 後編』詠唱術式の基礎』

『魔法魔術初心者用』詠唱術式の応用』

『魔法魔術詠唱術式全集』初級から上級まで 第三版』

と、あった。

この素晴らしいすぎる本の陳列に、優秀な娘で良かったと軽く泣く父親に対して、まだ魔法魔術を勉強するのは危険だと言う母親。どちらも一理ある意見だ。

結局、アレイシアが用意した本の山をそのまま買い、馬車で屋敷へと戻って行った。

アレイシアは二歳になるまで全く気になかったのだが、どう

やらこの世界での一日と言うのは元々東次が居た世界よりも長く、大体二十八時間に相当するらしい。そして、一日を十六に分割した時間を『一刻』と数える様だった。

一日が長いので眠くなりやすいかと彼女は考えたのだが、基本的に吸血鬼は夜に活動するためあまり気にはならなかった。

とはいえ、元々一日が二十八時間と言う環境で進化して来た生き物だからこそ、これが当たり前だとも言えるだろう。因みに一年は三百六十日、二十四日を一月とした計十五ヶ月によって成り立っている。

本を買って来たアレイシアは起きている間中、一日の内八刻は本を読むようになり、大の大人を遥かに凌ぐ速度で魔法魔術の知識を蓄えて行った。

しかし、母親に八歳になるまで魔法魔術の使用禁止令を出されている為に、残念ながら実践した事は一度も無い。そのため、実践用の本である『魔法魔術詠唱術式全集』初級から上級まで 第三版』はアレイシアの部屋の角で埃をかぶってしまっている。

アレイシアが知った魔法魔術の知識によると、魔法は基本的に存在する物を動かしたり変質、変形させる事によって生まれ、魔術はどちらかと言うと作り出す方に当たる様だ。

魔法には催眠、物質の遠隔操作、念話が当てはまり、それに対し魔術は火を出したり、風を起こしたり、と言った感じである。

ただ、最近では両方合わせて魔法と言うのが一般的になっている。何故なら近年、根本を辿れば魔法も魔術も全く同じ理論で発動されるという発見があったからだ。

アレイシアが魔法を勉強していて特に驚いたのは、魔法の詠唱に使うエンブライシアと呼ばれる古代語である。

エンブライシアというのは要するに、東次の居た世界での英語に

近く、詠唱用に若干文法が異なってはいるものの内包する単語はほとんど英語と一致する。

本に書いてあった資料によると、千年以上もの昔、とある異世界から数千人もの魔法使いに協力してもらい、異世界転移の術式の稼働に成功した魔法使いが来たという。

当時はあまり普及していなかった魔法をより多くの人が使える様に、エングライシアによる詠唱、記号による術式という新しい概念を取り入れて世界に広めて行った。

今では、皆その人を賢者と呼ぶ。その賢者が英語を扱える地球出身の人物の可能性も否定は出来ないが、地球には魔法が存在しなかった筈である。そのために、この辺りはまだまだ謎であった。

ただ、魔法の詠唱にエングライシアが使われているのなら都合がいい。何故なら、新しい魔法の開発にはエングライシアの解読が必要不可欠であり、エングライシアが元々ある程度理解できるアレイシアは、その点に関してかなり大きなアドバンテージを握っていると言えるからだ。

八歳になったら絶対に魔法魔術の研究を始めてやると意思を固め、今日も彼女は勉学に励む????

01-02 魔法魔術の学習書（後書き）

感想評価や誤字脱字の報告、アドバイスはいつでもどうぞ！

ユーザ登録していない方でも感想を送れますので、どうぞよろしく
お願いします^^；

01-03 アレイシア、魔法を使うの巻（前書き）

タイトルはノリですw

あまり気にしなくてもいいのかもしれない。

2011/1/8 追記：

感嘆符（！？）の後にスペースを入れました。

若干の訂正をしました。

2011/6/7 追記：

文章の全面的改定と再投を行いました！

描写が増えたためか、文字数も多くなっております^^；

01-03 アレイシア、魔法を使うの巻

今日はアレイシア八歳の誕生日だ。

彼女の身長も既に四テルムを超えており、長めで腰まで届きそうな黒髪がとも映えている。テルムと言うのはこの世界における長さの単位であり、大体四テルムが一メートルに相当する。

この日はパーティを催す事に決まっており、平民貴族関係無しに多くの人が集うという。アレイシアの両親がパーティーで知り合ったという事もあるからか、事ある毎に大人数を呼び、パーティーを開こうとする習性の様な物を持っているのだ。

この辺りでは神童と有名なアレイシアを一目見ようと訪れる者も多く、その中にはイルクス王国の国王が来るという話もあった。母親は『何かコネを作っておいて王子様と結婚しちゃえば？』と薦めたものの、勿論アレイシアは興味が無いので完全に無視していた。

町の中でもなかなか腕の立つ職人に作らせた子供用の純白のドレスを着用し、小さく輝くルビーが付いたネックレスを首元に付けているアレイシアは幼いながらもかなり美しかった、と言うのはパーティーに参加したある男性の話である。

現在アレイシアは、自身の目線よりも高いテーブルの前でジュースを飲んでいる。このジュースはパーティーのために用意された物で、モルという果物から取れるという。

モルと言うのは高い木に生っている林檎程度の大きさの実で、体力回復にも優れている。そのため、モルジュースは多くの冒険者たちによって飲まれているのだ。

魔法薬の原料としても有名なため、アレイシアとしては是非とも飲んで見たかった。味は地球で言う所の、葡萄と林檎を合わせて更

に酸味を足した感じである。

と、アレイシアがモルジュースを味わっていた時、急にそのテーブルの前に父であるオーラスと長めの白い髭を持つ男が現れた。その髭男の後ろには三人程、鎧を身に付けた兵士の様な人が立っている。

「アレイシア、国王様がお見えになった様だ。くれぐれも粗相の無い様に」

「分かった」

どうやらその髭男は国王の様で、国王はアレイシアの顔を見るなりすぐに近づいて来た。

「君がアレイシアで間違いないかね？」

「うん。……私が違かったら父様が連れて来ない」

「ほほっ、そりゃあ全く正論じゃな」

アレイシアは、愉快じゃ愉快じゃと笑う国王に冷めた視線を送り、モルジュースを口に含む。国王の後ろに居る鎧の人達から僅かな殺気が放たれた。

「ふおっふおっ……！？ そんな目で見ないでくれるかの？」

「嫌だ。……なら用件は？」

アレイシアは一先ず無駄な話はやめて本題に行こうと促す。ただ

でさえ今日一日中、本が読めずにアレイシアは苛立っているのだ。

「十二歳になったら、儂^{わし}の息子の嫁に来て欲……」

「断る」

「す、既にオーラス殿とナディア殿には話し……」

「だが断る」

「将来王妃に成……」

「それでも断る」

「何故じゃああ!」

間髪入れず断るアレイシアの様子に、遂に国王が叫ぶ。

アレイシアとしてはこの誘いを断るのは当然の事だった。それは、アレイシアの前世が男だったからでもあるが、王の息子とは即ち王子。この国の王子は一人だけで、歳は二十五程度だった筈である。????そう、決してアレイシアの歳に近い訳では無いのだ。

「その王子はロリコンかつ!」

「……………ロリコンとは何じゃ?」

「……………いや、古代語を語源に持つ素晴らしいと言つ意味の言葉だ」

確かに古代語と言うのは当たっている。何故ならロリコンは、ロリータコンプレックスという英語、もといエングライシアの省略形

なのだから????

「む？　そうか。何処か納得がいかぬのじゃが……？」

「気のせいでしょ？　あと、別に私は王妃になんて成りたく無いから」

そう言っつてその場を離れようとするアレシアだが、国王に呼び止められる。

「待っつてくれ！　なら十二歳になったら国立の魔法魔術学園に入らないかね？　儂からのお墨付きという事で最高レベルのクラスに編入させる事も……」

「それには興味ある。前向きに考えておこうかな？　決まっつたら父様に伝えて手紙を出してもらえばいいか……」

そう言い残し、アレシアはその場を離れて行つた。

後ろの兵士達が何故アレシアを討たなかつたかと言えば、国王に止められていたからである。曰く、未来のある子供に変な影響は出せないとの事だつた。

これは、魔法魔術学園に彼女を推薦しようとした事からも理解出来るだろう。

さて、歳の頃八歳といえは何かある日だつたか。それは、母親による魔法魔術使用禁止令の解除だ。

パーティーの翌日、東次は、ファンタジーの醍醐味と言える魔法

魔術を扱える様になるという事からか、六年間待った甲斐があると非常に喜び、部屋の角で埃をかぶっていた本『魔法魔術詠唱術式全集』初級から上級まで 第三版』をすぐに引つ張り出して来た。

幸い、六年間でこの本の第四版は出版されなかったため、本を新しく買いなおす手間は省けた。魔法魔術は全て母が教えると言う事になっているため、アレイシアは中庭で待っている母の元へと本を持って駆けて行った。

「母様！」

「アレイシアちゃん！ やつと来たわね。準備は出来てるわよ」

そう言うナディアの横にアレイシアは立った。そこには直径十メートル程度の大きな魔法陣が描かれている。魔法陣とは最も有名な術式の一つであり、結界など、魔法を固定すべき場所には比較的良く使われている。

例えば、敵襲や災害に備えて建物に張る強化の結界もあれば、炎に対する防御に特化した火事知らずの結界などもある。

今アレイシアが立っている魔法陣は、魔力を感じやすくなる結界を張るためのものであり、これから魔法を習おうとする全ての者に共通する『体内、自然に存在する魔力を感じ取る』という過程を成功しやすくするものだった。

これからアレイシアは、結界によって鋭くなった感覚でナディアが放つ魔力を感じ取り、体内や自然から似た『モノ』を探し出すという最も一般的な方法を行う。

「じゃ、大丈夫ね。魔法陣に魔力を流すわ」

「分かった。遂にッ……！」

そこまで言いかけた所で、突然視界が真っ白に染まる。何があったと考えるも、気付けば身体中が痛みだし、痺れたような感覚に襲われそのまま意識を手放した。

何時の間にか、辺り一面真っ白な四角い空間に立っていたアレイシア。そして、目の前にはあの黒髪の美人さんが立っている。ちなみに今回は、青と薄緑のドレスを着ていた。

「こんにちは、今日もいい天気ですね」

「……まずは質問に答える。何故私はまたここに居る？」

「それは魔力に対する耐性が不十分だったからよ。ただでさえ常人よりも遥かに鋭い魔力に対する感覚、感覚鋭敏化の魔法が合わされば、少しの魔力でも身体中に激痛が走るでしょうね」

「……なるほど、それで私は気絶してこの夢を見せられていると」

アレイシアはうんざりしたように言うが、それ程アレイシアの感覚が優れているという事に他ならないのだ。

普通の人間や吸血鬼でさえ、殆どがこの方法で魔力の感覚を掴むのだから。

「大丈夫、もうすぐ目は覚めるから。あと、この事を伝えるためにも呼んだんだけど、矛盾を操る能力は十二歳頃に使えるようになる予定だからね。あと感覚鋭敏化の魔法陣を使わずに先程の方法を試

してみるといいわ」

「能力の方は分かった。魔法陣を使わないやり方も試してみる。それと、貴女の名前は何て……」

そこまで言いかけた所でまた意識が遠のきはじめ、最後に「私の名前は絶対に教えないんだからねっ！」と聞こえた気がした。

「起きて！ アレイシア！！」

アレイシアの耳に、何処か悲痛そうな声量で自身の名を呼ぶ声が届く。呼んでいるのはどうやらナディアの様だ。霞んでしまっていて、声はあまり良く聞こえない。

「あう……母様？」

「よかった……いきなり倒れるから心配しちゃったわ……何でかしらね？」

かなり心配そう、かつ不思議そうに聞くナディアにアレイシアは答える。

「うん……きつと感覚がもともと鋭過ぎたんだと思う。何か魔力が痛かったし……だから、一応魔力を出してみて」

アレイシアにそう言われ、ナディアは鋭過ぎたとか自分で言わないでよ、と呟きつつも、ナディアの利き手である左手から魔力を出す。

そして、アレイシアはその魔力を逸早く感じ取った。

「……へえ、これが魔力」

「え、分かったの!？」

驚くナディアを無視し、アレイシアは感覚を掴んだばかりの魔力を操り、知識としてだけ持っていた詠唱を始める。

「願いよ届け。我、魔法が行使されん事を望む。火よ!！」

そう言った瞬間、アレイシアの目の前に巨大な焰ほのおが現れた。その炎球は、中庭の裏、森がある方向へと二百メートル（五十メートル）に渡って焦土に変える。

その状況を見ていた屋敷の人達の多くは、そのあまりの威力に恐怖を覚えたという??

「……へ？」

魔法を放った張本人のアレイシアでさえこの反応だ。

彼女はこの時、始めての魔法の行使で、その便利さと恐ろしさを実感したのであった。

01-03 アレイシア、魔法を使うの巻（後書き）

感想評価や誤字脱字の報告、アドバイスなどを心よりお待ちしております
おります^^

ユーザ登録していない人でもコメントは落とせませんよ！ 勿論、
Web拍手の方も宜しく願いします。

01-04 屋敷の地下室（前書き）

作者風邪で寝込んでいました。

寝込みながらもiPodで執筆していたので、文法とか表現がおかしいかもしれません。

・・・今もベッドの中（笑）

2011/1/9 追記：

風邪は治りました↑

感嘆符（！？）の後にスペースを入れました。
若干の訂正をしました。

2011/6/12 追記：

改定と再投をしました！

少しは文章がマシになっていると……いいなあ^^；

01-04 屋敷の地下室

アレイシアとナディアは茫然としていた。

それも当然である。実践を一度もした事の無い全くの初心者が、初めて使った初級中の初級の火炎魔法で二百メートル（五十メートル）に渡って焦土に変えたのだから。

ただアレイシアは、魔法を放ったのが屋敷側ではなく裏庭の森側であり、誰もいなかったのを良かったと思っていた。草木や虫、もしかしたら居たかもしれない小動物達に対しては御愁傷様、と言っべきだろうか。

「あ、母様？ どうすれば……」

「……もしかして、私に内緒で魔法の練習してた？」

「いや、そんな事はない！」

そう言いつつも、激しく頭を横に振るアレイシア。長めの黒髪が顔面に当たり、それを若干鬱陶しそうに横に分け直す。

「……それはそうか。練習してたらこんなに魔力を暴走させないだろうし。よし、とにかく今はそのあまりにも多い魔力を上手く制御出来る様になりましょうね！」

「あ、待てっ！ 引っ張るな、服が伸びる！！ うわっ！？」

ナディアは、アレイシアの着ている服の襟元をがしっと掴むと、引きずりながらある場所へと向かって行った。

その様子を見た者は皆、先程の恐ろしい光景を見せつけられなが

らも微笑ましいと見守っていたという。

「……ちよつと待って！！　ここはどこだ？」

アレイシアがナディアに連れて来られた場所。そこは、魔力式ランプが壁際に並べられた、無機質でとても広い部屋だった。

ランプが置いてある以外特に物は無く、アレイシアの叫ぶ声が空間にこだましている。

「ここは、屋敷の外れにある地下室よ。対魔法の強力な結界が張つてあるから、思いつき魔法を使っていいからね。……魔力を上手く扱える様になるまで出さないわ」

「誰が何の為にこんな所に結界を……あと制御出来るようになるまで出さないって何で……！！」

アレイシアは、ナディアの魔力を制御出来る様になるまで出さない宣言に落胆した様子だったが、やはりそれは当然の事だ。何故なら？

「だって、あんな威力の魔法を何度も放たれていたら屋敷がもたないでしょ？　だから、制御出来る様になるまでここでみっちり練習を付けてあげますからねッ！」

「えええ！？」

それから、アレイシアの修行は十刻にも及んだという。

まずは先程の初級火炎魔法を放ち、魔力使用量の効率化、加減などを覚えた。その時に対魔法結界が何度も壊れそうになった事を除けば、特に事件は起こらずに修行は進んだ。

実の所『たつたの』十刻で魔力のコントロールが出来る様になるという方が異常とも言えるのだが……

ただ、アレイシアは自身の膨大な魔力の全てをを操る事は無理なため、母親の協力のもと魔力封印の術式を使用した。この術式は、魔法陣と詠唱の混合によって発動し、自身の魔力を任意の数に分割する事が出来るものだ。

アレイシアは魔力を七つに分割し、状況に応じて段階を変更する事にした。勿論普段は一段階だけの開放であるが、それでも一般的な吸血鬼の一・五倍程度の魔力を使用する事が出来る。

念じるだけで簡単に二段階、三段階と変更して魔力を開放できる辺り、複雑な割には手軽で便利な魔法だった。

吸血鬼の基本活動時間は夜である。

そのため、屋敷の地下室に修行に行った時はまだ夜だったのだが、今ではもうすっかり日が高く登っている。

「暑い……死ぬう……」

「ほら、もう少しで屋根があるから!」

この世界の吸血鬼は、日光に当たっても身体が消滅する事は無い。その上、流水を気にする必要も無いのだ。……ただ、日光と水に多少弱いという程度なのである。

日光に対する弱さは時とともに薄れるため、母親のナディアはまだ大丈夫だったのだが???

それから更に三年が経つ。

十一歳になったアレイシアは、中級魔法もある程度使える様になっていた。本来中級魔法を使える様になるには、十年程の月日が必要な筈なのだが。全く、異常な学習速度である。

今では始めの様に魔力を暴走させる事も無くなり、任意に大量の魔力を初級魔法につき込んで、上級魔法にも引けを取らない威力を発揮させる事も可能になっていた。本来、初級魔法はあまり多くの魔力を受け付けない筈なのだが、そこを大量の魔力で力押ししてそれを可能にしてしまっている。それを知った父、オーラスは、娘の魔法魔術に対する素晴らしい才能に喜ぶでも無くただ呆れていたという。

アレイシアは今、魔法魔術研究所と成り果ててしまった屋敷の地下室にて飛行魔法の研究をしている。

多くの本を読んで調べて行くうちに分かった事の一つに、この世界には飛行魔法が存在しないという事があったのだ。人型で空を飛べるのは獣人の中でも鳥人や、獣人の最強種である龍人、竜人のみであった。

極東の地に住まう妖怪という人外の中には、人型で空を飛べる者も居るといふ噂だが、その辺りの真偽は不明である。極東の地ってジパングだよな、と思ったアレイシアはこの時、いつか絶対に行つてやると決意した。

飛行魔法が存在しないという事にはアレイシア自身かなりがっかりしたため、無いのなら自分で作ると随分前から決めていたのである。とは言っても、人類の空を飛ぶ夢はどの世界でも共通のものらしく、多くの魔法魔術研究者達が挑戦しているため簡単な事では無いだろう。

しかし、以前下から吹き上げる風で自身の体を浮かせられないものかと考え、実行に移した時。スカートが大きく捲れ上がったものの、足が僅かに浮いた状態を五秒間維持する事が出来たのだ。

これで希望の光が見えたと思い、アレイシアは更に研究を続けたのである。結果、スカートの件の反省を活かし、風を弾く結界を自身の周囲に張るという答えに辿り着いた。

「願ひよ届け。我、宙を舞わん事を望む。飛行!!」

アレイシアが一から作った完全オリジナルの魔法であり、東次による地球の物理学の知識をフル活用した飛行魔法は????

フワッ……ガッン!!

「……痛あつ!!」

一瞬浮かぶもすぐに落ち、失敗に終わってしまった。運が悪い事に頭から落ちてしまったアレイシアは、涙目で頭をさすりながら何がいけなかったのかと考える。そして、アイデアが記された卓上のノートに手を添えた。

「……あ!!」

羽ペンで描かれた、円の中央にある棒人間の絵と、その周囲を覆う幾つもの矢印。恐らく、円が風を弾く結界、棒人間がアレイシア、矢印が気流を表しているのだろう。

アレイシアは、円の上部の矢印に指を走らせていた。そこでは、上向きから下向きに矢印の方向が変わっており、結界を包み込む様に風を流すという意図が感じ取れる。

ただ、アレイシアは考えた。この上部の下向きの風が、自分の落下を引き起こしたのでは無いかと。

そこで彼女は気流を見直そうと思い、また研究机に向かって行った。

それから数ヶ月。テラスで本を読んでいたナディアは驚きの光景を目の当たりにする。

「か、あ、さ、ま!!」

「あ、アレイシアちゃんどうしたの!？」

「飛行魔法が完成したから、外に出たくて来てみただけ」

浮かんでいるアレイシアのその言葉にかなり驚いたナディアだったが、すぐに驚きも通り越して呆れてしまったため……

「……はあ、行ってらっしゃい。二刻以内に戻って来てね」

と、そう言った。

「分かった、行ってくる」

そう言い残し、アレイシアはその場を後にした。

イルクス王国の王城内広間にて、二人の人間が話をしていた。片方は、三年前にアレシアの断る断る攻撃を受けたイルクス国王だ。「アレシアは物凄い知識を有する才女だ。国の上層部に入れられればなかなか有用な人材だろう」

「確かにそうじゃろうがな……三年前に息子の嫁にと思って誘った時も断られてしまったから、誘いごとは難しいじゃろう」

「何！？ 国王の誘いを断っただと？」

驚いた様に言う男は、国の政務の一部を任される者であり、国王に従う者の一人だ。その様な立場上、国王の誘いを断るなど言語道断だと思うのは当然の事であった。

「そうじゃ。将来王妃に成れると言っても断られてしまったんじやよ。その、何と言ったかな？ ロリ……ロリコンとか言っておったかの？」

「……ロリコンが何を指し示す言葉なのかは分からないが、その様な無礼者を許すわけにはいかない！ 不敬罪だ！！」

「待て、儂^{わし}が許したのじゃから、いいと言っているではないか」

「しかし彼女は……っ！！」

男はそう言いかけるが言葉を飲み込み、失礼しました、と一言残して広間を去って行った。

国王は勿論、これが後に悲劇をもたらす事になるとは思ひも
しなかつただろう。

01-04 屋敷の地下室（後書き）

感想評価や誤字脱字の報告、どうぞお気軽に送ってやって下さい
！喜んで直しに参りますので^^；

……最後のあからさまなフラグは気にしない方向でw

01-05 急襲（前書き）

2011/1/9 追記：

感嘆符（！？）の後にスペースを入れました。
若干の訂正をしました。

アレイシアは今年で十二歳になる。飛行魔法は一応周りには公表しないという事になった。これはアレイシアがあまり有名になっても困る上に、飛行魔法を悪用されたくないという理由による両親からの願いであつた。

だが、それよりも重要な問題が今のアレイシアにはある。普通は十歳頃に始まる吸血鬼独特の吸血衝動がアレイシアには無いという事であつた。アレイシアはそろそろ十二歳になるのだが、未だにそれらしい症状は見られない。吸血衝動というのは吸血鬼にとって食欲の一部であり、魔力を得る為の重要な手段でもあつた。遅くとも十四歳までに吸血衝動が起きなければ、魔力枯渇状態になりやすくなつてしまい、危険と言えるのである。とは言つても、もともと魔力が一般的な吸血鬼の平均を大きく上回るアレイシアはどうなるか分からないのだが……

アレイシアは結局、十二歳になつたばかりの一月十日から国王が直々に誘つて来た魔法魔術学園に入学する事が決まつた。現在は一月六日、誕生日の一月七日を前日に控えている。

当然、魔法魔術学園に入学するとなれば準備すべき物も多く、学園指定のローブに靴、自身の魔導書となる白紙の厚い本など、他にも多くの物が必要となる。これらの買ひ物は既に済ませてあり、今すぐにでも行ける状態になっている。ちなみに白紙の厚い本の表紙には英語で『^{エングライシア}the Grimoire of Alysia』、

要するに『アレイシアの魔導書』と書かれており、アレイシアが作った飛行魔法含め二十を超える数の魔法が術式化されて収められている。……つまり、既に白紙ではなくなっている。

アレイシアは、魔法魔術学園ではどのような事をするのかと楽しみにしていた。確かに今まで独学で魔法魔術の勉強は進めて来たが、この世界での基準としてどのような勉強をするのかと思うと東次は自然と動悸がする程の興奮を覚えた。これまでの日々であまり友人と呼べる『ヒト』が居なかったのも原因の一つだろう。学園は全寮制になっているので、どのような友人ができるかとても期待しているのかもしれない。

学園はアレイシアが二歳の頃、始めて本を買った時に行った町であるラ・レイルの先にある山脈を超えた場所にある。大体道中馬車で丸一日といったところだろう。アレイシアは夜明けと共に馬車で出発、夜明けと共に学園に到着という予定となっていた。

学園ではどのような事をしようかと思いいながら誕生日を前日に控えるアレイシアは、魔法魔術研究中に突然強い睡魔に襲われ気付けばそのまま眠ってしまったていた。

次の日の昼、アレイシアは突然の轟音で目を覚ました。

ズウーン

「……せつかく人……じゃなかった、吸血鬼が気持ち良く寝てるのに……！」

吸血鬼だろうと、寝ている時に起こされるのは嫌なものだった。本来は夜が活動時間の吸血鬼にとって、昼に起こされるという事は人間にとつての夜に起こされる事と同義である。

とは言っても、轟音の正体になったアレイシアは眠い目をこすりながらも研究机の上に置いてある魔導書を手に取って立ち上がるが、何故かバランスを崩してそのまま転んでしまう。いくら起きただばかりとはいえ、あまりにも重過ぎる自分の身体を不思議に思うが、その疑問もすぐに解決する事となる。アレイシアが研究の為に集めた魔法魔術の資料の中に、催眠魔法の後遺症として翌日の不調と書いてあったのを思い出したからである。自分の中に他人の魔力が極めて微量残っているという事も感じ取れたため、ほぼその推測は当たっているだろう。これなら昨日の研究中に突然寝てしまったのも説明がつく。問題はその魔法をいつ掛けられたかという事だったが、襲撃の可能性もあるこの事態にその様な事も気にしていただけないと、急いで屋敷へと戻って行った。

「ダークネスウォール
闇壁……！」

今は昼のため、未だ日光に慣れないアレイシアは、自身で開発した日光を遮る小さい壁を上空に出現させる魔法を魔導書を利用して発動した。自身の上空六テルム程度の位置に現れた円状の闇壁は、アレイシアの上をすーっと滑る様についてくる。催眠魔法の後遺症がある中でもアレイシアは闇壁を軽々と扱うが、実は闇の中級魔法でもかなり上位にあたる魔法なのである。

屋敷の中に入るが誰もいなく、完全に静まり返っていた。何かがあったのは確かだろう。いつもなら従者が何処かにいる筈なのだから。

誰も居ないのは変だと思い、再び魔導書を利用してある魔法を発動した。

「^{サーチ}気配探索!!」

この魔法は名前の通り、周囲に存在する気配を察知するものである。半径百メートル程度は既に察知出来る様になっているので、一応屋敷の殆どを把握出来る位である。

アレイシアは、厨房の奥に眠っていると思われる沢山の気配を感じ取る事が出来た。その中でも特に大きい魔力を感じ取れる三人の内二人は、恐らくナディアとオーラスだろう。誰かが分からないもう一人は、厨房の入り口に近い場所に居る。

アレイシアは駆け出した。既に催眠魔法による後遺症も殆ど無かったため、少し前に使える様になったばかりの身体強化を掛けつつも魔法をいつでも直ぐに発動出来るようにと準備しておいた。

僅か数秒で厨房に辿り着き、両開きの大きな扉を両手で開けた時、突然目の前に小さい火の球が出現した。アレイシアはそれをなんとか当たる直前で魔法障壁を張って防ぐ事に成功したが、その直後に真上から剣の一閃が迫って来ていた。その剣を掠りながらも斜めにしゃがんで避けたアレイシアは、厨房の中で剣を振って来た張本人に対峙する。思えば、ナディアとオーラス以外のもう一つの強い気

配はこの男のものだったと気付いた。

「……貴様がアレイシアか。国王の頼みを断る様な無礼者は斬り捨ててくれる！」

「いやいや、少し待ってよ。平和的に話して解決した方が互いに得策……」

「お前と話す事など無い！！」

アレイシアの話に全く聞く耳を持たない男は、また剣を持って突撃して来た。剣がたまにバチバチと空中に放電するのは雷魔法を剣に纏わせているからだろう。それに対して魔導書以外の武器を持たないアレイシアは、剣から逃げる様にしつつもお返しにと初級魔法を放っていく。

アレイシアは困っていた。このまま男に大魔法を放てばすぐに決着がつくというのは決まり切った事だが、屋敷に被害が出る上に厨房の奥で眠らされている人もいる為、避難させる事も出来ない。このままでは防戦一方になってしまう。逃げつつも放っている初級魔法は殆ど男の魔法障壁に防がれてしまっている。

気付けば、アレイシアが男と戦っている内にいつの間にか眠らされている人の近くにまで来ていた。ナディアとオーラスもその中に居るのが確認出来る。

だが不幸な事に、アレイシアは両親の居場所に気を取られていた為、すぐそこまで迫って来ている的確に心臓を捉えた剣の突きにギリギリまで気付く事が出来なかった。それ程の至近距離では勿論魔法障壁を張るのも間に合わずに……

サクッ……

男が放った雷を纏った剣の一突きは、正確にアレイシアの心臓を貫く。男はアレイシアから剣を抜き、そのまま厨房から去って行った。厨房の中には眠らされた沢山の屋敷の住人と多量の血を流すアレイシアだけが残されていた。

何とかこの状況を打開出来る方法とは、遠のく意識の中で考える。もともと高い治癒力を持つている吸血鬼でも、少なくとも百年生きなければ心臓を貫かれて回復するという荒技は出来ない。治癒魔法もまだそれ程使えないため、あまり頼れないだろう。それでも唯一の方法があるとすれば、不老になる事である。不老に成れば死にくい身体になると、あの黒髪美人さんが言っていた。方法は簡単、強く念じるだけであつた。

（神様神様、正直死にそうだから私を不老にしてくれ。約束だろう？）

最後に了解、と軽く楽しげに言う声が聞こえ、そのまま意識は闇に落ちて行った。

01-05 急襲（後書き）

誤字脱字の報告や、感想評価アドバイス、改善点など、大歓迎です。
ユーザ登録して居ない人もコメント出来ますので気軽にどうぞ！

01-06 学園へ（前書き）

今回短いです。何時もの1/3位？
昨日投稿する筈だったのですがなかなか時間が取れなくてすみませ
んでした。

2011/1/9 追記：

感嘆符（！？）の後にスペースを入れました。
若干の訂正をしました。

アレイシアが目を覚ました時は既に真夜中の十六刻を回っていた。周りで寝ている人達は未だ誰も起きていない。

起きたばかりで重い体を起こし、アレイシアは自身の体を確認する。黒く飾りの少ないドレスの胸元に空いた穴から覗く、血の付いた白い肌を見た時に自分は不老になったのだと確信した。確かに、剣で貫かれた筈の胸の何処にも穴は見当たらない。不老になれば死ににくくなるとは言っても、心臓に空いた穴を治す程とは流石に驚く。注意すべき点は、不老は決して不死ではないという事である。

不老という事はもうこれ以上身長が伸びないかもしれないという事がどうしても気になったが、取り敢えず今は寝ている人達を起こすのが先だと思い催眠魔法を解いて行く事にした。この催眠魔法は四方に設置されている魔法陣により発動されている物らしく、これを解除すれば皆起きる筈であった。魔法陣を解除する方法として、魔法陣を作る時に込められた魔力より多くの魔力を込めて回路を破壊するという物がある。それをすぐに実行する為にまずは魔法陣を探し始めた。

結局、魔法陣はかなり分かりやすい所に設置されていたため、アレイシアはすぐに四つの魔方陣を解除する事に成功した。それから眠らされていた人達が次々と起き出し、アレイシアは両親による質問攻めを喰らうのであった……

一月九日の夜明け、今日は魔法学園に行く日のため、いつもなら睡眠に入る筈のこの時間にアレイシアは馬車に乗っていた。襲撃の件は、国王から普通に学園の事に関して手紙を持った人が送られてきたため、国王がこの襲撃の直接的に関わっている訳では無いという事が推測出来る。アレイシアを殺したつもりになっている人が国王について何かを言っていたため、国王が計画を立てたのかもしれないと懸念していたアレイシアは何処か安心した様だった。勿論それでも警戒は怠らない。

「父様母様、行ってきますうう……眠い」

「馬車の中で寝て行ってもいいんじゃないかな？」

「ダメ……この馬車の御者も国王から寄こされたとか言うけど怪しい」

「そんな懐疑的になつては……」

過度の警戒で懐疑的になったアレイシアを両親が心配しているが、自分を一度殺されたとなつては仕方ない事だとも言えた。

「ま、とにかく学園でも頑張ってくださいよ！ 行つてらっしゃい！」

「分かった。行ってきます！」

その声を受けて馬車はゆっくりと走り出す。丸一日の道の先、学

園ではどのような事が待っているのかとアレイシアは期待に胸を膨らませていた。

01-06 学園へ（後書き）

誤字脱字の報告、感想評価アドバイスや改善点など、大歓迎です。
ユーザ登録して居ない人もコメント出来ますので気軽にどうぞ！

……次から第二章かもしれない。

設定集（人物、魔法魔術、種族）（前書き）

少し説明不足な所もあったかもしれないので。
ミスがあつたため改稿しました

設定集（人物、魔法魔術、種族）

人物……あ、吸血鬼だったw

名前：アレイシア・メル・ラトロミア

種族：吸血鬼、不老

性別：女

年齢：十二歳、身体年齢はここで固定

誕生：一月七日

身長：五・四テルム、百三十五センチ

体重：血に染まっていて読めない

容姿：腰に届く長い黒髪

濃い紅眼

白い綺麗な肌

備考：前世は東次という普通の中学生だった

そのせいか、女らしい言動を嫌う

まだ使えないが、矛盾を操る程度の能力（笑）を持っている

母の好みで黒のドレスを着せられる事が多い

名前：ナディア・ラトロミア

種族：吸血鬼

性別：女

年齢：百三十八歳、身体年齢十四歳

誕生：一月三日

身長：六テルム、百五十センチ

体重：黒く焦げているために読めない

容姿：肩の少し下程度 of 金髪

紅眼

白い肌

備考：娘とお揃いで黒のドレスを着る事が多い

かなりのドーターコンプレックス、つまり娘大好き症候群

名前：オーラス・ラトロミア

種族：吸血鬼

性別：男

年齢：百四十一歳、身体年齢十四歳

誕生：十五日二十日

身長：六・二テルム、百五十五センチ

体重：九モルツ、四十五キロ

容姿：肩の上あたりで切り揃えられている茶髪
い肌

紅眼

白

魔法魔術について

魔法：存在する物を動かしたり変質、変形させる事によって生まれる。催眠、念話、物質の遠隔操作など。

魔術：現象を起こす。火や風を起こす事など。

最近は両方魔法と言うのが一般的となっている。

詠唱に使われる古代語の内、最もよく使われるエングライシアは単語が英語とほぼ同じ。

ある本の資料によると、千年以上もの昔、ある異世界から何百人もの魔法使いに協力してもらい、異世界転移の術式の稼働に成功したという魔法使いが来たという。当時はあまり普及していなかった魔法を、より多くの人が使える様にエングライシアによる詠唱、記号

による術式という新しい概念を取り入れて世界に広めて行った。今では皆その人を賢者と呼ぶ。

魔術の中には多くの系統がある。改行されている属性はそれぞれの系統における派生や応用。

基本系統

火、水、風

氷、雷

上位系統

光、闇

影

不明

空間、創造

時間、破壊

また、それぞれの属性を持った一柱の神と多くの精霊が存在する。

種族について

人間種

小人、人間、巨人

精霊種

精霊、妖精、エルフ

獣人種

犬人、猫人、蛇人、馬人、鳥人、龍人 e t c .

その他

吸血鬼、悪魔、妖怪、魔族、神族 e t c .

02・01 学園到着につき就寝（前書き）

事情があつていろいろと大変な事に……

インターネットに接続できない環境になつてしまい、今投稿出来たのも凄く運のいい偶然です。少し更新できないかもですが、その間にストックをためておく予定です。

2011/1/9 追記：

感嘆符（！？）の後にスペースを入れました。

段落字下げを行いました。

若干の訂正をしました。

02・01 学園到着につき就寝

一月十日の早朝、アレイシアは魔法魔術学園に到着した。学園に到着する直前、寝たふりをしてみたら突然御者の人が短剣で刺してきた事を除けば何事も無く学園へと到着する事が出来た。勿論短剣は避け、手首を抑えるだけで対処出来た。御者さんは適当に縄で縛りつけて学園入り口の警備員に預けてきたので大丈夫だろう。これは後から知った事だが、国王はこの御者の事を全く知らないそうだった。国王から送られて来たと自称したこの御者は恐らく、襲撃者の方の関係者かと思われる。

それはともかく、やっと学園に到着出来たのだからまずは入学手続を済ませなければならない。入り口の門付近のこの場所からやたらと長い煉瓦の道を通り抜けると、中央に高さ十五メートル程の噴水がある広場に突き当たる。そこからまた右に続く道をずっと真っ直ぐ進めば職員室や事務室などの設備を含む教職員塔がある。それは塔であり、決して棟では無かった。塔の入り口の右にある窓に人が居るのが見えたため、アレイシアはそこに話しかける。

「入学手続はどこですか？」

「ん？ お嬢さん、ここの入り口に入ってまっすぐ行った所に部屋がある。そこにまずは行くといい」

「ありがとう。あと嬢さん言うな」

その男の指示を聞いてアレイシアはすぐに歩き出し、入り口の扉をくぐって行った。ちなみに今まで外を歩いてきたが、まだ早朝なので日差しは弱く避ける程ではなかった。

アレイシアが着いた塔の一階の奥の部屋には何やら人が多く集まって列を作っていた。部屋の間には机が並べられ、教師らしき人が順番に書類を見ていた。実際は人ではないと思われる者も多く居る。尖った耳を持つ者や、尻尾が生えている者などである。この列に並び順番に入学書類を見てもらうのだと思い、アレイシアは列に入って行った。

何時の間にか列が進み、次はアレイシアになっていた。するとすぐに一番右端で話をしていた犬人と思われる人が離れて行き、アレイシアが呼ばれた。

「えー、次の方」

「はい」

右端に座っている人に呼ばれ、アレイシアはその場へと歩いて行った。

「まずは入学書類を見せて下さい」

「……これか？」

アレイシアは書類をその人に渡した。書類の中には国王の推薦状や、アレイシア自身の情報が書かれた紙が入っている。男は書類に目を通し、時々「ほおー」やら「うーむ」などと声をもらし、最後にアレイシアへと薄い金属板の様な物と紙を渡した。

「その板は学園証と呼ばれる物だからくれぐれも無くさないように気をつけて。紙の方にはこれからの動きが書かれているからよく読んでおくように。あと寮の部屋もその学園証に書かれているからね……あ、そうだ。僕は教師をしていて名前はフィズ・エイレル。またいつか学園で会うかもしれないからよろしく」

「ありがとう」

アレイシアはその言葉を受けてすぐに机から離れて行った。

教職員塔を出てしばらくした所に学園全体図が設置されていたため、それを参考に位置を把握して寮へと歩いて行くことにした。学園全体図によれば、寮は教職員塔からまっすぐで着く様だった。この学園の全体図を見てまず驚いたのはこの学園の広さである。学園の入り口は東側、中央に噴水の広場があり、一番奥にあたる西側には多くの生徒が学習する校舎がある。北側には教職員塔、南側には寮がある。更に校舎の両脇には四つの実践魔法用闘技場、ギルドの学園支部、買い物などが出来る市場があり、学園の外に出なくてもありとあらゆる事が出来るようになっていた。これは学園から一番近くの町でも馬車で三刻以上かかってしまうからこそその設備である。

歩き始めて四半刻、やっと寮のロビーに到着したため学園証を見て見る事にした。フィズ先生によれば、学園証には寮の部屋についても書いてあるそうだったからだ。

学園証を見ると、右側にある名前などの項目の下から二番目

に「寮番D204」と書かれている。これが恐らく寮の部屋番号だろう。これが意味する場所はD塔の二階の四号室に当たると推測出来るため、寮全体図を頼りにD塔に向かって行った。

D塔の二階へと魔力式エレベータで上ったアレイシアは、廊下の一番奥の四号室の前に立っていた。学園証を扉の右に備え付けられたホテルのカードキーの様な場所に差し込み、ゆっくりと扉を押して行く。すると何故か部屋の中から声が聞こえた。

「誰ですかー？」

「……この部屋は二人部屋だったのか？」

部屋の中から出て来たのは、水色のドレスを着た猫耳尻尾付きで茶髪のいかにもお嬢様といった感じの少女だった。身長は猫耳を合わせてもアレイシアより少し低い程度で、髪は肩の少し下辺りまである。

「もしかしてこの部屋で一緒に住む人ですか？」

「そういう事になるな……私はアレイシア・ラトロミアだ。一応よろしく」

「あ、私はフィアン・エンレイスといいます。よろしく願いします」

お辞儀したフィアンに部屋の中に促され、リビングルームに置かれている机を囲んでフィアンと座ったアレイシアは話を続ける。

「で、フィアンは今何年生なんだ？」

「まだ一昨日来たばかりです。多分一年生になると思いますよ」

「要するに同級生かな……これからどうすれば？」

「書類受取の先生からもらった紙によれば一週間後にクラス選定検査があるみたいなので、それまでは自由ですね」

その説明にアレイシアは分かった、と一言いうとすぐに部屋のソファに移動して寝てしまった。

「あのー……どうしたんですか？」

「眠いから寝る。学園見て回りたいけど夕方からでいいな」

「ええーっ！？ まだ朝ですよ？」

「私は吸血鬼だ。それに学園につくまで魔法で無理やり目を覚ましながら丸一日一睡もしていないから。夕方に起こして。おやすみ」

「吸血鬼だったんですか……私で良ければ献血しますよ？」

フィアンの優しい言葉は結局アレイシアの耳に届かなかったが、フィアンは結構本気でアレイシアになら血を吸われてもいいと思っていた。

「アレイシアさん、朝で……じゃなくて夕方ですよ！」

「う……あと半刻……」

「起きて下さいーい！」

フィアンに夕方に起こしてもらったアレイシアは、持参の鞆の中から着替え用の黒いドレスと魔導書を取り出した。これは勿論外出の準備のためだ。黒いドレスは完全にナディアの趣味なのだが、流石にここ何年も着せられていれば慣れてしまう。アレイシアは着替えようとした所で急にフィアンに話しかけられた。

「これから行く場所は学園内の市場でいいですね。買物もしたいですから」

「そうだな……私も買いたい物があるから少し見てみるかな」

「それと……」

「何だ？」

「同性なのに何で隠れて着替えるんですか？」

「なっ……！ それは別につ……！」

着替えを済ませ、魔導書を手に持ち財布や魔法薬ホルダーを腰のベルトに付けたアレイシアは玄関へと向かう。玄関の扉の前には既にフィアンが立っていた。

「黒くて飾りの少ないドレスにベルトというのも良いファッションですね……参考にしてみましようか……」

「大体いつも私はこんな感じだ」

「へえー、そうなんですか」

「そうなんです。とか言ってる暇があったらさっさと行くぞ」

「あああ…待って下さいい！」

すぐに玄関を出て行ってしまったアレイシアを追いかけるように、急いでフィアンは走って行った。

02・01 学園到着につき就寝（後書き）

誤字脱字や感想評価、改善点アドバイスなど大歓迎ですのでいつでも送ってください。ユーザ登録していない人もコメント書けますので気軽にどうぞ

02・02 亜空間修行（前書き）

遅くなつてすみませんでした。

2011/1/11 追記：

感嘆符（！？）の後にスペースを入れました。
若干の訂正をしました。

アレイシア達が到着したのは道の両脇に店が立ち並ぶ市場だった。食材や洋服、武器など、様々な物が売っている。食材も売っているのは全ての寮にキッチンが付いているからであつた。とは言つても、アレイシアもフィアンも料理が全くダメなので結局レストランで食べる事になるだろう。女二人の買い物割には洋服屋に行く様子は無く、ずっと本屋や魔導具店を回り、最終的に海鮮専門店のレストランで食事をする事になった。

「このレストランには来た事があります。この魚介と山菜のスープが美味しいですよ」

「なら私はその一つ下のスープで」

「……私も同じスープがいいですから決まりですね」

その後、特に何事も無く食事を取り終えた二人は寮へと帰って行った。

学園内寮のある部屋にて、

「あのー……何をやっているんですか？」

「魔法魔術の研究」

「寝なくても良いんですか？　いくら夜派だと言っても学園が始まる頃には結局直さないとイケませんよ？」

「少しずつ直して行くから多分大丈夫」

アレイシアは魔法魔術の研究をしていた。屋敷にいた頃は毎日やっていたので、どうしてもやりたいと思ってしまつたのである。そしてフィアンに心配されるのは仕方ない事だと言えた

「はあ……分かりました。私はもう寝ますね」

「おやすみ」

アレイシアは学園に来てからずっと気になっている事がある。それは十二歳になれば使える様になるという能力の事であった。矛盾を操るとは言ってもどの様な感覚を掴めば良いのか全く分からないため、修行のしようが無いのである。

気付けば何時の間にか、アレイシアはあの四角くて白い空間に居た。何時の間に自分は寝たのかと考えるが全く見当がつかない。

「こんばんは。今回は重要なお知らせがあつたので催眠魔法で強制的に寝てもらいました」

「よし、今日こそ名前を……」

「私の名前は絶対教えないわよ？」

この空間に來れば毎回会う黒髪の美人さんだが、名前だけは絶対アレイシアに教えないのである。これには重要な理由があるという事をアレイシアは知らない。

「……で、重要な知らせとは何だ？」

「えーと……順番に説明して行くと、魔界にあるいくつかの国は既に神界と平和条約を結んでいるのよ。要するに互いに攻め入るな、争うなという事。とは言っても当然まだ条約を結んでいない国もあるし、条約を破る国もある。今回は魔界にあるいくつかの国が協力して神界に攻め入ると思われる不穏な動きがあったのよ。だから戦力確保の為になるべく早く貴女の使用能力をいこなせる様になってもらいたくて」

「まだ私は能力を全く使えないが……」

心配そうに言うアレイシアに黒髪美人さんは近づいて行くところ言った。

「貴女の魔導書に魔法陣を追加しておいたわ。その魔法陣に魔力を流せば私が引き寄せてあげられるのよ。だからそれを使って私の家まで来てくれれば特別能力レッスンを付けてあげるわ」

「ありがと、細かい事は後にして起きたらすぐに行ってみる」

そう言うつとすぐに何処かに引かれて行く様な不思議な感覚がし、意識はまた闇に落ちて行った。

「アレイシアさーん！　またですか！　朝ですよー！！」

フィアンの叫び声が寝室内に響き渡る。理由は簡単、アレイシアが何度呼びかけても全く起きないからである。机に突っ伏して寝ているというのも理由の一つだろう。

「うー……あと半日……」

「起きて下さいいい！」

「だから私は昼頃に……」

結局フィアンに殴り起こされたアレイシアは着替えた後、寮一階のレストランへと向かっていった。今回も、アレイシアがオススメを頼まなかった事を除けば特に何事もなく食事を終えた。

寮の部屋へと戻ってきたアレイシアはすぐに、ベルトに様々な装備を付けて魔導書を手に持って開いた。黒髪の美人さんの言った通り、確かに魔法陣が追加されている。それを確認したアレイシアは床に魔法陣用の大きい紙を広げて魔法陣を写していった。魔法を行う使用する上での効率化のために、魔法陣を写すのに使う紙は絶縁紙と呼ばれる魔力を全く通さない紙を使用し、それに魔力伝導率の高い液体を使用したインクで魔法陣を描いて行く。

写し始めておおよそ一刻後、アレイシアの部屋にフィアンが入ってきた。

「また……何を？」

「今日ちよつと出かけてくる。夕方までには戻れる……かな？」

そう言ったアレイシアは床に敷かれた紙を持ち上げる。そこには魔導書から写し終わった魔法陣が描かれている。アレイシアは床に紙を敷き直すとその上に立って魔力を込め始めた。

「それって転移魔法陣ですか？」

「いや、これは違う。場所を他者に伝えるためのものだ。それで向こうから私を引っ張ってもらう事が出来る」

アレイシアは強く魔力を込めるがなかなか反応が無いため、二段階目の魔力を解放した。それでも既に一般的な魔法使いの十人分に相当する魔力を込めている。フィアンはその強い魔力に当てられたのか、少し気分が悪そうにしている。

「ちよつ…！ 凄い魔力ですよ！！ 明らかに入学前の生徒が出せる魔力ではありませんよね！！？」

「まだ反応がないな……もう少し出すかな」

「え！！？」

アレイシアはそう言うつと三段階目の魔力を解放した。丁度その瞬間、アレイシアを白い光が包み込み、フィアンが気付く頃にはその場からアレイシアは消えていた。

眩い光が収まると、アレイシアは何時の間にか石の床の上に立っていた。目の前にはあの黒髪の美人さんが立っている。

「私の家にようこそ。早速始めるわよ！」

「……ここがお前の家か？これはどう見たって……」

「そう、神殿よ。奥に部屋があつて、そこに私達は住んでいるわ」

アレイシアが到着したのは白い石で組まれた巨大な神殿の中央と思われる、広く天井が高い場所である。

「で、私はまず何をしたらいいんだ？」

「とりあえず時間の流れが遅い空間に入ってもらつね。亜空間、時差五万七千六百倍、発動、転移」

黒髪美人さんはそう言うと、胸元の近くに持ち上げた指の先に超高密度の神力を集中させる。あまりにも多い神力の影響でそれ程時間が掛からずに空間に穴が空き、その中に一つの亜空間が形成された。それを確認するとすぐに亜空間内へと転移する。周りは何色ともつかない色で覆われ、床があるのかも分からない、奇妙な場所である。

「ここはあの世界の狭間に空間を作ったのとはまた違って、既に存在している空間に空間を重ねて存在させているのよ。別次元でありながらも同じ三次元に存在しているから多分安全……かな？更に一刻を十年まで引き延ばしているからたっぷり修行出来るのよ」

「何というダイオ……いや、何でも無い。時間差がアレとは比べ物にならないな。五万七千六百倍か」

本来の五万七千六百倍もの時間を取れるという事は修行の時間もそれだけ取れるという事であり、時間の経過や修行で得られる魔力や神力なども成長させられるという事であつた。これはアレイシアが不老だからこそその方法である。

「そうよ。これから毎日神界に来てもらつて一日につき一刻を十日、この時間で合計百年は修行するわよ」

「百年とか……まあ、分かつた。よろしく願いします!」

「よし!! ならま^ずは……」

そう言う黒髪美人さんと共に、アレイシアは十年にも渡る修行をする事となる。

02・02 亜空間修行（後書き）

感想評価や誤字脱字、アドバイスや修正点などは大歓迎ですのでいつでもどうぞ。

ユーザ登録していない人も感想書けますので気軽に書きちゃってくださいw

感想は物凄く作者の励みになります。

02・03 亜空間修行 2（前書き）

ストック放出完了！

アレイシアちゃんの口調が変わったりします。このままでいいとか、戻してほしいとか、早くロリババ口調にしてほしいとか、そんなリクエストも受け付けています。

2011/1/11 追記：

感嘆符（！？）の後にスペースを入れました。

若干の訂正をしました。

表現的にアレな場所を訂正しました（笑）

修行を始めてから約一年が経つ。結果から言えば、アレイシアは修行を始めてからわずか四日で能力の感覚をつかむ事に成功した。感覚をつかむだけなら比較的簡単に出来るのだが、実用的な能力の行使には更に何年もの修行が必要だという。今の段階では自身が能力を持っているという事を自覚出来る程度だが、それが出来なければ能力を使う事など絶対に出来ない。黒美さん（仮）によれば、何事も基礎が大切なのだそうだった。

今は神力、妖力、霊力の扱い方の練習をしている。能力の修行はどちらかと言うと精神的な強化によるものなので、する事といえば瞑想や自身への暗示などであり、アレイシアに言わせてみれば何もしていない様なものであった。そのため、実践的な練習も含む神力などの力の使い方の練習を黒美さんに頼み込んだのである。

「えーと…いつか貴女が魔力を感じ取った時と同じ方法で、まずは神力を感じ取ってもらっわ」

「分かった。手を合わせて神力をこっちに流すやり方がいい」

「分かったわ」

そう言っただけで黒美さんはアレイシアと手を合わせて手から神力を放出した。神力は実の所魔力の原型でもあるため、魔法魔術の行使にも使用する事が出来るのである。神力を使って魔法魔術を行使した場合、実質魔力を使った場合より七分の一程度の神力で発動出来るという。

「どう？ 何か分かった？」

「んん……………あれ？ 何か異物感を感じる。でも何処か安心する様な……………」

不思議そうに言うアレイシアに黒美さんは応える。

「多分それが神力ね。安心する様な感覚は恐らく……………何と説明すればいいのか分からないけど、全ての原初、産みの親だからだと思わ」

「なるほど……………自分の中にも神力が少しあるのが分かった」

「そう、ならこの段階は成功ね。しばらくは魔力の代用として使ってみて感覚を覚えるといいわ。……………そう言えば今日はアレイシアの十三歳の誕生日ね。今日は家で休みましようか」

そう微笑んで言う黒美さんに促され、二人は亜空間内に建てた家の中へと帰って行った。余談だが、アレイシアは黒美さんに口調をもっと女の子らしくする様に毎日言われているため、若干口調が柔らかくなった様である。これからもアレイシアの修行は続いて行く……………

修行を始めて四年半程が経ったある日、アレイシアは亜空間の家の中で椅子に座って休んでいた。否、椅子に座りながらも修行していた。アレイシアは自身の目の前に置かれたコップを能力を使って瞬間移動させようとしているのである。

魔法の中には瞬間移動を発生させるものも存在するが、何処まで極めても準備に十秒は掛かってしまう。そのため実際は”瞬間”移動では無い上に、戦闘時には全く役に立たない。そこをアレイシアは一つの物が同時に二箇所が存在しているという矛盾を発生させて、本当の”瞬間”移動を成功させようとしているのである。ちなみに黒美さんが転移を使用して亜空間に入る時も三十秒程の時間が必要だった。

黒美さんの助言によれば、能力発動に神力を使えば成功率が上がる様なので、神力を込めつつ、能力を意識して、はつきりと発生させる矛盾を思い浮かべてみる事にした。神力を込めるのは、自然に存在するありとあらゆる森羅万象は元を辿れば神力に帰す、という法則に基づくというが、あまり細かい説明はしてもらえなかった。

アレイシアはここ四年半の修行で十倍近くにまで増えた神力の一部を込め、コップを動かす様に強く意識する。

（動けッ！！）

ガタッ！

「……あ！」

アレイシアが念じた瞬間にコップは横に大きく移動して倒れた。つまりは成功である。アレイシアはその時、三年もの修行がようやく報われたと心の底から喜んだという。

「瞬間移動成功した！！」

「えっ！ それ本当！？」

アレイシアの叫び声に一瞬で反応して駆けつけた黒美さんも、その報告に喜びのあまりアレイシアを抱き締めた。

「あっ……………苦っ……………しい……………！ やめっ……………」

ガクッ……………

「ああああ！ ごめんっ！！ アレイシアちゃん大丈夫！！？」

……………今日もアレイシアの一日は平和である……………？

初めて能力発動に成功した日から約五年半、合計十年の修行期間を終えたアレイシアは自身の体をも瞬間移動させられる様になっていた。魔力や神力などの力も修行前に比べてだいぶ大きくなっている。

「それにしても不思議なものね。ここで十年過ごしても外ではたった一刻しか経っていないなんて」

「そうね、貴女の口調も十年前に比べたらかなり可愛らしくなったわよ」

「うるさいそれを言うな！ 私だって直したくなかったし！！」

「やっぱり素はそれなのね」

黒美さんは笑いながら、掴みかかるアレシアをいとも簡単にかわす。

「まだまだあつー!」

「なっ!？」

と、そこで咄嗟に瞬間移動を発動させて黒美さんの背後に回り込んだアレシアは背中から黒美さんに抱き付いた。

「……え？」

「十年間も修行に付き合ってくれてありがとう。感謝するわ。あといい加減名前教えなさいよ」

「え…あ、どういたしまして。名前は教える気ないわよ?」

不意を突く様に感謝の言葉を述べられた黒美さんは驚きながらもそう言う。

「じゃ、そろそろ出ますか! 転移」

そう言うって黒美さんは膨大な神力を集中させて神界へと戻って行った。

神界に戻ったアレイシアはすぐに黒美さんに頼み、寮の部屋へと転移させてもらった。次の十年修行は来週という事になっている。ただ唯一の問題は、

「到着ー!!」

「わ! キヤアツ!!」

紙に描かれた魔法陣を観察していたフィアンの真上に転移してしまったという事である……

「ヒドイですよ……いきなり上に跨ってくるなんて……」

「私が悪かったわ。ごめんなさい」

アレイシアは脳内で、これは事故だこれは事故だと繰り返していたという。

「それにしても早かったですね。まだ二刻も経っていませんよ?」

「それは……」

「……? そう言えばアレイシアさんから感じる気配がさっきまでとは別物な位に大きくなっている気がしますが無いですか?」

「あう……」

「口調にも違和感がありますが……?」

「うう……ごめんなさい私が悪かったから、質問責めはやめて……」

「別に質問責めはしていませんよ？」

「言葉に棘がある……」

フィアンの真上に転移してしまったせいで質問責めを夜まで喰らってしまったアレイシアだが、久しぶりにフィアンに会ったせいか何故か嬉しかったというのは恐らく別の話である。

02・03 亜空間修行 2（後書き）

感想評価誤字脱字報告改善点など、お待ちしております。ユーザ登録していない人も感想書けますので気軽にどうぞ。

02-04 女の子だから……（前書き）

アレイシアの変更後の口調が可愛かったからつい着飾らせなくなつた。反省も後悔もしていない。

→この一心で書き上げたため、表現がおかしい所があるかもしれない。なので後々修正するかも。

2011/1/11追記：

感嘆符（！？）の後にスペースを入れました。
若干の訂正をしました。

02 - 04 女の子だから……

学園に来てから一週間、入学式を前日に控えたアレイシアは、フィアンの猫耳を弄くりながら雑談をしていた。椅子に座ったフィアンの後ろにアレイシアが立っているという感じである。入学に必要な準備は既に終わっていたために、かなり暇を持て余していたのであった。話題に登る話はほとんど魔法魔術関連であり、他の話題があったとしてもアレイシアの口調についてなどである。そんな偏った会話の中で、フィアンは珍しい話題を切り出した。

「そういえばアレイシアさんってそういう服……黒いドレスをよく着てますね。それもほとんど装飾がついていない」

「それは多分母様によく着せられていたからよ。最初は抵抗したんだけど流石に慣れてしまったわ」

アレイシアは、ここ何日かでフィアンの前でも抵抗なく喋れる様になった口調でそう返す。

「そうだったんですか……どうせならもっとおしゃれしてみませんか？ そんなに可愛いのに勿体無いですよ？」

「……嫌だ。と、言いたい所だけどそれも確かに……」

アレイシアは迷っていた。前世、東次だった頃は中の上程度の容姿であったにもかかわらず、自身の容姿をそれ程良く思った事は無かったのである。それが今はどうだろうか。言ってしまうえば、十二歳の身体ながらもほぼ完璧とも言える容姿を持っているのである。それこそ容姿に自信を持って自慢出来る程のである。服装や装飾品

などで飾ればその身長もあり、人形とも見違える程に可愛く、美しくなる事は明白であった。

だが、それでこそアレイシアは悩んでいるとも言えるのである。服装や装飾品でおしゃれをするという事は、何か別の、男としてのプライドが崩れて行く様な感覚を覚えてしまう。ただでさえ、黒美さんによって女口調に矯正されたばかりのため尚更であった。

でも、とアレイシアは考える。折角これ程の容姿を持ちながらおしゃれの一つもしないというのは損というものなのではないかと。そう考えてアレイシアは決意した。

「よし、分かったわ。学園で着る服をちょっと学園街に行って見て来るわね」

「あ、私も連れて行って下さい！」

すぐに魔導書を手に持って玄関へと向かって行ったアレイシアをフィアンは追いかけて行った。因みに、学園街というのは学園内市場を含む施設一帯の事を指し示す言葉である。

アレイシアによる日光軽減の魔法を発動させながら、学園街の中心部にて二人は服屋を片っ端から探っていた。探し始めてから半刻程経った時、ある服屋に目が留まる。いや、正確にはその店の入り口付近に掛けられた服に目が留まった。

「ちょっとあの店見てみましょうか？」

「!? あれは……!」

驚くアレイシアを引っ張りながら店へと近づいて行くフィアン。アレイシアは近づいて行くにつれてはつきりと見えて来たその服に驚いて言葉を失っていた。

「この服凄く良いですね。黒のドレスだからアレイシアさんに良く似合うと思いますよ?」

「あ……うん、そうね。それにしてもこれは……」

フィアンが勧めた服は、黒を基調とした上の服とスカートが別れた形のドレスである。下に重ねて着るフリルの付いた白いドレスがスカートの下から少し出る様になっている。更に、赤や白の刺繍がしつこくない程度に入っているのが見られる。袖は少し広がっており、下に着る白いドレスの袖と重なる様になっていた。上に着る方の服は、胸元に網目の様に紐が通されているため、下に着ている白いドレスが少し見える様になっている。

「この服、どう?」

「気に入った、買うわよ!! 幸いサイズも丁度良いみたいだし」

アレイシアがこの服を見た時に何故驚いたのかといえば、地球で言うゴスロリにかなり近かったからである。とは言っても、フリルやレースなどは少なく、派手さの無い、バランスの取れたデザインだった。そのためか、アレイシアもこの服を見た時すぐにこれが良いと思ったという。元々は嫌がる筈なのだが、先程のフィアンとの会話で何処か吹っ切れた様である。

そのドレスを買って店から出て来た二人は、他にも髪につけるリボン用の黒い紐や、ブローチを買ってから寮室へと帰って行った。ちなみに、フィアンも何着か服を買っていた。

入学式当日、フィアンに殴り起こされる事も無く起きる事が出来たアレイシアは、前日買ったドレスに着替え始めていた。指定時間に起きられる様になったのは、亜空間修行中に起床時間を直していたからである。

まずは下に着る白いドレスを着用し、その後に黒いスカート、上部分を着る。上部分の胸元の紐を蝶結びで結び、同じ様に蝶結びで髪の左右端に黒いリボン紐を結んでおく。胸元の蝶結びの下辺りにブローチを付ければ着替えは完了である。

丁度着替えが終わった頃、フィアンがアレイシアの部屋に入ってきた。寮室は、アレイシアの部屋、フィアンの部屋、リビングルーム、風呂場などの水周り、いくつかの部屋に別れているのである。

「アレイシアさん、着替え終わりました……」

「あ、フィアン。丁度着替えが終わった所よ」

アレイシアはそう言うが、何故かフィアンは部屋の入り口で固まったまま動かない。いつもは揺れ動いている猫尻尾も斜めになって固まっている。それを不思議に思ったアレイシアはフィアンに近づいて行った。

「……フィアンどうしたの？」

「ふえ…？ あっ、あのっ！ 凄く似合ってます！！」

「あ、ありがとう」

急に似合っているなどと言われて恥ずかしいのか、若干赤面したようになるアレイシア。フィアンも恐らく、アレイシアの服があまりにも似合っているから言葉を失ってしまったのだろう。

「え…えーと、朝食をレストランで食べたらすぐに、入学式のある校舎北の大ホールに向かうという事でいいんでしょうか？」

「多分大丈夫よ。行きましょうか」

そう言って、アレイシアは机の上に置かれている魔導書を掴み、玄関へと向かって行った。なぜ外出時に毎回魔導書を持って行くのかとフィアンは疑問に思ったが、それを聞く事はしなかった。

校舎北の大ホール、そこには入学基準に基づいた平民貴族関係無しの十二歳から十六歳までの多くの生徒であふれていた。教師と思われる者が何人か、そんな多くの生徒を整えて列に並ばせている。勿論、教師も生徒も決して人間に限らず、いわゆる獣人やエルフ、小人などもいる様であった。また、極々稀ではあるが、アレイシアと同じ吸血鬼もいるのが見受けられる。

入学式が始まった。この学園の校長は三人もいるらしく、それぞれイルクス王国、メアル皇国、リレネフ帝国という三つの国の者であった。校長の話は長いのが定番であるが、この学園の校長はそれほど長く話をしなかった。その代わり、三人分である。普通に一人による長い話を聞かせられるよりはよっぽどマシではあるが、長さはゆづに半刻を越える。校長”達”による長い話にはほとんどの生徒がうんざりしている様であった。勿論アレイシアとフィアンもその中の一人、いや二人である。

「……えー、この国立魔法魔術学園では、皆さんの魔法魔術の技術の向上、並びに知る事への好奇心を養う……」

「暇ねえ……暇……暇……」

「アレイシアさん大丈夫ですか？」

狂ったように暇と繰り返すアレイシアを心配してフィアンは声を掛ける。

「暇……暇……クククツ、あの校長を燃やしてみるのも面白そうねえ」

「ちよつ、性格変わってますよ！」

「……………あれ、私は何を？」

「そこ静かにしなさい！」

話をしている事に気付かれた二人は、巡回していた教師に注意されてしまう。二人は勿論その場ですぐに謝った。

そして、長くて無駄の多い校長の話が終わり、次の魔力検査、及びクラス選定のために生徒達は中ホールへと向かう。総演説時間半刻にも及ぼうかと言う程の校長の話は結局、『これからの七年間、皆健やかに勉学に励んで立派な大人になって下さい』とまとめられる事が分かった。全く、時間の無駄遣いである。アレイシアは、同じクラスになる事を望むフィアンと共に中ホールへと向かって行った。

02-04 女の子だから……（後書き）

感想評価や誤字脱字報告、改善点やアドバイスなどはいつでも大歓迎です。ユーザ登録していない人も感想書けますので気軽にどうぞ！

特に、感想評価は作者のモチベや執筆速度が上がったりする重要な要素です。w
フックター

02・05 狂妄（前書き）

アレシアちゃんの絵を描きたくて奮闘してたら遅れてしまいましたw

すみませんでした。難しいなあ……

タイトルは調子に乗りました。それ程でも無いので気にしないで下さい（笑）

中ホールには沢山の人が列になって集まっていた。中央には直径一メートル程度の大きめの水晶球が並べられている。恐らくあれが、魔力検査のための魔導具といった所なのではないかとアレイシアは考える。

「えー、次はアレイシアさんですね」

ふと、思考に耽っていたアレイシアは我を取り戻す。何時の間にか水晶球の前にまで来ていたのである。今アレイシアを呼んだ人は、入学書類の時にもお世話になったフィズ先生であった。

「久しぶりだね。……と言う程まだ時間は経っていないかな？」

「それでも私にとってはかなり久しぶりね」

このアレイシアの言葉をフィズ先生は疑問に思ったが、そう言えばと、ある事に気が付く。

「……あれ？口調変わったね」

「別に私も好き好んでこの口調で話しているわけではないのよ？」

「ははっ、そうか。じゃあまずは学園証を出してくれるかな？魔力検査の結果とクラスを書き足すようだからね」

アレイシアは、スカートのポケットから学園証を取り出してフィズ先生に手渡した。フィズ先生はその学園証を右手に持ち、左手を

水晶球に当てる。

「この水晶球に手を当ててそのまま待つだけで大丈夫だからね。大して何も起きるわけではないから、安心して良いよ」

そう言われ、アレイシアは恐る恐る水晶球に手をかざす。すると

……

ビシッ……パキッ……

突然水晶球が発光し、亀裂が入って行く。

「……！？これは……！！」

「大して何も起きないと言ったのは貴方よね……」

発光が収まる頃には、フィズ先生の右手には新たに多くの情報が記された学園証が持たれていた。

アレイシアとフィズ先生は、またもや恐る恐るといった感じで学園証を覗き込む。その中でも下の方、寮室の番号が書かれている所の上にある、クラス、魔力量の項目には目を疑う様な事が記載されていた。

「何だ…これは……」

フィズ先生が驚くのも無理がなかった。本来は魔力量だけが記載される筈の項目にはしっかりと、『魔力9999 霊力0121 妖力0142 神力0643』と書かれていたからである。更にクラスはS、エングライシアで書かれたその記号は、最も高位のクラ

入を表す記号であつた。

「うーむ……流石、国王様が直々に推薦状を書かれただけはあるな……というかそもそも霊力と妖力ってなんだ？それに神力は神族しか扱えない筈なんだぞ？何で吸血鬼の少女が神力を持っているんだ？魔力量9999と言う事はつまりそれ以上の可能性もある訳だ……四桁までしか測れないからなあ……一般的な人間が100程度の筈で、さっきここを通つて行つた吸血鬼の娘も700だったのに……本当に君は何者なんだ？」

「……多分普通の吸血鬼だと思うわ」

何やら一人でブツブツとフィズ先生は呟いていたが、さりげないその問いにアレイシアはただそう答える。アレイシアはその後、学園証を手につつてその場を離れて行つた。その場に残された生徒や教師は皆、先程の発光現象から驚きのあまり立ち竦んでいたという。

中ホール内での魔力検査後、アレイシアはフィアンと決めてあつた待ち合わせ場所へと向かつた。待ち合わせ場所は、中ホール横にある花壇の周りである。その場所に到着してみれば、既にフィアンがベンチに座つて待っていた。

「あ！終わつたんですか？」

「終わらなければ来ないわよ。それで、クラスどうだった？」

「アレイシアさんから言つてくださいよ。私は後で言いますから」

何を考えての事かは分からないが、フィアンはアレイシアの後に言う事を望んだ。それは彼女の自信の表れなのか、それとも……

「えっ……まあ、いいわよ。私はSクラスになったわ」

「じゃあ私と同じクラスですね！学園証も見せて下さい。これが私のですよ」

フィアンもどうやらSクラスに入れたようだ。差し出された彼女の学園証の下部には、『魔力0515 クラスS』と書かれている。これを見れば、アレイシアがどれ程多くの魔力を持っているかが分かるだろう。

「えー……私の学園証ね……これだけど、あまり見せたく……」

「えー！？見せて下さいよ！」

「あ、待って！ちよっ……」

するとすぐに、フィアンはアレイシアの手から学園証を奪い取ってしまった。

「へへっ、私も見せたんですから、見せてくれないと不公平じゃないですか」

フィアンは楽しそうにそう言ってアレイシアの学園証を見る。その瞬間、花が咲き乱れるかの如き綺麗な満面の笑みが消え失せた。

「え、え！？ええええええ！……！？」

そしてすぐに、絶望の表情を浮かべる。それも当然、二百年を生きた吸血鬼でも2000を越えればかなり凄いのである。それを三十年も生きていない吸血鬼が四桁に達するなど、前代未聞の事であった。尤も、フィアンはアレシアの事を十二歳だと思っているのだが。

「ううう……何か自信なくなってきましたよ……」

「だから言ったのに………大丈夫よ。私がおかしいだけだから」

「……………」

その予想外過ぎる発言に、ついにフィアンは黙り込んでしまう。午後からはクラスでの授業に関する説明があるために、早く立ち直ってもらわなければならない。そのため、寮室に戻って昼までフィアンを慰め続ける事となった。

正午の八刻を過ぎ、アレシアとフィアンは西にある校舎へと向かう。ちなみに今回は、学園指定のローブと靴を身に付ける必要があったので、着ていたドレスの上からローブを重ねて着ておいた。寮から校舎まではかなり離れているため、毎日これを歩くのかと思うと気が滅入りそうである。アレシアもフィアンも貴族、町の間の移動にも馬車を使用するため、あまり歩く事はない。更に、アレシアの前世は交通手段の発達した日本に住む都会少年のため、歩く事を嫌うのは当然であった。

それでもやっと、校舎に辿り着いた二人は、一年Sクラスがある

という五階建ての第一校舎三階へと向かって行く。廊下には、アレ
イシア達と同じ入学式を終えたばかりの者や、二年生以上に上がつ
たばかりの者など、多くの人や人外が行き交っていた。

しばらく廊下を歩くと、天井が五階まで吹き抜けになっている開
けた円形のホールに出た。中央には五階の天井から吊り下げられた
シャンデリアが輝いている。更に、上階から一階が見える様にフエ
ンスがそれぞれの階に張られていた。ホールの淵を沿う様に設置さ
れている螺旋スロープがそれぞれの階につながり、その場所だけフ
エンスが途切れている様だった。恐らくこれで三階まで登れるだろ
う。

二人がスロープに差し掛かったその時、突然何者かに後ろから衝
突された。後ろを振り向くとそこには、ニヤニヤと嫌な笑顔を浮か
べた痩せた感じの犬人と思われる男が立っていた。

「おいおい嬢ちゃん達……周りはしっかと見て歩こうな？」

「なっ！何ですか貴方は！？貴方からぶつかって来たんでしょう？」

明らかに因縁付けて謝らせる様な態度の男にフィアンは怒る。今
のフィアンはどこか髪の毛を逆立てている様にも見えた。

「いや、ぶつかっただから謝れよ。ほら、黒髪の方、お前の靴が
俺の足に当たっただからな。お陰で擦りむいちまったじゃねえか」

「……全く、どの異世界にも同じ様な愚かな人間は居るものねえ……」

「貴様あッ！！」

全く謝る様子の無いどころか、挑発する様な発言をするアレイシアに男は怒り、狂宴の引き金となる言葉を発した。

「そっちが謝らないのなら実力行使で行かせてもらうぜ？今謝ればまだ間に合うが、それで無けりや体で払って貰おうか」

フィアンは完全に怯え切っていた。その言葉を聞いて更に怯えたのは言うまでもない。……どこか、勘違いをしているのかもしれないが。

「あら、そちらもその気なら私も実力行使で行かしてもらおうよ？」

「ハッ、お前みたいな普通の人間に何ができるんだ？俺は四年スクラスの主席だぜ？」

「私に何が出来るって？目の前に居るクズを倒す事が出来るのよ。それに私は人間じゃない、吸血鬼よ。死ぬ覚悟は出来たかしら？」

「吸血鬼か、上等だ！戦ってやろうじゃねえか！」

そして今、戦いの火蓋は切られ、狂宴は幕を開けた。

02・05 狂宴（後書き）

感想評価や誤字脱字の報告、アドバイスや改善点をお待ちしております。ユーザ登録していない人も感想書けますので気軽にどうぞ。

次回は全面バトルの予定。

アレイシアちゃんがおかしくなったのには、ちゃんと理由があるんです。……見捨てないでくださいね？

02 - 06 吸血衝動

「願ひよ届け！我、魔法が行使されん事を望むッ！火よ！！火よッ！！」

戦いが始まった。先手を打ったのは男、まずは初級火炎魔法をいくつも放ち、アレイシアが避けられる方向を制限する。少しずつ相手を追い詰めて行く基本的な戦法だ。

一方アレイシアは、その火炎魔法を避けつつも、今まで感じた事のない不思議な感覚を覚えていた。火炎魔法を放って来ている相手の首筋に自然と目が向き、そして血が飲みたいと、そう思ってしまうのである。果てには、ホールの端で縮こまっているフィアンの血まで飲みたいと思う始末。先程の会話の時からやけに感情に忠実になっていたのは、恐らくこの吸血衝動のせいかと思われる。ある程度の年齢に達するまで、吸血衝動に駆られた吸血鬼は、自我を保つ事さえ困難になる者も居るといだが、アレイシアの場合、普段よりも思考力が少し低下するだけであつたのは不幸中の幸いだらう。

アレイシアは少し冷静さを取り戻し、先程己が放つた言葉を思い出す。

愚かな……クズ……死ぬ覚悟……

そのどれもが、普段のアレイシアでは考えられない様な言葉の数々であつた。怒りに身を任せて本能のままに突き進むところなるのかと、アレイシアは自分の事ながらも恐ろしく思ったという。

アレイシアはすぐにこの戦いを止めたいと思つたが、東次の知識

からも、売られた喧嘩を買った男は普通の交渉では引き下がらないという事をよく知っている。実際、元はといえば、アレイシアが言い始めた事なのである。こうなれば、どちらかが負けるまで戦いは続く事は明白であった。

「オラオラア！！危ねえぞ！」

「ッ！！？」

何時の間に接近してきたのか、アレイシアの目の前には男の拳が迫って来ていた。男の腕全体から魔力を感じるため、恐らく身体強化でも使っているのだろう。避けるのは間に合わないと瞬時に判断したアレイシアは、すぐに魔法障壁を張る。

ガッ……ピシッ……

アレイシアが張った魔法障壁は、魔力割れが起こる寸前で何とか拳を防ぎ切った。魔力割れとは、魔法障壁を破られた時に起こる現象の一つであり、周囲に弱い魔力の衝撃波を放つというものである。これは大きな隙を生むため、なるべく避けたい事なのである。

「防いだか！ならこれでどうだ！！！」

男は身体強化用の魔力を障壁に込めようとする。それは障壁を破る一番簡単な方法なのであった。しかし、それを見落とす程アレイシアも弱くない。すぐに飛行魔法を使用し、高速でその場から距離をとったのである。

「なっ……何だってえ！？何で空を飛べるんだ！！？」

「……………あ。しまった……………」

だが、アレイシアは重大な間違えを犯してしまった。飛行魔法は公には明かさない筈だったのだが、今この男の前で使ってしまったのである。

「え……………？アレイシアさん……………？？」

「ああ、これはね……………あの、そのお……………」

フィアンもかなり驚いている様であった。更に、集まって来ていた野次馬共にも見られてしまった。どうすればこの状況を打開出来るのかと考えるが……………

「は……………ははっ、これでこそ戦い甲斐のあるというものだぜえ！！火よ……………！！」

どうやらこの男はまだ戦うつもりらしい。アレイシアとしては早くこの戦いを終わらせたかったのだが。

相手が放って来る数多くの火炎魔法を避けつつも、アレイシアは男に急接近する。当然、急接近などされればそちらを警戒するに決まっている。そしてぶつかる直前、警戒が疎かになった背後へと瞬間移動、男の背中を蹴り飛ばしたのである。その瞬間、野次馬共の中から『見えたッ！』と声が聞こえたのは気のせいだろう。……………いや、気のせいだと思いたい……………

「ガハッ……………貴様っ……………」

それでもすぐに立ち上がってアレイシアと対峙する男だが、アレ

イシアはまた背後に回り込み、男の首に指を触れさせる。そして一言、あえて恐怖を煽る言い方で告げた。

「チェックメイトよ。指先に集めた魔力を放出すればすぐに風魔法が発動するわ。そうすれば頭と体がサヨウナラね」

「……………分かった、俺の負けだな……………」

どうやら、この戦いの勝敗は決した様だ。実は、指先の魔力うんぬんは嘘であり、勿論首を跳ねるつもりなど砂のかけら程も無い。少し落ち着いて来たところで、男はアレイシアに質問を投げかける。

「さっき、空飛んでいたのとか一瞬で後ろに回ったのってどうやったんだよ？あとチェックメイトって何だ」

「それは秘密よ」

「アレイシアさん！！」

するとそこに、どこか焦った様子でフィアンが駆け寄って来た。

「どうしたの？」

「学園長先生が呼んでいるそうです。私も含め、三人で来いとの事でした」

「あー…………騒ぎ過ぎたかしらね。校舎に被害はあまり出ていないけど」

校舎への被害は、ホールの所々が焦げているだけであつたが、そ

れはつまりこの男がやったという事である。

「あぁっ、くそっ！」

「仕方ありませんよ……」

そして三人は学園長室へと向かって行った。

三人は学園長室に入り、イルクス側の学園長と対面した。豪華な飾りで満たされた室内で机を挟んで座っている。三人が座ったところで、学園長は口を開く。

「えー、では君達、学園校舎内で魔法魔術を行使してはいけないという決まり事は知っているかね？」

「はい、知っています……」

「私は知りません」

「私事です」

そのルールについて、男は知っていた様だが、アレイシア達は知らない様だった。因みに、学園長、ウエルム、アレイシア、フィアの順である。ウエルムと言うのは男の名前であった。

「その二人は何故知らない？入学した時に、それについて書かれた紙を渡された筈だろう」

「え？」

「へあ？」

二人はわけが分からないといった表情をした。それも当然、紙などまだ貰っていない筈だったからである。尤も、いつか貰い損ねていたというなら話は別だが。

「私達はまだ紙なんてもらっていませんよ？まだ入学式を終えたばかりですし……」

「ん？入学式を終えたばかり？という事はまさか、一年生なのか！？」

学園長は心底驚いたという風にそう言う。まさか四年のSクラスと張り合う者が一年だとは思ひもなかったのだろう。本来一年生は、魔法魔術が使えないという事を前提としているのである。

「はい、これ学園証」

「私のも」

「なっ……これは……疑ってすまなかった。次からは気をつけなさい。先程言った、学園のルールが書かれた紙というのはこれから渡されるだろう。……あと、アレイシアと言ったか？この魔力……」

学園長がそこまで言いかけたところで、急にアレイシアは言葉を阻む。

「はいそこ禁則事項！それ以上聞かない！！」

「あ、ああ。しかし……うむ、分かった」

アレイシアが物凄い迫力で言うものだから、つい学園長は話すのをやめてしまう。後ろでは、何故あれ程慌てるのかと不思議に思ったウエルムがフィアンに話しかけていた。

「おい、あいつは何であんなに慌てているんだ？」

「多分心当たりはありますが、貴方には言えませんが……」

その後、少し打ち解けた様子の三人は、学園長室を後にしてそれぞれのクラスへと向かって行った。ウエルムだけが、後で呼び出しがかかっている様であった。クラスでの説明には少し遅れてしまう事になるが、アレイシアは走りながら、どれだけ多くの人に飛行魔法を知られてしまったかという事を心配していた。

02-06 吸血衝動（後書き）

誤字脱字、感想評価やアドバイスなど、大歓迎ですのでいつでも送ってやってくださいw ユーザ登録していない人も感想書けますので気軽にどうぞ

02・07 アレイシアファンクラブ（前書き）

二日連続投稿です。

早く話をすすめないと……w

02・07 アレイシアファンクラブ

アレイシアとフィアンは三階、一年Sクラスと思われる部屋の前に立っていた。クラスの中はどれも騒がしく、何やら面白い話題で盛り上がっているようであった。

「開けるわよ」

「はい……」

話の内容も気になったが、静かな声で、フィアンに扉を開ける事の確認をとる。先程からどうも怯えている様な感じのフィアンだが、別にアレイシアに怯えているという訳では無さそうであった。

「失礼します。遅れてすみません」

「すみません」

アレイシアは扉を開け、フィアンと共に中に居るであろう担任の先生に声をかける。すると、

「おー！あれが噂の！？」

「あのウェルムを降参させたという」

「そうね、『黒翼のアレイシア』で間違えないわ」

「羽は見当たらないが……？」

「こらっ！その君達、そろそろ黙ったらどうだ？」

何やらイタイ二つ名をつけられていた。

このクラスの担任はあのフィズ先生だったらしく、騒がしく話をしている生徒たちを鎮めている。アレイシアは、現状確認のためにもフィズ先生に話しかける。

「……ちよっ、これは一体どういう事なのよ？」

「ああ、ホールでウエルムと戦っただろう？その時に空を飛んだのが原因で、もしかしたら今では伝説になっている翼持ちの吸血鬼なのではという話になってな……僕も半分信じていたよ」

翼持ちの吸血鬼というのは、年齢は裕に一万を越える、この世界の神話に出て来る吸血鬼の事であった。大体二千年程前まで、翼を持った吸血鬼は実在していたそうだが、今では全くなりなくなっている。少し歴史の話をすれば、千五百年程前に現れたある翼持ちの吸血鬼は、わずか十五歳で二つの軍を相手にし、戦争の地にて勝利を収めたという。強さで比べれば、アレイシアも同じくらいはあるかもしれないが、背中の何処にも翼は見当たらない。要するに、虚構^{デマ}である。

「いや、信じるなって。私は別にそんな大層なものじゃな……」

「お願いだ、サインくれっ！！」

「抜け駆けはするいぞ！俺もだ！」

「アレイシア！俺だ！結婚し……」

「アレイシアファンクラブで会長をする事になりました。公認のものにしたいのでご本人の許可を……」

「私もサイン欲しい!!」

「はははっ、すっかり人気者だね。やっぱり僕もサインをもらっておこうかな?」

ついにフィズ先生にまで見捨てられた気分になったアレイシアは、もうこうなってしまうては仕方が無いと、一人ずつ順番に対応して行った。サインをほしがる者には、自分は翼持ちではないという事を告げ、それでもサインをほしがった者には、エングライシアで適当に『A l y s i a M . L a t r o m m i a』と書いて渡しておく。更に、ファンクラブに全く興味のなかったアレイシアは、自称ファンクラブ会長に、自分に迷惑がからない程度にならいくらでも好きにやっていると告げ、求婚はあっさりバツサリスツパリと断っておいた。求婚を断られた後の絶望した様な表情はなかなか見物であったというのは胸の内に秘めておく事にする。

「ふええ……これは心労で死ねるよ……」

「あ、アレイシアさん!?大丈夫ですか?」

「えうう……」

もしかすると、フィアンはこれを心配していたから怯えた様になっていたのではないかと思ひ当たる。

その後、かなり時間をかけて落ち着きを取り戻した一年Sクラス

は、やっと予定通りの説明に戻る事が出来た。アレイシアが指定された席は、一番左の窓際、最前列の席である。右にはフィアンが座っている。

「ではまず、この学園での方針について説明させてもらいますね。一般的な言語、演算能力から、魔法魔術や戦闘など、幅広い範囲を学園では教えています。午前は三時限、午後も三時限と、計六時限制になっているのですが、その内、午前の三時限は数学、国語などの必須科目、午後の三時限は、それぞれが選ぶ選択科目となっています」

なるほど、とアレイシアは思った。午前の必須科目は、国語がこの世界の三国共通語である事以外、地球でやっていた事とあまり変わらないのである。そのまま話を続けるフィズ先生に耳を傾ける。

「選択科目において、一学年の終了時に規定以上の単位を取得出来ていれば合格、クラスが一つ上がります。まあ、皆さんは一番上のSなので変わらないという事になりますが。それ以下でありながらもクラスの平均程度の者はそのままのクラスを維持、それ以下なら不合格と見なされ、クラスを一つ下げられます。学園卒業時にどのクラスにいるかで、どれほど優れているかが判断され易いですね。クラスは上から、S、A、B、C、Dとなっています」

それはつまり、単位制と学年制の見事な融合であった。七年という決められた期間の中で、どれ程上位のクラスに入れるかが鍵となるというわけである。

と、そこで、アレイシアの右にいるフィアンが立ち上がった。

「質問です！どの様な選択科目があるんですか？」

「ああ、そうだね。それが書かれた紙を今から配る所だったんだ」

そういつてフィズ先生は順番に、座っている生徒たちに紙を渡しに行く。アレイシアも紙を受け取り、たくさん並んだ選択科目に上から目を通す。

「この中から三日後までに、自分がやりたいと思う科目を選んでおくように。数はいくらでも選べるけど、あまり選び過ぎはすすめないよ。その勉強が疎かになるからね。三日後、選択科目が決まるまでは午前中の授業だけになるかな」

そう言つてフィズ先生は、さらにもう一束の紙を生徒たちに配つて行く。

「これには学園の規則が書かれているから良く読んでおくように。学園校舎内で魔法魔術は使つてはいけないというのもあるなあ」

「う……」

その言葉に心当たりがあるアレイシアは、知つていて言つたのではないかと思いつつも、自分がやつた事を悔やんでいた。

その後も学園内ギルドの使い方、学園証などについての説明も受けたアレイシアは、説明された学園証の機能にかなり驚いていた。学園証は、磁気の代わりに魔力を使ったカードのような機能も持っているらしく、寮室の鍵に学園証が使えるのはそのせいらしい。更に、ギルドにおける階級もこれを使つて分かるという。これらのことからアレイシアは、文化レベルは地球でいう所の中世でありながら

も、魔法を使つた一部の技術では地球にも引けを取らないという仮説を立てた。実際、約千年も前からこの世界の文化は同じ様な形をずっと保つて来ていると言われているため、この仮説も案外本当なのかも知れない。

説明が全て終わり、Sクラスの多くの人がまた明日と教室を離れて行く。そんな中、アレイシアとフィアンは教室を離れられないでいた。何故かといえば……

「あ、アレイシアさんっ！早く出ましようよ！！」

「無理よ！！これ程の人が集まったら……！！」

「学園紙のインタビューです！」

「うちのギルドパーティに入りませんか？」

「将来僕の嫁に！」

……あまりにもたくさんの人に囲まれ、身動きの一つも出来ないからであつた。結局、寮の部屋へと帰れたのはそれから一刻程経つてからだという。

「あんなの、もうつんざりよ……」

「私も疲れました……」

寮室に帰った二人は完全に疲れ切っていたため、そのまま体も洗わずにベッドへと飛び込んだ。誰が噂をこれ程まで広めたのかと考えを巡らせながら……

02・07 アレイシアファンクラブ（後書き）

誤字脱字、感想評価やアドバイスなどお待ちしております！

ユーザ登録していない人もコメント出来ますのでどうぞお気軽に！

くやってみたかった謎コーナー！

七篠「どうもおはこんばんちは、投稿する前、遂に総合評価三百ポイントを超えたのを見て狂喜した七篠であります。読者の皆様、読んで頂き誠にありがとうございます！！えー、では、黒翼のアレイシアさん、どうぞ！」

アリア「その名前で呼ぶなって……あとアリアって何よアリアって」

七篠「いいじゃないですか。最近どうも貴女に愛着が湧いて来てしまつて……愛称ですよ、愛称。次回から本編で使う予定の」

アリア「……そう、つまりは読者様の反応を見て判断するわけね。愛称アリアって悪くないわ」

七篠「そういう訳でよろしくお願いします。感想にこの愛称の賛否を書いてくれると嬉しいです！感想や評価は作者のエネルギー源ですからね」

アリア「待つてまゝすゝ（ニコッ）」

七篠「うお、サービスだw」

02-08 新たな友人……？（前書き）

執筆速度が上がっているw

この調子で書いて行きたいと思います！

次の日の朝、ベッドから起き出したアレイシアは、いつもより明らかに遅い時間に起きてしまったという事に気付いた。恐らく、昨日の騒ぎのせいで疲れてしまったのだらう。そのため、隣の部屋で眠っているフィアンを急いで起こしに行く。

「フィアン！朝よ！今すぐ起きなきゃ間に合わないわ！！」

「にゃ……？今は……」

寝ぼけているのか、猫らしい声を発しつつも今の時間を聞いてきた。

「今はもう五刻半、授業が始まるまであと半刻よ！」

「え……！？あ、急がなきゃ！！」

やっとフィアンも気付いたのか、ベッドから飛び起きて着替えの準備を始める。着る物を準備し、丁度今から着替えようとした所でフィアンは思い出したように言う。

「そういえば、昨日風呂に入っていないですね。いつもは毎朝毎晩入るけど」

「入っている暇はあまり……もういいわ、フィアンから入って来なさい！」

そう言われ、フィアンはある事を疑問に思った。それは、一般的

な女子ならあまりにも当然の質問である。

「え？一緒に入るのはいけないんですか？今は時間がないからそっちの方が良いでしょう？」

「な……それはダメだって！何がダメかって言われたら、主に私の精神が……！」

「何ですか？」

「ああああっ！！もういい！そんな事喋っている暇があるなら風呂に入るわよ！」

結局アレイシアが折れ、一度一緒に風呂に入ってからクラスに行く事にした。ちなみにお湯は、アレイシアが水魔法と火炎魔法を發動させる事によって一瞬で沸かす事が出来たため、設置された蛇口からわざわざ時間をかけてお湯を出す手間が省けた。変な形でありながらも、二人は改めて魔法魔術のありがたみを実感する事となった。……ただ二人は、その蛇口から出てくるお湯も、水源こそ山の川だが、実は火炎魔法で暖められているという事を知らない。

一年Sクラスに辿り着き、入り口に設置されている両開きの扉をかなりの勢いで開ける。

バンッ！！

「おはようございますっ！」

「ハア……おはよう……」

「お、今二人が来たな。これで今日の欠席者は無し……か。二十一人中二十一人、今日は異常なし、と」

教室の中では丁度フィズ先生が出席を取っていた所らしく、二人の姿を確認すると、手に持った紙に何かを書き込んでいた。

「では二人共、席について」

「はい」

二人は隣り合った席に座り、両者共に前方にある板へと目を向ける。その板は、地球でいう所の黒板に当たる物であり、ごく微量の魔力を使った特殊な杖を使う事によって簡単に消せる文字を書く物である。

フィズ先生は板の前に立ち、生徒の方へと目を向ける。

「ではこれから、必須科目の数学の授業を始めます」

そして今、この学園に来てからはじめての授業が始まった。どうやら、日直に当たる人はいないらしい。

授業が始まってからすぐに、アレイシアは退屈を覚えていた。何故かといえば、数学の授業レベルが明らかに小学三、四年生並なのである。加減法から一部の積、及び商、更にちよつとした応用的な

計算など、アレイシアとしてみれば復習もいい所だった。

そうして退屈を覚えると吸血鬼も人間も同じく、他の事を考えて時間を潰そうと思う物である。

（さっきの風呂……絶対思い出さたくないっ……！！ あわわわ……）

「……？アレイシアさん、ちょっと顔が赤いですね……大丈夫かな？」

アレイシアの様子が少しおかしい事に気付いたフィズ先生は、心配してアレイシアに声をかける。

「や…あ、はいつ、全然大丈夫です！」

「そうか、じゃあこの問題。アレイシアさん、解いて見て下さい」

アレイシアは成る程、とそう思った。これはつまり、話をしっかりと聞いていたかどうかの確認のために問題を出しているのである。

応用問題……直線上の街道に馬車が二台止まっている。それぞれが反対方向に、半刻あたり六千テルム、二刻あたり二万四千テルムで進んだ時、二台の馬車は一刻あたりどれ程の速度で離れていくでしょう？

「一刻あたり二万四千テルムよ」

「……正解だよ。この問題は難しい筈なんだけどなあ……一瞬で解くとか……」

……どうやらこの問題、あまり早く解いてはいけない問題だった様だ。

それから何事も無く授業が終わり、寮へと帰る時間になる。すると、アレイシアの後ろの席から誰かが歩いて来た。その人は、赤色の簡素なドレスの上に、学園指定のローブを着ている。更に、背中の中半ばまでの金髪を赤い紐で縛っていた。

「こんにちは、貴女が『黒翼のアレイシア』ね。私はシェリアナ・レイン、これから七年間と同じクラスになると思うわ。あと、実は寮の部屋が貴女の隣なのよ。よろしくね」

「……あ、こちらこそよろしく。って言えばいいのかな？……あと黒翼言うな」

「それと……これを見なさい！」

「えっ！？これは……」

アレイシアの言い分を聞かず、ローブの胸元に付いている内ポケットから二枚のカードを取り出す。そのカードの片方にははつきりと、『アレイシアファンクラブ：会員#001』と書かれていた。もう一枚は学園証であり、種族の項目には『吸血鬼』と書かれている。

得意げに二枚のカードを見せるシェリアナは、アレイシアに肩を寄せて組む様にした。

「へへへ……私は貴女が好きなのよ！がんつばって会員番号一番を取ったんだからね！」

「どーいう意味よ……」

シェリアナが言う所の『好き』は、ファンとしての好意的なものなのか、それとも別のものか。それは分からなかったが、夜の十四刻からアレイシア達の部屋に、シェリアナとそのルームメイトが来るという事になった。

夜の十四刻になる少し前、玄関の扉からノックが聞こえた。それに気付いたアレイシアは、玄関の扉をゆっくりと開ける。

「はい？」

「私、シェリアナよ。あとこっちはクレア」

「はい、よろしく願いますね。アレイシアさん」

シェリアナの横に居た赤髪の、フィアンよりも更にお嬢様な少女の名前はクレアと言っらしい。

「どうぞ入って、ゆっくりしてってね！」

アレイシアはシェリアナ、クレアと共に寮室の中へと入って行った。

02・08 新たな友人……？（後書き）

誤字脱字、感想評価やアドバイスなど、いつでもお待ちしております！

ユーザ登録していない人も感想を書けますので、どんどん書いて下さい。

↓結構気に入った謎コーナー↓

七篠「感想やアクセスが増え、評価も上がり、嬉しさのあまり泣きそいです。そして、この嬉しさを執筆に発散する七篠であります」

アリア「この名前、今回は出なかったわね」

七篠「ごめん、次回からになりました。夏菜様は可愛くていいと言ってくれましたので、何もなければこのまま使う予定です」

アリア「かつ、可愛いって！？ちよっ……それは……」

七篠「それにしても今回は……若干暴走してしまいました。ごめん。主に風呂の所で」

アリア「……いや、あの……」

フィア「……あ、私も名前が」

七篠「……そうなんですよ。フィアンも（あまり変わらないけど）これでどうかと思いましてね。では次回にまた。感想や評価、待っ

てます！」

フィア「待ってまーす」

アリア「……感想が書きにくいつて人はWeb拍手からコメントをどうぞ、って七篠さんが言ってたわ」

02・09 吸血鬼同士なら！（前書き）

何か今回、後半がやたらと筆が進んだw
こういうシーン、自分って好きなんじゃないか？

02・09 吸血鬼同士なら！

部屋の中、リビングルーム中央の机を囲んで四人は談笑をしている。フィアンもシェリアナ、クレア共に仲良く出来ている様であった。そんな中、より良く仲を深めるためにと、シェリアナがある事を提案する。

「はい、ちよつと提案！隠し事一切無しの自己紹介しない？ルールとして、少なくとも学園証に書かれた事は全て言う事」

一つに結ばれた金髪を揺らして立ち上がるシェリアナ。彼女はどちらかと言うと落ち着いた感じであるが、友人と居たり、興奮したりするとこの様なはじけた感じになってしまふそうだった。

「えー……私は……」

「それはいいですね」

「やってみましようよ、面白そうですし」

この意見にアレイシア以外は皆賛成していた。アレイシアがあまり賛成出来ないのは、あまり言いたく無い事も沢山隠し持っているからである。少し慌てているアレイシアをよそに、シェリアナは話し始めた。

「三対一で決定ね。じゃあまずは私から……ごほん。私の名前はシェリアナ・レイン、十二歳よ。種族は吸血鬼で、魔力量七百三十一のSクラス。イルクス王国の出身よ。次はフィアね」

アレイシアは、フィズ先生が魔力検査の時に言っていた『さつきこを通って行った吸血鬼の娘も七百だったのに』と言う言葉を思い出す。それはもしかしたらシェリアナの事だったのかもしれない。ちなみにフィアというのは、先ほどの談笑中に半ば無理やり決まったフィアンの愛称である。でも、あまり変わらない気がするというのは胸の内にとどめておいた方が良さそうだ。他にもアレイシアはアリア、シェリアナはセリアという愛称が付いている。

「私ですか？……えー、私の名前はフィアン・エンレイス、十歳です。あ、ミドルネームにエルマが入ります。種族は猫人、魔力量五百十五でSクラスに入っています。実はメアル皇国の出身なんです。えーと、次はクレアさんお願いします」

「え？フィアって十歳だったの！？」

アレイシアは驚いた様に言う。本来、この学園の入学基準は十二歳以上十六歳以下だったからである。

「はい、そうなんですよ。私の父様が十歳の猫人の割にはかなり多い魔力持っていると、学園長に頼んでくれたそうです。母様によれば、私は極東の地のヨウカイという生物の血を引いているそうですが、もしかしたらそのせいかも知れませんね」

「へえ……？」

ある事を疑問に思ったアレイシアだが、それはさて置き、クレアの話に耳を傾ける。

「話してもいいでしょうか？私はクレア・フレイルと言います。年は十二歳です。種族はエルフで、魔力量は六百三、Sクラスに入っ

ています。……実は私……あまり多くの人に言っていていい事なのかは分かりませんが、イルクス王国の山奥にあるエルフの里の姫なんです」

「なっ、なんだってー！？」

「クレアってそうだったんですか！？」

「それは知らなかったわ！」

三人は驚き、三者三様の言葉を発する。だがそれとは正反対に、どこか暗い感じのクレアが話を続ける。

「姫とは言ってもお箱入り、友達なんて全く居ませんでした。だからこの学園で貴女達に会えて嬉しいんです」

「そうなんですか……」

フィアンは何を思ったのか、下を向いて黙ってしまふ。そんな様子を見たアレイシアはクレアの元に向かい、やさしく話しかける。

「それはまた……大丈夫よ。私達がちゃんと友達で居てあげるから」

「私もです！」

「はい……ありがとうございます！」

その言葉が嬉しかったのか、クレアは少し涙目になりつつも笑顔になる。

「……では次、アリアさんお願いします！」

クレアにそう言われたアレイシアは、これから長い付き合いになる
しと、なるべく本当の事を打ち明ける事にした。よく考えてみれば、
本当の年齢を明かしたフィアンに、自身はエルフの姫だと明かした
クレア。気が進まないが、これで嘘をつける訳がなかった。

「分かったわ。私はアレイシア・ラトロミア。ミドルネームにメル
ヴィナの略でメルを挟むわ。年齢は十二歳……」となっているけど実
は二十二歳、種族は吸血鬼よ。魔力量は少なくとも九千九百九十九
のSクラス。二十二歳とは言っても、時間の流れが遅い空間に十年
間居たから多分十二歳で問題ないわ。魔力量については……もう何
も言わないで……」

それを聞いたフィアン以外の二人は啞然としていた。年齢に関して
もそうだが、魔力量が五桁に達するなどまさに伝説、神話級の化け
物である。フィアンは知っていたから驚かなかったのだが、それ
でも呆れたという様な表情をしている。

「っ……………！！」

「セリア！？どうしたの？」

なぜか震えるシェリアナを心配してアレイシアは声をかける。する
と突然、アレイシアの視界が金色に染まった。それがシェリアナの
髪だと気付くのに数瞬を要し、抱き締められている事に気付くまで
更に数瞬。

「……凄いつ！凄いわアリア！！流石私のアレイシアね！！……そ
れとやっぱり翼を隠していたりしない？」

「いつ私が貴女の物に……あと翼なんて持っていないわよ」

やたらとベタ褒めされて戸惑うアレシアだが、最悪嫌われるかもしれないと思っていたため、これはかなり嬉しい誤算だった。だがその直後……

「……ふふつ、ちょっと血を吸わせてもらってもいいかしら？」

「……………え？今何て？」

「だからあ…血、ちよーだい！」

「えええええ！？」

突然の吸血宣言をされたアレシアは余りにも唐突だったため、全く対応する事が出来ずに吸血ポジションを取られてしまう。それは互いが抱き付く様な形であり、首の斜め後ろに一番噛み付きやすい体勢であった。

その体勢を取らされていることに気付いたアレシアは、すぐにその手を振りほどこうとするが、刻すでに遅し。無情にも、アレシアの首にはシェリアナの牙が突き立てられていた。

プツッ……

皮膚を切り裂く小さな音とともに、溢れ出す多量の血液。それを一滴たりとも逃さない様にと、シェリアナはアレシアの首に口を押し付ける。

「あつ……ちよつ、やめつ……ああつ……あつ！」

「むう？うむううう！（何？凄く美味しいわ！）」

アレイシアの血をしばらく吸い続けたシェリアナだが、ここで予想外のことが起こる。

……プツッ

何と、アレイシアもシェリアナの首に牙を突き立て、互いの血を吸い合うことになったのである。

「あわわ……何か凄いですよあの二人……」

「互いに吸い合うなんて……吸血鬼同士ならですね」

「むうあうう！！」

「うううあー！！」

結局、それから互いに重度の貧血状態になるまで血を吸い合い、足元もおぼつかない状態になってしまっていた。リビングルームの床には所々血の痕が付いており、中央の机の横にはアレイシアとシェリアナが血まみれで転がっている。その二人は髪も洋服も、固まった血液で変色している所が見られた。

「ハア……へへへ……アリア、凄く美味しかったわ……ハア……ありがと……あと私のはどうだった？」

「ううう……始めて血を”飲んだ”わ……あれは吸うってレベルじ

やなかった……ハア……あそこまで吸われたら仕返ししたくなるじゃない……だから私も……つい……ハア……」

「……いいですよ！……ハア……アリアさんにならいくらでも……吸われていいです……ハア」

「……何あの二人……？」

「互いの吸血で少し……いや、かなり仲が深まった様ですね……あれは……」

その後、シェリアナとクレアの二人は、隣の部屋に住んでいながらも帰るのが面倒な時間になってしまったという事で、アレイシアとファイアの部屋に泊まって行く事となった。アレイシアとシェリアナの二人は、互いの血液で血まみれのままベッドで就寝してしまったため、動かさずにそっとそのままにしておいた。

02・09 吸血鬼同士なら！（後書き）

誤字脱字報告、感想評価やアドバイスなど、いつでも送ってください！ユーザ登録していない人も感想は書けますが、Web拍手からもコメント送れますよ。やりにくい方はそちらからどうぞ。

「ハマってしまった謎コーナー」

七篠「はい、アリアちゃん遂に血を吸いました！」

アリア「別に衝動があってやった訳ではないんだけどね」

七篠「本来はここ、アリアちゃんだけが吸われる予定でしたが、誰を一番最初に手をかけるか」と言って下さった方が居ましたので急遽変更、互いに吸ってもらいました」

アリア「読者様の反応が心配でもあるのよね……残酷描写ってあるから平気だと思うけど。そうだ、時間を見つけては何か書いていたけどあれは何？」

七篠「それは秘密。もしかしたら近日公開かも」

アリア「そう、期待してもいいのよね。感想や評価、アドバイスなど、待ってまーす」

セリア「Web拍手のコメントも待ってまーす！」

七篠「ではまた次回！」

02-10 西の草原にて

気付けばアレイシアは、白くて四角いあの空間に居た。前方のかなり離れた所に、白いワンピースを身に着けた黒美さん（仮）が立っている。

「こんにちは！始めて吸った血はどうだった？」

「いや、それが何か凄く美味しかったんだけど……」

アレイシアは、自分はもう人間ではないのだとより強く認識した。例え吸血衝動が無くとも吸血鬼、血液を美味に感じるものなのである。アレイシアも不覚ながら、また一緒にセリアと血を吸い合いたいと思ってしまった。

「まあ、それはいいとして……貴女は、あのセリアと言ったかしら？あの娘と後戻り出来ない関係にあるわよ」

「……！？それはどういう事よ！言いなさいッ！」

黒美さんの言葉を聞いたアレイシアは、わざわざ瞬間移動で長い距離を詰めてまで掴み掛かる。

「それは……あの娘が貴女の血液を口にしたものだから、血液に含まれる多量の魔力や神力がセリアの身体に影響して、寿命がかなり伸びてしまったという事ね」

「……成る程。で、具体的にはどれ位？」

すぐに落ち着きを取り戻したアレイシアは黒美さんに問う。それは、もしかしたら大変な事になるかもしれないからだ。そういう時こそ落ち着いて、冷静に判断すべきなのである。

「そうね、身体はあれ以上成長しなくなった上に寿命は……七千年から八千年位かしらね？ 神力はとても強い影響力を持っているのよ。さらにセリアまで貴女が持つ霊力や妖力を極微量、持つようになっているわ」

「……………私に責任を取れと？」

「別にそんな事は言わないわよ。貴女がいいなら、むしろもつと血を吸わせた方がいいわ。理由はまた今度言っわね。……そうそう、あと一日であれから一週間が経つから十年修行するわよ」

そこで突然不意に歪む視界。それは目覚めが近い事を表していた。

「じゃ、また明後日！」

アレイシアはそれだけを言い残し、意識を少しずつ、現実へと度し行った。

そこは寮の二階、一番奥にあたる寮室のベッドの上で、二人の少女がすやすやと眠っていた。それはアレイシアとシェリアナであり、二人とも上半身を中心にかなりの範囲が固まった血液で赤黒くなっている。今は早朝の四刻であり、他の二人、フィアンとクレアはまだ起きていない様であった。そんな中、ゆっくりと起き出して来た

のはシェリアナである。

「んうーっ！……やつぱり貧血気味だなあ……」

フラフラと上半身を起こし、伸びをしながらそう呟くシェリアナは、横にいるアレイシアに目を向ける。そして、ある事に気が付いた。

（……？私の魔力が……増えてる！？）

それは決定的な違いであつた。昨日の夜までと比べたら、天と地のと言わんばかりの差である。感覚的に言えば、二、三倍になるだろうか。

（えええええ！？何で何で？そんな急に増えるものなの！？）

シェリアナは当然かなり驚いたが、それと同時に喜びも感じていた。理由は簡単、余りにも遠すぎると感じていた存在が、少し近くなつたからである。それは始めてホールでアレイシアを見た時からあつた、尊敬という思いによるものであつた。だからこそ、シェリアナはファンクラブの会員番号一番を頑張つて取りもしたし、勇気を振り絞つて話しかけたりもした。その事に強い喜びを感じたシェリアナは、喜びの余りつい、アレイシアに抱き付いてしまう。

「えへへへ……」

「……う……？」

それから一刻程が経ち、血臭を辺りに振りまきながらリビングへと現れた二人は、フィアンとクレアに風呂に入つて来いと言い渡され

てしまうのであった。ちなみにまた、一緒に入るかどうかで言い争いになり、アレイシアが押し負けてしまったというのは余談である。

学園での授業が終わった後、フィアンに外で魔法魔術の練習をして来ると断りを入れ、大魔法を放つても問題の無い学園西の草原へと向かう。歩いて行くのは大変なので、学園からある程度離れた後、飛行魔法でゆつくりと空の旅を楽しみつつ向かって行った。

半刻もの飛行の後、アレイシアは目的の場所に到着する。そこには川が流れ、遠くには森が見える、とても自然豊かな場所であった。……正直、これ程自然豊かな場所では火炎魔法が放ちにくいいため、今回それは自重しておくことにする。

アレイシアは、矛盾の能力による『こじつけ』が何処まで通用するのかと、それを調べるためにもこの場所へと来たのである。瞬間移動で感覚を掴んでから、他の矛盾の行使も習得しやすくなったのだが、未だ瞬間移動以外では何も使い道が無いのが現状である。アレイシアが今回知りたいのは、例えば、瞬間移動は出来ても時間跳躍は出来ない、物質の再構成によって同質量の物を作り出す事は出来ても、零から有を作り出す事が出来ないなど、自分の今の力量でどれ程の事が出来るかという事である。

試験的に、そこら辺に転がっている小石を使い、当たっていないのに当たるといふ矛盾を使った必中の武器を作ってみる事にする。何処かで聞いた事がある気がするが、それは気にしないでよい。

手近で使いやすい大きさの小石を拾い、神力を込める。そして想像

する。当たりもしない筈の小石が標的へと吸い込まれる様に当たるという、その様子を。想像のイメージがはつきりとして来た所で、手に持った小石を勢い良く近くの木……の上に茂る葉っぱの一枚を狙って投げる。

パシャツ……

若干外した方向に投げてしまった筈の小石は、極自然な形で狙った葉っぱへと命中した。これにはアレイシア自身もかなり驚く。

それから何度も練習を重ねて行く内に、物に矛盾を付加する事は出来ないという事と、狙った物からあまり異なり過ぎる方向に投げるとう当たらないという事が分かった。前者は、武器を使う時に必殺技として使えればいいので、特定の武器で無く他の武器でも発動出来るという利点である。後者は、後々改善して行けばいいだろう。

とりあえず次の実験もやってみようかと思い、辺りを見回すと、遠くに見える森の方から地響きの様な低音が近づいて来るのが分かった。咄嗟にそちらを向いて臨戦体制を取るアレイシアは、次の瞬間現れた巨大な”モノ”に啞然とする。

「えええええ！？何あれっ！！」

アレイシアはこの時、この草原における最も上位の獣と遭遇してしまったのである。

02-10 西の草原にて（後書き）

いつにも増して、続きは次回！ですw

感想評価や誤字脱字の報告、アドバイスなどはいつでも大歓迎です！ユーザ登録していない人でも感想は書けますし、Web拍手のコメント機能もどうぞ活用して下さい！

～作者が居ない謎コーナー～

アリア「おはこんばんちわ～！」

セリア「おつハロー！この小説、読んで頂きありがとうございます！」

アリア「今回は若干アレね……急いで書いた感が」

セリア「十九時に間に合わせたかったんだって。ここも後々修正の対象だそうよ？」

アリア「ブツブツ……（下手に調子乗って毎日更新とかやり始めるから……）」

セリア「だから明日は休載かもって。でもその分、アレを上げるらしいわ」

アリア「そう、じゃあまた次回！」

セリア「感想や評価、お待ちしております！送ってくれたらまた更新早くなるかも、だって！」

設定集（人物、種族の詳細）（前書き）

また後ほど、魔法魔術も加筆するかもしれませんが、今はこれです。
うぞ。

設定集（人物、種族の詳細）

> 人物（？）など。

名前：アレイシア・メル・ラトロミア
(Alysia Melvina Latromia)

種族：吸血鬼、不老

性別：女

誕生：新暦百五十七年、一月七日

身長：五・四テルム、百三十五センチ

年齢：二十二歳、身体は十二歳

測定時 魔力：不明 霊力：0 1 2 1 妖力：0 1 6 0 神力：0

6 4 3

現在 魔力：不明 霊力：0 1 2 4 妖力：0 1 6 6 神力：0

6 4 8

クラス：S

容姿：腰に届くストレートの長い黒髪・濃い紅眼・白い綺麗な肌・
前髪は目にかかる程度

備考一：ミドルネームは母親が考えた、ファーストネームに使う予定だった名前を使用したもの。

備考二：女らしい言動を嫌っていたのだが、黒美さん（仮）に矯正された。

備考三：フィアンの言葉を受け、服装や身だしなみを気にする様になった。

備考四：シェリアナと血を吸い合うのが好き。

備考五：学園証に全ての力の表示が表れたのは黒美さんのせい。

一言：「血ってすごく美味しいのね」

名前：フィアン・エンレイス
(F i a n E r m a E n l a y c e)

種族：猫人、極東の地のある妖怪の血を継いでいる

性別：女

誕生：新暦百五十九年、七月五日

身長：五・一テルム、百二十八センチ

年齢：十歳

測定時	魔力：0 5 1 5	霊力：0 0 0 0	妖力：0 1 6 9	神力：
0 0 0 0				

現在	魔力：0 5 1 8	霊力：0 0 0 0	妖力：0 1 7 0	神力：
0 0 0 0				

クラス：S

容姿：肩下辺りまでの茶髪・薄めの碧眼・白い綺麗な肌、アレイシアよりは若干黄色人種系・前髪は目より上辺りで切り揃えられている・猫耳尻尾付き

備考一：微妙な敬語で話す事が多いが、あれは素である。

備考二：肉体に長けた者が多い獣人は、龍人などの一部の種族を除いて魔力が比較的少ない傾向にあるのだが、フィアンは魔法魔術学園でSクラスに入る事が出来た。

備考三：アレイシアに血を吸われてみたいと思っているのだが、吸われた事はない。少し前まではなかなか吸血衝動が起きなかったアレイシアに毎日吸えと言っていた。そしてシェリアナに先を越された。

一言：「ヨウカイってどんな生き物なんでしょうか？」

名前：シェリアナ・レイン

(C e r i a n a R a i n)

種族：吸血鬼

性別：女

誕生：新暦百五十七年、五月一日

身長：五・四テルム、百三十五センチ

年齢：十二歳

測定時 魔力：0731 霊力：0000 妖力：0000 神力：

0000

現在 魔力：1969 霊力：0009 妖力：0011 神力：

0064

クラス：S

容姿：背中の半ばまでの金髪を紐で結んでひとまとめにしている・

紅眼・白い綺麗な肌・前髪は目より上程度

備考一：アレシアの血を吸いまくった結果、魔力等が何倍にも増えた。

備考二：更に霊力、妖力、及び神力を持つようになった。

備考三：アレシアと同じ小さめの身長なのは、吸血鬼の十二歳の平均がそれ位だから。

備考四：アレシアと血を吸い合うのが大好き。

一言：「アリア、血を飲もうよ！えへへ……」

名前：クレア・フレイル

(C l a r a E r f i n F r a i r e)

種族：エルフ

性別：女

誕生：新暦百五十七年、七月十九日

身長：五・七テルム、百四十三センチ

年齢：十二歳

測定時 魔力：0603 霊力：0021 妖力：0000 神力：
0000
現在 魔力：0610 霊力：0023 妖力：0000 神力：
0000

クラス：S

容姿：丁度肩の辺りまでの赤髪・緑眼・白い綺麗な肌・前髪は長めで目より下まで届く・エルフらしい長い耳を持つ

備考一：エルフの里では姫らしいが、父親の反対を無理やり押し切って魔法魔術学園に入学した。

備考二：霊力を何故か持っている理由は今の所不明。

備考三：アレイシアに耳を弄くられやすい。

一言：「レイリヨクとはどの様にして使うものなのですか？」

>種族別ステータスみたいなの？

（）人間種

小人

寿命：四十～六十年

魔力：平均120

備考：その体の大きさもあり、細かい作業が得意である。

人間

寿命：五十～七十年

魔力：平均100

備考：人数が最も多い種族。その繁殖力と生存能力は凄まじい。

巨人

寿命：百～三百年

魔力：平均50

備考：魔力が少ない分、その巨体によるパワーは本物。

（ ）精霊種

精霊

寿命：五～十年

魔力：平均200

備考：自然のありとあらゆる場所に存在するが、自我が薄い。

妖精

寿命：五十～五百年

魔力：平均600

備考：精霊に比べたら上位の存在。多くの魔力を持った精霊も稀に妖精へと変わる。

エルフ

寿命：三百～二千年

魔力：平均800

備考：先祖は、肉体を持つ事に成功した最上位に当たる妖精とされている。

（ ）獣人種

犬人、猫人、etc.

寿命：六十～百年

魔力：平均80

備考：魔力が少ない分、ある程度の力を持つ。大抵は、その動物の特徴を持った人間と言った感じである。

龍人、竜人

寿命：百五十～千年

魔力：平均700

備考：獣人種の最上位に当たる。魔力と力共に優れ、戦場ではかなり活躍する。

（）その他

吸血鬼

寿命：五百～三千年

寿命翼持ち：千～六千年

魔力：平均1700

備考：作者が好きな種族（え 寿命も長く、魔力と力も強い。それはまさに最強種の名に相応しい。だが、子供を残す事が難しいという難点を持つ。

悪魔

寿命：不明

魔力：平均600

備考：西にある魔族の国にはたくさん居ると噂されている。それは恐らく魔界から召喚された悪魔だろう。

魔族

寿命：二百～五百年

魔力：平均500

備考：悪魔を信仰し、国に引きこもっている種族。元は普通の人間

だったのではとも言われている。

妖怪

寿命：百〜三千年

妖力：平均800

備考：極東の島特有の種族であるが、その島に辿り着く者はほとんどいない。

神族

寿命：不明

神力：平均1700

備考：世界中に点在する八つの巨大な宮殿にそれぞれ一柱ずつ居るが、実際に会った者はほとんど居ない。

設定集（人物、種族の詳細）（後書き）

吸血鬼のチートっぷりが素晴らしいw

実際、使える力が多いのは神族の方ですがね？

02-11 神の血（前書き）

PVアクセス50,000突破！

更に、お気に入り小説登録件数100突破！！

読者の皆様、ありがとうございますっ！

02-11 神の血

低い轟音が近づいて来る方向、そちらを向いたアレイシアがまず目撃したのは、ただのデカイ猪と表現するのが最も適切であろう、巨大な獣だった。体高は十二テルムにも届こうかという程の巨体を揺らし、高速でアレイシアの方へと近づいて来る。

既に魔導書を左手に開き、神力を右手に溜めて臨戦体制を取っていたアレイシアは、ただこちらへと突っ込んでくるだけの獣に、氷の矢を生成する中級魔法を無詠唱で多量に放つ。

氷魔法とは、水属性と風属性を合わせる事によって生まれる応用魔法である。それは、水魔法で空気中の水蒸気を凝縮し、風魔法で低温を保つ事によって氷を生成するという物であった。風魔法で低温を保つには、螺旋状の気流を水に巻き続けなければならないため、かなり難易度が高く、使い手も少ない魔法なのである。だが、そんな事は知らないと言わんばかりに大量の氷魔法を放つアレイシアは、他の者から見ればやはり、異常の一言に尽きるだろう。

勢い良く放たれた氷の矢は、四百テルム以上離れた巨大な猪までわずか一秒足らずで到達、その猪を木端微塵に粉碎——出来なかった。到達する直前、何故か風魔法が消滅し、速度による空気の摩擦熱で氷が水に戻ってしまったからである。

それを見たアレイシアは、初級火炎魔法を過度の魔力でわざと暴走させ、巨大な火球を放つ。その時に込められた魔力は、魔力量の数値で表せば裕に一般的な人間の総魔力量である百を超える。だが、その火球も獣に届く直前で消滅してしまう。そこでアレイシアは推測する。このデカ猪は、魔法を完全に無力化出来る障壁を張ってい

るのではないかと。実際、一部の上位の魔物は魔法魔術を行使して来る事もあるという。

そして、遂に猪がアレイシアの元へと到達する。その猪の背後に瞬間移動で回りながら、このまま魔法を使うだけでは対処出来ないと考えた。ならばと、右手に溜めた神力を放出し、一点に凝縮、形を取るように調整する。そして右手に現れたのは、巨大な一筋の光剣。それは神力を圧縮する事によって生まれる発光現象によるものであった。何故かは知らないが、神力を扱える者の多くはその技を使える……らしい。

「あえ？何となくやってみたら出来たし……大丈夫かな……？」

そう言つてアレイシアは、方向転換をして戻つて来る猪に向かつて光剣を構えた。実はこの技、黒美さんがやり方だけ教えてくれたもので、一度も使つた事は無かつたのである。

「っ！てえええいッ！！」

ザクッ！

「グギイイエア！！」

その猪はいとも簡単に真つ二つに斬れてしまった。恐らく、魔法以外の耐性はかなり低いのだろう。辺りには、猪が光剣に焼き斬られたからだと思われる、焦げた肉の匂いが漂っていた。

そしてアレイシアは学園へ、空を飛びながらゆっくりと帰る。先程の獣は、何かにはなるかもしれないと、一応角だけ折って持つて帰つておいた。

学園に到着したのは既に夕方、着陸が面倒だったアレイシアは、窓からそのまま寮室へと入る。すると、

「ただいま、遅くなったわね」

「遅いですよーっ！これからみんな外で夕食を食べようと思っていたんですから……って窓から！？」

「アリア遅いッ！罰として私に血を吸わせ……窓！？」

「窓ですか！？アリアさん……もう慣れましたわよ………」

何故か呆れられてしまった。

その後シェリアナが、「血を吸わせるー」と叫びながらやたらとアレイシアを追いかけていた事を除けば、大して何も起きずに一日は終わった。

次の朝、もとい、夜中という程の早朝に起きたアレイシアは、着替えた後、棚から丸められた紙を取り出す。それは言うまでもなく、黒美さんに場所を知らせるための魔法陣が描かれた紙であった。

そう、彼女はこれから十年修行に向かう予定なのである。あえてこの時間を選んだのは、皆に心配をかけない様にといい配慮による物

だ。取り出した紙を広げてその上に立ち、魔導書を手に持って魔力を込め始める。薄く光る魔法陣だが、前回と同様、この程度の魔力では全く反応が見られない。それからしばらく、遂に三段階までの魔力を開放したその瞬間、アレイシアは突如発生した眩い光とともにその場から消え去った。

少しづつ浮上する意識、動かしにくい体を何とか動かして声を発する。

「ん……う？」

「起きた？今回は直接亜空間内に呼んでみたのよ。成功して良かったわ」

聞こえたのは黒美さんの声、首を回してそちらをの方を向く。今日は緋色のドレスの様だ。

「……失敗したらどうなっていたのかしたら？」

「それは………何処とも知れない異世界の宇宙空間や『無』に放り出されていたかもね……」

「私はまだ死にたくないわよ………少なくとも私は寿命で死ぬ事は無いだけなんだから」

そう言っただけ息を吐いたアレイシアは辺りを見回す。前回ここを去った時と何も変わらず、この空間内に建てた家がそこにあるだけだ。

「さて……十年間よろしく！」

「という訳には行かないのよ……下手したら、魔界がもつと早く攻め入るかも知れないって情報があつて、これから九十年は悪いけどここで修行してもらうわ」

「え……ファイア、セリア、クレアもいるのに……」

「大丈夫、外では九刻しか経たないから」

その答えに、そういう問題じゃない！と脳内でつつこむアレイシアは、とりあえず素直に九十年、修行を積む事になるのであった。

それから僅か三日後、アレイシアはいつかあった不思議な感覚を覚えていた。

「うう、黒美さん……あの、私ちよつと……」

「どうしたの？」

妙に頬を朱く染めて慌てた様に言うアレイシアを心配し、黒美さんはアレイシアに近寄って行く。だが、それが間違いだった。

「あのっ、血を……少し吸わせて欲しいの……」

「……………え？」

すぐに瞬間移動を発動、背後から抱き付いたアレイシアは、黒美さんの首に牙を突き立てる。黒美さんの方がアレイシアよりもずっと身長が高いため、腰に足を回して抱き付く形になっている。

ブツッ……

「あっ！うぁ……っ！私のっ、血はあまり……吸うと……」

「むううっ！」

アレイシアは、その血のあまりの美味しさに夢中になる。何処までも深く、甘く、そして力のあるその血は、瞬く間にアレイシアを虜にして行つた。これからアレイシアは、短い時は数日、長い時には数年おきに起こる吸血衝動の度に、黒美さんの血を吸うというのが習慣となってしまったのである。これが、後にある事件を引き起こすとは知らずに……

02-11 神の血（後書き）

誤字脱字報告や感想評価、アドバイスなど、いつでも大歓迎です！
ユーザ登録していない人も感想は書けますし、送りにくいという方はWeb拍手の方からどうぞ！

（何処か無駄な謎コーナー）

七篠「前書きにある通りで、これがすごく嬉しかったです！」

フィア「読者の皆さん、ありがとうございます！」

七篠「でさ、アリア。あのー……モーツアルトのオペラで『魔笛』
っていうの知ってる？」

アリア「クラシック好きねえ……」

七篠「いや、珍曲マニアだからモーツアルトとかベートーヴェンに
興味無いよ。アムランとか、アルカンとか、ゴドフ……」

アリア「それはいいから！……で、その『魔笛』がどうしたのよ？」

七篠「いや、なんかそのオペラに『夜の女王アリア』ってのがある
バキッ！」

フィア「……作者不在のため私が。感想評価など、いつでもお待ち
しておりますっ！」

七篠「全く……関係、無いのに……言葉だけなのにつ……！」

02 - 12 黒翼のアレイシア

既に修行を始めてから十三年が経つ。神力の扱い方について黒美さんに教えてもらっていたアレイシアは、ある事に気が付いた。

「……ねえ、私の神力が少し増えていないかしら？」

「それはそうよ……私の血を吸いまくって増えない訳がないわ。私、これでも神だし？」

「えええっ！？それ本当？」

それは当然、驚くに決まっている。神力の扱い方にかなり慣れたアレイシアとしては、多い神力を持つのはとても良い事なのであった。……とは言っても実は、消費する神力の半分近くを無駄に出してしまうため、まだまだ修行が必要なのだが……

「ならもつと吸わせて？」

「えー……いいわよ……」

少し嫌がりながらも吸わせてくれるあたり、アレイシアは嬉しく思っていた。なんとと言ってもその血は絶品、世界中どこか異世界中の吸血鬼が吸いたがることは間違いないだろう。そんな血を独り占め出来るとは、少しシエリアナに悪い気もした。

「あのねー、神も生命体なんだよ？血を吸われすぎたら……」

「大丈夫、そんな時は私一人で修行出来るから」

口元を血でべったりと濡らしたアレイシアに、今度は黒美さんが、
そういう問題じゃない！と脳内でつつこみを入れた。

アレイシアは、神力の直接的な力の使い方を学んでいる。どうやら、魔法よりも遥かに効率の良い神力ならではの力の使い方という物があるらしく、例えば一瞬の間に多量の魔力を出す必要のある技を簡単に使う事が出来るそうであった。そして現在、空を飛ぶ黒美さんに、それを体をもって教えられているのである。

「ほらっ！そこは斜め下じゃなくて横に避ける所よ！！」

「うわあああっ！ちよっ！？お手柔らかに頼みますうう！！」

魔法魔術を行使する上で重要なのは、どれ程の速度で魔力を放出する事が出来るのかという事である。普通の人間なら、魔力放出量は秒速二十から三十もあれば王宮で一級の魔法騎士団長に就任する事が出来るそうだが、アレイシアは既に秒速百もの高速で魔力を放出する事が出来るのだ。神力は魔力の七倍もの効率を誇り、アレイシアの神力放出における効率率は七十パーセント、つまり神力を使用すれば、秒速五百程度の巨大な魔力を放出するに等しい攻撃を生み出す事が出来るのである。

「焰球、二十、密！」

「お！？なかなかやるわねッ！！」

アレイシアは、二十もの巨大な焰の球を生み出す。あのデカ猪と

戦った時も一つしか出せなかった炎球を、更に大きく更に多く、そして複雑な動きをさせて黒美さんに近づけて行く。相手の周囲を囲んで近付けて行くからこそその『密』なのである。

「っ……！！」

ゴオオオオ……

黒美さんは焰に包まれ、地面へと落ちて行く。アレイシアは急いで落下地点へと瞬間移動し、黒美さんを抱きとめた。

「ふふっ……まだまだ私は本気じゃ無いわよ」

「何か負け惜しみにしか聞こえないけど、本当なんでしょうね……」

その日の夜、黒美さんに始めて勝った褒美として、失血死しない程度に毎日血を吸わせろと要求したというのは余談である。

それから七十年以上も修行を続けたアレイシアは、能力や神力の扱いに関してはかなり強くなっていた。

まずは矛盾の能力。例えば、学園西の草原で試した必中の攻撃を、剣、槍、弓など、どのような武器でも使える様にと練習した。この辺りのものは要するに慣れなので、練習あるのみであった。

またある時は、亜空間内の家に引きこもり、そこに存在しないも

のが存在するという最も難しい矛盾を起こそうと必至になって練習したりもした。……結局出来なかったのだが。

神力の扱い方については、基本的に魔法と同じ様な鍛錬を続けて行く事によって、発動効率の改善を図ろうとしたのである。それは、焰球を百個浮かべたまま三日間放置などの、あまりにも酷すぎる修行であつた。

時間当たりの消費魔力量が異常に多い飛行魔法を、神力を用いて省エネ化する事に成功した。更に、自身を取り巻く結界、周りを囲う風、その両方を研究する事によって、より効率的で高速な飛行を可能にする事も出来た。

他にもまだまだあるのだが、一先ずはこれでいいだろう。

修行開始から八十七年、アレイシアが百九歳のある日、眠りから目覚めてみれば、肩から背中にかけてとんでもない違和感を感じた。違和感の正体になりながらも、朝の微睡む心地よいこの時間を堪能しようと、自然と布団の中に深く潜り込む。

だが、そこで異変は起きた。

「あつ……！！」

何故か布団に潜り込もうとすればする程、背中でも肩でもない変な場所から痛みが走る。どこが痛んでいるのか、彼女には全く見当が付かなかった。

結局、その痛みに眠りを妨げられたアレシアは、ベッドの中からゆっくりと這い出して来る。

そして遂に、『それ』を見てしまった。

「え……何、これ……？」

部屋の角に置かれた鏡を覗き込んだアレシアは茫然とした。それも当然、これで驚かない者はいないだろう。何故なら……

バサッ……

自身の背中に蝙蝠の様な漆黒の翼があったのだから。

「うーん……そうねえ、先祖返りみたいなものかしら？やっぱり私の神力の影響を受けたのかも知れないわね」

「これも血を吸い過ぎたから……?」

「毎日毎日真夜中に、私のベッドに忍び込んで寝込みを襲うあなたの自業自得ね!」

起きて来た黒美さんに早速相談したアレイシアは、どうしても気になっている事を聞いてみる。

「……どうしよ、このままじゃ学園の皆に……隠せる方法とか無いかしら?」

「自業自得よ、自分でなんとかしなさい!さて、今日も始めるわよ!」

そう言って家から出て行ってしまった黒美さんを急いで追いかけて行くアレイシアは、何とかするってどうするのよと、考えを巡らせていた。

アレイシアの翼が現れてから三年、遂に九十年もの修行を終わらせ、亜空間から神界に戻ったアレイシアはある事に悩んでいた。それはもちろん、結局隠す事が出来なかった翼についてである。

「この翼、どうしよつか……」

「自業自得よ、学園の寮に返すからこっちに来てね!」

「え、ちよつと待って……！」

黒美さんはアレイシアの襟元を掴み、神力を集中させ始めた。このままではまずいと、神力を放出して妨害するアレイシアだが、本物の神の神力に敵うはずも無く、一分程で転移は発動してしまう。

「や、やめてっ！ストップ！！」

「じゃ、またいつか。用事があつたら呼ぶわね」

「その……！！」

アレイシアが最後に言った言葉は、途中までしか黒美さんの耳に届かなかった。

02-12 黒翼のアレイシア（後書き）

誤字脱字の報告や、感想評価、アドバイスなどをお待ちしております！ユーザ登録をしていない人も感想を書けますので、ぜひ送って下さい。

くきつと、あまり誰も見ない謎コーナーく

七篠「総合評価が四百を超えました！しつこい様ですが、読者の皆様、ありがとうございます！」

クレア「私、あまり出られなくて寂しいのですが……」

七篠「大丈夫、次回からどんどん出して行きますよ！」

フィア「次回から、学園の本編が始まります」

クレア「感想評価、よろしくお願いしますね」

黒美さん「私って、次はいつ出るの？」

寮室への転移は無事成功したアレイシアだったが、問題は山積みである。アレイシアにとっては九十年前、魔法陣を発動させたのは早朝も早朝、真夜中であつた。いくら真夜中に出たとは言つても、こちらの時間で九刻も経つてしまえば既に昼過ぎの一刻なのである。つまり、今日の授業には大遅刻も良い所、フィア達三人にも心配をかけてしまった。更に現在のアレイシアには、どうしても隠しようの無い蝙蝠の様な翼もある。結局、フィアが戻つて来るまで寮室で待っているのが一番安全という結論に辿り着いた。どう言い訳をしようかと考えながら……

言い訳を考えている途中で、そういえば、とアレイシアはある事を思い出す。九十年もの歳月の中で思考の片隅に追いやられたある事、それは今日が選択科目を決定する日だったという事である。自室の棚から選択科目が書かれている紙を見つけ出し、ついにと、どの科目にするかを考えるのであつた。

一方その頃、フィアン、シェリアナ、クレアの三人は、一年スクラスで授業を受けながらも、朝からいないアレイシアをずっと心配していた。授業が終わつて帰る時間になると、三人はフィアンの部屋に行く事に決める。すっかり四人の溜まり場となつたその部屋に行くのは当然、もしかしたら戻つて来ているかもしれないアレイシアに一喝入れるためだ。

「お邪魔します」

「アリアいるー？」

三人は部屋の中にならずかと入って行く。奥にある部屋には、未だ思いつかない言い訳を必死で考えようと焦るアレイシアがいた。だが、いくら焦ろうとも思いつかないものは仕方ない。思い切つて三人に打ち明ける事にした。そこで丁度、アレイシアの自室の扉が開けられる。

ガチャッ
……

「あ……お、お帰りなさい」

⌈
⋮
∧
?
⌋

「……は？」

「ええええええ！？」

三人が部屋に入つてまず目に付いたのは、こちらを向いてベッドに横になつてゐるアレシヤ、そして彼女の背中にある大きな翼だつた。その翼は、これは本物だと主張するかの様に小さく動いてゐる。

「アリア、それ……」

「……やっぱりそうだったの!？」

「う……………順番に説明するからちよつとそこに座れ、命令だ」

そう言つて三人をリビングの椅子に座らせ、アレイシア自身も空いた椅子に座る。この時、一瞬口調が素に戻ったという事に喋った

本人は気付いていない。

「……私、時間を圧縮した空間で九十年修行してたのよ。じゃなくて、させられていたのよ。だから私は既に百十二歳のババアになるわね……」

「なっ、なんだってー!?!」

フィアン、シェリアナ、クレアの三人は口を揃えてそう言った。だが三人にはまだ気になる事がある。

「で、アリアはやっぱりその翼を隠してたの?」

「百九歳の時に生えてきた」

「生えてきたって……」

アレイシアに話しかけたシェリアナは呆れた様にそう言う。ここ何百年も産まれなかった筈の翼持ちの吸血鬼が目の前にいる。それだけで驚きをも通り越し、呆れるには十分過ぎるだろう。そして、シェリアナは椅子から立ち上がり、アレイシアの後ろに立って翼を弄くり始めた。

「へえー、これが吸血鬼の翼………伝承通りの蝙蝠みたいな……」

「ちょ、やめてっ………触るなっ!」

「おー!」こ、ぷにぷにしてる!」

「あ、そこはやめてっ!触るな!離れろっ!」

結局、修行の残り三年間で学んだ翼の動かし方が幸いし、翼を大きく動かす事によって難を逃れる事が出来た。その後、九十年ぶりの再会ともあつてか、アレイシアが少し泣いてしまったというのは余談である。

「ちょっと相談があるんだけど……」

「ん、何ですか？」

その日の夜、四人集まった寮室で、アレイシアは翼についてを皆に相談してみる事にした。アレイシアの言葉に一番早く反応したのはフィアンである。

「この翼、このままじゃ学園に出て行けないよ……」

「うーん……どうしたらいいんでしょうか？」

「……あ！それなら私に心当たりがあります」

そう言ったのはクレア、どうやらよほど自信がある様だ。

「私がいた里ですが、そこには歴史的な書物もたくさんあるのです。伊達に何千年も繁栄し続けた里ではありませんから。その中でも、吸血鬼について書かれた歴史書があったと思います。それを見てみてはいかがでしょうか？」

「歴史書……翼持ちの吸血鬼が翼を隠すために使った手法も書いて

あるかもしれないわね」

「はい。ですが、私の里まで馬車で二日は掛かってしまいます……」

そう言つて暗い表情になるクレア。せっかく友人を助けられると思つたのに、重要な所で行き詰つてしまうという事を申し訳なく思つているのかもしれない。出会つてから未だ一週間も経っていないが、この四人の仲はかなり深いものになっているのである。尤も、アレイシアは違ふのだが。

「馬車で二日かかる？なら馬車を使わなければいいのよ！」

「え？馬車が一番速い移動方法ですよ？」

首を傾げてそう言うフィアンだが、アレイシアにはもつと優れた移動方があるという事を知らない。

「私は翼で飛べばいいし、クレアには付いて来てもらいたいから飛行魔法をかけていくわ。それでいいわね？」

「あ、はいっ！」

そしてアレイシアは、すぐクレアに飛行魔法をかける。

「なら明日の夜明けまでに戻るわ」

「今行くのですか！？うわ、飛びました！」

「明日の登校までには間に合わせたいのよ。じゃ、行って来ます！」

そう言い残し窓を開け、そこからアレイシアは飛び立って行った。シェリアナは、翼を広げるその姿に見とれてしまい、数分間再起不能となってしまうたそうである。

飛び始めてから約三刻、この世界ではあり得ない、音の半分程度の速度を出す飛行で辿り着いたのは、木々が生い茂る広大な里だった。その里は、アレイシアの故郷であるクラードよりも更に山奥へと入った場所にある。それはどうも里と言うには大き過ぎる気もするが、元々はたった一つの弱小集落だったのだと言うから驚きだ。木々を利用する様な形の家が多く、高い木の上に乗ったログハウスや、木を直接くり抜いた家もある。

そんな集落の奥、一際目立つ巨大な木。それが、クレアの家に当たるものらしい。入り口の正門に立った二人は、期待と緊張に高鳴る胸を抑えながら、門番と思われる人に話しかけた。

02-13 エルフの里（後書き）

誤字脱字の報告や感想評価、アドバイスなど、いつでも大歓迎であります！

ユーザ登録していない人も感想は書けますので気軽にどうぞ。

「何とも言えない謎コーナー」

七篠「十二月二十九日の朝十時、ユニークアクセス10,000突破！読者の皆様、ありがとうございます！」

アリア「時間が細かいわねえ……」

七篠「ま、細けえこたあ（ry……学園本編に入れなくてすみません。少し先になりそうです」

アリア「私の翼の事を学園中の皆にバラされるよりはいいわ」

七篠「……ま、そうだね」

セリア「えー、かつこいいのに……」

アリア「こいつは放つといて……。感想評価など、いつでもお待ちしております」

セリア「アリアかつこいいよアリア」

アリア「黙らっしやい！」

02-14 翼隠蔽大作戦（前書き）

大晦日でも更新なのです！

紅白に見飽きてしまった人は、ゆっくりこちらで小説を読もう！

……といった感じでw

「あのー、すみません」

「ん？何だお前達、こんな夜中に……ッ！！」

正門前に立つたアレイシアは、門番と思われる人に話しかける。だがその瞬間、その男は何故か後ずさってしまふ。それもその筈、蝙蝠の様な翼を広げるアレイシアの後ろには、学園に行った筈のこの里の姫がいたのだから。

姫がいるだけなら問題無い。姫様、お帰りになられたのですか、で済むだろう。だが問題はアレイシアである。クレアと比べたら身長こそアレイシアの方が低くとも、彼女が放つ威圧感の本物である。その姿はさながら、姫を人質に取る魔王の様であった。

「くっ……貴様ッ！何者だ！！姫様に手を出すなど、許される事では無いと分かっているんだろうな！」

それを見た門番の男は当然、警戒を強めて右手に持っていた槍を構える。対してアレイシアとクレアの二人は、何か興味深い物でも見るかの様な目を向けていた。

「……あれ？私ってクレアに手を出したっけ？」

「いえ、私は何もされてませんよ……ね？」

「いや、私に同意を求められても困るって」

「姫様にその様な口の聞き方をするとは何だ!!」

何故その様な事を言われなければならないのかと、不思議そうに話す二人だが、門番の男にはその態度が気に食わなかったようだ。

「あの、この方は名をアレイシア・ラトロミアといいます。学園での友達ですよ」

「……まあ、いいでしょう。姫様が友達というのなら……どうぞお入りください」

そう言つて男は門を開けるために、門の端へと戻つて行つた。どうも、渋々と言つた感じがするのは気のせいではないだろう。

もう一人いた門番の案内のもと、巨大な木の根元にある扉をくぐり抜けて家の中に入る。アレイシアは、もう家というよりは城の様な気がしてならなかった。辺りに置かれた置物、壁に掛けられた絵画、天井から吊り下げられたシャンデリア。どれを見ても、それかなりの代物だという事が素人目でも理解出来るだろう。シャンデリアには、炎魔法の魔法陣を利用した明かりが幾百と輝いている。

周りに目を向けながら、木をくり抜いた様な長い廊下を歩いて行く。少し上り坂になっている事と、壁に空いた穴から見える景色から、上に向かっているのだらうと推測する事ができる。

壁の穴から木の上部に生い茂る葉が見えてきた所で、案内の人が立ち止まる。

「ここがレラーク様の書斎に……」

「分かっています」

案内人の言葉を遮ったクレアは、両開きの書斎の扉を押し開ける。中に見えたのは、横に長い大きな机と部屋の脇にずらりと並ぶ本棚。机よりも奥に座っているクレアの父と思われる青年には目もくれず、扉の近くに置かれた小さい机の引き出しを開けた。

「父上、書庫の鍵を借りて行きますわね」

「あつ、やめてくれ！」

「アリア、行くわよ！」

父の静止の声には全く聞く耳を持たず、クレアは鍵だけ持って書斎から出た。案内人も驚いたのか、扉の横で固まってしまっている。

「あれでいいの……？」

「いいですよ。学園に行く事に反対したのは父上です。その反対を押し切っていないければ、今頃アリア達には会えなかったでしょう」

「……ありがとう……」

照れくさそうに斜め下を向きながらアレイシアは言うが、その一言はクレアに届かなかった。

「そこ、ハシゴの上の本はどうですか？」

「んー……ここにあった。棚番号百十五、十七段目は全部そうね」

そう言つて、棚から大量の本をこっそり取り出すアレイシア。二人は現在、あまりにも巨大な書庫の中から歴史書、特に吸血鬼關係を片っ端から網羅していた。既に百冊近くは見つかっているのだが『多い事はいい事だ』というアレイシア提唱の謎理論により、何百もの本を集める事となつてしまったのである。

「そろそろ読んでみるわね」

「ここに積んであります」

机を指差すクレアに促され、アレイシアは椅子に座り、机の上に建てられた本の塔を上から崩して行く様に読み始めて行つた。

読み始めてから一刻が経過した時、アレイシアはあるものを見つけた。

「ん……？これって……」

「何かありましたか？」

「これ、翼を収納可能にするとかいうよく分からない魔法陣。これを使った後は、魔力を流して念じるだけで発現、収納が自由に出来るらしいわ」

本に描かれた魔法陣を、アレイシアの横からクレアは覗き込む。外側に描かれた二重の円と、内側の六芒星。六芒星の内側に出来る六角形の頂点を結ぶように、もう一つの六芒星が描かれていた。更に、外側に描かれる二重の円の間には、いくつもの直線、曲線、記号が埋め尽くされるように描かれている。

魔法陣とは基本的に、どのような手順を以てその現象を起こすのか、という事を表すプログラミングの様な物であった。この場合、内側に描かれる二つの六芒星は使用魔力の多さを表し、二重の円の間に描かれた線が、それぞれの記号、つまり現象一つ一つを繋ぎ合わせる役割を果たしているのである。

内側に描かれる図形は、空白、直線、正三角形、正方形、五芒星、六芒星、七芒星という順に使用魔力が多くなり、何重にも重ねて使えるのは、例えば六芒星なら、空白、直線、正三角形、六芒星と、頂点の数の約数及び空白のみである。アレイシアの知識によれば、本に描かれていた魔法陣はつまり、魔力使用量が三千を超える大魔法なのであった。

「使用魔力量三千越えの大魔法ですか……………あ、大して問題ありませんでしたね」

「大して問題なかったわね」

アレイシアは魔法陣を分析する。まず一番始めに座標指定で術者の背中、翼の位置を把握させ、次に翼を構成する物質を魔力に置き換えて体内にしまい込む。後は意思と魔力を媒介に翼を発現させる魔法陣を背中に刻み込むだけとなっていた。『だけ』とは言っても、物質の魔力構成化とは途方もなく複雑な魔法なのである。

ありとあらゆる超常的事象を意思の力で可能にする魔力は、物質と化す事まで可能だが、それは本来神力が成し得た事であり、創世の時に神力から派生して生まれた魔力は、その様な事に対して劣っているといえた。

「んー、魔力じゃなくて神力に変換するように改良を加えるには、ちよつと時間が足りないかな……」

「え、何ですか？」

「よし、これを紙に書くわよ。部屋からこれ持って来たから」

そう言つてアレイシアは、持参のバッグから絶縁紙と魔導インク、神界の黒美さんから奪つて来た万年筆を取り出した。そして本を横に置き、紙を広げて魔法陣を写し始める。ちなみに魔法使いを目指すのならば、魔法陣を書き写すというこの過程は何百回と経験する事になるだろう。

学園の寮室にて、フィアンはかなり苛立っていた。アレイシアもクレアも未だ戻って来ないからである。そんなフィアンを、シェリアナは必至で押さえ続けている。

「何でまだ戻って来ないんですか！もう授業が始まってしましますよ？」

「きつともう少しで戻って来るから、もう少しだって！」

フィアンは開けっ放しの窓に目を向ける。丁度その時、アレシアとクレアが窓から入って来た。そして背中 of 翼は光の粒子？？魔力に姿を変え、アレシアの周りをしばらく回ってから彼女に取り込まれて行く。

「ごめん遅くなって！一応何とかなっただわ」

「すみません、徹夜でやっていましたから。里も遠くて行きに三刻、帰り二刻もかかってしまいましたし……」

そこで、今までフィアンを押さえていたシェリアナは、アレシアの方へと駆けて行った。

「アリアお帰りー！」

「私は無視ですか！？無視なんですか！？ルームメイトなのに……」

その後、苛立ちを爆発させたフィアンの怒りにより、結局授業に遅れてしまったというのは余談である……

02-14 翼隠蔽大作戦（後書き）

感想評価や誤字脱字の報告、アドバイスなどもお待ちしております。
ユーザ登録していない人でも感想を送れますし、やっぱり送りにくいなぁと思う人は、Web拍手の方からメッセージをどうぞ。

〽大晦日のスペシャル謎コーナー（嘘）〽

七篠「総合評価四百越えたばかりですが、早くも五百達成です！」

アリア「二章の第十二話くらいで爆発的に増えたという謎。どういう事かしらね？」

七篠「……………まあそれは置いて、今回はちょっと魔法理論を展開してみました」

アリア「結構理論的だけど、まだまだ穴がある気がするわ」

七篠「次回の学園本編から本格的に描写して行く予定です。これから面白くなってくると思います……………多分きつと恐らく。主に作者が」

セリア・アリア「作者がかよっ！」

七篠「ナイスツツコミ！感想評価など、お待ちしております！」

セリア「お待ちしておりますっす」

クレア「感想評価は作者のモチベーションにかなり影響しますからね」

アリア「では、良いお年をお迎え下さい！」

02-15 選択科目（前書き）

元旦更新！

今回は何時もの2/5位ですが、次からは一応次章となる予定です。
1/3 追記：次章は先送りになりました。

02 - 15 選択科目

「君達、授業に遅れる事が多いけど、何か理由でもあるのかな？」

「……いえ、大してその様な事は……」

一年Sクラスに到着した四人は、早速フィズ先生のお咎めを喰らってしまった。席の方に目を向ければ、四人の場所だけがぽっかりと空いている。

「……で、アレイシアさん、一昨日までとは気配が全く違う気がするのですが……まあそれは今は置いといて、選択科目は決まりましたか？こちらの三人は既に提出してありますよ」

「あ……まだ決めていなかったわね」

流石はSクラスの先生、アレイシアの気配の違いに気付かない筈が無かった。だがその事をスルーして、アレイシアは選択科目の事についてだけを返す。

「ならとりあえず、急いでこの紙に選択科目を記入しておいて下さい。なるべく早く、出来れば今すぐ提出するように」

「分かったわ」

フィズ先生から渡された、選択科目が書かれた紙を持ってアレイシアも席に付く。その紙に目を通せば、書かれているのは面白そうな科目の数々。魔法魔術の各系統、剣術槍術などの武器、体術などもある。その中からアレイシアは、魔法魔術全系統と実践戦闘、剣

術、研究科にチェックを付けてフィズ先生に提出した。

「ん……？これはちょっと多すぎないかな？」

「多分何とかなるわ。きつと大丈夫よ」

「……そうかい」

そう言つてフィズ先生は、机の中に紙をしまつ。アレイシアが選んだ多くの選択科目、彼女としては剣術以外、かなり楽だと思われた。

昼食の時間が過ぎる。今日からは午後の選択科目の授業もあるため、今までみたいに昼食無しという訳にはいかないのだ。食堂は校舎の五階にあり、そこでアレイシア含む四人は昼食をとっていた。肉料理をこの国独特の、フォークとナイフを合わせた様な食器を使つて食べるアレイシアに、食事を中断したクレアは話しかける。

「アリアさん、選択科目の方はどうしたのですか？」

「え？……てけとーに魔法魔術全系統と、研究、剣術、実践戦闘科を取ったわ」

「それは少し多すぎませんか？……あとてけとーって……」

フィズ先生と同様に、科目が多すぎるのではないかと心配するクレア。あまり多くの科目を選び過ぎると、その科目が疎かになつて

しまうからだ。

「この学園の指導方針は、得意な事を伸ばす、興味のある事をやらせる、だったでしょう？ 私は魔法魔術と実践戦闘は得意だし、剣術と研究には興味がある。なら、やらない道理は無いわ」

「一理ありますね……」

「得意な事が多すぎるんですよ……」

クレアとフィアンに、いつも通り呆れられるアレイシア。彼女としては、いい加減呆れないでほしいというのが本音なのだが……

「私は水風系統魔術と、魔法、研究、実践戦闘科を取ったわ。魔術は多くても、普通は三つの系統しか取らないものなのよ？」

「……えー」

「私も、魔術は火だけしか取りませんでしたし」

「……………あー」

アレイシアは、どうも申し訳ない気持ちになってしまふ。だが、多くの科目を取った事により、他の三人と一緒に選択科目を受ける時間が増えたというのも、また事実だろう。

昼食を食べ終わり、話し合いの末、四人とも偶然取っていた実践戦闘科へとまず向かう事にした。今まで受けてきた必須科目とは違い、初めての魔法魔術を使う授業のため、当然四人は期待を胸にクラスへと向かって行った。

02 - 15 選択科目（後書き）

誤字脱字の報告や、感想評価など、お待ちしております！ユーザ登録していない人でも感想を書けますので、どうぞお気軽に。

くあけおめ謎コーナーく

七篠「あけましておめでとう！今年もよろしく願いします」

四人「ハッピーニューイヤー」

七篠「今年も絶対負けないと、年明け早々『不屈の民変奏曲』を聞きまくってる作者です」

アリア「そういえば、暇を持て余したからって、私の絵を描いてたみたいけど？」

七篠「そうなんだよ、いつ上げるかは分からないけど……画才が欲しい」

アリア「文才でもでしょ……では、感想評価など、お待ちしておりますまゝす」

セリア「今年もよろしく、」

フィア「お願いします！」

02-16 実践戦闘科の場合（前書き）

前回、次章にすると書きましたが、それは先送りになりそうです。

インターネット接続がすごく悪い……

更新出来なかったらストック溜ときます。

02 - 16 実践戦闘科の場合

現在アレイシアを含む四人は、実践戦闘科を専攻したクラスメイ
ト達と一緒に学園内ギルドまで来ていた。ギルドは木造の建物で、
中は多くの生徒であふれている。担任の犬人ダル先生によれば、ギ
ルドで簡単な討伐系依頼を一つ受け、クラスで行く事によって経験
を積むのだという。先程の説明で、俺考案の人助けにもなる一石二
鳥の授業だと、ダル先生は胸を張って言っていた。

「おーし！じゃあお前達、今回は一番最初の授業だから、实力を見
る意味も込めてという事になるな。予定としては、俺も含めて討伐
依頼を成功させる、その後到现在出来る限りの技を放つ様子を俺が
みてやる。魔法も剣技もまだ何も出来ないという奴は、俺の下で戦
闘における心構えの指導を受ける事。魔法や剣技、その辺りは各選
択科目の担任の教える事だからな。質問がある奴は手を挙げる！」

生徒の前で説明を進めて行くダル先生。質問に誰も手を挙げなか
ったため、よしっ、と言って立ち上がり、生徒全員に告げる。

「ではこれから、ベルウルフを討伐するために、学園北の森へと向
かう！」

その言葉に生徒はそれぞれの応答を返し、皆ギルドから出て行く
ダル先生に着いて行った。ベルウルフというのはその名の通り、狼
の様な低級魔獣の一つである。大して強い訳では無いのだが、数が
多い上によく旅人を襲うため、討伐対象となっているのである。

学園北の裏口から歩く事およそ半刻、クラスの全員は既に薄暗い森の中を進んでいた。その多くが口を聞く事もせず、周りの気配に気を配っている。現在位置はそれ程森の奥深くでは無いとはいえ、かなり低級に当たるFクラスの魔獣、ベルウルフなら、いつ出没してもおかしくない。

「うう……怖いですよ……」

「こんな場所は初めてです……」

「アリア助けてえ……」

だがここに、周りの気配に全く気を配らず、口さえ閉じようとしてない三人がいた。三人とも中央のアレイシアに抱き付いて離れようとしなない。アレイシアよりも身長が高いクレアまで抱き付いているのが、周りから見ればどうもシュールだ。

「……その御三方、いい加減離れなさいな」

「だって怖いんだもん……」

「だもんとか言っていないで、早く離れッ……!」

「そこ、静かにしろよー!」

ダル先生の注意を受けながらも、アレイシアは獣の気配を感じ取った。情報で聞いていたベルウルフよりは強いものだという事も、簡単に理解出来た。

「……先生、前方に二匹と左に一匹いるわ」

「ん？そんな気配はどこにも……っ！」

次の瞬間、アレイシアが言った通りの方向に突如現れた気配にダル先生は驚く。気配察知において生徒より劣るなど、あり得ない事だからだ。その気配はダル先生の方へと急接近して来る。それに逸早く気付いたアレイシアは、一瞬反応が遅れたダル先生を庇う様に立ち、茂みから現れたその獣を蹴り跳ばした。勿論、身体強化を發動させて、である。

「先生っ！」

「ああ、俺は全然大丈夫だ！」

アレイシアはその獣の方を向いてよく観察する。そして、ベルウルフの上位種であるギルウルフだという事が分かった。黒い毛並みはベルウルフと同じだが、その体の大きさが桁違い。体高四メートル程度のその体は、アレイシアからしてみればかなり大きいものだ。……こんな時だけ、永遠に伸びないこの身長を恨めしく思うアレイシアであった。

「まだ戦えない奴はなるべく後ろに下がれ！！」

ダル先生のその声により、生徒のほとんどが後ろへと下がって行く。その中には、フィアンとクレアの二人の姿も見られた。

結局、前に残ったのはダル先生含め七人、そのうち女子はアレイシアとシェリアナの二人だけとなった。

「……来る！」

アレイシアのその声に、他の六人は揃えて臨戦体制を取る。魔導書を持つ者、剣を抜く者など、様々だ。

「ガルウアアアア！！」

二匹のギルウルフが五人の男を狙って飛び出して来ると同時に、アレイシアとシェリアナの方には、先程蹴り飛ばされたギルウルフが向かって来ていた。

「願いよ届け！我、その刃に全てを切り裂く風を纏わん事を望む！風よ！！」

シェリアナは短剣を腰のベルトから抜き、刀身に風の刃を纏わせる中級魔法を発動させた。ギルウルフがシェリアナに到達すると同時に、ギルウルフの背中に短剣を突き立てる。

ブチチッ！

「グアアアアア！！」

背中に短剣が刺さったまま、方向が逸れたギルウルフはアレイシアの方へと突進して来る。アレイシアは、ギルウルフの足下に水魔法を放ち、そのまま風魔法で氷結、身動きが取れない様に固定した。そしてシェリアナが、先程外した急所である首元を狙って、再び短剣を振り下ろす。

ザシャッ！

「ギイアアッ！ガルウル……ガッ………」

「やった！？」

「そうみたいね」

そこで丁度、ダル先生が残り一匹のギルウルフを斬り伏せ、アレ
イシアの方へと向かって来た。

「二人共、よくやった！……それと、アレイシアだったか？さつき
は気配に気付いてくれてありがとな。まさか氷魔法を使うとは思わ
なかった」

「はいっ！」

「どういたしまして。……あと、この場を早く離れた方がいいわ。
血の香りに誘われて何が来るか分からないから」

その言葉にダル先生は、そりやどーも、とだけ言い残し、生徒達
の方へと戻って行った。ここであまり何も言わなかったのは、ただ
アレイシアに照れていたからである。

早急に森から出て実践戦闘科の教室へと戻って来た皆は、そのま
まずぐに解散という事になった。ダル先生は、この件を学園長三人
に伝えるために、戻って来て早々、教室から出て行ってしまった。
次の選択科目は、シェリアナと一緒に研究科へと向かう事になって
いるのだが……

「あ、あの黒翼のアレイシアよ！」

「あいつを降参させたという一年生か……」

「聞いた？さっき戦闘科の授業でギルウルフを倒したんだって！」

……どうも、クラスに遅れてしまいそうなのは気のせいではないだろう。ギルウルフの件で、余計に噂が広まってしまったからである。少しでも遅れを取り戻そうと、人混みを掻き分けてクラスへと走って行く二人なのであった。

02-16 実践戦闘科の場合（後書き）

感想評価や誤字脱字報告、アドバイスなど大歓迎です。ユーザ登録していない人も感想を書けますので気軽にどうぞ。

02-17 研究科の場合

群がる人間エルフに獣人、種族問わずかわし続け、アレイシアとシエリアナがやっと辿り着いたのは、校舎の五階の隅にある広い部屋だった。高い三角屋根の天井には、炎の魔法陣を使用した明かりがいくつも設置されている。二人は入り口の扉の前で教室を見回す。あまり人気がない選択科目なのか、それ程人が多いという感じはしなかった。

「そこのお二人」

そこで突然、後ろから何者かに話しかけられる。あまりにも唐突だったため、驚きながら後ろを向けば、そこには真面目そうな白髪眼鏡のオバサンが立っていた。

「時間丁度ですよ。次からはなるべく、時間前には席に着いていないさい」

「……はい」

「分かりました」

どうやらこのオバサン、この科目の先生のようなのだ。アレイシアとシエリアナは、隣り合った席を選んで座り、先生の方に注目した。

「では、これから研究科の授業を始めます。研究科とは、ありとあらゆる魔法魔術がどの様にして発動されるのかなどの理論を学び、新しい魔法魔術の開発を促すという、魔法魔術の未来を作って行く重要な科目です」

それはあまり人気のない科目になる筈だと、アレイシアは考える。新しい魔法魔術の開発などしなくても、現状存在するものだけで十分だと思ふ人が多く、魔法魔術研究者が減っているのが現状だ。だからこの世界の文明は、地球でいう中世程度を千年近くも保っているのだ、というのはアレイシアの意見である。これから永遠の時を過ごすであろうアレイシアにとっては、魔法魔術の研究及び開発はいい暇つぶしになるのではないかと考えてこそ、この科目を選んだのである。

「私の事はロネルとお呼びなさい。では早速、授業を始めて行きますよ。まずは基本的な魔法魔術の原理を説明して行きましょう」

そう言い、オバサン改めロネル婆……もといロネル先生は、手に杖を持ち、クラス前方の板の前に立つ。手に持った杖は勿論、板に文字を書くためのものである。

「魔術は例えば、水系統の場合、その空間にある見えないモノを集める様にイメージします。このイメージの事を『式』と言い、ありとあらゆる他の系統も『式』を持っています。風系統の場合は、何も無い空間を掴んで動かす様にすれば、動かした方向に風が流れ、火系統の場合、ある物が超高速で動く様にイメージすれば、その場所に炎が灯ります。これらの『式』が何を意味する物なのかは、未だ誰も解き明かせていません」

ロネル先生の説明を聞いた多くの生徒は、そのイメージは何を意味する物なのかと議論を交わしたり、首を傾げて疑問の表情を浮かべたりと様々であったが、アレイシア一人は違う。どこか確信した様な表情で、この事に関しての考えを巡らせていたのである。

（やつぱり……水系統の場合は、空気中に含まれる微量な水を凝縮する。風系統の場合は、空気を掴んで移動させる。火系統の場合は、分子運動を活発にし、温度を上昇させて火を発生させる。……つまり、魔力とは元素を人為的に操作出来る超自然的物質……！！）

アレイシアは、未だ誰も解き明かしていない完全な魔法理論を理解する事が出来たのである。だが、観測もされていない元素など、こちらの世界の住人に受け入れられる筈が無いと、アレイシアは複雑な気持ちになってしまう。

「んむうー……」

「アリアどうしたのー？」

「何でも無いわー……」

「皆さん、次に他の魔法についての説明をして行きましょう」

しばらく間を置き、再び板の前に立ったロネル先生は話を再開する。その瞬間、教室内の多くの生徒がロネル先生に目を向け、話を聞く姿勢を整えた。やはりこのクラスは、比較的真面目な生徒が多いようだ。

「他の魔法、それは例えば、催眠であったり、念話であったり、系統を持たないこれらの魔法は、それぞれが独立した『式』を持っているのです。それはつまり、もっと系統を増やせるかもしれないという事でもあります。皆さん知っての通り、ここ何百年系統は増えていません。新たな系統の発見は難しいだろうというのが、多くの魔法魔術研究者達の意見です。ここまでで質問はありませんか？」

そこで多くの生徒が挙手し、ロネル先生は順番に質問に答えて行く。そんな中、またもやアレイシアは、

（新しい系統……？それよりも氷系統は、水と風魔法を使わなくても、分子運動を押さえて温度を低下させればいい。雷系統も、電子を移動させればいい。うわぁ……魔法凄っ！）

前世の記憶から次々と、魔法魔術に対する新しい理論を展開させていたのである。もしもこの事をロネル先生が知ったらどうなるのかと、考えただけでも恐ろしい。

「では、今日の説明はこれ位にして、図書館に向かいましょう。学園地下の図書館には、多くの魔導書や魔法魔術の学習書が存在します。それらを読んで、魔法魔術の知識を身につけて下さい。では、行きましょう」

教室の扉を開け、ついて来る様に促すロネル先生。それに続き、アレイシアとシェリアナも学園地下図書館へと向かって行った。

現在研究科の皆は、図書館の地下一階に来ている。辺りを見回せば、本、本、本。それはまさに、本の森と称するのが正しいだろう。その規模は、エルフの里の書庫にも相当する。生徒全員に配られた地図がなければ、迷って一週間は出られなくなる、そう言っても過言ではない。何せ、どこを向いても同じ景色が続くのだから。

と、そこでロネル先生が立ち止まる。

「皆さん、この列に置かれた本が大体役に立ちますよ。借りたい本を持ったらここに帰って来なさい」

ロネル先生がそう言うと同時に、クラスの皆は散らばり、それぞれが欲しい本を探しに行った。

「どうしようか？」

「私は……この本がいいわ」

「アリアもう決めてたの？」

アレイシアが指差したのは、普通は手に入りにくい光闇系統の魔導書だった。以前、やつとの思いで手に入れた学習書も、中級魔術しか書かれていなかったため、かなり苦労したのを憶えている。

「なら、セリアはこれでどう？私も勉強手伝えるし？」

「えーと……全系統マスター初級魔法魔術？」

「私もこれを使って勉強したことがあったわ」

それを聞いたシェリアナはすぐに、これにするっ、と言ってロネル先生の元へと戻って行った。シェリアナがアレイシアを尊敬しているのは、今でも同じ事なのである。アレイシアも、そんなシェリアナの様子を不思議に思いながら、急いで追いかける様に走って行った。

02-17 研究科の場合（後書き）

感想評価や誤字脱字の報告、アドバイスなど、いつでも大歓迎です。
感想評価は特に、作者のモチベーションや執筆速度が上がる重要な要素ファクターです。

（多分、謎コーナー）

七篠「遂に総合評価が六百です！」

フィア「読者の皆様、ありがとうございます！」

アリア「……で、総合評価がもしも千超えたら、タイトルを饗宴↓
狂宴するらしいわね」

七篠「まあ、総合評価千超える頃にはきっと話の内容も色々とアレになると思うし」

アリア「そうそう、無駄に壮大なのよね……」

セリア「あまり言っとネタバレが……」

アリア「確かに……。では、感想評価などお待ちしております」

七篠「ではまた次回っ！」

02-18 剣術科の場合（前書き）

1 / 8 追記：

感嘆符（！？）の後にスペースを入れました。
最後の方の描写を加えました。

02-18 剣術科の場合

その後、本を無事に借りたアレイシアは、一人で剣術科へと向かう事にした。今は一先ず、魔法魔術の各系統よりも剣術科に行っておきたかったのだ。もしかするとこれから、マイソードが必要になるかもしれないとアレイシアは考える。

マイソードは店で買うべきか、注文するか、自分で作るべきかと考えている内に、いつの間にか剣術科のクラスに到着していた。流石に屋内で剣を振り回す訳には行かないからか、第三実践魔法用闘技場の一角が剣術科のクラスとなっている。

「ハイ、ではみんな注目！」

前方に立った先生に生徒全員が注目し、話を聞く姿勢を整える。周りの生徒を見回せば、既にマイソードを持っている人も何人か見受けられた。

「これから、剣術科の授業を始める――！」

「……………」

「こらぁッ！！ そこは『よろしくお願いします』と言う所だろ！
もう一度！ これから、剣術科の授業を始める――！」

「よ、よろしくお願いします――！」

生徒達は皆、先生のあまりの気迫に引き気味になりながらも、言われた通りの挨拶を返す。アレイシアも若干、この先生に対しては

引いてしまった。

「よろしい！ では、剣の基本的な種類から説明して行くぞ！ いいな？」

「……………」

「こらあッ！ 問いかけられたら『はい！』と答えるものだろ！！」
「はいつ！！」

……この授業は大変なものになりそうだと、アレイシアは不安な気持ちで一杯になった。それは他の生徒も同じらしく、中にはあからさまに嫌な顔をしている者もいた。先生はそれを気にする様子も無く、話を続けて行く。

「俺の事はベルク先生と呼べ！ じゃあ、まずはこれを見る！」

「は、はいつ！ ベルク先生！」

地面に置かれたいくつかの剣を拾い上げるベルク先生。よく見れば、それぞれ長さや幅が違うのが分かる。

「これらが今のお前達にオススメの剣だ。一般的な剣、短剣などがある。近くに来て見てみるといい」

その言葉を受け、ベルク先生に近寄って行く生徒達。ベルク先生はどうやら、剣の事になると真面目になる様だ。アレイシアもそれに続き、剣に視線を向ける。

「これがよく使われる普通の剣で、これが小回りのきく短剣、こっちにあるのが突きに向いた細剣だな。あと、これが大剣、重いからあまりオススメしない。この中から一つ選んで、扱い方を学んでいく。重要な決定だから慎重にな。既に剣を持つてる奴は、学園支給のこれらの剣から選んで使わなくてもいい」

そこでアレイシアは、すぐに普通の剣にすると決めた。他の人からしてみれば、適当に使いそうなの、という理由で決めた様にしか映らないだろうが、普通の剣を選んだのにもアレイシアにはちゃんとした理由がある。それは、いつかは刀を使いたいという理由であった。短剣も細剣も、刀に応用するには難しいと思っただからだ。大剣などはもつての他、刀とは全くの正反対に当たる武器だろう。

「どの剣にするか決めた奴から、闘技場地下の武器庫に取りに行け。そこに階段がある」

ベルク先生がそう言い終わると同時に、半数以上の生徒が武器庫へとなだれ込んだ。その様子を見ていたアレイシアは、急いで取りに行かなくて良かったと安堵するのであった。その証拠に、今も武器庫の中から叫び声が聞こえてくる。

「おいっ！ その剣は俺が取ろうと……」

「学園支給のだから全部同じだろ！？」

「キヤアッ！ その大剣使いの方、危ないわよっ！！」

「静かにしろお前らああー！！」

最後の声は、ベルク先生のものである。しばらくして騒ぎが収ま

つてから、アレイシアも遅れて武器庫の中へと入って行った。

「ベルク先生、普通の剣はどこに……！？」

「ん？ 普通の剣なら右側の棚の三番目だが……どうしたんだ？」

ベルク先生が疑問に思うのも無理はない。アレイシアは、ベルク先生の後ろを見つめて固まってしまったからだ。

「お、おい！ 俺の後ろに何かいるのか？」

「先生……そこにあるのって……！！」

「ん？」

アレイシアにそう言われ、後ろを向くベルク先生。それと同時に、アレイシアは棚の上のある物を指差した。

「それは確か……百年以上も前に極東の地から漂流して来た、ある旅人が持っていたカタナという武器らしいぞ？ 斬るという事に関しては剣と同じだが、上手く扱うには特別な技術がいるらしい。俺も使ってみたけど全然斬れなかった。何でだろうな？」

「それはそうよ。刀を扱うのなら、ただ力で押し切るだけではないわ。押しと引きが重要だからね。やり方次第では、純粋な人間の力だけで鉄さえも切り裂く、扱う者の技術も問われる武器なのよ。……ま、私も実際使った事は無いんだけどね」

そう言い、刀に触れて微笑むアレイシア。黒く光る鞘に、真紅と漆黒の紐が巻かれた持ち手。その色合いは、アレイシア本人を表し

ているかの様であつた。鞘と柄の間から覗く白銀の刃が、妖しい雰
囲気を醸し出す。ベルク先生は、何故こんな少女がカタナについて
これ程知っているのかと、幾分当惑した様であつた。

「……決めたわ。この刀を私にくれるかしら？」

「まあ、使える奴がいなし、知識を持った奴に渡すならいいかな
？……そうだ、カタナはやるから条件がある」

「条件？ 金と身体はお断りよ？」

「ははっ、言うねえ！ そんな事は言わないよ。ただ……」

そこでベルク先生は一息置いて、告げた。

「絶対に、使いこなして見せろや！」

「ふふっ……面白い。分かつたわ、絶対に使いこなして見せる！」

「ああ、たのむぜ。今から始める予定の『第一回、魔法もいいから
とにかく何でもありの剣技大会』でも使ってくれよ！ ちなみに、
俺命名」

「分かつた、使うけど……まずはそのネーミングセンスを何とかし
なさいよ。わざわざ試合名にそんなに詰め込む必要が無いでしょう
に」

ネーミングセンスについてを軽く説くアレイシアと共に、武器庫
から外に出たベルク先生は、早速『第一回、魔法もいいか（略）』に

ついでの説明を始めた。クラス全員を同時に戦わせ、大体の実力を見るのだという。勿論試合名の通り、殺しさえしなければ魔法の使用も大丈夫らしい。

「では、全員！ 試合開始ッ！！」

その合図と共に、アレイシアを含め、全ての生徒が前へと駆け出して行った。

02-18 剣術科の場合（後書き）

誤字脱字の報告や感想評価など、いつでも大歓迎ですのでよろしく
お願いします。感想評価などは特に、執筆速度やモチベーションが
上がる重要な要素ファクターですので。

（誕生祝いの謎コーナー）

七篠「知ってた？今日はアリアの誕生日だったりするんですよ」

アリア「あ、本当だ。一月七日（地球時間）ね」

セリア「誕生日おめでとう！」

フィア「本編じゃまだですけど」

七篠「ま、そうだけどね。実は今回、元男設定のフラグを一つ回収
しました」

アリア「やっぱり武器は刀でしょ」

七篠「……という訳で、感想評価など、お待ちしております！」

アリア「お待ちしておりますーす！」

剣を手に構え、前進して行く生徒達。アレイシアもその中で、向かって来るクラスメイトと相對する。周りの生徒達の目は、アレイシアが持つ奇妙な武器に釘付けとなっていた。

他の生徒達が持つ剣の中では、アレイシアの刀はどうにも目立ちすぎる。何故かといえば、大太刀に当たるのだろう。刀身の長さが三・五テルム（九十センチ）程もあり、本来アレイシアの身長では扱えない筈の大きさだからだ。

扱えない理由として挙げられるのは、鞘から剣を抜く事が出来ない。もっと単純なものでは、重さを支える事が出来ないなどといった理由がある。刀独特の反った刃が、アレイシアの身長でも刀を抜く事を可能にし、魔力による身体強化魔法が、刀の重さを支える事を可能にしている。その事に気付けたのは、クラスメイトの内何人だろうか。

と、そこで、アレイシアの方へと六人の生徒が向かって来た。刀を持ったアレイシアは、生徒の中でもかなり目立ってしまう。試合時に目立てばどうなるか、答えは単純。他の者から狙われやすくなるという事だけであった。

迫って来た六人の内、二人の男が同時に剣を振り下ろす。

ガキキンッ！

二つの剣は刀によって、衝撃を柔らげる様に斜めへと逸らされた。

そしてアレイシアは、刀をそのまま横へと持って行き、高速の峰打ちを放つ。やはりアレイシアには、まだ刀で斬るような勇氣は無かったのだ。

「ごめんっ！！」

「うおっ！？」

「ぐふああっ！！」

痛々しい声と共に吹き飛ばされた二人は、後ろに控えていた四人に体当たりし、地面に崩れ落ちる。

「ぎゃあああ！！」

「ふぐっ！！」

「うああ……死んでないよね？」

その悲惨な光景にかなり心配になったアレイシアだったが、休む暇もなく背後から火球が迫る。

「水龍っ！」

咄嗟にアレイシア自作の中級水魔法で相殺、火球を放って来た本人もろとも押し流した。

その後、峰打ちと初級魔法だけを駆使し、アレイシアは最後の三

人にまで残る事が出来た。最後の三人に残ったのは、アレイシアと、猫人のほっそりとした大剣使いの男、そして……

「何でベルク先生が試合に参加してるのよ……」

「先生が参加したら勝てる訳ないだろ……」

「いや、实力を見るならやっぱり実際に戦った方が早いかなと」

何故か、ベルク先生であつた。これには猫人の男も呆れたのか、深いため息をついている。

「で、实力を見たんでしょう？ 皆の实力は如何程いかだったの？」

「いや、お前ら二人以外は弱かつたな」

「お前が言っとなっ！」

アレイシアと男の声が重なる。そんな二人の様子に、ベルク先生は一瞬たじろぐも、すぐに姿勢を取り戻す。

「あー、まあとりあえず、三人でやろうか？」

「異議あり……と言いたい所だけどいいわ」

「僕も、右に同じく」

「そうか、じゃあ行くぜ！」

ベルク先生はそう言うと同時に、二人の視界から消え失せた。ア

レイシアは、辺りを見回してベルク先生を探そうと必至になる。

「……………どこに？」

「ここだッ！！」

「！？」

突然現れた気配に、アレイシアは驚いて後ろを振り返るが、反応が追い付かずに攻撃をもろに食らってしまう。

ガガッ！！

「うぁっ……………！！」

「ぐぉっ……………！！」

そして、横にいた男も同様に、攻撃を食らって大きく吹き飛ばされた。

意識が闇に堕ちる直前、アレイシアが最後に見たのは、吹き飛ばされた猫人男と慌てふためくベルク先生、そして自身の横に落ちて地面に刺さった刀であった。

浮上する意識、瞼の隙間から光が入り込む。そしてまず感じ取っ

たのは、自身が今ベッドに寝かされていると言う事であった。目が光に慣れて来て、辺りを見回す。

「……………んう……………？」

「アレイシアさん、起きましたか？」

「あ……………フィズ先生……………とベルク先生？」

ベッドの脇には、フィズ先生とベルク先生が立っていた。ここはどうやら保健室の様だ。フィズ先生は心配そうに、ベルク先生は申し訳なさそうにアレイシアを見つめている。

「悪かった！ 大人気ないっ！ 二人が中々やるもんだからつい……………！！」

「……………それよりもさ……………あの瞬間移動はどうやったの？ 魔法を使った様には見えなかったし、第一あれ程すぐに転移魔法を発動できる訳が無い。もしかして、純粋な身体能力で？」

その問いに、一瞬困った様な表情を見せるベルク先生。何か言いたくない理由でもあるのかと、アレイシアは推測する。

「あ、いや、言いたくなくても……………」

「いや、言っておこうかな……………あれは気と言うものを使っているんだ。気とは生物が持つエネルギーそのものであり、それを引き出せば、異常なまでの力を発揮する事ができる」

それを聞いたアレイシアはある事を思い付いた。この状況に乗せ

てうまく行くかもしれないと踏んで、ベルク先生に問う。

「……なら、私に気の扱い方を教えてくれないかしら？ それ『だけ』で許すわよ？」

あえて『だけ』を強調するアレイシア。これはつまり、気の扱いを教えさえすればこの場を逃れられる、という事を前面に押し出すためであった。

「あ、ああ分かった。だが気の扱いにはある程度の素質が必要だぞ？ 気が少なければ、少し出しただけでも死んでしまう」

「死んだら私もそこまでという事よ。いつなら時間が空いている？」

アレイシアとしては、一度捨てた命を取り戻した様なものであり、死後の世界の存在も知っているため、大して死を恐れる様な事は無くなっていたのである。尤も、気の枯渇程度で死ぬ様な事は無いのだろう。

「その……何か凄いなお前は……毎日十二刻以降は暇だから、その時でどうだ？」

「分かった、よろしく頼むわね」

そう言っただけでベッドから飛び降りようとするアレイシア。そこでフイズ先生が慌てて止める。

「ちょっと待って！ 首に怪我をしていたから見たんだけど、背中にある魔法陣は何だ？」

「……秘密よ！」

アレイシアは、枕元に何故か置かれていた刀を手に取り、保健室から逃げる様に走って行った。いや、実際逃げていたのだろう。その魔法陣は、背中の翼を発現させるためのものだったからだ。

寮室に向かって走って行く途中、校舎内の向かい側から歩いて来た三人とすれ違う。

「アリアさんっ！？ 大丈夫ですか？」

「今からお見舞いに行く所でした」

「全然大丈夫よ！もう平気だから心配しないで」

「ふええ……アリアあ……」

今日一日、念願の刀を手に入れ、本格的な気の修行への目処も立った。色々と密度が濃くて進展がある日だったなとアレイシアは考える。

……これはまた、明日からが楽しみね。

02-19 剣術科の場合 2（後書き）

感想評価や誤字脱字の報告、アドバイスなどお待ちしております！
Web拍手の方からでも、気軽にコメントを送って下さい。

感想評価は、作者のモチベーションや執筆速度が上がったりする^エ原動力^{ネルギ}なので、どうぞよろしく願います。

〈感謝のための、謎コーナー〉

七篠「一月九日の午前二時、真夜中にPVアクセスが100,000超え、更にお気に入り小説登録数も200を超えました！ありがとうございます！」

アリア「また時間が細かい……で、その午前二時時点のアクセス数が問題なのよね」

七篠「そうなんだよ……活動報告の方を見てもらえれば分かりますが、午前二時時点でのアクセス数が1も違わずに100,000ピッタリだったんですよ」

アリア「だからこれはまさに奇跡だと。凄いわね」

七篠「では、これからもよろしくお願いします！」

アリア「感想評価など、お待ちしております」

黒美さん「だから私はいつになったら……」

七篠「多分もうすぐ、恐らく第三章で活躍するでしょう。……きつと」

黒美さん「自信無さすぎっ！ヒドイ……ガクッorz」

02 - 20 新しい戦い

現在は二月一日。一学年が始めて選択科目の授業を受けてから、既に四日が経つ。この日から二日間には休日のため、学園街、つまり学園内市場も、朝方から休日を通り過ぎ多くの生徒で溢れていた。

そんな人混みの中、最近では自由時間に一人欠けるのも珍しい、とても仲の良い四人組歩いていた。三人が手を繋ぎ、残りの一人が手を引っ張られている形である。

「ちよっ！ 引っ張るなって！」

「いーでしょアリア！ ほら、こっちの洋服屋にいいのがあるわよ！」

一番左を歩くのは、幼いながらも威厳を感じさせる、赤髪と長い耳が特徴的な少女。

中央を歩くのは、茶髪に時々ぴくつと動く猫耳が可愛い、こちらと同じく少女。

右側で手を引くのは、背中の半ばまで届く金色の髪を一纏めにした、活発そうな少女。

それに対し、手を引かれるのは、腰まで届く長い黒髪を風になびかせる、分厚い本と不思議な形の棒を持った少女。

……言わずもがなである。右から順番に、クレア、フィアン、シエリアナ、アレイシアであった。

四人は朝早くから学園街に来たと思ったら、突然アレイシアを着せ替え人形にして遊びだしたのである。着せ替えの幅は、洋服から

ちょっとしたアクセサリーまで、多岐に渡る。

「この服いいです！ アリアさん可愛い！」

「とても似合ってますよ」

「ううう……恥ずかしいから、もうやめて……」

今アレイシアが着ているのは、すっかり普段着となった黒いドレス？？？背中の部分に髪で隠れる穴があいている？？？よりも更に装飾の多い、緋色のドレスであった。彼女自身としては、これもうゴスロリでいいだろと言った感じの服である。その様な服を着た状態で三人の可愛いコールを浴びせられれば、アレイシアの精神がガリガリと削られるのは当然の事であった。既にアレイシアは、心身ともに疲れ果ててしまっている。

「店員さん、これ買いまーす！」

「ああつ！ また勝手に話を……！」

先程からこんな調子で、既に洋服を二着、新しいブローチを一つ、髪を飾るためのリボン紐を二本も買っていた。金は勿論、アレイシアの負担である。

昼時を過ぎ、昼食を食べてから寮室へと戻って来た四人は、リビングルームにてちょっとした雑談をしていた。アレイシアは何故か、寮室に入った途端三人に取り押さえられ、緋色のドレスと胸元には濃い紅のブローチ、髪は朱い紐で一つに纏めるという、赤尽くめの

服装に強制的に着替えさせられたのである。

四人の雑談の内容も、当然アレイシアの服装についてだったのだが、ここでクレアが突然口を開く。

「……そうですっ!!」

「クレアどうしたの？」

「これから七年間、学園に通う事になると思いますが、この学園の外の街に出る事は少ない筈です」

「確かにそうね……」

他の三人も、この事に関しての考えを巡らす。この学園の長期休暇は、五月、十月、十一月の一月間、つまり二十四日間を丸々となっている。他の街に行くならその辺りしかない。

「じゃあ五月になったらみんなで王都に行こうよ!」

「いえ、わざわざそこまで待つ必要はありません。魔王アリアがここにいる限り」

「魔王って何さ、魔王って……」

アレイシアは、魔王の称号^{Erk King}を手に入れた。

「空を飛べば速いでしょう。今からでも行けます」

「よし、アリア行こう!」

「えー……ま、いいかしらね」

ここでアレイシアが王都に行くとしたのは、王都に用事があるという事を思い出したからである。国王に一度、襲撃の件について話しておきたかったのだ。

「王都に行くなら……えーと……どこに挟んだっけ？」

机の上に置かれた魔導書『the Grimoire of Alysia』のページをめくり、本に挟んだらしい何かを探し始めるアレイシア。全て英語で書かれているため、後ろから覗き込む三人はほとんど理解出来ていない。

「何て書いてあるんでしょうか？」

「全く分かりませんわね……」

「あ、これだこれだ！」

そう言ってアレイシアが取り出したのは、魔法陣が描かれた四枚の紙。アレイシア分の一枚を残して三人に配って行く。

「これに私が魔力を供給すれば空を飛べるわ。ポケットにでも入れておいて」

「すごい……！」

「二百年後の技術ですよこれは……」

そして四人は、アレイシアの飛行魔法で王都へと向かって行った。本来は馬車で一日かかる道のりなのだが、アレイシアの飛行魔法があれば一刻半で到着出来るだろう。方向としては、いつかアレイシアがあのだか猪と遭遇した、学園西の大草原のずっと先に当たる。因みに、アレイシア含め四人共、一度も王都に行った事は無い。

イルクス王国の王都は、中央にそびえ立つ王城と、それを取り囲む貴族の館がある住宅街、その他多くの人達が住む一般地区から成り立っていた。

これら、三つの地区を貫く様に存在するのは、幅が四十テルム（十メートル）以上もある中心街であり、露店から宿などが立ち並ぶ非常に活気のある場所であった。

王都の中心街、辺りをキョロキョロと興味深そうに見回しながら歩く四人。長期休暇でもないのに王都に来れる学生がどれ程いるのだろうか。

「その店を見てみましょう！」

「あ、私もー！」

「これは来て良かったですね。来週もよろしくお願いします、アリアさん」

楽しそうな三人とは違い、どこか困惑した様な表情のアレイシア。何故かといえば、三人に着せられた服装のまま来てしまったからである。周りの視線がかなり痛い。

「……と、とりあえず、私は国王に会って来るから。皆は待っててね」

「えー、ずるいですよ。アリアさんだけ……」

「仕方無いわよ。アリアにも事情があるらしいし……」

「じゃ、行ってくるわ!」

そしてアレイシアは、三人に見送られながら王城へと向かって行った。全ては襲撃問題解決のために。

フィアン、シェリアナ、クレアの知らない場所で、アレイシア一人の戦いが幕を開けた。

02・20 新しい戦い（後書き）

感想評価や誤字脱字の報告、アドバイスなどはいつでもどうぞ！
感想を送りにくい方は、Web拍手の方からでも送って下されば。

くきつと、謎コーナーく

ファイ「最近、プロローグから見直しをしているらしいですね」

七篠「そうなんですよ。どうも見直したら、ここおかしいなぐとい
うのが随所に見つかるので……」

アリア「……所でさ、Erlikingって何？」

七篠「語源は多分Elf-King、つまり妖精の王で、一応魔王
の英語訳だよ。ほら、ゲーテ作の『魔王』から。称号名に引用して
みたり」

魔王アリア「……おいっ!!」

七篠「そ、それでは、感想評価などお待ちしております!」

ファイ「お待ちしております」

02・21 お姫様と王子様（前書き）

タイトルは気にしないっ！

前半と最後の方は訂正する必要がありますそうです。

02 - 21 お姫様と王子様

中心街をまっすぐと進み、現在アレイシアは城門のすぐ前まで来ていた。深い堀と跳ね橋、灰色の石と煉瓦で固められた城壁。それら全てが城の威厳を強く感じさせている。そこでアレイシアは、跳ね橋の横の槍を持った兵士に話し掛けられた。比較的豪華な緋色のドレスを身に纏う少女が城を見上げていれば、誰だって不思議に思う事だろう。

「お嬢さん、この城に何の御用かな？」

「国王様に会いに来ました。アレイシアと言えば分かる……と思います」

いつもよりも丁寧な口調で喋るアレイシア。恐らく国王も私の事を憶えているだろうと、名前を伝えるように頼んでみる事にしたのだ。

「……国王様に面識があるのか？ 君は何者だ？」

「クラウド出身、ラトロミア家の者です」

「君はまさか……！ いや、何でもない。ひとまずはこっちに来てくれ」

跳ね橋を渡り、庭を通り抜けた先、丸机と椅子が並ぶ広い部屋にアレイシアは通された。どうやら、ここで待っているとの事らしい。部屋を見回せば、壁際に置かれたいくつもの置物や装飾品。これらを見て、アレイシアは暇をつぶしていた。先程の言葉がどうも引つ

かかるのだが、どうでもいい事だと、すぐに思考の隅に追いやる。

部屋に通されてから十分程、やっと先程の兵士が戻って来た。話によれば国王は、アレイシアが会う事を快く承諾してくれたそうだが、王の間へと向かう途中、アレイシアは、今まで黙っていた案内の兵士に突然話し掛けられる。

「質問があるんだが、いいかな？」

「いいですよ」

「どのような事があって国王様と知り合ったのかな？」

「私が八歳の誕生日を迎えた日に、国王様がパーティに来てくれました」

それを聞いた兵士は、そうかと一言、また黙り込んでしまう。何か悩む事でもあるのか、眉にしわを寄せている。それを不思議に思ったアレイシアは、兵士に話しかけた。

「あの、どうしたんですか？」

「んー、いや、何でも無いが……」

「そう」

そして、前を向くアレイシア。

と、その時???

「……悪いッ!!」

「!？」

突然その兵士が、アレイシアの背中を狙って槍を突き出して来たのである。突然の事だったが、アレイシアはなんとか斜めに動く事によってかわす事が出来た。

ヒラリ……

宙を舞う何本かの黒い糸???いや、アレイシアの髪。恐らく、槍をかわした時にでも切れたのだろ。その黒い糸は風に流され、そのままアレイシアの右手に収まる。

「……何のつもりかは知らないけど、私が十年かけてここまで伸ばした髪を少しでも切った。その事に関してはいいわね？」

「あ……!!」

先程までとは全く違うアレイシアの様子と、背後からの奇襲をかわしたという事実に驚いて超えも出ないらしい。実の事を言えば、アレイシア自身、黒くて長い髪をかなり気に入っていたのだ。右手に握った髪を、大事そうにスカートのポケットにしまう。

「国王の所までは来てもらいましょうか。とりあえず言っておかないゃね」

「!!! やめろっ! 国王様には言わないでくれっ!!!」

アレイシアは、瞬間移動で兵士の背後に回り、襟元を掴んで王の間へと引きずって行？

「……………あ、王の間の場所知らないや」

?? けなかった……

結局、王の間の場所を給仕の人に尋ね、五分程歩いて辿り着いたのは、鉄と木で出来た巨大な両開きの扉がある場所だった。ちなみに、給仕の人に道を尋ねた時、兵士についてを逆に尋ねられたが無視しておいた。

「お邪魔しまーす！」

ズガコンツ！！

「何事じゃ！？」

人間一人では開けるのにも苦勞しそうな扉を、アレイシアはいとも簡単に指二本で押し開ける。両側に勢い良く開いた扉が、壁に当たって大きな音を立てた。

「国王、久しぶり！ 私の事憶えてるわよね？」

「ふおっ！？ 何じゃ、アレイシアか……それにしても、大きくなつたのう」

国王は、アレイシアを上から下まで全体的に見る。確かにアレイ

シアが八歳だった頃と比べれば、かなり成長しただろう。

「何じゃとは何だ。……それにしても、老けたわね」

「ふおっふおっ……口調は変わっても、やはり性格は変わらんな。
で、そこに転がってるのは……お主がやったのかね？」

アレイシアの後ろ、開きっぱなしの扉の前に国王は目を向ける。
そこには、身に付けた鎧の一部が剥がれ落ち、みすばらしい姿を晒している兵士の姿があった。それでも槍は手放さなかったのか、ぴくぴくと震える右手にはしっかりと槍が握られている。ある意味、根性がある奴だとアレイシアは思った。

「ああ、あれはね、ここに案内する途中に客人を刺す様な人間だから、気にしないでいいわ」

「……それは本当か？」

「だから気にしないでっ。そろそろ本題に入っていいかしら？」

アレイシアは、以前よりは柔らかい言い方で本題を促す。国王は兵士の事がまだ気になる様子だったが、王の間の隣の部屋へとアレイシアを案内した。

部屋のソファに二人が腰掛けた所で、アテと呼ばれる、地球でいう紅茶の様なものが運ばれて来た。客人をもてなす時に出される一般的な茶だ。だが勿論、王城で出される物のため、風味や味に関してはかなりいい物を使っているだろう。

「砂糖はいるかね？」

「いらないわ。私にとって、アテはそのままの味で楽しむ物なのよ」

「ほう……珍しい」

そう言い、カップの中に砂糖を入れる国王。アレイシアは今まで気付かなかったのだが、カップにも細かい装飾が多く入れられているらしい。

「ま、人の好みよ」

「そうじゃな。では、本題に入るとしよう」

そしてアレイシアは、襲撃の件についてを詳しく話し始めた。十二歳の誕生日、学園へと向かう馬車、そして先程の兵士。大体の時刻や、その時の状況を細かく説明して行く。

「恐らく、私が王子と結婚したら良く思う奴か、あるいは、貴方の誘いを断った私を良く思わない奴か、どちらかだと思っわ」

「なるほど……心当たりもある、今から尋ねてみるかの？」

「ありがとう。それにしても、アテに時間差で効く睡眠薬入るとか無いわよ……効かないからいいけど」

国王は驚いた様な顔をする。まさか、アレイシアのアテに睡眠薬が入っているなどとは思ってもなかったからだ。

「無味無臭無色透明、一般的には完璧な睡眠魔法薬ね。魔力が思いっきり感じ取れるのが欠点だわ」

「ふおっふおっ……相変わらずの素晴らしい知識じゃの」

「そりゃどうも」

褒められた事などどうでもいいと言わんばかりのアレイシアの返事に、国王はしばらく黙り込んでしまう。

「……で、やはりどうじゃ？ 例の問題の解決にもなる。儂^{わし}の息子の嫁には……」

「行かないわ。生憎、男には興味なくてね」

それは確かに当然の事と言えた。それでも、アレイシアは元男なのである。恐らく一生、結婚する事は無いだろうとアレイシアは考える。

「……女が好きかの？」

「……………別に、そういう訳じゃ無いわ」

「ほう、それは残念。男嫌いの娘がいてのう……………困っておるんじゃ。ただの可愛い物好きらしいがの。息子と娘に、一度くらい会ってみてはくれんかのう？」

「まあ、一度くらいなら……………」

ガチャッ！

アレイシアがそう言った瞬間、扉を開けて誰かが入り込んできた。

「その言葉を待ってたわ！ ああ可愛い、人形みたい！！」

「ちよっ！？ いきなりそれはまずいだろ……」

「え、うわ！？」

部屋に入ってきたのは、薄い金色の長い髪を持つ少女と、なかなか整った顔立ちの青年。少女の方は、部屋に入った途端、何故かアレイシアを強く抱き締めた。これが恐らく国王の娘、姫に当たる人なのだろう。呆れた表情で後ろに立っているのは、国王の息子、王子だと思われる。

これが、この先長い付き合いになってしまうリーシェ姫、レオル王子と始めて会った瞬間であつた？？

02-21 お姫様と王子様（後書き）

誤字脱字の報告、感想評価などをお待ちしております！ Web 拍手の方からでもコメントをどうぞ。

……リーシェ姫はですね、アリアに対してかなりのキーパーソンだったりします。

02-22 死神就職申し込み用紙（前書き）

行動範囲が大幅に拡大フラグ（笑）

02-22 死神就職申し込み用紙

王の間の隣、机とソファが置かれた部屋。そこは元々、国王が客と重要な話をする為の場所であるが、今はすっかり和やかな雰囲気にも包まれている。

国王が座る向かい側、先程までソファに座っていたはずのアレイシアは、何故かリーシェの膝の上に乗せられていた。それもまるで、大切な人形を抱き締めるかの様に、互いが向き合う形で。

「私は人形かッ！」

「下手な人形よりもずっと可愛いわ！」

ぎゅうう……

本人は気付いていない様だが、人形と間違えられる程には可愛いという事も、また事実なのである。

「リーシェは小さい頃からずっとこんな調子じゃ。今年で十六だというのに、いつになったら直るのやらと心配なんじゃよ……」

「へえ、十六歳……」

ぎゅううう……

年の割に子供っぽいリーシェには、何か理由があるのかとアレイシアは考えたが、ここで聞くのは控えた方が良さそうだ。そこで、国王が思い出した様に言う。

「そうじゃ、明日まで王都に居るなら、城の客室がいくら空いている。連れて来た三人と一緒に泊まってはどうか？」

「……寝込みを襲われたらたまったものじゃないわ。主に二つの意味で。だから悪いけど、街で宿取って明日また来るわね。……リーシェ、いい加減放しなさいよ」

そう言つて、リーシェの腕の中から逃れようとするアレイシアだが??

「やだ」

「放せっ!」

「やだっ!」

「はーなーせっ!」

「やーだっ!」

「……という事があったのよ」

「始めまして、リーシェです!」

「……えええええ!」

ここは中心街にある宿。四人が泊まるため、一番広い部屋を用意してもらったのだが、現在この部屋には五人の少女の姿があった。

「え、えっ？ この国のお姫様！？」

「うん、そうよ」

「うわあ！ まさか会えるなんて思ってなかったわ！！」

やはりどの世界でも、姫というのは女子の憧れの的なのである。アレイシア以外の三人は、それから半刻に渡ってリーシェと嬉しそうに話をしていた。クレアも当然、姫同士で仲良くなって行った。……勿論、姫であるという事を隠しながら。

「で、リーシェさんは城に帰らないんですか？」

「私はいいの、明日帰るから。今日はアレイシアと寝るわ」

「絶対寝ない！！」

「寝ようよー」

「やだっ！」

寝るかどうかを言い争う二人は、他の三人の目にはかなり微笑ましく写っていた。その事を口に出したシェリアナが、二人に厳しく責められたというのは余談である。

意識が浮上する。辺りはどこまでも奇妙な色が続き、時間と距離の感覚が曖昧になる。アレイシアは、そんな場所に見覚えがあった。そう、ここは夢を見せられる時に来るいつもの場所であった。

「こんにちは！　どうやら上手く、リーシェ姫とレオル王子には会えた様ね」

「今日は何の用かしら？」

「あの、ちょっと話があつて」

前方に立つ黒美さんは、アレイシアに近寄ると視線を合わせる様に屈む。その様子にアレイシアは、自身の身長の高さをまたもや恨めしく思つたのであった。

「……あの二人、記憶を持った転生者なのよ。地球からじゃないけど」

「へえ……なんか納得出来る」

「天界の手伝いとして死神の職に就いてもらつてるんだけど、貴女も入ってみない？」

それを聞いた瞬間、すぐに興味を持ったアレイシアは黒美さんに問う。

「具体的にはどんな仕事を？」

「そうね……時間がある時に見つけた魂を天界に送るとか？ 祐に渡せばあとは天国行き地獄行きはこちらが決めるからね。報酬には天界の共通通貨とか、何か物がもらえたりするわ」

「はい決めたっ！ 楽しそうだし、とりあえずやってみるわ！」

「話が早いわね。じゃあ早速……」

そう言っで、黒美さんは懐から一枚の紙を取り出した。書かれている事から判断して、申し込みフォームに近い物だろう。

「この紙に書かれた項目を全部埋めておいてね。また明日！」

「え、ちよっ！？ 待って！」

気付けばアレイシアは、暗くなった視界に飲まれ、再び現実へと戻されて行った؟؟？

「んう……にえむい……」

次の朝、アレイシアはカーテンの隙間から漏れる僅かな光で目を覚ました。腰と腹部に回されたリーシェの腕の中から這い出し、枕元に目を向ける。そこには確かに、夢の中で黒美さんに渡された紙が置いてあった。何故置いてあるとか、その様な疑問はさておき、アレイシアは紙に目を通して行く。

パサッ……

「……………」

紙の内容は至って普通。名前、性別、種族から始まって、魔力量や得意な事など、多くの項目が英語で書かれていた。^{エンクライシア}アレイシアは万年筆を取り出し、眠い頭を働かせて順番に一つずつ記入し始める。

「ふわぁぁ……………」

「アリア何やってるの？」

「あひゃあ!？」

大あくびをするアレイシアの後ろに現れたのは、先程までいなかった筈のシェリアナだった。突然の事に驚いて、つい変な声を上げてしまう。

「あ、セリア？」

「そんなに慌てなくても……………その紙は何？」

「あー……………これ？ 何でもないわ。セリアも、何しに来たの？」

アレイシアがそう言うと、急にシェリアナはそわそわし始める。何か問題でもあるのかと、アレイシアが思った次の瞬間??

「っ……………何でもない！ 何でもないわ!!」

「!? セリア待つて!」

シェリアナは何故か全速力で逃げ出した。それを追おうとするアレイシアだが、どうも彼女に悪い気がするのでそのまま踏み止まる。二つに別れた宿の部屋の内、入り口に近い部屋のベッドに隠れたシェリアナは、その時こう考えていた。

??アリアを抱き締めてたリーシェが羨ましくて、私も入りたかったなんて言えないっ! 言えないいいっ……!!

シェリアナがこう考えていたという事を、アレイシアが知る日は永遠に来ないだろう。椅子に座り直したアレイシアは、再び机に向かって紙の欄を埋めて行く。シェリアナが何故逃げてしまったのかと考えながら???

02-22 死神就職申し込み用紙（後書き）

誤字脱字の報告や、感想評価、アドバイスなど、いつでもお待ちしております。送りにくい方は、Web拍手の方からでもメッセージを送って頂ければ。

02・23 飛び降り着地（前書き）

どうも七篠です、おはこんばんちは。

今日気付いた事なのですが、正直02・19辺りからスランプ気味だったと思います。今はきっと大丈夫です。ゴドフスキーのショパンエチュード一番を聞いたら、何故かスランプ抜けた気がしましたw

詳しくは1/15の活動報告でも見て頂ければ。ついでに、一つ下のキャラバトンも見て下さいねw

02 - 23 飛び降り着地

用紙への記入を全て終わらせたアレイシアは、やっと起き出して来たリーシェ、クレアと共にフィアンとシェリアナを起こして行く。今日は休日の二日目、明日からは授業があるため、学園へと戻らなければならぬ。更にアレイシアは、リーシェを城に帰さなければならぬ上に、襲撃の件を国王ともう少し話する必要があった。たった二日の休日に王都まで来た弊害と言えるのか、大分忙しい一日になってしまいそうだ。

「じゃ、私はリーシェを城に帰しに行つて来る」

「その間私達は、昨日と同じく中心街を見ていればいいですね」

そう言うのはクレア。街を見て回る内に欲しくなってしまったのか、羽を模した髪飾りを付けている。

「そうね。じゃ、行ってくるわ。何か仲間外れにしてるみたいでごめんね」

「いえ、別に大丈夫ですよ？ アリアさんはいつも私達と居るじゃないですか」

「……ありがとう」

恥ずかしそうに、斜め下を向きながら言うアレイシアは、リーシェの手を取ってそのまま城へと歩き出した。その足取りが、若干慌てている様に見えるのは気のせいだろうか？

城門前にて、アレイシアは門番の兵士に話し掛ける。

「あのー、姫様を帰しに来ました」

「ただいま！」

「……！？ あ、ああ、そういえばそうでしたね。話は聞いています。リーシェ姫様とアレイシア様、着いて来なさい」

門番の兵士に話しかけた途端に驚かれてしまったが、一人の少女がリーシェ『姫』の手を引いていれば無理も無い事だろう。辺りを見回したが、門付近に構えている十人程の兵士の中に、昨日アレイシアを刺そうとした兵士は見当たらなかった。

昨日と同じく、王の間の扉を指二本で押し開ける。その様子には、リーシェも驚いた様だった。そして扉を開けて早々、大きな声で御挨拶。

「国王、おつはよー！！」

「父上、ただいま！！」

「ふおっ！？ いきなり扉を開けられると驚くんじゃが……」

まだ朝早いからか、若干眠そうな顔の国王。だが、それを気にす

る様子も無く、アレイシアとリーシェは国王のすぐ前まで寄って行く。

「例の件、結局どうだったの？」

「昨日はアレイシアと寝れたんだよ！」

「お、あ……二人とも落ち着いてくれんかのう？ 順番に話して行く予定じゃから」

「分かったわ」

「……はい」

リーシェは一度自室に戻る事となり、アレイシアは王の間の隣、昨日も通された部屋に案内された。昨日と同じく、部屋に入ってからすぐにアテが出されたが、今回は別に毒が入っているという訳ではなさそうだ。

「……で、どうだったの？」

「それがじゃな……ソルフという優秀な大臣の一人が、わ儂の頼みを断ったお主の事を良く思わず、不敬罪で私刑を下すと言い出したのが元らしいんじゃ。儂はいいと言ったんじゃがな……言ってしまったえば、身分に関係なく誰でも平等に接する変わり者のお主を、儂は気に入っておったんじゃが……」

それを聞いたアレイシアは、怒りによる物なのかは分からないが、目を細め、威圧的な雰囲気醸し出す。

「そう……そのソルフってどこに居るの？」

「ソルフはじゃな、今は行方が分からなくなっておるんじゃ。大分前からこの辺り一体の盗賊を纏めて金を取ってるという噂もあるが、真偽の程は分からんな」

「……なら、ギルドに入って盗賊を倒す依頼を片っ端から受けて、ボスに吐かせればいいじゃない。人助けにもなるわ」

「そんな事を簡単によく言うのう……」

アレイシアが呆れられるのはもう何時もの事だ。いい加減慣れてしまったアレイシアは、そのまま話を続ける。

「そろそろ私は行くわね。三人が待つてるわ。昨日一緒にいけなかった分、買物に振り回される羽目になりそうね……」

「ふおっふおっ……まあ、御愁傷様じゃ」

「じゃ、またいつか。王都に来たら寄っていくわ」

笑う国王に背を向けたアレイシアは、部屋の隅の窓まで歩いて行き、窓を勢い良く開け放つ。そして???

「うむ。……!! な、何をしておるんじゃ!？」

??? 宙に身を投げ出した。

「何ってそれは……窓から飛び降りた方が速いに決まってるじゃない!?!」

「な、何じゃとおお！？」

窓から身を乗り出して下を覗き込む国王、背中を下にして地面へと落ちて行くアレイシア。二人の視線が交わる。

「よっ……と」

カカツ！！

「っ！？」

地面に無事に着地したアレイシアは、国王に手を振りながら中心街へと歩いて行く。城の窓から顔を出していた国王は、驚愕としか言えない様な表情をしていた。

「……全く、心臓に悪い……」

国王のその眩きは、誰に聞かれる事もなく消えて行った。

中心街の中でも有名なレストラン、そこは路上に幾つものテーブルと椅子が用意されており、王都の活気ある様子を眺めながらの食事が出来る場所であった。テーブルを囲う客の中でも一際目を引くのは、他でも無く、沢山のデザートと同時に注文した少女三人組だろう。机の上に多く並べられたフルーツやパンなどによるスイーツは、そのどれもが絶品だ。

「これ美味しいです！ もう一つ頼みましょうか？」

「じゃあこれ、モルジュースも欲しい！」

「あ、私も欲しいです。二つ頼みましょう」

そんな三人に近づいてくる人影が……

「貴女達……何やってるのかしら？」

「あ、アリア？ 一緒に食べようよ！」

「ほら、これ美味しいですよ」

そう言っ、アレイシアの口の中にケーキを突っ込むクレア。もう少し小さく切ればいい物を、大きめの欠片を口の中に入れられたため、アレイシアは喋る事もままならない。

「むふううー！」

「ほら、このフルーツもいいですよ！」

「あ、アレイシアさん？ 大丈夫ですか？」

「ぐむううー！！（だめーっ！！）」

その後、何とかケーキやフルーツその他を飲み込み、水を大量に飲んで復活したアレイシアは、三人と共に残りのスイーツを平らげる事となった。

レストランを出た後は、書店や魔法魔術用品店を見て時間を過ごし、たまにアクセサリーショップで面白い物をしたりと、アレイシアもかなり充実した休日を楽しむ事が出来た。現在は王都の外、東の草原に来ている。

「じゃ、みんな準備はいい？ 魔法陣の紙は無くしてないわよね？」

「はい、大丈夫です」

「何時でも大丈夫よ！」

「なら、魔力供給始めるわね」

アレイシアがそう言うと同時に四人は空へと舞い上がり、学園の方へと高速で飛び去って行った。

02・23 飛び降り着地（後書き）

感想評価、誤字脱字の報告やアドバイスなど、何時でもお待ちしております。Web拍手の方からでもコメントを送って下されば、大変作者の励みになります。

（質問謎コーナー）

アリア「どうもこんにちは」リポーターのアレイシア・ラトロミアです！今日は七篠さんにお話を伺って見ましょう。七篠さん？」

七篠「どうも、七篠です！」

アリア「今回は幾つか質問をして行きましょう！では早速、小説を書く上で気をつけている事がありますか？」

七篠「最近は特に、段落始めや感嘆符後のスペースや、ダッシュ及び三点リーダに気を遣いますね」

アリア「そうですね。では次、何時もはどうやって執筆しているんでしょう？」

七篠「基本的にiPodTouch使っています。文字数表示付きの便利なAppあっていいですよ。小説家になろうの機能がスマートフォン対応するのが楽しみです」

アリア「文字数は、2500 3500をキープしているんですね」

よね？」

七篠「そうですね……もっと書ける様になりたいです」

アリア「では、今日はここまで！感想評価など、お待ちしております
まゝす」

七篠「評価やお気に入りに、入れて下さった方々に感謝!!」

フィア「何かアリアさんの口調、この場では妙に明るいですよ？」

アリア「あ、いや、気にしないでっ！」

02-24 少女二人の吸血行為（前書き）

今回は短いですが、番外編的に吸血オンリーの回にしてみました。
苦手な方は読み飛ばしても大丈夫です。

念のため、R-12と言っておきます。

……何故か、吸血行為に期待している方も多かったので、ならば
期待に答えねばと思ひましてね（笑）

あと、ユニークアクセス20,000超えました！ 読んで下さ
っている読者の皆様、ありがとうございます。

02 - 24 少女二人の吸血行為

王都から帰って来た四人は、明日から再開する授業に備え、風呂に入ってすぐに就寝した。

?? 就寝した、筈なのだが……

「アリア、ちょっと血を吸わせてよー」

「えー……」

「まだこれで二回目ですよ」

何故か、シェリアナがアレイシアの部屋に残る事となり、ベッドの上にはアレイシアの血を吸おうと交渉するシェリアナの姿があった。窓から差し込む月明かり以外、照明となる物は無い。

「吸わせてよー……」

「………はあ、いいわ。私にも吸わせなさい」

「ありがとっ！　じゃあ早速……」

そう言つて、アレイシアの首に口を近づけるシェリアナ。わずかに開いた唇から覗く牙が、アレイシアの首にぴたりと添えられた。それがくすぐったいのか、アレイシアは背筋を震わせる。

「ん……吸うなら早くしなさいよっ！」

「分かった。頂きまーす！」

プツッ……

皮膚を貫いた牙はそのまま血管を突き破り、濃厚な魔力を含んだアレイシアの血液が多量に溢れ出した。前回と同様に、出来るだけこの美味しい血を逃さない様に、無駄にしない様にと、シェリアナはアレイシアの首に口を押し付ける。口内に広がる甘美な血の香りに、シェリアナはうっとりとした表情を浮かべる。

……ポタポタッ

「んあ……！」

シートに血が垂れる音に反応し、シェリアナはつい口を離してしまふ。口から垂れた血が、更にシートを真っ赤に染め上げる。

「ハア……ハア、次は私ね。私も……吸うからねっ！」

「ひあっ！」

シェリアナを抱き締め、自身が上になる様にアレイシアは転がった。首を伝ったアレイシアの血が、シェリアナの顔の上にポタリと落ちる。

「……私も、頂きまーす！」

……プツッ

「つつ……！」

一瞬痛そうに顔を歪めるシェリアナ。だが、痛いのは最初だけ、その後はすぐに力が抜けてしまうだろう。吸血とは常に、吸われる側に抵抗されてはならない行為なのだ。???吸血鬼同士の場合を除いて。

「あ……私も……っ……………おかわりっ！」

「っ!？」

シェリアナの血を貪るかの様に吸うアレイシア。彼女の首に、再びシェリアナは口を付けた。

「んんっ……………んむうう！」

「むっ……………んうっ！」

二人は苦しそうな声を漏らす。それもその筈、互いの吸血でただでさえ力が入らないのに、首元に顔を埋めているせいで呼吸がしにくいのだ。口元からは飲みきれなかった血が溢れ出し、二人の白い肌を紅に染める。

それから暫く血を吸い続けた二人。既に息も絶え絶え、貧血状態になっていた。アレイシアは何とか体を腕で支え、上半身を持ち上げる。すると突然????

ガクッ……………

「…………ハア…………あ」

「あ…………アリア？」

…………ドサッ

アレイシアはシェリアナの上に、覆いかぶさる様に倒れてしまった。恐らく貧血による気絶だろうとシェリアナは考え、アレイシアをそつと横に寝かせておいた。

「アリア、おやすみ……………」

「すー…………すー……………」

血臭漂う部屋の中、月明かりに照らされた少女達の吸血行為は、こつして幕を閉じた。

02-24 少女二人の吸血行為（後書き）

感想評価、誤字脱字の報告やアドバイスなど、いつでもお待ちしております。

アリア「感想を書きたくなる、書きたくなる……」

セリア「ちよっ！？ 催眠術はダメだって！」

気付けばアレイシアは、奇妙な色の中、あの空間に立っていた。目の前には黒美さんが屈んで、アレイシアの顔を見つめている。

「あれ？ 私はあの後……？」

記憶を探っても、王都から帰ってシエリアナと血を吸い合った所までしか覚えていない。この空間に居るという事は、いつの間にか眠ってしまったという事だろう。

そこで、黒美さんが口を開く。

「……それにしても貴女、よく血を吸う様になったわね」

「吸血鬼ですから」

「そうとは言ってもね。前世元人間が血を吸う事を快く思う筈無いじゃない？」

アレイシアは確かに……としばし思考に耽る。吸血衝動が起こるからと言う事も出来るかもしれないが、それを忌避するでも無く、血を吸う事をアレイシアは受け入れた。今更ながら、そんな自分をアレイシアは不思議に思ってしまう。

「ま、順応力があっただけでしょ」

そう言っつて、黒美さんは懷から紙を取り出す。それはアレイシアが記入し終えた死神就職申し込み用紙だった。

「これ、書き終わっているみたいだから持って行くわね」

「分かったわ」

どうやって持って行くのかと聞きたかったが、絶対に話してくれないだろうと言葉を飲み込む。

「……あ、言い忘れる所だった。貴女の刀、妖刀なのよ」

「え、妖刀？」

アレイシアが問うと同時に視界が暗くなり始める。いつも通りの目覚める前兆だ。

「あ、妖刀ってどういう……」

そのままアレイシアは、言葉を最後まで言い切れずに落ちる意識に身を任せた。妖刀とは何かと考えながら???

現在は夕方の十二刻、地球で言う午後六時頃に当たり、遠方には橙色に輝く夕焼けが見える。今日はベルク先生に気の扱い方を教えてもらう約束となっていた。

待ち合わせ場所の学園中央噴水広場に到着したアレイシアは、噴

水を囲う煉瓦に座り、腰に携えた刀を抜いて持ち上げる。銀の刃は夕焼けの光を反射し、より一層妖しさを醸し出していた。

アレイシアは、峰の部分を指で触れる。金属の冷たさが伝わって来ると同時に、別の『何か』を感じ取る事が出来た。

「……？」

もう一度、同じ場所に触れる。すると？？

「……あっ！」

確かに感じ取れたそれは、アレイシアの知識から判断して妖力だと確信出来た。つまりこれが、黒美さんの言っていた妖刀という事なのだろう。

と、そこで丁度、ベルク先生が道の向こうから歩いて来るのが見えた。ベルク先生は、アレイシアを見つけるとすぐに手を振りながら近づいて来る。

「おーい！ 待たせちまったかな？」

「大丈夫よ。まだ二、三分位しか待っていないわ」

その言葉に安心したのか、アレイシアのすぐ隣に座るベルク先生。

「そ、それにしてもお前……武器を撫でる少女って凄くアレじゃないか？」

アレイシアは一瞬、確かに……と考えるが、それが自分らしさだとも断言出来る。

「……私はそれでいいのよ」

「そうかい。カタナを気に入ってるなら何よりだ」

「これから校舎の屋上に行くんでしょう？」

「そうだ。何時でも自由に使えるからな」

ベルク先生は立ち上がり、校舎の方へと歩き出す。アレイシアも刀を鞘に収め、速足でその後を着いて行った。

「まずは、気を感じ取る事が重要だ。これは魔力でも同じ事だな」

「やっぱり」

「こらあ！ やっぱりとは何だ、やっぱりとは！」

校舎の屋上、そこでアレイシアとベルク先生は向かい合っている。魔力でも神力でも同じだったその過程は、アレイシアにとって『やっぱり』としか形容出来ないものであった。

「まずは目を閉じて、一切の余計な思考を絶つんだ。心を無にして感覚だけに集中する。やってみる。そこに俺が微量の気を流す」

「分かったわ」

アレイシアは目を閉じ、言われた通りに感覚を研ぎ澄ます。そうすれば、何時もは気にしない風の音や、自身の心臓の鼓動まで聞こえてくる。果てには、空気中に含まれる微量の魔力や精霊の声でさえ感じ取る事が出来た。

??どれ程の時間が経ったのだろうか。アレイシアは突然、胸の心臓部に圧迫感を覚える。その感覚は更に強くなり、身体中に響く様な弱い痛みに変わった。それは痛いけど心地の良い、存在するだけで力が漲って来るといふ不思議な感覚……

???これが、気……!!

気存在を遂に掴む事が出来たアレイシアは、ゆっくりと目を開ける。持ち上げた両手をじっと見つめ、そこに確かに気があるという事を確認した。

「……………!!」

「そうだ！ 本来は短くても四刻は掛かるんだがな、二刻半で感覚を掴むとは恐れ入ったぜ!!」

そう言っ、アレイシアの背中をバシバシと叩くベルク先生。その表情はどこか嬉しそうで、誇らしげにも見えた。

「…………え!? 二刻半ってことはもう十五刻?」

「そうなるな。今日はもう寮に帰って休め。本格的な使い方は明日からでどうだ？」

「そうね。……じゃ、また明日！」

「おう、また明日！！」

ベルク先生に見送られ、アレイシアは寮室へと戻って行った。屋上から飛び降りようとしたアレイシアをベルク先生が止めようとし、危つく先生共々落ちかけたというのは余談である。

真夜中の十六刻、この時間で日付が変わる。そんな時間になっても、アレイシアはまだ机に向かっていた。

「んー……」

「アリアさん、もう寝ましようよ……」

「待つて、あともう少し」

眠そうなフィアンの言葉に耳を傾けず、机に置かれた刀にじっと目を向ける。右手は柄の部分に添えられ、淡く発光しているのが分かる。アレイシアは刀に妖力を込めていたのだ。何故かといえば、先程感じた微量の妖力を増幅すれば、何かが起こるかもしれないと思ったからである。

「先に寝ててもいいわよ……あっ!？」

「アリア!？」

そこで突然発光が強まり、暗い部屋に光が満ちて行く。唐突の事に全く対応出来ず、二人は驚きの声を上げる。

「キヤアアアッ!！」

「っ!？」

気付けば、アレイシアの右手にあった刀は赤く光り、周囲に妖力を撒き散らしていた。赤の濃い場所が模様のように、刀身に浮かび上がっている。

「さすが……妖刀の名は伊達じゃ無いわね。……あ、フィア？」

「うあ、アリアさん……っ……」

妖力に当てられたのだろうか、倒れるフィアンをアレイシアは抱き止め、そのままベッドへと運んで行った。勿論刀は、すぐに妖力の供給を切って鞘にしまっておく。

フィアンをベッドに寝かせた時、アレイシアはこう言った。

「フィア、おやすみ……」

「すー……すー……」

それは前日、彼女自身が言われた言葉であつたという事を覚えて
いるのだろうか。アレイシアは知らず知らずの内に、自然とこの言
葉を口にしていた。

02-25 妖刀（後書き）

感想評価や誤字脱字の報告、アドバイスなどをお待ちしております！ Web拍手の方からでもコメントをどうぞ。

アリア「読者様からの感想評価、お待ちしております」

02・26 学園全体闘技大会（前書き）

遅くなってすみません、忙しかったもので……

今回はちょっと、もう少し細かい描写はできないものかと考えてみました。上手くいったか心配ですが、アドバイスをくれたら作者が喜びます。

02 - 26 学園全体闘技大会

二月の十三日、この日は今月三回目の休日に当たる。アレイシアは机に向かって魔法魔術の研究をしていた。内容は主に、魔法魔術の新しい系統を開発するための方法などである。

机の隅に置かれた本を取ろうとした時、玄関の扉から硬い音が響く。

?? コンコン、コココン！

「はい！」

普通に真面目にノックするよりは遥かにリズムカルな音に、先に反応したのはフィアンだった。アレイシアは万年筆を机に置き、何故か身につけていた眼鏡を外す。

ガチャッ……

「誰ですか？」

扉を開けたフィアンは目の前に立つ人物に目を向ける。そこに居たのは、この学園のイルクス側学園長だった。

???? そう、入学当日にお世話になってしまった、あの人である。

「君は……エンレイスだな。ラトロミアはいるかね？」

「あ、はい。アリアさんは奥にいます」

「私に何か用があるのかしら？」

フィアンが案内しようとした丁度その時、アレイシアは既に扉の前まで来ていた。学園長はアレイシアの方を見ると、咳払いをして話し始める。

「少し話がある。学園長室まで来てもらえるか？」

「……分かった。行くわ」

「じゃあ、着いて来なさい」

アレイシアはいつも通り、魔導書を持って早足に校長の後を着いて行く。部屋に残されたフィアンは、また怒られてしまうのかと心配になっていた。

学園長室に入り、アレイシアは椅子に座る。目の前には学園長と、机に置かれた三枚の紙。

アレイシアは内心、飛んでいる所でも見られてしまったのかと緊張していた。

「……で、話というのは？」

「えー、話というのはだな……まあ、この三枚の紙を見た方が早いだろう」

そう言って、学園長はアレイシアに三枚の紙を手渡す。恐らく羽ペンで書かれたと思われる文字がびっしりと紙全体に敷き詰められていた。多少面倒に思いながらも、アレイシアは上から目を通して

行く。

「あー……」

その内容は何故か、アレイシアの良い点を片っ端から列挙して行く様な物であった。気配察知が優れている、実践戦闘のセンスがある、凄く可愛いなどである。そして、文の最後はこう締めくくられていた。

「アレイシア・ラトロミアの学園全体闘技大会出場を、一年S組担任フィズが、実力を見込んで推薦する。」

「アレイシア・ラトロミアが学園全体闘技大会に出場する事を、一年剣術科の担任、ベルクが本気で推薦する。」

「アレイシア・ラトロミアの学園全体闘技大会出場を、一年実践戦闘科の担任ダルが推薦する。」

不可解な内容に、アレイシアは学園長に問う。

「……これは何？」

「見ての通り、三月一日から一週間行われる、学園闘技大会出場の推薦状だな」

学園全体闘技大会とは、第三学年以上の生徒が競い合い、優勝を目指すという単純明快な催し物である。毎年三月一日から一週間行われ、優勝した者には賞金などが贈呈されるという。

「……そういえば、推薦状を貰った場合は第三学年未満でも出場できるって書いてあったっけ？」

寮入り口の掲示板に、その様な事が書いてあったかもしれないと
考えを巡らすアレイシア。

「それにしても……第一学年が推薦状を、しかも三つ貰うとは前代
未聞だぞ……」

「絶対出なければいけないのかしら？」

「三つも推薦状を貰って、断る訳にはいかないだろう？」

頭を抱え、こちらも悩んでいるんだと主張するかの様な姿勢を取
る学園長。その様子に、アレイシアの口から自然と笑みがこぼれる。

「仕方ない……か。ふふつ、それはそれで、出してみるのも面白そう
ね」

「……ま、出てくれるのならこちらでも楽だ。手配しておこう」

失礼しましたと一言残して学園長室を出たアレイシアは、先程ま
でとは打って変わり、優勝すると意気込んでいた。三人の先生の期
待には、応えなければならなかったのだろう。一先ずは、寮に
戻って三人に知らせなければと、学園内の道を走って行くのであっ
た。

寮に戻ったアレイシアは早速、隣のシェリアナとクレアを部屋に
招き、学園全体闘技大会に出場する旨を話す。この時シェリアナが、
全力でアリアのサポーターをやると言い出したため、アレイシアは

取り敢えず承諾しておいた。

「アリア、大会まであと二週間でやれる事はない？」

「んー……刀の扱いを練習した方がいいかもしれないわね。力だけでねじ伏せるなんて詰まらない、技も極めたい所だわ」

「流石……アリアらしい！　ま、それなら鍛錬あるのみでしょ！」

サポーターらしく、予定を決める様に話すシェリアだが、すぐいつもの調子に戻ってしまう。アレイシアはその様子を見て、すぐに刀を手を取った。勿論、外に出て鍛錬をするためである。

何故か付いて来た三人に見守られながら、刀を振るうアレイシア。普通、見るだけというのは詰まらないものだろう。だがアレイシアの刀の扱いは、独学では有り得ない程に惹き付けられる、魅力の様なモノを感じられた。

刀を横に一度振るい、そのまま上方へと持っていく。知識でだけ知っていた、最も効率の良いといわれる円運動の刀の振り方である。そこから方向を変え、垂直に振り下ろす一閃。それだけで空気が斬れるのが三人にも分かった。

「すごい……！　すごいですっ……！」

「凄く滑らかな動きですね。どうやったらあれ程……！」

感激の声を上げるフィアンとクレア。その横のシェリアナに至っ

ては、目を輝かせ魅入っている様だ。

アレイシアが刀を手にしてから一月も経っていないのに、どうしてこれ程まで扱える様になったのか。

それはやはり、吸血鬼の高い身体能力で、刀を思い通りに扱う事が出来たからだろう。他にも理由があるとすれば、亜空間内で剣を使った事も関係しているのかもしれない。

左下から上へと振り上げる。全身を無駄なく使ったその動きの後、そのまま刀を前方に構え直した。

「……ふう、こんな感じがしら」

「アリアすごい！ もう一回見たい！！」

「セリア……ちょっと休んだらね。連続はきついわ……」

暫くの休憩の後、更に半刻に渡って刀を振り続けたアレイシアは、三人と一緒に寮へと帰って行く。

この事がきっかけで、三人、特にシエリアナの好感度が今まで以上に上がったというのは余談である。

02-26 学園全体闘技大会（後書き）

誤字脱字の報告や感想評価、アドバイスを本気でお待ちしております！

セリア「感想評価を下さいな〜！」

フィア「待ってます！」

02・27 ファンクラブ内争奪戦

闘技大会まであと三日、廊下を歩いていたアレイシアは、向かい側から歩いて来た男子に突然話し掛けられる。

「……あの、君がアレイシアさん？」

「そうよ。何の用かしら？ 闘いを挑むとかだったら即断るわ」

「いや、そうじゃないんだけど……」

そう言つと、その男は突然黙り込んでしまう。立ち止まったアレイシアは、何を言つつもりなのかと考えながら次の言葉を待つ。

数瞬の間を置き、その男が口を開いた。

「あ、あの……僕は、アレイシアさんのことが……す、すつ……」

「……あー。はいはい、分かったから」

震える言葉から内容を察したアレイシアは、すぐにその言葉を制する。聞いたら大変な事になると思ったからだ。そこで何を勘違いしたのか、その男はとても嬉しそうな顔をする。

「そ、そうですか……！ ありがとうござ……」

「いやだから違つて」

どこか盛大に勘違いをしているこの男。その様子にアレイシアは一度呆れのため息を漏らすと、廊下の反対側に目を向けた。人数は四人くらいだろうか、廊下を駆ける音が近づいて来るのが分かる。

「あつ！ こいつ……抜け駆けしたな！！」

「それはフアンクラブのルールに反するだろ！！」

「……！ な、何？」

廊下の向こうから走って来た五人組は、アレイシアと男の姿を見るなり大声を上げる。フアンクラブのルールというのは何か分からなかったが、その中にアレイシアへのアプローチ禁止に近い物があるという事は容易に想像出来た。

「お前！ アレイシアちゃんに何をした！？」

「あ、いや、僕は何も……」

「……嘘じゃないのか？」

「うわあ、これはひどい……」

アレイシアに関する事なのだが、当の本人は完全にカヤの外。その呟きも、誰に聞かれる事も無く宙に消えた。

厄介事には巻き込まれたくない、アレイシアはすぐにその場を離れようとする。一瞬、追いかけられるかもしれないと心配が頭をよぎったが、すぐにその心配も晴れる事となった。

「告白か？ まさかの告白か！？」

「い、いや、だから違っつて……！」

「俺もしたいのを我慢しているんだぞ！」

話に熱中する余り、どうやらアレイシアが離れようとしている事にも全く気付いていない様だ。

その話の内容に、思いつ切り突っ込みたい気持ちを抑え、アレイシアはその場から離れて行った。

入学の日に魔力検査を行った中ホール。アレイシアはそこに、闘技大会に出場する生徒全員と並んで立っていた。何故かといえば、これから闘技大会のルールを説明して行くとの事だからだ。この場に立っている全員が、前方の先生に視線を向けている。

「よし、いいか？ これから闘技大会のルールを説明して行く訳なんだが、その前に伝えておく事がある。今回の大会に、第三学年未満で推薦状を貰って出場する奴が何人が居る」

先生がそう言うのと、その場の生徒は皆ざわざわと話し始める。話の内容は勿論、誰が推薦状を貰った生徒なのかである。

それと同時に、他の生徒よりも頭一つ分、下手したら二つ分よりも身長の高いアレイシアに視線が注がれた。このような場合も想定して、わざわざ右端の列の一番後ろという場所を選んだのだが、あま

り意味が無かった様だ。

アレイシアは、自身に注目する生徒の中に、どこかで見た様な顔を見つけた。若干濃い茶色の髪に頭上の犬耳、どちらかといえば痩せた体つきの男。

それが誰だったか理解すると、アレイシアは深いため息をついた。今日二回目のため息、明日から幸せが逃げないか心配だ。

「……なんであのウエルムが」

「お……？ あいつ、気付いたか？」

ウエルムのその言葉は、ちゃんとアレイシアの耳に届いていた。吸血鬼の高い身体能力、その中には当然、五感の鋭さも含まれているからである。……実際は、魔力などを感じ取る『第六感』も優れているのだが。

アレイシアはそこで、念話魔法を使ってウエルムに言葉を伝えてみる事にした。向こうからも言葉を伝えられる仕様だ。

？？何で貴方がここに？

？？うおっ！？ 念話か……いきなりは驚くだろ。……そりゃま

あ、俺は四年の主席だし？

？？それは自分で言う事じゃないでしょ……

？？俺はいいんだよそれで。ま、大会で……

その言葉で、アレイシアはすぐに念話魔法を切った。説明の先

生が話し始めたからである。

「ま、これ以上はあえて言わないでおこうかな。では皆、この紙に注目！」

その言葉を受け、アレイシアを含む全員が前方の紙の方向に注目した。

紙の下部に描かれた四つの円。その上には、三十二もの線に分かれたトーナメント表があった。

「この場にいる全員をランダムに四のグループに分け、予選としてまずはそれで戦う。各グループから八人ずつ残った奴がトーナメントに進出して訳だな。単純だろ？ 今年の出場者が二百四人だから予選は一グループ五十一人になる。ここまですべて質問は？」

先生がそう言うのと、何人かの生徒が手を挙げる。そして先生は、順番に生徒達を指差して行った。

「魔法の使用は大丈夫ですよね？」

「ああ、他の武器の場合でも同じだが、殺しさえしなければ大丈夫だ」

「日程はどの様になるんでしょう？」

「三月一日と二日が予選、それから先が六日まで本戦だな」

.....

生徒達の質問も大体終わり、質問で出なかった部分だけ先生が説明をして行く。アレイシアが、これなら始めから説明をすれば良かったのではと思ったのは内緒である。

昼過ぎの九刻、全ての説明が終わった後、アレイシアは人目を避ける様に校舎内のレストランへと向かって行った。わざわざ人目を避けるのは、先程のファンクラブに件で敏感になってしまったからかもしれない。

02・27 ファンクラブ内争奪戦（後書き）

誤字脱字の報告や、感想評価などをお待ちしております！

アリア「感想評価、待ってまーす！」

クレア「Web拍手の方でも、コメントをよろしくお願いしますね」

02 - 28 闘技大会予選

闘技大会予選の当日二日目。アレイシアは寮室で、クレアと共に装備の確認を行っていた。

何故二日目なのかというと、アレイシアは第四チーム、つまり予選二日目の部に入ったからである。前日既に、第一チームと第二チームは終了しており、決勝進出の三十二人中十六人は既に決定しているのであった。

この場に居ないフィアンとシェリアナは、闘技場の観戦席を取ろうと必至になっている様である。アレイシアの様子を見るため、一番前の席を取りたいそうであった。

手に持った魔導書を机の上に置いたアレイシアは、鏡に映った己の姿を上から下まで細かく見て行く。

彼女の服装は王都に行く前、学園街で購入した緋色の服に、対魔法の魔法陣を裏に描いた物であった。腰にはベルトが巻かれ、左側には鞆が固定されている。

「……よし、これで準備は大丈夫」

「頑張つて来て下さいね！」

「勿論よ。折角出場するからには……ね！」

アレイシアはそう言うと、魔導書を再び手に取り、玄関の扉へと歩いて行く。クレアも急いでその後を着いて行った。

寮を出たアレイシアとクレアは、四つの闘技場の中で最も大きい第四闘技場の前まで来ていた。

周りを見れば、人、人、人、ついでに獣人、エルフに小人まで。ありとあらゆる国からの、ありとあらゆる種族がこの学園に集まっていた。その中には学園に通う生徒の親などともいると思われるが、娯楽を求めてやって来た者も多くいる事だろう。

「アリアさん、とりあえずセリアさんとフィアさんを探しましょうか」

「そうね。まだ始まるまで二刻も……」

「アリアちゃんっ!!」

「……え?」

どこかで聞いたことのある、そして懐かしい様な声に、アレイシアは咄嗟にその方向を向いた。そこに居たのは確かに、アレイシアの母であるナディアだった。

そこでアレイシアはつい、ナディアに思いっきり抱きついてしまった。

「……母様……っ!!」

「あら? 学園に行くまではこんな事無かったのに……」

勿論ナディアは知らないが、アレイシアにとっては実に百年ぶりの再会なのである。これでは逆に、泣かない方が不思議だった。実

それからアレイシアは恥ずかしさの余り顔を赤くし、すぐに瞬間移動で二人の背後に移動した。

「御二方、一体何を見たのかしら？」

「あわ、私は何も見ていませんですよ？」

「そう、そうよ！ アリアがママに抱き付いた所なんて見ていな……！！！」

シエリアナがそう言った瞬間、何て愚かな事を言ってしまったんだと後悔する。フィアンもそれと同時に、貧血じゃ済まない程度に血を吸われる事を覚悟した。……彼女の中で、アレイシアは一体どういう人物になっているのかは分からないが。

そんなアレイシアは、二人に対して怒るでも無くナディアの元へと戻って行く。フィアンとシエリアナは当然、肩透かしを何度も喰らわせられた気分になった。

「え……？ 何で？」

「アリア、何もしないの？」

「したって何の意味ないでしょ。……それとも、何かされたかったのかしら？」

「い、いや、そういう訳じゃ……」

そして、その様子を見たナディアはというと……

「アリアちゃんは学園に来てから二ヶ月で大分変わったのね」

「……ま、褒め言葉だと思っておくわ」

まさか、この二ヶ月で百歳以上も歳を取っただなんて、口が裂けても言える筈が無かった。この件については、時期を見て言わなければならぬ時がいずれ来るだろう。

そこでアレイシアは、腰の左側に携えた刀をナディアに見せた。

「この武器、剣術科の先生から貰った物なのよ」

「へえ……変わった武器ね」

鞘から刀を抜いて、刀身をじっと見つめるナディア。いくら見た事がない形の武器とはいえども、その良し悪し位は感覚的に理解できるのだろう。刀をアレイシアに返すと、

「これ、凄くいいわ。絶対にアリアちゃんの助けになるでしょうね」

と、そう言った。

その後、しばらくの間ナディアと話をしたアレイシアは、選手招集の放送と共に待合室へと向かって行った。その時は勿論、三人とナディア、オーラスの応援を受けたのは言わずもがなである。

闘技場の中央で開会式らしき物を行った後、アレイシアは待合室へと戻っていた。

周りにいるのは、アレイシアよりも明らかに身長の高い男女丁度五十名。大剣を磨いている者や、魔力を引き出しやすくするために瞑想をする者など、それぞれが思い思いの方法で待ち時間を過ごしていた。

『第三チーム、決勝進出はこの八人に決まりました！』

????ワアアアアア!!

????パチパチパチパチ!!

風魔法の放送と歓声、割れる様な拍手が闘技場に響き渡る。第三チームが終了、つまりアレイシアの第四チームは次になるだろう。

『では、次は第四チームの試合になります。第四チーム選手の皆さん、入場門から入って来て下さい!!』

その声が聞こえた次の瞬間、待合室の全員が我先にと闘技場へと溢れ出した。

第四チームが出揃い、今は開始の合図を待つだけ。アレイシアも刀を構え、臨戦体制を取る。

『第四チーム、出揃いました! では……………』

そこで息を吸い込む司会の男。

?????

『始めええッ!!』

その声を受け、その場の全員が前方へと駆け出した。

????アリア、頑張つて!!

アレイシアは会場の歓声の中、だれかがそう言ったのが聞こえた気がした。

02・28 闘技大会予選（後書き）

誤字脱字の報告や感想評価など、何時でも大歓迎しております！
送って下さると、大変作者の励みになります。

フィア「総合評価が900超えました！ 読者の皆様、ありがとうございます！」

アリア「いつでも感想評価、待ってます♪」

02-29 闘技大会予選 2（前書き）

総合評価が遂に千まで届きました！

読者の皆様、本当にありがとうございます！！
そして、これから
もよろしくお願いします！！

右側から勢い良く迫って来る、巨大な炎を纏った大剣。アレイシアはそれを咄嗟にしゃがんでかわし、相手の地についている方の足を刀で薙ぎ払う。片方の足が浮かんた状態で、地についたもう一方の足が離れたらどうなるか。当然、バランスを崩して転ぶ事になるだろう。

「うをつ！？」

????ドザザーッ！

転んだ男の首筋に左手を当て、極微量の魔力を瞬間的に放つ。ただそれだけで、体内の魔力をかき乱し、相手を気絶させる事が出来る。

気絶させた男をそのままにし、横から向かって来た二人の男に目を向ける。その内一人は魔導書を開き、描かれた魔方陣を発動していた。

「……っ、火球！」

放たれたいくつもの火球はアレイシアのすぐ横を掠め、後ろに立っていた選手数人に当たる。元々の狙いは自分だけでは無かったのかと安堵したその時、火球を放って来た男の隣に居たもう一人の男にアレイシアは蹴り飛ばされた。

「うあつ！……あ……か弱い乙女を、蹴り飛ばすなんて……！！！」

「いやいや……お前、絶対か弱くないだろ……」

そう言った男は腰に下げた剣を抜き、アレイシアに向かって振り下ろす。

直線的で何の捻りも無い剣の一閃はしかし、アレイシアに当たる事無く宙を斬る。

「ならこれで……!!」

「隙ありっ!」

次の攻撃を放とうと、剣を斜め後ろに振り上げたが運の尽き。アレイシアは全くの無防備になった体の前面に近付き、至近距離の風魔法を打ち込んだ。

ブォワァッ!!

「うわぁあっ!?!」

風魔法に当たった男はそのまま吹き飛ばされ、大きな音と共に闘技場の壁にぶつかった。この闘技場には屋根が無いため、斜め上に魔法を放っていたら最悪ホームランだったかもしれないとアレイシアは考え身震いする。

『さあ、今ので残りが十人になりました! あと二人が脱落すれば、その時点で残った選手の決勝トーナメント進出が決まります!!』

その放送を聞いた選手は皆、大体同じ事を考えた。???弱そうな奴を順番に二人倒せばいいと。

だが、アレイシア一人は違った。

??私を狙って来た奴を、順番に二人返り討ちにすればいい！

アレイシアの方へと周囲の選手六人が向かって来る。それは全くアレイシアが想定していた事と同じだった。

倒すべき相手は二人。そこでアレイシアは、六人の中から如何にも弱い者いじめをする様な表情の男を二人選び、取り合えず攻撃を試みる事にした。

「水球！」

「……んお！ もごあつ！？」

「がつ！？ ごぼ、ごぼ……」

水魔法を頭部周辺に発動したら、男二人は息が出来ずにその場に倒れこんでしまった。その様子にアレイシアは、自身が行った事ながらもこれはひどい、と思うのであつた???

そして次の瞬間、風魔法の放送がかかり、闘技場の観戦席全体から大きな歓声上がる。

『決まりましたあつ！！ 第四チームの決勝進出はこの八人です！ 黒髪の少女のこれからにも期待できそうだ！』

??ワアアアアア！！

「……別に、期待しなくてもいいわよ」

そう呟いて、アレイシアはすぐに闘技場から待合室へと戻って行った。何故すぐにその場を離れたのかといえば、今の放送でファンクラブの人達が騒ぎ出したら大変だと思ったからである。

その後、待合室から出たアレイシアは、周囲に群がる人を避け、すぐにフィアン達と合流する事が出来た。

アレイシアの姿を見るなりすぐに抱き付くシェリアナ。そんな二人の様子を、ナディアは微笑ましく見守っていた。

その後、闘技大会予選終了の放送がかかり、アレイシアと三人は寮室へと戻って行った。そんな三人の後ろを、ナディアとオーラスが着いて行く。

オーラスの話によれば、学園からアレイシアが闘技大会に出場すると書かれた手紙が送られて来たという。それからすぐに支度して学園に来たため、泊まる宿については何も考えていないとの事だった。だから、寮の部屋に泊めてくれないか、と三人は相談されたのである。この事に関してアレイシアは勿論、何故か三人も快く承諾した。

何故かと言えば、シェリアナ曰く『アリアの両親だから』だそう。本人からしてみれば、理由になつていないと言いたくなる所だが、一先ずは寮に帰る事にしたのである。

「ここが私の部屋で、フィアと一緒に住んでるのよ。ここ、隣にあるのがセリアとクレアの部屋」

「へえ……この学園の寮ってすごく綺麗ね。廊下はどこ見ても紅いカーペットだし。……ふふっ、安心したわ」

「それで……学園証。これが鍵にもなつて扉を開けられるわ」

アレイシアは懷から学園証を取り出し、扉の右の穴に差し込んだ。カチャツと軽い音と共に扉が開き、六人は部屋の中へと入って行った。

アレイシアは寮室に買い貯めてあつたアテを淹れ、ナディアとオーラスの前に置く。フィアンとシェリアナ、クレアも、すぐ隣で雑談をしている。

「ね、アリアちゃん。三人も友達が出来ちゃつて、楽しそうで何よりだわ」

「……所でアリア、今までで吸血衝動つて起きなかった？」

学園でのアレイシアの様子にナディアは安心したのか、ソファにより深く腰掛けアテを少し口に含んだ。それに対しオーラスは、アレイシアをかなり心配しているのか、アテを口に運ぶ事もせずにとアレイシアの方を見ている。

心配そうな表情のオーラスに答えたのは、クレアのエルフ耳を弄くっていたシェリアナだった。

「あ、吸血衝動については私が………血を吸いたくなつた時に、互いの血を吸い合う事で万事解決としてるわ」

「そうか、なら安心だ……よかった」

「二人共、互いに血を吸つた事があるの？」

そう言うのはナディア。アレイシアとシェリアナは、その事問いに対して即座にこう答えた。

「うん。アリアの血はすごく美味しい！」

「互いの首に顔をうずめる感じでね」

「……あ、どうしょ。アリアちゃんの血、私も吸ってみたくなっちゃったわ」

「……今はダメっ！」

この日は結局、アレイシアとナディアと一緒に寝る事となった。オーラスは何故か、ソファで寝ると自分から言い出したため、そのままにしておいた。

……オーラスがソファで寝ると言い出したのは、誰と寝ようが女子と添い寝をする事になってしまう、というのが理由だとは誰も思わなかっただろう。

その夜、アレイシアの部屋にて???

……プツッ

「ん……本当に美味しいわ！」

「あ……母様、やめた方が……」

親子二人の吸血行為が繰り広げられたというのは余談である。

02・29 闘技大会予選 2（後書き）

感想評価や誤字脱字の報告、アドバイスなどはいつでも大歓迎しております！

く久しぶりの謎コーナーく

七篠「前書きにもある通り、この小説の総合評価が遂に一千に届きました！」

アリア「更にはお気に入り登録数も三百突破！！これからもよろしくっ」

クレア「そういえば、総合評価が一千超えてタイトルを……」

七篠「あー、それは一先ず先送りと言うことになりそうです（笑）」

アリア「……では、感想評価をいつでもお待ちしておりますっ」

クレア「これからもこの小説をよろしく願いますね！」

02 - 30 闘技大会本戦 開催

闘技大会の予選が終わり、次の日の朝。この日からは決勝のトーナメントが始まる。

「アリアさん、おはようございます!」

「フィアおはよ……あ、ちょっと貧血気味だわ……」

ベッドから起き出して来たアレイシアは、何故か早速貧血を訴える。それもその筈、昨日の夜寝る前にナディアに血を吸われてしまったからだ。勿論アレイシアも、仕返しと言わんばかりにナディアの血を吸ったのだが。

ソファに倒れ込むアレイシアの様子を見て、この事を知らないフィアンは、アリアは昨日の予選で血を流す怪我なんてしたっけと考える。

横から見ているフィアンを全く気にせずに、アレイシアはソファで寝ていたオーラスに抱き付いた。

オーラスとアレイシアは親子の関係だが、吸血鬼という種族上、老化が他の種族に比べて圧倒的に遅いため、寝ている二人は兄妹にしか見えない。人間からすれば、オーラスの身長もまだ子供という範囲だからだ。よくよく見れば、髪の色こそ違うものの、顔立ちがどこか似ているという事に気が付くだろう。

それから暫くして、やっと起きて来たナディアとオーラス、着替えを済ませたフィアンと共に、隣の部屋へとアレイシアは向かう。何故かといえば、シェリアナとクレアも誘って朝食を食べに行くた

めだ。

ちなみにアレイシアはいつも通り、刀と魔導書を持っている。

??コココンッ!

アレイシアは扉を軽く爪で叩く。

数秒の沈黙。

……しかし、何も起こらない。

「まだ寝てるんでしょうか?」

「そうかもね……案外セリアとクレアって朝の寝起き悪いから」

「もう先に行っちゃいましょうか?」

「そうね。一応先に……」

??ガチャッ! バンッ!!

アレイシアがそう言った瞬間、扉が勢い良く、それこそ壊れてしまつのではないかと思う程の速度で開いた。突然の事に、フィアンとナディアは驚いてその場を後ずさつてしまう。この時、アレイシアとオーラスは全く動じなかった。

「ごめんっ! 寝坊しちゃった!」

部屋から現れたのは寝間着姿のシェリアナ。いつもは一つに纏められている金髪が、寝癖で痛々しい程に乱れている。

「扉、壊れるわよ？ ……ほら、うしろ」

「え？」

そう言われたシェリアナは、扉の後ろを確認する。そこにあつたのは、丁度ドアノブが当たる場所に大きな窪みができた白い壁だった。吸血鬼がいかに高い身体能力を持っているかが良く分かるだろう。

「あああ……どうしょ……」

「ま、仕方が無いわね。着替えて朝食に行きましょう」

「……はいっ！」

その後、既に着替え終わっていたクレアが四人の中に入り、髪を整えたシェリアナと一緒にレストランへと向かって行った。

……………。

「あの、学園紙の取材です！ アレイシアさん、今日の本戦での意気込みをどうぞ！」

「私が今日出ると決まった訳じゃないわよ？ 三十二人分、十六試合を二日に分けて行っただから」

「あ………そ、そういえばそうでしたけど、意気込みをお願いします！」

レストランにきたアレイシアは、早速学園紙記者の取材を喰らってしまった。

すぐ後ろにいた筈の五人は、ナディアとオーラスを除いてその場を離れている。友達だからと言って、取材をされたく無いからだろう。

「じゃ、私はそろそろ……朝食がまだだしね」

「あ、ああ……待つて、待つて下さい！ 後ろの二人は誰ですか！？」

「私の母様と父様よ」

「あ、少し話を……ダメかあ……」

取材の男は、遊園地で親を急かす様に二人の手を引くアレイシアを見て、これ以上の取材は無理だと悟った。そして、トーナメントが行なわれる闘技場へと足を運ぶ。取材が無理なら、戦っている所を見ようと思ったからである。

??? 昨日の予選は他の取材があつて行けませんでしたからね。

本戦こそは……

第四闘技場の中央に、予選で勝ち残った三十二人の選手が並んでいる。一番後ろの一番左に立っているのがアレイシアだ。

『予選を勝ち抜いた皆さん、本日三月三日から三月六日まで、闘技大会の本戦が行われます！ 三十二人が二人ずつ戦い、今日は十六人の中から八人が選ばれる予定です』

司会の人がそう言うだけで、観客席から歓声が上がる。

アレイシアが右側に目を向けると、『優勝！ アレイシア様！』と書かれた大きなボードを掲げたファンクラブの男子共が目に映った気がした。

??? そうよ、あれはあくまでも気のせいね。気のせい……気のせいなのよ……

視界の端に映ったあるモノを全否定し、アレイシアは司会の方へと目を向ける。

『問題はどうかやって今日戦う十六人を決めるかですが、それに関しては既にトーナメント表を作っております。こちらに注目！』

闘技場の円形の観客席。その一角、司会者が立っている段の下に、授業でも使われている板が運び込まれて来た。遠くにいる観客への配慮なのか、普段使用している板よりもかなり大きい物の様だ。

『ここに描かれたトーナメント表の左半分が一日目、右半分が二日目を予定している分となっております！』

アレイシアは列の一番後ろに居ながらも、板に描かれたトーナメント表を高い視力で確認する。

??? 一日目の一戦目……って!?

探してみればすぐに、表の一番左端にアレイシアの名前が見つかった。その下には小さく『一戦目』と書かれている。

『では、選手の皆さんは待合室に戻って、準備を始めておいて下さい。第一回戦の一戦目はこれからすぐに始まります！』

その後、心の準備が全く出来ていないアレイシアは、待合室の出入り口付近に立ち、どうしたものかと頭を悩ますのであった。

観客席の最前列、司会の丁度向かい側に当たる席に、アレイシアの両親含め五人が座っていた。クレアは板の方を指差し、ナディアに話し掛けている。

「ナディアさん、あの板を見る事は出来ますか？」

「出来るわよ。アリアちゃんが一戦目になったみたいね」

「本当だ、早速アレイシアが出て来る……！」

「私も見える。一番左にアリアの名前があるわ」

ナディアとオーラス、シェリアナは、この距離からでも板に書いてある事が読める様だ。百テルム（二十五メートル）以上も離れた場所から細かい文字を読む事が出来る三人を、フィアンとクレアは少し羨ましく思ってしまうのであった。

「一戦目……！ 応援しましょう！！」

「勿論、言われずともね！」

そして五人は、一戦目が始まるという風魔法の放送を聞き、闘技場中央へと目を向ける。それは丁度、アレイシアが出入り口から出て来る所であった。

02-30 闘技大会本戦 開催（後書き）

誤字脱字の報告や感想評価、アドバイスなどをお待ちしております！

アリア「また次回！ 次こそは本戦が始まるわよ！」

セリア「感想評価、送ってくれると嬉しいです」

02-31 闘技大会本戦 第一回戦（前書き）

遅くなつてすみませんでした m(┐┐)m
インターネットがここ二日繋がらないという訳もありまして……

……まあ、このような事もありましたが、読者様に楽しんで頂けたら幸いです。

02 - 31 闘技大会本戦 第一回戦

『では、第一回戦の一戦目です！ こちらの選手は、三年Aクラスのユーニスさん！ 種族はエルフ、水系統の魔法が得意だとの事です』

司会がそう言うと、観客席全体から昨日と同じく大きな歓声が上がる。反対側の出入り口から歩いて来た、金髪の女がユーニスだろ

う。
『対してこちら、一年Sクラスのアレイシアさん！ 種族は吸血鬼で、今年の闘技大会、最年少の出場だ！ 右手に構えた奇妙な武器が気になる所です』

その放送を聞き、アレイシアは前へと歩き出す。たまに観客席から聞こえて来る『可愛い！』などといった声を無視しつつ、前方に立つユーニスと向かい合う。

魔法陣が描かれた薄い板を掲げる司会。恐らくそれは、拡声魔法を発動するための物だろう。

『では、闘技大会一戦目……始めえッ！！』

司会が『始め』と言い終わると同時に、アレイシアはユーニスのすぐ目の前まで迫っていた。そして、右手に持った刀を左側に引く。それを見たユーニスは驚きながらも、攻撃を受け流す様に剣を縦に構える。

キーン！！

居合と同じ形に振られた刀は、勢い良く剣を直撃した。ユーニスの剣はそのままの勢いで弾き飛ばされ、遙か観客席のすぐ手前に刺さる。剣は折れてこそいないものの、刀が当たった部分にヒビが入っていた。

『おお？　こ、これはどういう事だあ？！？　アレイシア選手、一瞬で距離を詰めてユーニス選手の武器を弾き飛ばしたあ？！？』

観客席にどよめきが走る。観客は皆、目の前で起こった事が信じられないだろう。それは司会も同じなのか、普段よりもだいふ熱のある実況解説を行う。

茫然と立ち尽くすユーニス。手を伸ばせばアレイシアに届く距離にいるというのに、反撃の一つもしようとしない。この距離で無詠唱魔法を放たれたら、いくらアレイシアでも対応が間に合わないだろう。

そして、誰もがユーニスの戦意喪失を確信したその時？？？

「っ……！！　まだっ！　下級生に負けてたまる物ですかッ！！」

ユーニスは、腰の右側に付けられたポーチから魔導書を取り出し、アレイシアの元から逃げる様に離れ出した。それから一秒も経たずに闘技場の壁付近まで辿り着く。

アレイシアは、それを追いかける事もせずに、じっと相手の動きを待っていた。やはり、自分から攻撃を仕掛けるのはらしくないと思ったからである。

「願ひよ届け！　我、微細なる雫が集まりて、球を成さん事を望む

！ 水球！！」

十を超える水球がユーニスにより放たれる。その数と大きさは、平均をかなり上回る。得意な魔法系統と言っただけの事はあるのか、水球一つ一つの動きは正確にアレシアを捉えていた。

水球がアレシアの周囲を回り、軌道を持つ惑星の様な動きになった時、ユーニスはさらに詠唱を重ねる。

「水よ！ 鋭利な槍と成りて、敵へと降り注げ！ 水槍！！」

「っ！！」

アレシアの周囲を回っていた水球は、突然その場で動きを止め、細く鋭い、氷柱（氷柱）の様な形に変形した。勿論それは、氷などでは無く水なのだが。水だって、速度によれば鉄をも貫く。侮ってはいけない。

いくつもの水槍が、四方八方どころか上方からも降り注ぐ。それはまさに、死角無しの必殺攻撃魔法。

そして遂に、アレシアの立っている場所に水槍が到達した。

「……………！！」

ズシャアアッ！！

水しぶきと共に水槍は元の液体に戻り、闘技場の地面を濡らす。アレシアが回避した気配は無い。ユーニスは、地面に落ちて柱を作っている水に目を凝らした。

「……？？？未だにアレイシアは水の中に居ると思ったユーニスはそれ
せいか、後ろから近づいて来るアレイシアの存在に全く気付かなか
った。」

「背後注意よ。一つの事に気を取られて、他の事が散漫になるのは
気を付けるべきね」

「……！ いつの間に……！？」

アレイシアはユーニスの首に、逆手に持った刀を添える。勿論、
峰の方を首に向けて。

……二学年上の生徒に身長が足りないのか、アレイシアは爪先立
ちをしている。いい加減、身体年齢を変えられる魔法でも作ってみ
ようかとアレイシアは考えた。

『決まりましたあつ！ 首に武器を密接させられた状態は、行動不
能で負けとなります！！』

「……？？？ワアアアア！！」

「……？？？パチパチパチパチ！！」

その放送で、再び闘技場は歓声と拍手に包まれる。アレイシアは、
観客席の方にナディアとオーラスの姿を見つけた。二人とも、嬉し
そうな表情でアレイシアに手を振っている。

ふと、そこでアレイシアは、フィアンとシェリアナ、クレアの三
人がその場にいない事に気が付いた。まさか、と思い、アレイシア
が入場した側の出入口に目を向けると……

「ひゃっ！？ 放してっ！！」

「こらっ！ 待合室は関係者以外立入り禁止だぞ！？」

「アリア……じゃなくてアレイシアさんは、私達の友達です！！」

「今はさすがに通す訳には……！！」

ナディアの元に居なかった三人が、何故か警備を任されている先生に取り押さえられていた。このままではまずいと、アレイシアは出入り口の方へと駆けて行く。

「三人共！ 何やってるの！？」

「アリアに会いたいからに決まってるじゃない！」

「あのねえ……ほら、もう私は来たから」

今まで良く呆れられて来たアレイシアが、珍しく三人に呆れた瞬間であった。

警備の人から解放された三人は、若干駆け足気味で観客席の方へと戻って行く。そしてアレイシアはというと、用事があるとクレアに伝え、ユーニスがいる筈の反対側の出入り口へと向かって行った。向かい合う二つの出入り口と待合室は、観客席の下を通る長い廊下で繋がっているため、アレイシアはそこを通過して行く事にする。

アレイシアが待合室に着くと、丁度ユーニスが待合室から出て行く所であった。アレイシアはユーニスを呼び止めると、すぐにその隣に並ぶ。

「えーと……アレイシアちゃん、だっけ？」

「そうよ。ちゃん言うなって……呼び捨てで良いわ。貴女の剣、ヒビが入ってるでしょ？」

「……うん。これ、学園に入学する前から使ってたから、そろそろ新しいのに変えなきゃって思ってたし」

そう言つて、ユーニスはどこか遠い目をする。何かしらの思い出があるのかもしれない。その様子にアレイシアは、胸が痛むのを感じた。

「ごめんね……そうだ。この剣、私に貸してくれる？」

「え……？」

「なんとか直してみるわ。寮の番号教えてくれれば持つて行くし」

「いや、そんな……迷惑だし……」

「私が壊さなければ、あと数年は使えたと思うけど？」

迷っている様子のユーニスに、アレイシアは追い討ちをかける様に言う。そこで決心がついたのか、腰に付けた剣を外してアレイシアに手渡した。

「……ありがと。寮の番号はBの三二七よ」

「うん。じゃ、またね」

アレイシアはそう言い、すぐに待合室から離れて行った。

その後、ユーニスの剣も腰に差したアレイシアは、フィアン達と共に観客席に座っていた。そのまま一人で寮室に帰っても良かったのだが、大会本戦はまだ一回戦。次の日まで含めて十六回戦まであるため、他の人達の戦いも見えておきたかったのだ。

『では次！ 第一回戦の二戦目です！』

その放送でアレイシアは、次に出て来る選手の方へと視線を向けた。他の人の戦いを見るのは、自身の戦法を見直す良い機会かもしれないと考えながら？

02-31 闘技大会本戦 第一回戦（後書き）

感想評価や誤字脱字の報告をお待ちしております！ アドバイスなども遠慮なくどうぞ。

アリア「ふふっ、今回の更新で十万字越えよ！」

フィア「感想評価、いつでも待ってます♪す♪」

02-32 闘技大会本戦 第三回戦

闘技大会の第一回戦で、アレイシアが戦った日から二日。第二回戦でも、四年Aクラスの大男相手にアレイシアは勝利を収めた。

一体どの様にして勝ったのかというと、開始早々走って来た大男が剣を振り下ろした丁度その時。アレイシアは体の小ささを上手く利用して、足元に滑り込んで氷魔法を放った。結果、足が滑って地に伏した大男は、アレイシアに負ける事となったのである。

今日は闘技大会の最終日。アレイシアは闘技場の中央に、勝ち残った他の七人の選手と並んでいた。多くの観客を含め、その場の全員が司会の話に耳を傾けている。話によれば今日は、第三回戦、第四回戦、決勝戦を行う予定だそうだ。

ちなみにこの世界の言語には『準決勝』を表す言葉は存在しない。それは、アレイシアが使う三国共通語だけの話では無く、この世界の他のどの言語でも同じ事らしい。

『今日の戦いで、優勝する選手が決まります！　まずは第三回戦、これ残るは僅か四人です！！』

司会がそこまでを一息で言い終えた所で、観客席からは今までとは比べ物にならない程大きな歓声が上がる。決勝戦が行われる日だからか、今までよりも多くの人が集まっている様だ。

『第三回戦からは、今までとは違うルールを取ります。相手の気絶、降参及び行動不能で負けとなるのは同じですが、それに加えて闘技場の中央に、一辺六十メートル（十五メートル）の線を引き、そこからはみ出た場合も場外負けとなります』

アレイシアは自身の周囲を確認する。地面には確かに、濃い線が正方形状に描かれていた。待合室の出入り口から入場して来た時、気になった線はこれだったのかと考える。

『なお、場外の線を超えても、足が地に着かない限りは負けとはなりません。この線で囲まれた場所は、以後ステージと説明します』

そこで一息おいた司会は、観客の様子を見る様にして話を続けた。

『では今から、第三回戦の一戦目！ 呼ばれた選手以外は、ステージから離れておいて下さい。こちら側は、一年Sクラスのアレイシア選手！！ 一部で翼持ちの吸血鬼なのではと噂されているそうだし！』

「…………噂されてるんだ…………」

今まではこんな説明無かったのに、とアレイシアは内心でため息をつく。遠くからアレイシアを見守っているナディアとオーラスも、その説明には驚いた様だった。二人で目を見合わせ、アレイシアに何かを言おうとしているのが分かる。

と、そこで、アレイシアとオーラスの視線が交わった。

「アリア？ 今の放送って本当なのか！？」

「あわ、う、噂されてるだけ！」

若干慌てたように答えるアレイシア。年齢についてと同様に、実は翼を背中に隠してる、だなんて言える筈も無かった。

『対してこちら、六年Sクラスのフェダー選手！ 今までの戦いで、剣術を活かした素晴らしい俊敏さを見せてくれた選手だ！！』

アレイシアともう一人、司会が言っていたフェダーと思われる人物だけがステージ上に残る。他の選手は皆、ステージと場外の境界線の後ろに立った。

『いよいよ始まります！ 第三回戦の選手はこの二人！！』

息を大きく吸い込む司会。

観客は皆、向かい合う二人の間から緊迫感が伝わって来るのが分かった。

『……………始めええッ！！』

その声と同時にフェダーは駆け出した。アレイシアの方へと、右手に持った剣を向けている。距離を取った状態から始まる戦いは、その距離を詰める事から始まるものなのだ。

だがアレイシアは、近づいて来るフェダーに対し、距離を縮めさせない様と同じ速度で遠ざかり始めた。近接戦闘が得意だと思われるフェダーには、遠距離からの魔法が有効だと考えてこそその行動だろう。注意すべき点は、ステージの正方形という形だ。正方形の頂点部分に追い詰められてしまつては元も子もない。

フェダーが立ち止まる。それに反応し、アレイシアも立ち止まった。魔法を放とうと詠唱を始めるアレイシアだが、そこで予想外の攻撃が飛んでくる。

「……風刃！」

何時の間に詠唱を完成させていたのか、それとも無詠唱か。フェダーは剣に風魔法を纏わせ、アレイシアの方へと勢い良く振りかぶった。

放たれるのは、視覚不可能の風の刃。ソニックブームが放たれる速度よりは遅いが、その速さは確実に亜音速の域に入る。

魔法障壁を球状に、自身の周囲を取り囲む様に張るアレイシア。魔力放出速度が間に合わないと判断したのか、神力を代用して障壁に供給している。

バキーンッ！！

アレイシアが魔法障壁を張っていない所だけ、地面に大きなヒビが走る。それからすぐに魔法障壁を解除、刀を右手に持ってフェダーの方へと駆けて行った。ちなみにここで、第一回戦と同様に瞬間移動を使用しても良かったのだが、あまり変な噂をこれ以上広めたくないと自重したのである。

先程の攻撃は、相手は遠距離攻撃も可能だという事を表している。これ程の攻撃を放てるのだから、他の遠距離攻撃の手段も持っている事だろうとアレイシアは考えた。だから、予想外の攻撃を喰らってしまふ前に、あえて近接戦闘に持ち込んでみる事にしたのである。

？？キーン！！

互いの武器がぶつかり合う。フェダーは上手く力を分散したのか、彼の剣は弾き飛ばされる事も、ヒビが入る事も無かった。

「こんの……!!」

ガキッ！ キキインッ！！

そのまま、二人は武器の打ち合いに入る。片方が攻めに入れば、もう片方が防ぐ様に武器を動かす。

両者共に、一瞬たりとも気を抜かない。対応に遅れる事がある物なら、すぐに負けが決まってしまうからだ。

そこでアレイシアは、わざと対応に遅れたかの様に刀を止めて後ろに下がった。剣が捉えられる範囲から出たアレイシアを追う様に、フェダーは一步前に踏み出す。

だがそれが間違いだった。フェダーが前に踏み出す一秒にも満たない時間。それだけでアレイシアは充分だった。

再び振られたフェダーの剣は、アレイシアの刀に直撃する。その瞬間、二つの刃の間に光が走った。つまりアレイシアは、無詠唱で刀に雷魔法を纏わせていたのである。刀に込められているのは、感電とまでは行かないが、動きを鈍らせる程度は出来る微弱な電流だ。

バチッ！！

「うをおっ！？ あ……体が……？」

フェダーは一瞬よろめくも、それからすぐに体勢を立て直す。だが、明らかに動きが鈍っているのが分かる。そんな中で打ち合いを再開しても、まともに剣を操れないのは当然の事であった。

キンッ！！ ガッ……！！

二、三度の打ち合いの末、アレイシアは刀の峰をフェダーの胸部に押し当てる事が出来た。もしもここで刃の部分を押し当てていたのなら、と考えアレイシアはぞっとする。

後ろにのけ反るフェダーに、アレイシアは視線で訴えかける。

「っ……………分かった、俺の負けだな……………」

「……………！？　どうやら決まった様です！　勝者は、アレイシアさんだあぁっ！ー！」

割れんばかりの拍手と歓声に包まれる闘技場。上級生に引けを取らない戦いをするアレイシアに、観客は皆が皆、驚いた様であった。

今はまだ第三回戦、後二回の戦いが残されている。今日の戦いはまだ始まったばかり؟؟？

02-32 闘技大会本戦 第三回戦（後書き）

感想評価や誤字脱字の報告、アドバイスなどをお待ちしております！

〽謎コーナー……かな？〽

七篠「二月三日の午後五時半頃に、ユニークアクセスが30,000突破しました！」

アリア「時間がまた……もう何も言わないわ」

ファイア「そういえば、最近感想が少なくて寂しいそうですね？」

七篠「い、いや……別にそんな訳は………」

ファイア「……と、いう訳で、読者の皆様、感想評価をお待ちしております〽す」

アリア「感想評価、いつでも待ってるわよ！」

02 - 33 闘技大会本戦 昼食タイム

第三回戦終了後、アレイシアは昼食を食べるために、学園街のあるレストランに来ていた。そのレストランとは、学園に来たばかりの頃、アレイシアがフィアンと一緒に食事を取ったあのレストランである。

二人は度々、シェリアナとクレアを誘ってこの店に来ているため、四人はすっかりこの店の常連となっていた。

店の一番奥の席には、アレイシアだけでは無く、ナディアとオラス、フィアンを含めた五人の姿もある。それぞれが好きな料理を頼み、会話を楽しんでいる様であった。

「ありやーひゃん、ふおんほーいゆーひょーえっひょーえふえー！」

「……はいはい、言いたい事は分かったから。まずはそれを飲み込みなさいよ」

フィアンが今食べているのは、焼いた肉を生野菜で包んだムティと呼ばれる食べ物である。今の意味不明な発言は、口の中のムティを飲み込もうともせずにアレイシアに話し掛けた結果であった。フィアンは、コップに並々と注がれた水を飲み干し、アレイシアに再び話し掛ける。

「……んっ……今ので分かったんですか？」

「……アリアさん、本当に優勝できそうですね！ でしょ？」

「すごい！ 何で分かったんですか？」

「直感だけを頼りに、後は状況で判断したわ」

そう言つてアレイシアは、大皿に盛られたムティーを一口食べる。
先程フィアンが食べていた物とは別の皿だ。

「……あれ？ そつちの皿は何が違ふんですか？」

別の皿から取つた事を不思議に思つたフィアンは、大皿の方を指
差してアレイシアに問う。

「これは焼き加減が生焼^{レア}なのよ」

「？ ……あ、そう言つ事ですか」

アレイシアは吸血鬼、これは周知の事実だ。例え獣の血といえど
も、ほんのりと香る血の香りには食欲をそられるものがあつた。
向かい側を見れば、ナディアとオーラスまでもがレアムティーを頬
張っている。

「ほふえあほふつ……これが美味しいんだ。吸血鬼で生焼^{レア}があまり
好きじゃないつて言つたのはアリアくらいだよ。今は普通に食べら
れるみたいだけど」

「そつなんですか」

オーラスの話を聞いたフィアンはそう言つて、ムティーをもう一
口頬張る。半生焼程度しか食べた事がないフィアンは、その味がど
の様な物が全く見当がつかなかった。種族の壁は厚いんですね、と
楽しげに言い、ムティーの横に置かれたジュースに手を伸ばす。

そこで、アレイシアから見て右側に座っていたシェリアナが、思い出した様に口を開いた。

「アリア、そういえば第四回戦の相手って……」

「……あー、そうよ。そうだったわ……あのウエルム……」

アレイシアが第四回戦で戦う予定の相手は、何故か勝ち上がって来ていたウエルムであった。彼女としては、またウエルムと戦いたくないというのが本音なのだ。

「……また私と戦えて嬉しいとか思ってるのかしらね？」

「それよりもやっぱり……今度こそは勝つ、とか思ってるかも」

そこまで話をした所で、レストランの客がやけに少なくなっている事に気が付いた。店の中には、アレイシア達の他に五、六人程しか客がいない。

「あれ？」

「……あ！もしかしたら闘技場に……っ！」

アレイシアは、横に置いた刀と魔導書を抱え、若干慌てた様子で立ち上がる。もしかしたら、第四回戦がもう始まるかもしれないと考えたからだ。……ついでに、黒美さんに懐中時計をねだってみようかとも考える。

「あ、アリアさん、どうしたんですか？」

「ごめんっ！ 先に行ってるから！！」

そう言っつて、アレイシアはすぐに店から出て行ってしまった。その場に残された五人は、しばらくしてからやっと状況を把握し、アレイシアが待っているであろう闘技場へと向かって行った。

『さあさあっ！ 第四回戦、残ったのはこの四人だけ！！ これからどの様な戦いを見せてくれるのでしょうかッ！？』

今までと同じ様に、司会が観客席を大いに盛り上げる。

闘技場の中央に立った四人。その中には当然アレイシアの姿もあった。その隣に立っているウェルムは、アレイシアの方をせわしくちらちらと見ている。

『ではまず、第四回戦まで残った四人の選手を紹介しましょう！ 一人目は、今大会最年少のアレイシア・メル・ラトロミアさんだあッ！ 種族は吸血鬼！ その可愛い容姿とは裏腹に、持っている戦闘技術にはただただ驚かされるばかりだ！！』

？？？かつ……可愛らしいとか、言うなああっ……

心なしか、司会が『可愛い』と言うと同時にアレイシアの頬に朱が差したのは気のせいでは無いだろう。

照れが原因と言うよりも、多くの人の前で可愛いと言われた事が原因なのかもしれないが。

『そしてこちら、二人目は、ウエルム・レダールさんだあつ!!
火系統魔法と格闘を得意とする犬人、同時に放てる魔法の数は圧倒的! 戦略的に敷き詰められた火球は回避不能と言われている!』

その放送を聞いたアレイシアはウエルムの方を向く。そして、私かわせたけど? と言。それにはウエルムも反論出来ないのか、アレイシアと目を合わせようともせずに視線を彷徨わせる。

「あー……まあ、司会が勝手に言ってるだけじゃね?」

「……うん、納得」

『三人目はこちらの、ラセル・デイトリーさんだあつ!! なんとこちら、四人目のリセル・デイトリーさんの弟に当たるそうです! 種族は竜人。その種族ゆえの高い身体能力で、多くの選手を打ち負かして来た二人だ! 第四回戦では、この二人が戦う事になります!!』

その放送で一層沸き立つ観客席。アレイシアも、この事については良く知っていた。何故かといえば、アレイシアが読んでいる学園紙に、今大会の注目の的として大きく取り上げられていたからだ。兄弟が闘技大会で戦う事になるなど、そうそうある事では無い。

『第四回戦は間もなく始まります! 第四回戦の一戦目は、アレイシア対ウエルム!! 決勝戦へと上れるのはどちらなのでしょうかなッ!? 両者、前へ!!』

アレイシアとウエルムは一步前へと進み出る。その一步で、正方形のステージ上に立った二人。

ステージ内で距離を取り、そのまま向かい合う。後は、司会の言葉を待つだけだ。

『第四回戦、一戦目っ！ 始めええッ！！』

弾かれる様に走り出した二人。アレイシアとウェルム、二回目となる戦いが幕を開けた。

02-33 闘技大会本戦 昼食タイム（後書き）

誤字脱字の報告や感想評価、アドバイスなどをお待ちしております！

↳返信してみる謎コーナー↳

七篠「どうもおはこんばんちは！ 今回の謎コーナーは、気になるWeb拍手メッセージに返事をしてみようというコーナーです」

セリア「じゃ、早速行くよー！ 一つ目はこれっ！」

『いつも楽しみに拝見させてもらってます』

七篠「こういうコメントには癒されますねー ホント、やる気が出てきますよ」

セリア「次はこれ、二連続でどーぞ！」

『これからがんばってくださいねー（^ー^）b』
『更新がんばってください！』

七篠「ハイ、思いつきり頑張りますよー！！ 更新速度も上げたいですが……更新が最近遅れ気味ですみません」

セリア「では次……っと？ えーと……これはアリア宛かな？」

七篠「ん？ どれどれ……」

アリア「何？」

『アレイシアかったいい』

アリア「わ……ま、これは置いて……感想評価、お待ちしております！」

セリア「話そらした……で、では、Web拍手の方からでもメッセージを送って下さいねー！」

02 - 34 闘技大会本戦 第四回戦

走りながら剣を抜き、両手で斜め後ろに構えたウエルム。その姿勢は、力の入った大振りの一撃を与えるのにかなり有効なものだ。それに対しアレイシアは、左側に携えた刀。その柄の部分を手でしっかりと握り、いつでも抜刀出来る様にと構えていた。それはつまり、素早い一閃を放つ居合の構えである。

互いがぶつかり合う様に。高速で、かつ正確に接近して行く二人。このままアレイシアとウエルムがすれ違えば、かなりの確率で、どちらかが攻撃を喰らう事になるだろう。あるいは両方か???

「……っ！」

「っ……らあっ!!」

シャツ……!!

アレイシアとウエルムがすれ違った瞬間、何かが擦れる様な音がした。だが二人共、特に目立った怪我は見受けられない。

実はウエルムが剣を振った時、アレイシアは攻撃を逸らすために、剣の中央を縦に切り裂く様に刀を動かしたのだ。もし、少しでも手元が狂っていれば、二人は互いの攻撃で地に伏していただろう。

例え攻撃を受け止めても、このままだと相打ちになる。その事を理解していたからこそ、アレイシアは剣全体を押さえるこの対処法を取ったのである。

「……相変わらず凄いなお前は」

「貴方も、剣を逸らさずに良く支えられたわね」

「俺も伊達に鍛えちゃいねーよ。っと……そら、お返しだ!!」

ウエルムは多くの火球を放つ。でもそれは、攻撃するための物というよりは小手試しに当たる物だろう。迫り来る火球を次々と、軽快な動きでかわして行くアレイシア。長い髪の手元も、洋服の裾も、全く当たらないのが不思議だ。

「……我、その刃に吹き荒れんばかりの風を纏わん事を望む。風刃!!」

アレイシアは走りながら、素早く詠唱を完成させる。それは、第三回戦でフェダーが使っていた風刃を自己流にアレンジ、詠唱をその場で編み出した新作魔法だ。

アレイシアの刃に、目視出来そうな程の風が集まって行く。闘技場の砂を高く巻き上げ、それですら目くらましになるのではと思わせる程だ。ウエルムが放った火球は既に、風の強さでそのほとんどが消滅していた。

「おいおい……凄っ……!!」

刃に収束した風と多量の魔力。それを確認し、アレイシアはウエルムの方へと向き直る。

風を纏った刃は、振る時の力を極限まで抑え、素早い連続攻撃を可能とする。相手が離れている場合でも、風の刃を放てば遠距離戦が可能だ。

「貴方はどうせ、私から向かって行かないと気が済まないと思うか

ら」

「まあ、その通りだな」

「行くわ、とりあえず受けてみなさいっ!!」

身体強化魔法を発動、目にも留まらぬ速度でウエルムの眼前へと迫る。そして、体の速度をそのまま峰打ちに掛けた一撃。

キンッ!!

ウエルムは咄嗟に剣で防御する。だが、例え防御したとしても防ぎきれないモノがあった。

「っ……!!」

「うおあっ!?!」

剣だけでは当然、アレイシアの速度までは殺し切れず、ウエルムは大きく弾き飛ばされてしまう。

この戦いにおいて、弾き飛ばされる事程不利なものはないだろう。何故かといえば、ステージからはみ出るだけですぐに負けが決まってしまうからだ。

ガッ!!

「危ねえっ!!」

場外負けの危険があると判断したウエルムは、地面に剣を突き立て、何とか空中に静止する。そのまま剣の柄を軸にして、ステージ

の境界線ギリギリの地面に着地した。

「こいつ……！！……願いよ届け。我、その炎が幾多もの矢を成さん事を望む！ 炎矢！！」

ウエルムの周囲に八つの炎の矢が浮かぶ。辺りに火の粉を振りまき、空中をゆらゆらと動いている。

炎の矢がわずかに後ろに下がったと思った次の瞬間。アレイシアの方めがけて、炎矢が勢い良く放たれた。

それを見たアレイシアは、すぐに刀を構え直し、ウエルムの方へと走り出す。普通に考えれば、炎矢を放って来ている相手の方へ向かうなど、自殺行為にも等しい事なのだが。

シャシャッ！

目の前に迫る炎矢に向けて、アレイシアは二度刀を振るう。それだけで、その場に発生した風の刃が炎矢を斬り裂く。

炎をも切り裂くのは、魔力を纏った音速の風の刃。風刃はそのままアレイシアの意思により、空气中に霧散してすぐに消えて無くなる。

アレイシアがウエルムの方を見ると、驚いた様な表情をしながらも、何やら詠唱を始めているのが分かった。相手が詠唱をしている時は、妨害して詠唱を完成させない様にするのが基本である。アレイシアもその例に習って、火球をいくつか牽制に放つ。だが、アレイシアが放った火球は、ウエルムに到達する直前で消滅した。恐らく、魔法障壁が張られているのだろう。

ウエルムはそこで、アレイシアの方を見てニヤリと笑う。それは始めて会った時の様な、嫌悪感を覚える笑みでは無い。単純に何か

を楽しんでいる様な笑い方だった。

「……炎剣ッ！！」

ウエルムの周囲で巨大な炎が巻き上がる。それはすぐに一筋の形を取り、ウエルムの手に収まった。かなりの熱風がアレイシアの立つ場所にまで押し寄せる。

「アレイシア！ 俺の攻撃も受けてみるおお！！」

「……っ！！」

身体強化魔法も使っているのか、かなりの速さで地面を駆けるウエルム。

そこでアレイシアも、面白い事を考えついた子どもの様な笑みを浮かべた。思い立ったが吉日と言わんばかりに、アレイシアはすぐさま詠唱を始める。

「願ひよ届け！ 我、宙に迸る雷の槍を形成せん事を望む！ 雷槍
！！」

アレイシアの利き手？左手に、纏わり付く様な雷が走った。その雷はバチバチと音を立てながら広がって行き、先端の尖った槍の様な形を形成する。

青白い光を放つ雷槍。それは、ウエルムの炎剣を見たアレイシアが、その場の思いつきで作り上げた即興新作魔法だ。この魔法の凄い所は、雷系統を使うためには必要だと考えられていた、火系統、風系統、水系統の合成を全く行わない所にある。

今現在アレイシアが使っている魔法が、ここ何百年と変わらなかった魔法魔術の理論を完全に覆す物だとは。観客は勿論、ウェルムや教師ですら全く思わなかっただろう。

「うおおおおあー！」

ウェルムは、アレイシアの雷槍にひるむ事無く向かって行く。

???そして遂に、雷槍と炎剣が激しく衝突した。

バキイインッ！！！！

その音は何の音だったか。

気付けばアレイシアは、地面に倒れたウェルムのすぐ隣に立っていた。砂埃で視界が悪いが、それもすぐに晴れ、その姿が観客にも届く。

『……き、決まりましたあッ！！　立っていたのはアレイシア選手！　決勝進出ですッ！！』

観客席が、今までよりもさらに大きな歓声に包まれる。それも当然。あれ程大規模な戦いを見せられて、興奮しない観客がいる筈も無かった。

今すぐにも、アレイシアコールが巻き起こりそうな勢いだ。

??? うん、それは起こらなくて良いわね。

何はともあれ次は決勝戦。アレイシアは次の戦いで、竜人兄弟のどちらと戦う事になるのかと、楽しみに思いを馳せていた。

02-34 闘技大会本戦 第四回戦（後書き）

誤字脱字の報告、感想評価やアドバイスなど、いつでもお待ちしております！！

フィア「感想評価、是非とも入れて行っして下さい！」

アリア「Web拍手の方でも、コメント待ってます」

02-35 闘技大会本戦 決勝戦（前書き）

読者の皆様、お待たせしました！
遅くなつてすみませんです。

2 / 12 に、ユニークアクセス35 / 000 達成！

現在は既に夕方の十二刻。空の低い位置には、やや黄色がかつた色の満月が浮かんでいる。アレイシアはそれを見る度に、一度死んだ『あの日』を思い出す。

今から始まるのは決勝戦。大いに盛り上がった竜人兄弟対決の末、勝ち上がったのは兄の方だ。アレイシアが決勝戦で戦う相手は、兄のリセルに決まったのである。

獣人種の中では最強と謳われている竜人。保有する魔力量でもそうだが、身体能力面でも他の種族を大きく上回る。そして、そんな竜人と互角、あるいはそれ以上なのが吸血鬼だ。

この大会の決勝戦。竜人と吸血鬼の戦いとあつては、盛り上がらない方が可笑しいと言うものだった。

『遂に来ました、決勝戦です！ アレイシア・ラトロミア選手、リセル・デイトリー選手、この二人が決勝戦で戦います！！』

何故かアレイシアの左側に立ち、手を大きく広げて場所をアピールする司会。ちなみに、アレイシアのすぐ右隣にはリセルが立っている。

このリセルという男。若干長めの白髪と、背中にベルトで固定された大剣が特徴的だ。竜人は翼を持っている事が普通なため、アレイシアの翼とはまた違う、灰色の羽が敷き詰められた様な翼を観客の眼前にさらしている。

アレイシアはそれを見て、どうも羨ましく思ってしまう。???
何故私は、翼を隠さなければならぬのかと。

だが、翼持ちの吸血鬼だという事を明かしても、何一つ良い事が

無いのは分かり切った事だ。むしろ、厄介事が増えて大変な事になるだろう。

『では両者、前へ!!』

その言葉を聞いたアレイシアは、ウエルムと戦った時と同じ様に一歩前へと進み出る。観客の歓声を聞き流しつつ、二人はステージ上で向かい合った。

『闘技大会決勝戦！ 只今始まります!!』

観客席に座っているナディア達五人。我が娘を、親友を、尊敬する者を見守るために、ステージ上へと目を向けた。

『っ……始めええッッ!!』

司会がそう言った瞬間、リセルはアレイシアの方へと急接近し始める。一部の観客の眼には全く映らないであろう程の速度だ。アレイシアはしかし、それをかわそうともせずじっとその場に佇んでいる。

竜人なら、皆誰しもが持っていると言われている鋭い爪。それを、アレイシアの方へと振り下ろした。

ガキン!!

闘技場全体に、硬質な物を叩いた様な音が響き渡る。アレイシアは、神力を用いて障壁を張ったのだ。詠唱も前準備も無く、これ程丈夫な障壁を張れる者が他に一体何人いるだろうか。

そこでアレイシアは、お返しと言わんばかりに居合の一閃を放つ。リセルはそれを、爪の先端で受け止め???切れなかった。

パキン！

リセルの爪にはかなり多くの魔力が込められ、その固さは普段の十倍以上にもなっている。だが、それをものともせず、アレイシアの刀は爪の先端部をへし折った。

互いに距離を取る二人。リセルは爪を気にしている様であったが、アレイシアの方に視線を向けて離さない。リセルは背中の大剣を右手に取り、アレイシアの方を睨む。

「それ、本気じゃ無いだろう？ 第四回戦の時もそうだったけど」

「……そう言う貴方こそ、ね。やろうと思えば、この闘技場を一瞬で瓦礫の山にできると思うけど？」

アレイシアがそう言うと、リセルはほんの少しだけ笑った。それは恐らく、肯定の意を表しているのだろう。

「ふう……出来れば本気で来てほしいな」

「……分かった。」ある程度”は本気で行くわ」

次の瞬間、リセルの背後に瞬間移動したアレイシアは、刀を逆手に持って勢い良く上へと斬り上げた。リセルはその攻撃を、大剣を縦に置く事によって防ぐ。

そのまま刀を持ち直し、リセルの方へと高速連続攻撃を放つアレイシア。だが、その攻撃は全てリセルの大剣に阻まれる。

驚くべき事に、リセルは右手だけで大剣を支えているのだ。普通は両手で持つ様な大剣を右手だけで支え、アレイシアの刀の速度に対応出来ているのである。

アレイシアは確かに、このリセルという男が今までとは比べ物にならない程強い相手だという事が理解出来た。

キンッ！！

一瞬だけ身体強化魔法を発動し、リセルの大剣を思いっきり押し返す。

そこでは何とか押し勝ったアレイシアだが、次にリセルはあまりにも予想外な行動に出る。背中の翼を羽ばたかせ、空中へと舞い上がったのである。

「……っ！！」

刀では攻撃出来ないと、アレイシアは遠距離攻撃魔法を放つ。だが、相手は竜人。空を飛ぶ事に関しては、純粋な竜を含めた他のどの種族にも劣らないだろう。リセルは、アレイシアが放った火球、水矢、風弾を見事にかわし、今度はアレイシアに向けて攻撃魔法を放ち始める。

プッッ！

「……あ……！！」

すぐ横を掠めた水の矢。アレイシアの頬に、綺麗な紅い筋が入る。そこから溢れ出した血液は、アレイシアの肌を伝って地面に落ちた。頬に付いた血を指にすくい取り、自身の口に運ぶ。

「ん、美味しい……」

血を舐めて若干の冷静さを取り戻したアレイシアは、今のこの瞬間まで忘れてしまっていたある事を思い出す。それは……

??? 当たる筈の無い攻撃は、当たるッ!!

「水弾!!」

「な……っ!!」

リセルが居る場所よりも左に放たれた水弾はしかし、吸い込まれる様にリセルの体に命中した。

空中で姿勢を崩して落下し始めるリセルだが、すぐに体制を立て直し地面に着地。そこでリセルは、どうも嬉しそうな表情をする。

「……やっと使ってくれたか。矛盾を操る程……じゃなくて、矛盾を起こす能力、で良いかな？」

「……!! 貴方は……」

「それはお楽しみ。本気でかかって来てくれたらね」

アレイシアの脳裏に、リセルに関するとてもない仮説が浮かぶ。まさか……とは思うが、その可能性も否定出来ない。

リセルは再び空へと舞い上がる。そして、アレイシアの方を見て大剣を構えなおした。

「このために来たんだ。君の本気が見たい」

「……いいわ。私の母様と父様、ファイ達以外の人には少なくとも見せたくなかったんだけどね……」

「……来い!!」

魔力を五段階まで開放、空を飛びリセルの方へとアレイシアは走り出した。いくつか心配な事もあったが、アレイシアはリセルの正体が知りたかったのである。ベルク先生に教えてもらった気を集中し、アレイシアは地を思いっきり蹴ってリセルの方へと跳び上がった。

02-35

闘技大会本戦 決勝戦（後書き）

続きは次回です。

でも、次からが本番です（笑）

感想評価や誤字脱字の報告、アドバイスなどをいつでもお待ちしております！

アリア「感想評価、いつでも待ってるわ」

セリア「Web拍手、二回以上押すと……こちらのメッセージも、お待ちしております！」

地を蹴って跳躍したアレイシアは、一瞬でリセルと同じ高さにもで到達する。そこですぐさま飛行魔法を発動。アレイシアは空中に留まった。

刀の切先をリセルの方へと向け、距離を詰めるべく宙を駆け出す。それに対しリセル。アレイシアの攻撃を防ぐために、大剣を右手で前方に構えた。

ガキキキンッ！！

刹那の瞬間に三度振られた刀。それらを全て防ぎ切ったりセルは、アレイシアに反撃を見舞おうと大剣を振るう。

「ぐ……ッ！！」

キンッ！！

重い大剣の一撃を刀でやすやすと逸らしたアレイシアは、大剣を振るった後の隙を狙い、刀をリセルの方へと振り下ろす。

それを素早く察知したりセルは、咄嗟に大剣を引く事によって辛うじて攻撃を防いだ。

「……風刃ッ！！」

攻撃を防いだばかりで隙だらけのリセル。準備に時間の掛かる風刃を発動させるなら今しかないと、アレイシアは詠唱をすぐに完成させた。

嵐の如く強風を纏った刀を、下から斜めに振り上げる。ここまで

わずか一秒未満。やっと体制を取り戻したりセルに、音速にも届く程の速さで刃が襲いかかる。

ザッ！！

「……っ！？」

その状態では流石に防御も間に合わず、リセルは攻撃をもろに食らってしまった。

しかし、アレイシアの刀に直撃したにもかかわらず、リセルの体からは血の一滴も出て来ない。それどころか、身に着けている衣服にも全く損傷は見られなかった。

強力な魔法障壁でも張っているのかと推測したアレイシアは、ひとまずその場を離れようと飛行魔法を発動する。だが……

ガシッ……！！

「あ………！！」

何時の間に回り込んだのか。背後に突然現れたりセルはアレイシアの背中を鷲掴みにすると、膨大な量の魔力を流し始めた。

「……ッ！！　そこは……やめろおおっ！！」

何とかリセルから離れようと、ジタバタともがくアレイシア。だが、どういった理由かは分からないが、どうしてもリセルの腕の中から逃れることが出来ない。

アレイシアの背中にあるのは、蝙蝠の様な翼を隠すための、そし

て発現させるための魔法陣だ。そこに魔力を込めるという事はつまり????

???語るまでもないだろう。

「……っ……!!」

もうすぐで翼が現れると直感的に理解したアレイシアは、自身とリセルの周囲に魔法障壁を展開。下から吹き上げる風魔法を全力で発動させた。

「ああああッ!!」

「……うお!？」

ゴオオオオオッ!!

眼下に広がる雲海。

上を見れば、煌く無数の星と白銀の月。

ここは、地上から遥か二万テルム（五千メートル）の上空だ。

そんな場所で向かい合うのは、二人の翼を持った人外。一人は、黒く長い髪を風になびかせる、蝙蝠のような翼を持った少女。もう片方は、大剣を斜め下に向け、黒髪の少女の方をじっと見つめる白髪の青年だ。

しばらくはその場を沈黙が支配していたが、白髪の青年？？？リセルは話し始める。

「……まさか翼が……封印系の魔法陣みたいだったから発動させてみたんだけど……ダメだったかな？」

「ダメもいい所よ。……まだ、続きやるのよね？」

アレイシアがそう言った瞬間、リセルは大剣に炎を纏わせる。それを見たアレイシアも、すぐに刀を持ち直して臨戦体制に入った。

「勿論」

「ふふっ……早く終わらせましょう。観客が待ってるわ」

そう言い笑みを浮かべたアレイシアに、大きく羽ばたいたリセルは急接近。風魔法を翼全体に受け、更に加速する。

リセルをこれ以上近付かせまいと、十数もの風刃を放ったアレイシア。だがリセルは、風の刃を大剣による物理攻撃で相殺し、アレイシアの目の前にまで迫る。

ブオッ！！

風を斬る音と共に放たれた大剣の一撃。それを、一度羽ばき急上昇してかわすアレイシア。

一旦距離をとる二人。アレイシアの方が若干、リセルよりも高い位置にいる。

刀を鞘に収め、アレイシアは神力を集中させ始めた。

仄かな光を放つ左手。神力が少しずつ、密度を増して行っているのが分かる。

「……光剣ッ!!」

高密度の神力による発光現象が起こる。月明かりにしか照らされていなかったその場が、一瞬にして目が眩む様な光に包まれた。

アレイシアが前を見れば、何故かりセルも同様にして光剣を作り出している。そこから感じ取れるのは魔力などではなく、明らかに神力だった。第一、この様な発光現象が起こるのは神力だけなのである。

「行くわよ!」

「いつでもどうぞ……ッ!!」

アレイシアとリセルが猛接近。剣の打ち合いと同じ様に、リーチの長い光剣を自在に操る二人。

光剣同士がぶつかり合う度に、辺りには神力の衝撃波が放たれる。それを防ぐためにも、神力を使った強固な障壁を常時発動し続けなければならぬ。わずかな時間に膨大な神力を消費する消耗戦だ。

バキンッ!!

「……!?!」

リセルの光剣が障壁を突き破り、アレイシアの左肩へと振り下ろ

される。

ザシヤッ！

「うあっ……！！」

致命傷でこそ無い物の、アレイシアの肩からは、多量の血がぼたぼたと垂れては雲海に消えて行く。

久しぶりに感じた激痛に顔を歪ませるアレイシア。前にこの様な痛みを感じたのは、地に叩き付けられた時と心臓を貫かれた時くらいかと考える。

??? 嫌な事を思い出したわ…… あんな時に心臓貫かれてなければ…… もっと身長伸びてたかもしれないのに……

アレイシアは翼を動かす事も疎かになり、既にかなり高度を落としてしまっていた。

そこを追撃する様に、重力に任せた落下と風魔法でアレイシアの方へと近づいて行くリセル。

右手に構えられた光剣は、遂にアレイシアの方へと??? 振り下ろされなかった。

「……え？ わふっ!？」

「……ふっ、はははっ!!」

リセルは光剣に込めた神力を霧散させると、アレイシアを抱き締める様に腕を回した。そして、何が面白いのか突然笑い始める。

「ちよっ……！ やめ……！！」

「久しぶりの再会でそれか？」

「う……もしかして、やっぱり……」

アレイシアは目頭が熱くなるのを感じた。その紅い瞳の両端にはうつすらと、涙が浮かんでいるのが分かる。

「ぷっ……すっかり女らしくなったなあ……！！」

「ッ……！！ それを言うなあああッ……！！」

見事なまでに一瞬で、感動の再会の雰囲気壊したりセル？？ではなく祐に、思いつきり頭突きをかますアレイシア。

「痛っ！？」

「自業自得よ！」

二人はそのまま雲の中を通り抜け、学園へと落ちて行った。

アレイシア曰く、高度四千テルム（千メートル）を超える場所から見る学園の夜景は、かなり美しい物だったそうだ。

タタッ！

「……よっ」

闘技場のステージに無事着地する二人。ちなみに、アレイシアは既に翼をしまっていた。

???ざわざわ……………

観客席にざわめきが走る。それは恐らく、両者共に血まみれになっ
ていたからだろう。尤も、それはアレイシアの肩から流れ出た血
なのだが。

アレイシアは、隣に立つ裕リセルに目を向ける。そして、いつもより幾
分小さい声で言った。

「ハア……裕、私ちょっと疲れたから……寝るわ……」

ドサツ……

「……あ、アレイシア？」

地に倒れたアレイシアを見て、観客全体が騒然となった。
決勝戦まで勝ち残って来た、闘技大会最年少の少女。その人気は
いつの間にか、他の選手とは比べ物にならない程になっていたの
で
ある。

そんな『学園の人気者』が決勝戦で負けたとあれば、誰もが驚く
事だろう。

『ゆ、優勝、決まりましたあッ!! 勝者は???』

「待て!!」

最後の判定を下そうとした司会の言葉を、裕リセルが大声で遮った。そ

の様な事をすれば当然、観客の視線が一気に裕^{リセル}に集まる。

裕^{リセル}は、司会が持つ拡声の魔法陣が描かれた板を手にとると、観客全員に告げた。

『勝者はアレイシア、異論は認めない!!』

その言葉と同時に、周りの観客席から徐々に拍手が巻き起こる。それはいつしか、今までで最も大きな拍手となった。

「司会さん……勝手にやって悪かったかな？」

「い、いや、君が良いなら大丈夫だ。それなりの理由があるんだと思うし」

「ありがとう。大丈夫で良かったよ……」

その後、裕^{リセル}はアレイシアの体を抱きかかえ、一先ずはと保健室に当たる部屋へと運んで行った。それまでに、肩の傷は既にほとんど塞がっていたというのは余談である。

新暦百六十九年度の学園全体闘技大会は、史上最年少で出場した吸血鬼の少女、アレイシアの優勝に終わった。

02・36 闘技大会本戦 決勝戦 2（後書き）

感想評価や誤字脱字の報告、アドバイスをいつでもお待ちしております！

くやつぱりやろうよ謎コーナー」

七篠「総合評価がもうすぐで1,400に届きそうです。読者の皆様、今回も読んで頂きありがとうございます！」

アリア「そういえば今回の話、本来はリセルと裕を同一人物にする予定は無かったんでしょ？」

七篠「実はそうなんですよ…… 大会くらいはと思って作成したプロットからは実際、かなりかけ離れています」

アリア「それって、プロット作る意味無いじゃん」

七篠「……確かに。これである名言を思い出しましたよ」

アリア「それは？」

七篠「アムラン氏が、ある曲を作曲した時に言った言葉です」

『ひとたび書き始めてみると、最初は全く予想しなかった方向へと、勝手に進んでいくものだ』

アリア「……………かなりいい事言ってる」

七篠「もの凄く痛感しました（笑）」

アリア「では、感想評価など、いつでもお待ちしております♪」

02・37 真夜中の思い出話（前書き）

今回は短めです。

ストーリーが動き出すのは、きっと次回からになります。

02・37 真夜中の思い出話

闘技場の中にある保健室の様な部屋。そのベッドには、アレシアが静かな寝息を立てて眠っていた。

彼女が身に着けているのは緋色のロングスカートだけであり、肩から胸にかけては包帯が巻かれている。包帯は恐らく、肩の傷はほとんど塞がっているとは言え、心配に思った者が巻いたのだろう。

「アリアさん、まだ起きませんね……」

「……はい」

心配そうに話すフィアンとクレア。シェリアナに至っては、ベッドの隣に座り込んで今すぐにも泣いてしまいそうな表情をしている。

反対側に立っているナディアとオーラスも、アレシアを心配そうに見守っていた。……時折、壁際に立っているリセルに『お前のせいだ』と言わんばかりの鋭い視線を浴びているのは気のせいだと思いたい……

「う……」

「……！！　今、ちょっと動いた……！？」

小さく声を漏らしたアレシアを見て、一番早く反応したのはシェリアナだった。そして、シェリアナがアレシアの右手を掴むと同時に、突然寝言を言い始めるアレシア。

「んう……セリア……もう飲めないよ……」

「平和な夢ですね……」

「……私？」

アレイシアの事を心配して、ずっとベッドの傍で見守っていた六人は、案外心配する事は無かったのかもしれないと安堵するのであった。

「……あわ！？　アリア起きて！！」

そこで突然、シェリアナの手を強く引くアレイシア。意識してか、それとも寝ぼけて無意識の内か。それが分からないのが怖い所だ。シェリアナを抱き寄せると、その首の後ろに牙を突き立て、口を押し付ける様に血を吸い始めた。思えば先程の寝言。シェリアナの血を吸う夢でも見ていたのかもしれない。

「助けて！　捕食される！！」

「アリアさん起きて下さい！」

「……んん……？」

フィアンの呼びかけに、アレイシアの目がわずかに開かれる。だが、その紅い瞳はシェリアナの姿を捉えると、かえって安心したかの様に再び閉じられた。

そこで勿論、アレイシアは吸血を再開する。

「あああ、ああ……助け……て………」

ガクッ……

「セリアさあぁんっ！！」

クレアのその叫び虚しく。アレイシアは、それから数分にも渡ってシェリアナの血を吸い続けた。

いつもは意識があるからいいものの、意識の無いアレイシアに血を吸われてしまつては、どこまで吸われるか分からない。さらに、どうしてもアレイシアを引き剥がす事が出来ないという恐怖がある。

ただ良かった点は、これでシェリアナに吸血に対するトラウマが植え付けられなかった事だろう。

「……で、私は何を？」

そして、やっと意識を取り戻したアレイシアの第一声がこれである。

「何を、じゃないですよ……セリアさんの血を吸い続けてたんですよ?。」

「あ。確かに血の味が……」

そう言い、アレイシアはすぐ隣で眠っている??もとい、倒れているシェリアナに目を向けた。吸血鬼特有の白い肌が、更に青白くなっている気がするのは何故だろうか。

「……セリア！？ ごめんっ！！」

「あ……アリア……？」

？？？その後、アレイシアが起きたという事を担当の先生に伝えた所、すぐに寮に戻っていいとの許可が貰えたため、アレイシアは眠っているシェリアナを背負い、寮室へと戻って行った。

その日の夜。

アレイシアは、学園で最も高いと言われている教職員塔の最上部に来ていた。今までは隠していた筈の翼を大きく広げ、待ち合わせの人物が来るのを今か今かと待っている。

バサッ！！

そこで、大きく羽ばたく音。アレイシアがそちらに目を向けると、灰色の翼を羽ばたかせるリセルが空中に浮かんでいた。

「ごめん、ちょっと遅れたかな？」

「別に、気にしていないわ」

短いやり取りの後、リセルはアレイシアの隣に腰を下ろす。塔の最上部は円錐状になっているため、御世辞にも座りやすい場所とは言えないのだが。

「ふう……じゃ、話してくれるわよね？」

「元々そのつもりだよ」

何故二人がこの場に來たのかというと、互いに現在に至るまでの経緯を話したかったからである。

リセルは少し息を吸い込むと、アレイシアに向けてゆっくりと話し始めた。

「十二年前だったかな……」

十二年前、地球で大地震が起こった日。

祐は東次を転生させた後、その転生体であるアレイシアが心配でならなくなってしまったのだ。そして、天界の友人に仕事を任せ、祐自らこの世界に降り立ったのである。彼が言う『友人』の中には、暇にしていたワルキューレの黒美さんも含まれているのだろう。

そして、この世界にやって來た裕は五歳の竜人に適合し、リセル・デイトリーの名でとある竜人家族の養子になったのである。彼の説明によると、適合というのは神にのみ許された権利であり、一時的に己の肉体を他の種族に変える事なのだそうだ。

アレイシアはそこで、なら吸血鬼になれば良かったのに、と思ったのは内緒である。

リセルが学園に入学してから五年。第五学年になったりリセルは、ある興味深い噂を耳にする。

『今年入学した一年生にもの凄く可愛い黒髪の娘がいるらしいんだけど、お前聞いた事あるか？』

それを聞いたリセルは、十中八九アレイシアだなど見当を付けたという。

「そして一昨日の闘技大会。偶然にも、決勝戦まで勝ち残った二人は奇跡の再開を果たしたのである……とか言ってみる」

「……成る程。私が心配、それだけの理由で天界の仕事を蔑ろにしないで私の所に来たと？」

「……！！ あ、まあ、そう言う事に、なるかな？」

アレイシアの威圧的な雰囲気、冷や汗を流し、口がうまく回らないリセル。それを見たアレイシアはと言うと……

「ふふつ、やっぱり貴方をからかうのは面白いつ……！」

「ちょ、おまつ……！！！」

この時のリセルの反応は、いつか東次が裕をからかった時の反応と全く同じであった。その事に懐かしさを覚えた二人は、それから朝までずっと、思い出話に耽ったという。

02・37 真夜中の思い出話（後書き）

感想評価や誤字脱字の報告、アドバイスなどをお待ちしております！

アリア「感想評価を入れて行ってね」

フィア「Web拍手のコメントも、お待ちしております！」

##-## アレイシア（絵：小慶美様）

なんとこの小説の主人公、アレイシアちゃんの絵を描いて下さる方が見つかりました！

ですがその直後、更に二人から描かせて下さいとの申し出が！？

そしてその二人の内一人、小慶美様シャチンメイから完成した絵が届きました！

感謝を込めて、こちらへと上げさせて頂きます！

>i18608—2107<

→クリックで『みてみん』へ→

服装からして恐らく、八歳〜学園入学直後でしょう。

髪型もいいし、あの表情が何とも……ッ！！

小慶美様のサイトはこちら↓<http://sinogikiriha.tuzigiri.com/>

小慶美様、本当にありがとうございますっ！m（＿）（＿）m

ではではっ！

##-## アレイシア（絵：朔宵水雫様）

ちょっと遅れて、二枚目のアレイシアちゃんの絵が届きました！！

描いて下さったのは朔宵水雫様^{Kiyooshuna}、描かせて頂きたいという申し出を下さった二人目の方です。

では、どぞお！

>i18732—2107<

→クリックで『みてみる』へ→

服装がまた、イイ！！

シエリアナに向かって、顔を赤くして照れ隠しに叫んでいる様子が良く思い浮かぶのは当方だけですかね？

朔宵水雫様のサイトはこちら↓
<http://www.geocities.jp/mznynkt32104/1.1.IND EX.html>

本当にありがとうございます、朔宵水雫様^^

では、次から本編ですよ～

03・01 学園内ギルド（前書き）

……あれ？

おかしいな……

ワンシーン当たりの描写量がやたらと増えた気がする……？

書き始めた時は1,500文字を予定としていたはずの文が、2,500文字に増えてたり（笑）

では、本編どうぞー！

03 - 01 学園内ギルド

魔法魔術学園の広い敷地の中には、本来は冒険者のために設立されたギルドの支部がある。

ギルド自体は冒険者向けの設備であるにもかかわらず、学園の中に支部があるのは何故か。それは、ギルドの中で最も大きい『依頼サービス』には、実践的な戦闘技術を磨く事が出来る、魔物の討伐依頼なども多く入って来るからだ。……むしろ、そっちがメインとも言えるだろう。

現在アレイシアは、校舎の脇にある学園内ギルドの前に来ていた。入り口の扉を両側に押し開け、喧^{けんそう}噪な建物の中へと入る。

「んー……」

ギルドの中は長方形の広い部屋となっており、奥には受付の者と思われる人が三人立っていた。

アレイシアは迷わずそこまで歩くと、彼女としては重要なある事に気が付く。アレイシアの視線の高さと受付の台の高さが全く同じなのだ。

爪先立ちになって背伸びをし、何とか頭だけは台の上に乗せる。

そこで、アレイシアの顔を覗き込む受付の男。

「……ギルドの依頼はどうやって受けるの？」

「え、受ける？ てつきり依頼を出しに来たのかと……」

「そうね……第一学年で依頼を受ける生徒ってそうそう居ないらしいし」

「……ならやつぱり、依頼を受けるのは始めてかな？ 学園証があれば今すぐにも依頼は受けられる」

アレイシアはそれを聞き、どうしたものかと考えを巡らす。学園証には、やたらと高い魔力量、この世界では知られていない霊力と妖力、神しか持ち得ない筈の神力についてが書かれているからだ。

だが、こればかりは仕方無い。学園証を見せなければ、当然いつまで経っても依頼を受ける事が出来ないからだ。

スカートのポケットから学園証を取り出し、受付の男の前に差し出すアレイシア。ちなみに今日の彼女の服装は、黒を基調としたワンピース風ドレスとなっている。

「……はい」

「えーと、一年Sクラスのアレイシア・メルヴィナ・ラトロミアさん……って、三日前の闘技大会で優勝した娘！？」

「そうだけど……あまり大きい声出さないで。周りが見てるから……」

「あ、ああ、悪かった」

ギルド内の他の生徒達の視線が突き刺さる。容姿から判断して、もしかしたら……程度の噂は既に飛び交っていた様だが、それもどうやら確信へと変わってしまったらしい。周りの人達は、アレイシアの方を指差してはコソコソと何かを話している。

「ほいつ」

再び、アレイシアの方へと手渡された学園証。それをよく見てみると、名前などの項目の下に『ギルドランク：F』と書かれていた。

「そこに書かれているのが……まあ、見ての通りだな。それでもう依頼は受けられる」

「……聞かないの？」

「ん？ 何をだ？」

「……ならいいわ」

どうやら、闘技大会で優勝した者の名前という事に目を奪われて、魔力量などの項目には目が行かなかった様だ。その事に安堵したアレイシアは、受付の男に問う。

「ギルドランクはどうやったら上げられるの？」

「そのギルドランクと同じランクの依頼を十六回受ければ、一つ上のランクに上がる事が出来る。それと、一つ上のランクの依頼なら八回、二つ上のランクなら四回、更に上で二回、一回と、上のランクに上がる事が出来るな」

「へえ……で、その依頼はどこに？」

「その掲示板に上げてある。好きなのを取って来ていい」

そう言い、壁際の掲示板を指差す男。

その掲示板には、依頼の詳細が書かれていると思われる紙が大量にひしめきあっていた。紙が重なり過ぎていたためか、明らかに隠れて見えなくなってしまうている依頼もある。

「……ねえ、二つ目の掲示板を設置する気は無いの？」

「……ああ、考えている」

アレイシアは、掲示板の上から目を通して行く。その殆どがランクDとEであり、C以上やFは殆ど無かった。

そんな依頼の中に、一際目立つ大きい紙に書かれたBランクの依頼があった。やはりアレイシアは、その依頼の内容を興味津々といった様子で読んで行く。

「西の草原……ロアブ？」

「その依頼はちょっと難しいんじゃないかな？ 西の草原周辺の草木を荒らし回っている巨大な魔物だそうだ。……まあ、ロアブの被害も最近は全く無いんだがな」

その説明を聞いたアレイシアは、脳内に少し引つ掛かる物を感じた。だが、大した事はない筈だと、他の依頼を探し始める。今日ギルドに来たのは何も、魔物討伐の依頼を受けようと思って来た訳ではないからだ。

「やっと見つけた。これ……と、これ」

「お前……正気か！？ それは両方とも盗賊の被害の依頼だぞ！？」

実は、アレイシアが探していたのは盗賊関係の依頼であった。こ

れは勿論、数度に渡ってアレイシアを殺そうと企てたソルフの手掛かりを掴むためだ。これで手掛かりも何も掴めなくても、少なくとも人助けにはなる。そう考えたアレイシアは、遂に実行に移す事にしたのだ。

「分かってる。私はいつでも正気よ」

「そう言う奴が一番正気っぽくない……」

「大丈夫！ この二枚の依頼でお願い」

「……はぁ……本当に大丈夫か？」

その意見も尤もである。

?? 依頼を遂行するに当たり、自身の身に如何なる災難が降り掛かるうともギルドは責任を負わない。

これが、ギルドの暗黙の了解だ。これでは尚更、アレイシアの様な幼い少女を盗賊の元に行かすなど、受付の男にとっては良心が痛むという物だった。

「だから大丈夫だって！」

「大丈夫……かな？ まあ、闘技大会でもあんな凄い戦いをした娘だし……な？」

「……そういうわけで。よろしく、おにーさん！」

「あ、ああ。分かった……その紙から必要な情報を書き出しておく
と良い。主に、場所やら人数だな」

そう言われたアレイシアは、持参のメモ帳に依頼内容を書き写して行く。この時に使っているのは何故か日本語だ。それは精神の故郷の言葉。忘れる訳にはいかないと、百年以上も復習を続けて来たのだ。

この時アレイシアが実際に、日本語でメモを取った物がこれである。

一つ目。ティルフ山の南側、自ぜんのどうくつを使ったかくれ家を持っている。人数は少なめで四人。Cランク。

二つ目。同じくティルフ山の、北側の頂上近く。トンネルとしてほられて工事が止められた穴を使っている。二十人以上いるといううわさがある。Bランク。

両方、とうぞくの長を倒せば大丈夫。

若干、漢字が頭から抜け落ちてしまっているのは御愛嬌。むしろ、日常的に日本語を使わない環境にありながらも、百年以上も平仮名を忘れないというのは凄い事だ。吸血鬼は頭腦的な所でも人間に勝るのかもしれないと考えたアレイシア。人間と吸血鬼、二つの種族を経験して来たからこそ思い付ける事だった。

「書き終わったから、後は良いよね？」

「ああ。くれぐれも盗賊には捕まらなくな。何されるか分かったもんじゃない……」

「分かってるっ！」

アレイシアのその一言に、本当に分かっているのかと心配になる受付の男。

ギルドの建物から出て行ったアレシアを見送った後。彼女が取った依頼の紙を整理するべく、再び受付の台へと向かって行った。

03・01 学園内ギルド（後書き）

誤字脱字の報告や、感想評価アドバイスなど、いつでも待っています！

「どこが謎だか謎コーナー」

アリア「私の絵がいつぱいだ」

クレア「嬉しそうですね」

アリア「今、セリアの絵も書いてくれる人がいるんだって！」

セリア「いいでしょう！」

ファイア・クレア「……私達は？」

七篠「自分としては、四人並んだ絵もいいかなあ、と思うけど」

クレア「いつか、描いて頂きたいものですね」

アリア「では、感想評価など、お待ちしております」

セリア「評価、入れて行ってね」

03 - 02 盗賊の隠れ家

バサバサッ！

「……つと」

翼を発現させて空を飛んでいたアレイシアは、目的の場所に辿り着いた事を確認するとゆっくりと地面に降りて行く。

目的の場所というのは勿論、二つの盗賊集団が集まっているティルフ山だ。

ティルフ山というのは、標高が四千メートル（千メートル）程度の緑の多い山であり、鉱石の発掘も盛んに行われている事で有名だ。

これはあくまでもアレイシアの推測だが、この辺りの盗賊は、鉱石を運搬している人や、食料や資材を運び入れている人を狙っているのだろう。

「……物質魔力構成化」

アレイシアがそう呟くと、翼は魔力へと姿を変え、背中魔法陣に収まった。彼女の背中に残ったのは、緋色の服に空いた二つの穴だけ。その穴はすぐに、アレイシアの長い黒髪に隠された。

手近な木の幹に寄り掛かり、一息ついたアレイシアは、早速探索を始めようと歩き出す。

腰に巻かれたベルトの右側。魔導書を入れておける様になっているホルダーからメモ帳を取り出し、それを一枚一枚捲って行く。

「うー……」

山の南側の少数盗賊集団と、山の頂上の中規模盗賊集団。近いのはどちらかといえば、前者の方だろう。何故かといえば、この山は学園の北に当たるため、アレイシアが辿り着いたのは山の南側だったからだ。

「……？」

ふとそこでアレイシアは、かなり近くから人の気配を感じ取る事が出来た。人数は？？？四人。

実はアレイシア、神力の応用により、気配から正確な人数を割り出す事くらいは余裕で出来る様になっていたのだ。……そして、感じ取った人数は、南側の少数盗賊集団と全く同じであった。

「……ッ！」

？？？水球！！

場所を特定し、不意打ちを掛けられる前にと先手を打つアレイシア。

ガササッ！！

もうバレているという事を悟ったのか。茂みの中から飛び出してきたのは、如何にも『俺達盗賊』と言わんばかりの服装をした四人組だった。

バシヤッ！

「うぉあぁっ!？」

アレイシアが放った水球が顔面に直撃し、叫び声を上げながら地面にダイブする男。

残った三人はアレイシアの方を見ると、ニヤニヤと嫌な笑みを浮かべた。正直、始めてウエルムに会った時の方がまだましだ。

「ほぉー……」

「こいつぁ中々……」

二人の男の考えが手に取る様に分かったアレイシア。
全身が粟立つのが分かる。これを一言で表せば、生理的嫌悪だろ
う。

「あーやだやだ……」

ボツ!

「!?! 何時の間にぁ熱ぢゃぁあッ!？」

「熱ッア!？ うぁ……助けっ……!?!」

男二人の服が突然燃え上がる。その熱さから逃れようと必至にも
がく二人だが、当然”炎”からは逃れられる筈も無く。その炎が消
えた??? いや、アレイシアが炎を消した時には、既に二人は気絶し
てしまっていた。

残った一人に向き直るアレイシア。盗賊の仲間二人が攻撃された

にも関わらず、それを傍目に見ているだけで、全く助けようとしなかった男だ。

「……たく。この役立たずめが……」

そして、拳句の果てにはこの発言。アレイシアがこの男に対して怒りを覚えたのも、極自然の事だっただろう。

「……この中でボスは誰？」

「この俺だ。良くも……」

ガッ！

「な……！？」

倒れている男が持っていた縄を奪い取り、アレイシアは一瞬で男の背後に回り込んだ。そして、一番近くの木の下に硬い結び目を作って男を縛り付ける。

「……良かった。上手くボスが残ってくれて」

「貴様あ……何が言いたい！？」

「ソルフって名前に聞き覚えはないかしら？」

「……くっ……無いな」

「……嘘じゃないみたいね」

魔力の揺らぎが無い事からも、この男は嘘をついている訳ではないという事が理解出来た。

これは、手掛かりが掴めなかったという事になるのか、ソルフは小さな盗賊に興味が無かったという事になるのか。それはまだ分からない。

「あ。貴方どうしよう……」

「……………」

これから山頂付近を目指すアレイシアは、この男を木に縛り付けたままで良いものかと考えた。少なからず、この山にも魔物は潜んでいるのだ。このような場所に縛り付けて置いたら、魔物にとつての格好のエサとなってしまう。それはアレイシアとしても後味が悪い出来れば生かしたまま、ギルドに連れ帰りたい所だ。

「んー……あ、そうだ」

男を縛り付けてある木を中心に、地面に倒れている三人を囲う様に結界を張る。その結界は、例えこの三人が起きても決して破る事が出来ないであろう程の強度だ。

「後で、また来るわね」

「ちょ、待てえッ!!」

耳が痛い程の大声で呼び止める男を無視し、アレイシアはその場から瞬間移動。周囲に全く人がいないという事を確認すると、すぐに翼を広げてその場を飛び立った。

直感的に頂上だと思う方向に進み始めてからわずか三分足らず。アレイシアは、山頂付近の山肌に開いた巨大な穴を発見した。それが恐らく盗賊の隠れ家だろう。アレイシアは、穴の入り口まで一気に下降。クレーターが出来るのではと思わせる程の速度で地面に着地した。

ズガカツ!!

辺りを見回せば、そこかしこに出来上がっている土の山。元々はトンネルを掘っている途中で工事中断となった場所だからかと当たりを付ける。

木々をかき分け、トンネルの中へと足を踏み入れる。そこには、明らかに人工物である炎魔法のランプが並べられていた。土がそのまま地面と天井になっているからか、トンネルの中はどれも湿度が高い。それ程温度が高くないにも関わらず、大汗でもかいた様な感覚だ。

しばらく歩き続けると、トンネルの両側に木製の扉が見つかった。もしかしたら、中には盗賊の一員がいるかもしれないし、囚われている人もいるかもしれない。

「……!!」

アレイシアは音を立てない様に刀を抜き、警戒しながらも、その扉を一気に開け放った。

03・02 盗賊の隠れ家（後書き）

続きは次回です！

感想評価や誤字脱字の報告、アドバイスなどはいつでもどうぞ！

フィア「感想評価、いつでもお待ちしております！」

セリア「絶対よ！絶対入れて行ってね！」

アリア「……こちら（汗）」

03 - 03 盗賊の隠れ家 2

アレイシアが扉を開け放った瞬間。目に入ってきたのは、明らかに盗賊といった格好の三人と、見^み窄^{すぼ}らしい服装をした四人の男女だった。

三人の盗賊はアレイシアの姿を見るなり、目を白黒させながら奥の扉の方へと叫ぶ。

「お、お頭っ！ 侵入者だ！！」

「……！！ しかもこいつ、年端も行かねえ女だぜ！？」

その言葉を聞きつけたのか、扉の奥からはドタバタと。明らかに、何人もの人が扉へと押し寄せて来ているのが分かった。

そして、その扉がわずかに開かれた瞬間？？？

「氷球！」

ガンッ！！

「ぎゃああっ！？」

「うぐわあっ！！」

アレイシアによって放たれた氷球が、扉の表面を強く直撃する。その攻撃により、ある者は扉で腕を挟み、ある者は体を強く打った。

「……こ、こいつ……！！」

「よ……っ!!」

近くの壁に立て掛けてあった剣を手に取り、アレイシアの方へと走り出す盗賊三人組。

一番最初にアレイシアの元へと到達した一人目の男。横薙ぎの一閃を、そのか細い胴を引き裂かんと言わんばかりに放つ。

「遅い……ッ!!」

「お!？」

しかし、アレイシアからしてみれば、その攻撃はあまりにもゆっくuriとしたものだった。

しゃがむ事によって当然難無くかわしたアレイシアは、更に上方から迫り来る二人目の男の剣を、バックステップで舞う様に移動。こちらにもかわず事に成功した。

攻撃が遅れた三人目の男。アレイシアは体勢を低く取ると、その男の足元まで一瞬で移動。腹部に思いつ切り身体強化付きの蹴りを見舞った。

「ゲファッ!？」

「ちょ、ま……!!」

口から血を吐き軽々と吹き飛ばされた男は、その後ろに立っていた一人目の男に当たり、そのまま床に崩れ落ちる。二人共、どうやら頭を打って気絶してしまった様だ。

「……さて、と」

「ひ……！！！」

アレイシアは立ち上がり、一人立ちすくむ男の方へと向き直る。それを見た男は、恐怖によるものなのか、息を吞んで足を震わせた。一步一步、恐怖を煽る様に。ゆっくりと歩を進めて行くアレイシアの様子に、思わず後退る男。……当然本人としては、恐怖を煽るつもりなど毛頭も無いのだが。

ザッ！

「……あ……！！！」

「おやすみっ！」

二人の距離があと二歩程度になったその瞬間。アレイシアは男の背後に瞬間移動し、首筋に手を当てて少量の魔力を流した。闘技大会で相手を気絶させるのに使ったあの手法である。

アレイシアは、三人が気絶した事を確認すると、その場で呆然と座っている四人の男女の方へと目を向けた。良く見てみれば、その場の四人は全員猫人であった。更にその内二人は、十歳程度の少年少女である。

「貴方達は、どうしてここに？」

「……あ、僕達は……ッ……！！！」

「あ、言いたくなければ言わなくても良いのよ？」

アレイシアはそう言うが、少年の隣に座っていた少女が話を続ける。

「私達の村は盗賊に襲われたの……それで、私とここにいる三人は、今気付いたらここにいて……」

「……他に人はいないの？」

「村にもつと人はいたよ？　でも、みんな奥に連れていかれちゃった……」

それを聞いたアレイシアは、考えたくも無いある予想に辿り着く。この盗賊は、多種族が友好的に暮らしているイルクス王国から猫人を連れ出し、獣人を奴隷として扱う傾向のある他国に売り払おうとしているのではないか、という事である。

もしもそれが本当ならば、当然放っておく訳にはいかない。アレイシアの親友であるフィアンも、言わずもがな、猫人であるからだ。人間”以外”の種族は一般的に、種族間の友好をとっても大切にするものなのである。

「……分かった。私、今から奥に行つてなんとか助けて来るわ」

「え、いいの!？」

「いいんですか？　で、でも、そんなに迷惑は……」

「いって。私がやりたくてやってる事だから。利害一致よ」

静止の声を振り切ったアレイシアは、鞘に収められた刀を抜き放ち、奥の扉の方へと歩き出した。

アレイシアの小さな手が、取っ手を掴んだその瞬間???

「今だっ！ 捕らえろおおッ！！」

「うおおああ！！」

「！？」

扉の後ろから、突如雪崩の様に押し寄せて来た盗賊。その数、十三人。

余りの唐突さに対応が遅れてしまったアレイシアは、数秒と経たない内に体を縄で拘束されてしまう。

「く……っ！！」

「ほおー……これはまた可愛いお客さんだねえ……」

そう言い、アレイシアの隣に立つ男。他の盗賊の恐れる様な反応からして、この男が盗賊の長だろう。

「お前ら、こいつは一応地下牢にでも突っ込んで。後で売るなり何なりすればいい！」

「オウツー！！」

アレイシアはそのまま、盗賊の部下に抱え上げられ、四人の猫人と一緒に地下牢へと連れて行かれてしまった。

アレイシアがその時に見た、猫人四人の絶望的な表情は、これか

ら一生忘れる事が無いだろう。

ドサッ！

「あぐあっ……！！！」

「痛っ！」

ガチャン！

「そこでおとなしくしとけ！！！」

五人を乱暴に投げ捨て、地下牢の鍵を閉める盗賊の男。アレイシアが忌まわしげな視線を浴びせるも、何食わぬ顔で去って行ってしまった。

地下牢の中には、猫人と思われる人が何人もいた。しかし、誰も喋る気力は無いらしく、斜め下を向いて暗い表情をしている。

人数が多いせいか、それとも土がそのまま床になっているせいか。地下牢の中は、洞窟の入り口以上に湿っぽかった。

「……姉ちゃん、解ほどいてあげる」

先程の猫人の少年が、アレイシアを縛り付けている縄を持ってそう言う。その少年の瞳を見れば、今にも涙が零れ落ちてしまいそうだという事が分かった。

「お願い……」

「……うん」

少年はまず、アレイシアの肘の位置から胴に回されている縄を解く。次に、アレイシアの背中であの手首を縛っている縄を解いた。そして最後に、スカートの上からしつこい位に両足に巻かれている縄を、両手が開いたアレイシアも一緒に解いて行く。

やっと全ての縄を解き終えた二人。アレイシアは、床が土になっている事も気にせずに、大の字になって手足を伸ばした。

「ふう……ありがとう」

「……姉ちゃん大丈夫？」

「大丈夫よ。絶対に、ここから出してあげるからね」

「……うん」

アレイシアは少年を抱き締める。すると少年は、盗賊に襲撃された恐怖と現在の安心感からか、胸に顔を埋めて泣き始めてしまった。アレイシアは少年の頭を撫で、この場の全員を無事に返す事を誓った。

03・03 盗賊の隠れ家 2（後書き）

感想評価や誤字脱字の報告、アドバイスなどはいつでもどうぞ！
遠慮せずに入れて行っ下さいね^^

セリア「総合評価が1 / 600超えたわよ！」

アリア「読者のみんな、ありがとう!!」

セリア「では、画面の向こうの皆さんへ。感想評価、入れて行っ
ね！」

アリア「画面の向こうって……」（笑） 感想評価、お待ちしております
まっすっ」

##-## ファイン（絵：かげつ様）

かげつ様から、フィアンちゃんの絵が届きました！

本当はセリアの方が先だったのに、何故かこちらが早かった。うん。

では、どぞっ！

>i19152—2107<

→クリックで『みてみん』へ→

……つか、”Dear七篠さん”って（笑）
嬉しいですw

幼さがよく出ています。

おまけ。

>i19153—2107<

→クリックで『みてみん』へ→

かげつ様のサイトはこちら↓
http://hp.xxpock
e.txt.jp/pudd24/

かげつ様、どうもありがとうございますっ！^^

では、次話で会いましょう

##-## シェリアナ（絵：朔宵水雫様）

二枚目のアレイシアちゃんの絵を描いて下さった、朔宵（Kiyoi）水雫（Yuna）様から、シェリアナちゃんの絵が届きました。

正直御世話になりすぎて、申し訳なさとし難さが共存します（笑）

では、この下に。

>i19198—2107<

→クリックで『みてみる』へ→

服は学園のローブと言っておきましたり。

口元をよく見てみると、牙があります。

正直、噛まれてみたいd（マテ

朔宵水雫様のサイトはこちら↓
http://www.geocities.jp/mznynkt32104/1.1.IND
EX.htm

朔宵水雫様、またまたありがとうございますっ！

03・04 盗賊の隠れ家 3（前書き）

更新遅れてすみません！

インターネット繋がらないって辛いですね……

では、今回少し長めですぞっ！

アレイシアは、泣き疲れて眠ってしまった少年を横に退かし、地下牢の人達の様子を見るために立ち上がった。彼女の服は、少年の涙と地下牢の土で汚れてしまっているが、当然そんな事は気にしていられない。なるべく早く盗賊の長を倒し、この場にいる全員と脱出するのが先決だ。

辺りを見回せば、木箱に腰を下ろした者。壁に背を預けている者。ただ呆然と仰向けに寝転がっている者。

誰もが皆、意気消沈としているのが分かった。

しかしその中には、アレイシアの方を希望の眼差しで見つめている者もいる。

——この状況を救ってくれる女神様は彼女なのではないかと。

当の本人としては、何て傍迷惑な希望なのだろうかと突っ込みたくなる所なのだが。彼女の容姿は実際、一般的には女神と勘違いされる程には整っているというのもまた事実なのである。

何にせよ、まずは行動を取らなければ始まらないと考えたアレイシアは、ランプが一つしか無い暗い地下牢を照らすために、初級光系統魔法を発動させた。

イレジーエト

「照射！」

「……！？」

「お、おお……これは……！！」

アレイシアが胸の前に掲げた両手。その間には、地下牢全体を十分に照らす明るさの光があった。その光景、他の者にはさぞ神秘的に見えた事だろう。

ちなみに、ここでアレイシアが照射を発動させたのは、暗視の効かない人間までもが地下牢に居るのを確認したからである。

スライアオブヒール
「治癒結果……つと」

アレイシアは更に、地下牢全体に治癒魔法結界を張った。それは、結界を張った場所にそのまま治癒の効果を付加するものであり、大人数を一気に治癒するのに向いたものだ。

当然、治癒する人数相応の魔力を消費する事になるのだが。アレイシアにとっては雀の涙である。

地面に座り込んだ猫人の男。アレイシアと一緒に連れ込まれてきた四人の内一人だ。その男に、アレイシアは話しかける。

「……ここから脱出しましょう。貴方達はここで待っていればいいわ。その間に私が盗賊を打ちのめしてくるから」

「本当に大丈夫か？ さつきも……下手したら襲われてたぞ？」

「あの時はまあ……油断してたわ」

「心配したんだからな……本当に……」

そう言うと、男は下を向いて黙りこくってしまった。照射を発動しているとはいえ、薄暗い地下牢の中では、その表情を窺い知るこ

とは出来ない。

「行つて来いよ……早く」

「……ふふつ、分かったわ。他の人達にも言つておいてね」

ぶつきらばうな言い様から『何か』を察したアレイシアは、口元に笑みを浮かべながら歩き出した。

男は小声で、アレイシアの背中に向けて呟やく。

「お前、吸血鬼……か？」

「……いつから気付いてたの？」

「笑つた時に、牙が丸見えだったぞ？」

「あ。……別に、隠す事でも無いんだけどね」

その後、瞬間移動で地下牢から脱出したアレイシアは、暗くて狭い、迷路の様な洞窟の中を全力疾走していた。

頼りになるのは、自身が地下牢に運び込まれた時の記憶と、現在進行形で発動し続けている気配察知魔法。それと、直感だけだ。

やっと辿り着いたＴ字路。

左側は恐らく、先程アレイシア達がいた出入口付近だろう。そして右側からは、十を超える人間の気配が感じられる。

アレイシアは右に曲がると、それからすぐに行く手を阻む木の扉を見つけた。その扉を木端微塵に斬り捨てようと、腰の刀に手を掛け――

「……！？」

――られなかった。

いつもは腰に携えてある筈の刀が、そこに無かったのである。

「なら……ッ！
エッジオアガタック
風刃改！！」

この技は、本来武器に纏わせて使う風刃を、アレイシアがそのまま使える様にと改良した物である。純粋な風を手に”握”り、その刃を扉に向けて連続で振り下ろした。

ガガコオン！！

「何だあつ！？」

「うわ！？」

バラバラになった扉は風で吹き飛ばされ、その一つ一つが礫ひょうりゅうの攻撃と化す。そして、扉の破片は二人の盗賊を気絶させるに留まった。

「こ、こいつ……！！ 地下牢に入れたんじゃない無かったのか！？」

「いや、確かに入れた筈で……」

「脱出したのよ」

「な……！？」

ギャーギャーと煩く話をする三人。その背後に瞬間移動したアレイシアは、男三人を同時に仕留める様に風刃を横に振るった。

「うあ……！ し、死ぬ……」

「死なれたら私が困るわよ……」

斬り裂かれた服の上から血が滲み出す。アレイシアの計らいにより、傷は比較的浅めだ。

倒れこんだ三人を尻目に、アレイシアは部屋の奥に目を向けた。その鋭い視線に、盗賊の男は一瞬強く威圧される。

「私の刀……じゃなくて、黒くて弧状の棒みたいな物、知らないかしら？」

「……！ だ、誰が貴様に、教えるかッ！！」

そう言う男だが、言葉の前の間をアレイシアは見逃さなかった。明らかに動揺しているのが分かったのである。

本当ならここで聞き出したい所だが、盗賊が刀を奪ったという事が分かっただけでも良かったと言えるだろう。

「なら、貴方達のボスはどこに居るの？」

「……言うと思ってるのか？」

あまりにも予想通りの返答だ。やはりそう簡単には教えてくれない。

そこでアレイシアは、小さく息を吸い、言った。

「^{フレイズストーム}炎嵐。私が十を数えるまでに言いなさい。……十」

アレイシアの周囲に火の粉が発生する。それは風で渦を巻いて行き、徐々に勢いを増して行く。

「八、七……」

「ちょ、待てっ！ 教えるから！！」

「こ、こっちだ！！ こっちに着いて来てくれ！」

その場の男の一人が怯え切った表情で、右の奥に続く洞窟を指差してそう言った。

アレイシアは、元々放つつもりなど無かった炎嵐を霧散させ、歩き出した男の後を着いて行った。脅しにも近い事をしてしまった自分自身への罪悪感を背負いながら――

「……こ、ここだ」

「うん、ありがとう」

どうやらボスが居るらしい場所に到着したアレイシアは、ここまです案内してくれた男に、満面の笑みで感謝の言葉を述べた。先程の罪悪感からのせめてもの償いだ。

だがその男は、顔を赤くしてそっぽを向いてしまった。それを見

たアレイシアは考える。

???そりゃあ……脅迫させられて、ありがとって言われても怒るよね……？

……存外アレイシアは、かなり典型的な鈍感であった。

アレイシアが居る洞窟の先、広くホールの様になっている場所にボスとやらが居るらしい。

「誰か居ますかー？」

「貴様あッ……」

アレイシアの呑気な問いに答えた、机の椅子に座っている男が盗賊の長で間違いないだろう。顔を見れば、アレイシアが縛られた時に横に立っていた男と同じだという事が見て取れた。

「……さて、話してもらいましょうか。猫人の村を襲って、女子供まで見境無く攫って来て、一体何をするつもりなのかしら？」

「お前には関係無い事だ。とっとと出て行きやがれ！！それとも……」

「その先禁則事項！！言ったら即気絶よ？」

言いかけた長はその言葉を飲み込む。アレイシアが目の前に迫り、魔力の込められた拳を鳩尾みそおちに当てていたからだ。

「答えなさい。何をするつもりだったのか」

「そ………！」

「………？」

何かを言っている長だが、その言葉は小さくて聞き取れない。アレイシアが再び問おうとしたその瞬間……？

「……の程度で、言うと思ってんのかあッ……！」

ゴキッ……！

「ぐあ………っ……！」

右から迫る拳骨を、脇腹にもろに食らってしまったアレイシア。今更ながら、長の両手を押さえなかった事を後悔する。

体の中で骨が碎ける嫌な感覚。痛みは殆ど無いものの、肋骨が何本か折られてしまった様だ。しかし、それは高い自然治癒能力であつと言つ間に治つて行つた。

「聞き出したけりや、体か力ずくで来るんだな」

「……分かつた。なら、力ずくでッ……！」

風刃改を発動したアレイシアは、即座に盗賊の長に向けて風の刃を放つた。

……ゴオオッ……！！

03 - 04 盗賊の隠れ家 3 (後書き)

感想評価や誤字脱字の報告、アドバイスなどはいつでも大歓迎です！

フィア「感想評価、遠慮なく送って下さいね！ 私との約束ですよ」

アリア「フィア、それはちょっと……で、では、感想評価、お待ちしておりますっ！」

風の刃がアレイシアによって放たれる。狙いが狂っていないければ、決して避けられる筈の無い攻撃だ。

しかしアレイシアは、狙う事に関しては人一倍下手だとも言えるのであった。何故なら、能力による必中攻撃を可能としてしまっているからだ。

ズカガッ！！

「っ！？」

風刃は長の体に擦りもせず、後ろの壁に彫刻を形どった。アレイシアは、攻撃必中化を発動していなかったのだ。

「お、おいおい……見えない攻撃とかうおあっ！！」

ビキッ！！

「まだ終わっていないわ」

恐々と冷や汗を流す長に向けて、更にもう一度風刃を放つ。そして、手に握った風の剣を真っ直ぐと長の鼻先へと向けた。

「私はあまり貴方達を傷つけたく無いの。猫人を集めて何をしようとしていたのか、それを話せば良い事よ」

「……どうせそう言っておきながら、言ったら俺達を殺すんだろッ！！」

そう言った長は、腰に携えた剣を引き抜き、アレイシアの方へと走り出した。

確かに、そう言って油断を誘っておきながら、情報を引き出したら殺す、何ていうのは良くある話だが。しかし当然アレイシアとしては、そんなつもりは全く無いのだ。

アレイシアのすぐ目の前にまで迫った長は、彼女の胸を狙って剣を横に振るう。

それを見たアレイシア。攻撃を受け止める様に風刃を縦に持ち直した。

しかし、そこでアレイシアは重要な事を忘れていたのである。風の刃では、物理攻撃を止められないのだ。それこそ、剣を両断でもしない限りは。

その事に、剣が当たる寸前で気が付けたアレイシアは、魔法障壁を神力の代用で発動する。

更に剣を防いだ直後、風刃で障壁を破り、意図的な魔力割れを発生させた。いや、この場合は神力割れと呼んだ方が正しいのだろうか。

バキンッ！！

「ぐへあっ!？」

神力の衝撃波に吹き飛ばされた長。元々魔力割れ自体は、それ程強い衝撃波を放たないのだが、高密度の神力によって、その威力は人間一人を吹き飛ばす程にもなっていたのである。

「っ……痛ぁ……!!」

「さてと……まだ、言う気は無いのかしら？」

二度も地を跳ねやつと静止した長。その横に立ったアレイシアは、手足に拘束魔法をかけて動きを封じた。風刃を首の前に添えると、長は恐怖に顔を歪ませる。

「……な、何が知りたいんだ!？」

「そうね……まず一つ、猫人を集めた理由。二つ、私の武器は何処にあるのか。三つ……ソルフって名前に聞き覚えはあるか、ね」

アレイシアがそう言うのと、長は驚いたのかわずかに眼を見開く。やはりそれを見逃さなかったアレイシアは、続けて更に問う。

「どうか、心当たりでもあったの？」

「……い、いや、何でも無い」

長がそう言った瞬間、体から放たれる魔力に明らかな揺らぎが発生したのを感じた。アレイシアの明敏な第六感??魔力に対する感覚が、これほど役に立った日は今までに無い。脳内でそれらしい理由を付け、アレイシアは長に向けて言った。

「嘘はやめなさい。貴方が言った『何でも無い』は、何か別の事象を考えていた時に出る言葉よ」

「く……ッ、言えば良いんだろ、言えば!」

「そう、言えば良いの」

アレイシアの予想外な返答に、長は一瞬言葉を詰まらせるも、一度目を合わせてから観念した様に話し始めた。

「ソルフ……あいつを何で貴様が知っているのかは知らねえが、あいつは俺達の主人みたいなもんだな」

「主人……？ それはと言う事よ？」

「俺達も元は奴隷だったんだ、隣の大陸のクアルシって国でなあ」

何処か苛立ちを込めた様な長の言い分には、逆にアレイシアの方が驚かされた。この発言が嘘では無いという事も、アレイシアの感覚によって確認済みだ。

「で、俺達が居た奴隷商の所に、その国の大臣のソルフって奴がやって来て言ったんだ。ここに居る全員で幾ら出せばいいってな」

「……クアルシの大臣？ ソルフはイルクス王国の大臣の筈だけど……？」

アレイシアは、イルクス国王と話をした時を思い出す。確かにその時『優秀な大臣の一人』と国王は言っていた筈だ。それがまさか、クアルシ国の、と言う訳では無いだろう。

そして、アレイシアはある結論にたどり着く。どちらかの国が、スパイとしてソルフを送り込んでいたのではという事だ。この場合、クアルシがイルクスにスパイを送ったと考えるのが自然だろう。何故なら、小国は技術や方法を大国から盗み、他の国に着いて行こう

とするのが普通だからだ。更に、ソルフが現在行方不明になっているという事実が、その推測に一層真実味を帯びさせる。

尤も、これだけの情報で判断するのは、些か早とちりが過ぎるとも言っののだが。

「……成る程、とりあえず辻褄が合ったわ。続けて」

「ああ。……その後、ソルフは俺達をイルクスの山奥に置いて、盗賊でもしながらなんとか暮らしてけ、って言ったんだな。その代わり、得た物の三分の一は俺に寄越せと」

その言葉からアレイシアは、この盗賊の大体の事情を察する事が出来た。ソルフは奴隷を自由を与え、元奴隷からの恩返しで利益を得ているのだろう。

「……なら、貴方達が猫人を集めていた理由は、彼らを奴隷として売り払い、一攫千金を狙っていたって所かしら？」

「そ、そうだ……」

嘘をついても無駄だという事を悟り、遂に正直に答えた長。それに対しアレイシアは、どうも納得の行かない気持ちになってしまう。この盗賊が元奴隷なら、猫人を奴隷として売った場合に彼らがどのような目に遭うか、良く解っている筈だからだ。

「まあ、いいわ。……良くないけど」

「……あとは、貴様の武器だったか？」

「そうよ」

これが残り一つ、アレイシアが知りたかった事だ。あの刀が無ければ、ベルク先生との約束は果たせない。アレイシアとしては、かなり大事な物なのである。

「この奥に倉庫があつてだな、今まで盗った物が全部入ってる」

「随分と素直に答えるのね」

「今更嘔吐いてどうするってんだよ……」

「……それもそうね」

そしてアレイシアは、長が視線を向けた先、洞窟の更に奥へと歩き出した。盗賊の長にどの様な処置を施すべきか、ソルフはやはり何者なのかと考えを巡らせながら?????

03・05 盗賊の隠れ家 4（後書き）

感想評価や誤字脱字の報告、アドバイスなどはいつでも大歓迎です！

セリア「ぜーったいに、感想評価入れて行ってね！」

アリア「遠慮無く！ 感想評価、いつでもお待ちしております！」

03・06 盗賊の隠れ家 5（前書き）

総合評価が1,800を超えました！
読者の皆様に感謝です！！^^

後半急ぎ過ぎたかなと反省中。
改定予定であります。

長が言った方向へと洞窟を進んで行くと、アレイシアはまた木製の扉を発見した。それを良く見てみれば、鎖で鍵が掛けられているのが分かる。先程の会話で、鍵については全く述べていなかった事を考えると、これは長のささやかな抵抗なのかもしれない。とは言ってもこの程度、アレイシアにとっては全く障害にならなかった。

パキン、とやけに軽い音が洞窟の中に響き、軋みを上げながらその扉は奥へと開く。アレイシアは、魔法で加熱して脆もろくなった鎖を引き千切ったのだ。その軽さと言ったら、アレイシアの見た目相応の年の少女でも簡単に出来る程だろう。

「うわぁ……」

扉の奥に見えた光景に、思わず声を漏らしてしまう。倉庫の広さ自体はそれ程でも無いが、辺りに積み上げられた金銀財宝の山にはアレイシアも圧倒された。

金銀財宝とは言っても、あるのはジュエリーなどの類では無く、金を含んだ石や鉱石、原石などだ。それはやはり、この山が鉱山だからだろうか。これらを全て売り払えば、どれ程の額になるのか見当も付かない。

倉庫の奥には、剣や弓やら、ありとあらゆる武器が乱雑に積み重ねられている。もしかしたらそこに刀があるかもしれないとアレイシアは考え、早速武器の山を掻き分けて刀を探し始めた。

?? 結果から言えば、呆気ない程簡単に見つける事が出来た。何故なら、積み上げられた武器の一番上に置かれていたからだ。まだ

取られたばかりのため、当然と言えば当然なのだが。

「……あ、どーしょ」

刀を腰に携えたアレイシアは、辺りに置かれた盗品の山を見て思う。依頼の内容は、盗賊の長を倒す事及び出来れば生け捕り、という物だが、これらの盗品は一体どうすれば良いのかと。

実は彼女は知らないのだが、ギルドから与えられる盗賊関係の依頼は、殆ど長を仕留める事だけだ。長さえ仕留めてしまえば、後は隠れ家の場所を聞き出すのは簡単な上に、盗品を取り返しに国の兵士を行かせる事も出来る。冒険者としての仕事は、僅かな情報から盗賊の隠れ家を探し出す事に重点が置かれているのだ。

……これは要するに、たった一人で盗賊を壊滅させる事など始めから想定されていなかったという事である。

そんな事実を知らない彼女は、盗品全てを持ち帰るためにと、ある方法を思い付いた。高密度の神力で空間を捻じ曲げ、亜空間を作ってしまうおうという物だ。

黒美さんに教えてもらって以来そのまま放置されている記憶を探り出し、神力を集中させ始める。

しばらくすると、アレイシアの目の前に光の球が浮かぶ。高密度の神力による発光現象だ。しかし、まだ全然神力が足りない。

超高密度の神力で、空間に重圧を与えて穴を開ける。それが、現在アレイシアが実行しようとしている事だ。この世界は神界により『二三・零七九』の番号が振り分けられているが、隣に存在する空っぽの世界『二三・零七八』に、この世界の空間と神力をねじ込ませて新たな空間を作るといふ荒技である。

ちなみにこの方法で繋がられる世界は、上二桁が同じ数でなければならぬという制約を持つ。これは『世界番号の上二桁が異なる、イコール完全なる異世界』というルールに基づいた物だ。下三桁が違ふ場合は重なり合つた世界の時もあるため、比較的簡単に繋ぐ事が出来るのである。

目が痛くて直視出来ない程の光の中央。そこに、少しずつ黒い穴が広がって行く。アレイシアが凝縮した神力はその中へと吸い込まれて行き、瞬く間に発光現象が収まった。更に、小さく空いた穴に、空气中に存在する魔力が大量に流れ込んで行く。

「……大丈夫かな？」

アレイシアが神力を込め始めてから一分足らず。そこに、亜空間への入り口が出現した。中を覗き込んでみると、真つ暗な空間が存在する上に、この場から流れ込んだのか、呼吸可能な空気までもが存在していた。

どれ程の広さなのかは分からないが、今は盗品を持ち帰るのが先決だ。他の事は、後で帰ってから調べればいいだろう。

「早速入れちゃいませう！」

やけに軽い調子でそう言ったアレイシアは、鉱石を鷲掴みにすると亜空間の中へとポンポン投げ入れた。金塊の様な、やたらと重い物まで軽々と掴んでは投げ入れる。

鉱石や原石を粗方入れ終わり、残すは武器と僅かばかりの貴金属類だけとなった。これらは流石に投げてはまずいだらうと、一つずつ手に取って亜空間の中に仕舞い込む。

そして、倉庫の中は空っぽとなり、剥き出しの石壁を晒すのみに

なった。

アレイシアは亜空間を閉じると、再び別の位置に開けられるかを確認した。そして何を思ったのか、ファスナーを開けた様な形???この場合、眼を開けた様な形と言った方が正しいのだろうか???に入り口を開き直す。

「おー……あんな事も出来るかも……?」

最後にそう呟いたアレイシアは、亜空間を閉じて倉庫を後にした。

先程の部屋に戻ったアレイシアは、やはり未だに地面に拘束されている長の隣に立つ。放してくれと視線で訴えかけてくるが、勿論無視しておいた。

「長さん、刀は見つかったわ」

「やっぱり鍵開けたのか……」

「違っの、壊したのよ」

「……成る程。そうかいそうかい……で、俺達はどうなるんだ?」

そう言う長は、どこか覚悟した様な表情をしていた。ギルドに引き渡される事も、最悪???死さえも、覚悟しているのかも知れない。それを考えたアレイシアは、突然罪悪感が込み上げてくる。

元はただの奴隷。言ってしまうえば、ソルフの手の平の上で踊らさ

れているだけだ。実行犯的な経歴はあろうとも、自由を望むという一般的な思想を持つ彼らに取っては、盗みを働く事は致仕方の無い事だったのかも知れない。

アレイシアの気持ちに揺らぎが生まれる。人間は生まれて来る場所を選ぶ事はできない。それは、自らの経験により実証済みだ。

「……………決めたわ。貴方達全員をギルドに通して国王に引き渡す。貴方が国王に会う時、しっかりと自分の口で説明しなさい。今までの事……………勿論、ソルフについてもね」

「そ、そんな事が出来るのか？　こんな俺達に国王が会ってくれる筈が……………」

「あるわ。そんな筈が無いのなら、私が国王に会わせる様にするのよ」

自信たっぷりと言うアレイシアの様子に、長は懐疑的な視線を向ける。

「……………お前、やっぱり何者だ？」

「さあ？　普通の吸血鬼としか言えないわね」

「吸血鬼だったのか……………通りで、その小さい体の割には強いなと」

「他人のコンプレックスに容易く触れる物じゃ無いわよ？」

そこでアレイシアは決意した。学園卒業までに身長を伸ばして見せると。

元々吸血鬼は八歳を過ぎた頃から成長が緩やかになり、アレイシアの両親の様に、十五歳程度の身体を数百年間保つ事になるのだが、現在のアレイシアの身体は十歳程度なものだ。どうせならもう少し成長しておきたいと思うのは極自然な事だろう。

勿論、これはシェリアナにも言える事なのだが。

「で、貴方達をどうやってギルドに送るかなんだけど……」

「……ああ。国王に会って話をさせてくれるならギルドにも喜んで行くわ」

「なら良かった。鉱石を運ぶ馬車にでも乗せてもらえば良いわね」

その後アレイシアは外に出て、鉱石の採掘現場で働いている人達を発見した。辺りは既に暗くなっているが、暗視が効くため何ら問題も無く見つける事が出来た。

「……という訳で、馬車を貸してくれると助かるわ」

「あいつらには俺達も悩まされていたからな。馬車くらい喜んで貸すぜ！」

「ありがとう、おじさん」

「がっはっはっは！！ おじさん言うな！ 俺はまだ若いぜ？」

やたらと陽気なこの男が、鉱石などを運ぶ馬車十七台の所有者な

のだそうだ。商業ギルドの方に鉱石を売るか、工房などに直接売る事によって商売を成り立たせているのだという。

「じゃ、お願い。それと沢山の人が地下牢に囚われているから、彼らも助けて良いわよね？」

「ああ、勿論だ」

そして、アレイシアを乗せた馬車が学園に到着する頃には、既に夜が開けてしまっていた。道中では勿論、木に縛り付けておいた盗賊も回収しておいた。使用した馬車は、盗賊に三台と、地下牢にいた人達に四台、アレイシアを含めその他で一台の合計八台にもなる。ちなみに、学園の正門に到着した時、警備の兵士が何事かと剣を持って駆け寄ってきたが、アレイシアの学園証を見せる事によって事なきを得た。

ギルドに報告するだけでは終わらない。まだまだやる事が沢山あるのだ。

アレイシアは、この件が一段落着いたら絶対に昼寝しまくってやると心に決めたというのは余談である。

03・06 盗賊の隠れ家 5（後書き）

誤字脱字の報告や、感想評価アドバイスなど、いつでも大歓迎です！

アリア「一先ずは、総合評価2,000を目指しましょう！」

クレア「感想を送りにくいという方は、Web拍手の方からどうぞ」

セリア「という訳で、感想評価お待ちしております」

03・07 やることは沢山ありました

学園内ギルドの中に入ったアレイシアは、すぐに受付の男の前まで歩いて行く。朝早くからギルドにいる、数人の生徒達の視線が一斉にアレイシアの方へと注がれた。

しかし今までの経験により、すっかりスルースキルを身につけていたアレイシアは、その痛い視線を完全に無視して受付の台の上に頭を乗せる。ついでに、両腕をだらしなく台の上に伸ばした。

「おはー」

「こんな朝早くに……もしかして、もう依頼成功したのか!？」

「依頼は終わったんだけど……色々と話したい事があるから、出来れば外に出てもらいたいよ。今、忙しかったりする？」

「今は大丈夫だが、一体何があるんだ？」

そう言う男は、入口に向かって歩き出してしまったアレイシアを追いかける様に走り出す。そして、アレイシアが扉を開け放った瞬間、目に入って来た光景に男は驚愕した。そこに八台もの馬車が止まっていたからだ。

「こ、これは……どういう事だ？」

「盗賊二つの人員と囚われていた人達よ。どうしたら良いか分からなかったから、鉱石採掘の人に協力を頼んで馬車を出して貰ったの」

「お前、依頼は長を倒す事だけなんじゃ……紙にも書いてあった筈

だぞ？」

「あ」

アレイシアはその言葉で、紙に書いてあった内容を思い出した。依頼遂行から丁度現在まで、細かい内容を完全にど忘れしていたのである。

その事実のアレイシアは、口元を思わず手で覆ってしまう。受付の男の方を振り向くと、頬を朱に染めながら言った。

「……忘れちゃったわ。テヘツ」

「あのなあ……まあ、とりあえず解った。これをどうすれば良いんだ？」

「国に送るわ。囚われていた人達は、それぞれが住んでいる場所に返すの。出来れば明日がいいわね」

「なら先ずは、依頼関係を少し調べなきゃな。そこで待っていてくれるか？」

男の指示に従って、ギルドの中の椅子に腰を下ろすアレイシア。良い加減受付さんの名前を聞いておかなきゃと思いつつも、机を挟んで向かい側にある鏡を覗き込んだ。

服装は黒、髪は左右にはリボンが結えてある。腰元のベルトに携えられた大太刀の刀と魔導書、何故か持っている自分自身を縛っていた縄。黒いスカートの下部から見える、内側に着ている白いスカート。いつもと何が違うと言えば、体の至る所に土が付着してしまっている事だろう。

????あ、風呂入らなきゃ。

そう考えたアレイシアは、ギルドを後にして一旦寮室へと戻って行った。勿論、馬車の所有者と話をしている受付さんにお断りを入れてからだ。

カチャツ????

「ただいま」

寮室の扉を開けてアレイシアはその中へと入って行く。少し進みリビングの方に出ると、そこでは寝間着を着たフィアンが机に突っ伏していた。さしづめ、起き出して来たにもかかわらず、眠かった為に机で二度寝をしてしまったという所だろうか。アレイシアはフィアンに近付くと、肩を揺すって顔を横に向かせた。

「フィア、ただいま！」

「にや、ふあああ……っ」

瞼を僅かに開いたフィアンは、アレイシアの方に顔を向けると大きく欠伸をする。丁度その時、玄関の扉からリズムカルなノック音が聞こえて来た。気配を探ってみれば、魔力量などからクレアとシエリアだという事が分かる。

玄関へとすぐに瞬間移動したアレイシアは、扉を開けて二人を迎え入れた。何とも能力の無駄遣いだが、それだけ二人を早く出迎え

たか思つたという事だろう。

「おはよー！」

「あ、アリアさん！ 帰って来てたんですね」

「うん。ギルドの依頼に行ってたのよ」

シェリアナとクレアを連れてリビングに出ると、フィアンが今度は横を向いて涎を垂らしながら机に突っ伏していた。幸い今日は休日のため、起こさなくてもいいかと、アレイシアはフィアンをそのままにして置く。

「今帰って来た所だから、風呂に入って来るわね」

「行つてらっしゃい。私達は……」

「アリアの部屋にいるから！」

アレイシアの言葉に返答したクレアだが、次の瞬間シェリアナに腕を掴まれて奥へと連れて行かれてしまった。それを微笑みながら見送ったアレイシアは、腰のベルトを外して風呂場へと入って行った。

その後アレイシアは風呂から上がり、シェリアナとクレアが居ると思われる自室へと向かう。ちなみに、アレイシアが着替えたのは部屋着となっている黒のワンピースだ。

「上がったわ」

「うん！」

シェリアナはそう言うと、今まで漁っていた机の棚から手を下ろす。その棚は勿論アレイシアが使用している物であり、そこには私物が多く置かれていた。これがどうも、シェリアナにとっては見ていだけで面白いのだそうだ。

「……さて、着替えるからごめん。ちょっと外に出ていてくれる？」

「私達、居てもいいのでは？」

「……あ、そうだ！ 私が着替えさせてあげる！」

いつかアレイシアが、三人に着せ替え人形にされた時の服が入っているクローゼットを開けたシェリアナは、中から一着の洋服を取り出した。また着せ替え人形にされるのを恐れたアレイシアは、すぐにその場から逃げ始める。

……とは言っても部屋の中。当然逃げるスペースは限られてしまい、クレアの協力によってアレイシアは取り押さえられてしまった。能力を使えば幾らでも簡単に逃れられる筈なのだが、アレイシアは親友に対して能力を使う事を躊躇ってしまったのである。

それから数分後。ベッドの上には、白と黒の衣服を身に纏った状態^{うなだ}で項垂れるアレイシアの姿があった。

上半身、シャツの部分は白い半袖となっており、襟元の前面には金の刺繍が少し施された赤い布が結ばれている。しかし、それ以外

には目立つた装飾も見られず、スカートも黒いだけのロングだ。比較的簡素な、とも言えるのかもしれないが、シンプルイズベストという言葉を侮ってはいけない。単純ながらも、その白と黒のコントラストが大人びた美しさを感じさせるのだ。

「よし、上手く行ったね」

「そうですね、ふふっ」

「……………」

それから更に数分後、やっと再起を果たしたアレイシアは、部屋の隅に置かれた荷物を漁り始めた。何事かと、二人はベッドの上からアレイシアの方を見るが、先程の事もあってか中々話し掛ける事が出来ない。

「あ、あのー…………」

「別に怒ってないわ。そんなにビクビクしなくても良いのに」

「えーと、なら…………何をやってるの？」

「まあ、見ていれば分かるでしょ」

そう言って立ち上がったアレイシアは、空中に手をかざして亜空間を開いた。中はやはり、盗賊の盗品でごちゃごちゃとしている。

「…………亜空間魔法!？」

「あ、クレア分かったの？」

「何それー？」

それが何かを察したのか、驚きの声を上げるクレアに対し、シェリアナは疑問に首を傾げる。

部屋の隅に置かれた剣を拾い上げたアレイシアは、それを亜空間の中へと大事そうに仕舞う。その剣は、闘技大会第一回戦で戦ったユーニスの物だ。まだヒビは直っていないため、いつでも直せる様にと、亜空間の中へと仕舞って置く事にしたのだ。

「私、これからまた出掛けて来るからね」

「えー……じゃあ、戻って来たら血を吸わせて？」

「う、うん……」

実は闘技大会の後、寝ぼけた状態のアレイシアに血を吸われたシェリアナは、その後丸一日寝込む事になったのである。そして回復後、アレイシアの後ろに抱きつきながら、耳元でゆっくり、恐怖を煽る様に言った言葉が????

『今度は私が、アリアの血を飲み干すからね』

????この時アレイシアは、なかなか吸血鬼らしい吸血鬼だなと考えた。

寝ぼけていたとは言え、元を辿れば自分のせいなのだからと。今日は大人しく血を吸われる事に決めたアレイシアは、玄関先でシェ

リアナとクレアに見送られる。

「行ってらっしゃい！」

「行って来るわ。夕方までには帰ってくるからね」

「そう言っていつも遅れるでしょー！」

「あ……ぜ、善処します」

そこで何故か敬語になったアレイシアは、恐らく受付の人が待っているであろう、学園内ギルドへと戻って行った。ちなみに、アレシアが部屋を出る時になってもフィアンはまだ眠ったままであった。

03・07 やることは沢山ありました（後書き）

感想評価や誤字脱字の報告、アドバイスなどはいつでも大歓迎です！！

セリア「読者の皆様、感想評価を入れて行って！」

フィア「特に最近は感想が少なくて寂しいです……」

アリア「遠慮せずに！ どんどん感想評価を入れて行って下さい！！！」

p.s. 『うちの子を自由にお描き下さい同盟』に参加しました！

##-## アレイシア（絵：ななしー様）

ななしー様より、アレイシアちゃんの絵が届きました！

……と、言いますか。

ある方が、いつの間にななしー様にリクエストを送っていて、その絵が完成した報告をある方に受けたという、幾分謎な完成の仕方をした絵です（笑）

この場で、その御二方に感謝を！

>i19272—2107<

→クリックで『みてみん』へ→

いえ、是非ともクリックして下さいな^^

水彩とパステル画、みたいなの？ 独特の画風ですね。

風に流される髪 of 臨場感と翼がまたイイッ！！

ちなみに当方、パステルは結構好きです。

ななしー様という御方は、主に『東方Project』のお絵力キコをニコニコ大百科にて投稿している絵師様です。

ななしー様の活動場所はこちら↓
<http://bitly.com/hv80dt>

（URLが82文字もあったので、短縮URLを使用しています）

リクエストの方となしー様、どうもありがとうございます！御座います！

03 - 08 依頼の結果（前書き）

総合評価が遂に2,000を超えました！

お気に入り登録して下さってる方々や、評価を入れて下さった方々。感謝してもしきれないとは、まさにこの事ですね^^

次話に一つ挟んでから、展開部へと入れて行きます。

拙い文章ですが、これからもこの小説をどうぞよろしくお願いします！

では、第三章八話、依頼の結果。
どうぞっ！

03 - 08 依頼の結果

「トッ??」

「ほら、飲みな」

「ありがとう」

ギルドの隅に置かれた机を挟み、アレイシアと受付の人は向かい合う様に座る。先程アレイシアが尋ねた所、受付の人、どうやら名前はグルーヴというらしい。

グルーヴが運んで来たジュースをぐびつと大きく一口飲み、アレイシアは彼の眼を真っ直ぐと見つめた。

「依頼達成の件を含めて、どうなったのかしら？」

「そうだな、まずは依頼の方だが……」

そこで一息置いたグルーヴは、膝の上に用意されていた紙を順番に机の上に広げる。枚数は全部で六枚だ。細かい文字が、読む気を失せさせる程にびっしりと書き込まれている。

「ここに六枚の紙があるが、三枚で一つの依頼分の書類だ。順を追って説明して行くぞ」

「うん」

そう相槌を返すと、アレイシアは机の上に乗り上げる様な形で上体を傾かせた。そして、大雑把に紙の内容に目を通して行く。一枚

目が報酬関係、二枚目が盗賊の後処理となっており、三枚目がアレイシアのギルドランクについてであった。

前の二枚はともかく、最後の一枚に関しては全く心当たりが無いアレイシアは、状況反射的に思わずグルーヴに問う。

「えと、私のギルドランクがどうかしたの？」

「ああ、君は今までFランクだったんだが……今回受けたのはBとCランクだっただろう？ Cは三個、Bは四個上のランクの依頼なんだ。四個上のランクの依頼は、成功したらすぐにランク上げという事になってる」

頭の中で、耳から入って来た情報と今までの記憶を順番に組み合わせる。そして、辿り着いた結論が??

「……あ。つまり、私もしかしてEランク？」

「そうだ。初回の依頼でランクアップとか、この学園じゃ始めてだな……」

グルーヴは呆れ気味にそう言うと、一枚目の紙を手を取った。今回の依頼における報酬関係の書類だ。

「実は君が受けた依頼、あの山の鉱石採掘員の一人が出した物なんだ」

ジュースを飲みながら、グルーヴの話に耳を傾けるアレイシア。相槌が打てないためか、口元に当てたカップを通して『んんうー』という声が聞こえて来る。

「だから、報酬として出る銀貨二十四枚とは別に、好きな鉱石十モルト（五十キログラム）を取っていいという事になってるんだが…
…鉱石なんて使わないだろう？」

グルーヴが言うのも尤もだ。例えば、武器の購入や修理の際に、
鉱石を使えば安く済んだり優先して作って貰えたりという利点があるのだ。これは恐らく、武器を持つ冒険者向けの報酬だったのだろう。しかし、今回の依頼を成功させたのは魔法魔術学園の生徒？？それも少女だ。

「だから、鉱石の分を報酬金に上乗せして……」

「しなくていいわ」

「銀貨十枚……え？」

かなり予想外な返答だったのか、グルーヴは目を白黒させる。その反応が面白く、アレイシアはつい小さく笑ってしまった。

「だから、しなくていいのよ。私、丁度鉱石は欲しかった所だし」

実はアレイシア、ユースの剣を直すために、鉱石から自分で鉄を取り出す事に決めたのだ。能力を使った物質の変形が、どれ程可能なのかを確かめるためでもあった。

「そうか、鉱石は彼らから直接渡すそうだ。……と、三枚目の件だけど、盗賊を国に送ってどうするんだ？」

「秘密よ！」

「あ、ああ……」

満面の笑みで楽しそうに答えるアレイシア。このような言い方をされてしまったのは、誰も聞き返す気にはなれないだろう。そしてグルーヴは、残念そうとも嬉しそうとも取れる微妙な表情で、机に広げられた紙を纏め始めた。

「話はこれで終わりだな。書類は君が持っておく事を勧めるよ。今、奥から報酬分を持って来るから待ってな」

「うん」

アレイシアに、纏めた六枚の紙を手渡したグルーヴは、その場から立ち上がって受付の奥の方へと歩き出した。ここで、何故書類をアレイシアに渡したのかといえば、この先の将来、アレイシア自身の経歴の証明として非常に役に立つからだ。

「……と、これが銀貨二十四枚だな」

ジャラジャラと音を立てて、受付の奥から出て来たグルーヴは、アレイシアの隣に立つとそう言った。彼はしゃがみ、アレイシアに銀貨が詰まった袋を手渡す。

「ありがとう」

「礼は言わなくていいぞ。お前が働いた分の報酬だからな」

今回の報酬である銀貨二十四枚は、丁度金貨二枚分に当たり、平民の一般家庭が一週間暮らせる程度の金額だ。一人の少女からしてみれば、それが例え貴族令嬢であろうとも、中々の大金なのである。感謝の言葉が口について出てしまっても、それは全く不思議な事ではなかった。

ちなみに、金貨一枚は銀貨十二枚、銀貨一枚は銅貨八枚と同じ値段となっている。これは、イルクス王国を含め五つの国で使われているため、かなり広い範囲で使用出来る通貨なのだ。また、金貨二十枚分に相当する『白金貨』なる物も存在するそうだが、多くの場合は国同士の取引などに使用され、表に出る事はあまり無い。

「じゃ、明日の朝にまた来るんだったな」

「そうよ」

明日の朝、馬車が盗賊を乗せて王都へと向かう。アレイシアは、それに同行する形で王都へと向かうのだ。丸一日掛かってしまうが、飛行魔法を使う訳には行かないため仕方が無い。

「気を付けて帰りな」

「言われずとも」

小さくグルーヴに手を振ったアレイシアは、ギルドの扉を押し開け、寮室へと戻って行った……筈なのだが。

「よっ!」

「……あ」

ギルドの前には、何故カリセルが立っていた。彼は、アレイシアの姿を見るなり歩み寄って行き、彼女の手を取って歩き出す。

その姿はさながら、中の良い兄妹の様にも見えるだろう。ただ、身長的な意味で、流石に恋人の様には見えない。

「ちょっと裕、何を……」

「君の部屋に、少し邪魔しようかと思ってな」

「邪魔するなら帰って」

アレイシアの若干捻くれた返事にリセルは笑うと、彼女の肩に、空いている方の手を乗せた。それに対し、アレイシアはむすっとした表情になる。

「そう言わずに、良いだろ？」

「……まあ、良いけど」

「よし、なら行こう」

結局アレイシアは、一緒に風呂に入るか否かを言い争った時と同じく押し負けてしまった。そして、リセルは彼女の寮室へと一緒に向かう事になったのである。

03・08 依頼の結果（後書き）

感想評価や誤字脱字の報告、アドバイスなどはいつでも大歓迎ですので、どうぞ御気軽に送って下さい！

フィア「勿論、Web拍手からのコメントも待ってますよ」

アリア「感想評価、絶対に入れて行ってよね！」

03 - 09 リセルの訪問

学園の南部、幾つもの寮棟が立ち並ぶ場所へと戻って来た二人は、リセルの寮室があるというA棟を通り過ぎ、アレシアの寮室があるD棟へと入って行った。

紅いカーペットが敷かれた廊下を進んで行くと、その一番奥に扉が見えて来る。その扉には『D204』と彫られた木の板が貼り付けられていた。それが、アレシアの寮室だ。

と、そこで。学園証を取り出したアレシアの耳元に、リセルは顔を寄せて小声で話し掛ける。

「ちょっと」

「わひゃっ……！？」

耳元に突然話し掛けられたものだから、アレシアは驚いて、つい変な声を上げてしまう。若干顔を赤くしながら、さっとリセルの方へとアレシアは向き直る。

「な、なな、何よ……！！」

「いや、別にそんな意味でやった訳じゃ……学園証、貸してくれるかな？」

「……うん」

アレシアは小声で、斜め下を向きながらそう言っていると、手に持った学園証をリセルに手渡した。

実際の所彼は、アレイシアよりも先に寮室の中へと入り、フィアンを驚かせてみようと思ったただけなのだ。だから、部屋に入るためにアレイシアから学園証を借りたのであった。

ガチャッ

「誰か居……!？」

しかし、扉はリセルでは無く、どうやら話し声を聞きつけたらしいシェリアナが開けてしまった。部屋から出て来たシェリアナは何故か、その場で固まって動かなくなってしまう。

「セリア? どうしたの?」

アレイシアはそう言うと、自分が今どの様な状況になっているのかを確認する。リセルが耳元に顔を寄せた後、アレイシアは振り返ったのだ。当然、互いの顔は近くにある訳で????

「……アリア、彼氏いたの!？」

「ちがーうつ!！」

恥ずかしさのあまり、シェリアナに掴み掛かるアレイシア。当事者であるリセルは、端から二人を見ているだけだ。彼が一言いうだけで、シェリアナのこの勘違いは収まりそうなものなのだが。

そこでシェリアナは、アレイシアの彼氏と勘違いしてしまった青年が、一体誰なのかを察したらしい。彼女は、恐る恐るといった風にリセルに尋ねる。

「あの、リセル……くん？」

「そうだけど？」

そして、帰って来た答えは肯定。そこからシェリアナは、二人の関係を間違いだらけに推測して行く。

????やっぱリアって、弱い人には気を向けなさそうな感じがするよね……リセル君は、闘技大会で見た感じかなり強かったし、リセル君がアリアを好きなのだとしたら、あの時アリアに勝ちを譲ったのも納得できる……！！

「ちよつとフィア、クレア！！ アリアに彼氏ぐあつ……」

「だから、ちーがーうーっ！！」

何を思ったのか、突然部屋の奥に向かって叫び出したシェリアナを、アレイシアは襟元を掴んで止める。勿論、その先が超危険事項だからだ。

見ているだけで何もしないリセルと、虚構を拡散するシェリアナ。二人の襟元を掴むと、アレイシアは寮室の中へと幾分ご立腹な様子で引き摺って行った。

寮室の中に入った三人は、元々中にいた二人と机を囲んで座る。先程の騒乱があったにも関わらず、アレイシアのすぐ右隣にはリセルが座っていた。

アレイシアから見て左側に座っているシェリアナは、やはりそれを不思議そうに眺めるも、アレイシアの鋭い視線に阻まれる。

「……一応言っておくけど、リセルは友達だから。勘違いしないでよね」

「は、はいっ！」

アレイシアの威圧的な言葉に、思わず身を震わせるシェリアナ。それに対し、フィアンとクレアは何の事か分からないといった表情をしている。

「で、リセルは何しに来たの？」

「暇つぶし。ラセルも何処か行っちゃったしな」

ラセルとは、リセルの義弟おとつとの名だ。この前、闘技大会で会った時にはあまり話が聞けなかったのだが、どうやら思いのほか、兄弟としての仲は良いらしい。

「分かったわ。なら、アテを淹れてくるから話でもしながら待ってね」

アレイシアは料理が苦手である。しかし、嗜好品の類、例えば薬草などから湯を淹れる事に関しては、人一倍上手なのであった。

勿論アテも例外ではなく、貴族の嗜みということで、アレイシアは母親から淹れ方を教わっていたのである。曰く、淹れる事も楽しみの一つ、従者に任せっきりではいけない、との事だった。

「はい」

コトツ

数分後。トレーに淹れたてのアテを乗せて、四人がいる机の前に立ったアレイシア。皆の話を聞きながら、それぞれの前にアテを置いて行く。

「美味しいですね」

そう言うのは、一番始めにカップを手にとったクレアだ。美味しいと言ってもらえて嬉しいのか、アレイシアは満面の笑みを浮かべて自身のカップに口を付ける。

「ねえ、アリア？」

「何？」

アレイシアが一口、こくつと音を立ててアテを飲んだ直後。既に半分以上飲み終わっていたシェリアナは、カップを机の上に置いてアレイシアに問う。

「約束、忘れてないよね？」

「……………あ」

シェリアナにそう言われ、アレイシアは出掛ける前に何と言われたかを思い出す。

??戻って来たら血を吸わせて？

何故、シェリアナが今尋ねたのかは分からないが、アテの朱色を

見た時に血を連想したのかもしれない。

「……あ、後でね」

「やだ、いま吸いたい」

シェリアナは立ち上がると、アレイシアの椅子の後ろに立つ。逃げて追いかけられるんだろうなあと、アレイシアは半ば諦め気分でシェリアナの吸血を受ける事にした。

それから一刻もの間、シェリアナとアレイシアは血を吸い続け、最終的にはリビングの床に倒れる事となる。

それを見ていたリセルはというと……

「……吸血鬼って、凄いな」

「貴方も、吸血鬼に適合してれば……ハア、良かったのに……」

「正直後悔してるよ。でも、あと十年はこのままだな」

二人のこの会話が妙に印象的だった。適合はどうやら、あと十年は元に戻れないらしく、それが終わらない限りは吸血鬼になれないのだそうだ。

勿論フィアンとシェリアナ、クレアは、この会話の意味が全く分からなかったのだが……？

「いつか自分も吸血鬼に……」

「何か言った……？」

「いや、何でも無いよ」

そして、アレイシアが気絶する直前に、彼女とリセルが交わした会話がこれだった。

03・09 リセルの訪問（後書き）

感想評価や誤字脱字の報告、アドバイスなどはいつでも大歓迎で御座います！

アリア「私との約束よ！ 感想評価、入れて行ってね！！」

セリア「絶対だからねっ！」

アリア「そうそう、次回に閑話で吸血を入れるか悩んでるらしいんだけど……読者さんは見たい？」

セリア「という訳で、そんなリクエストもお待ちしております！」

03 - 10 閑話（前書き）

前回省略した吸血シーンです。

苦手な方は、用法用量をきちんと守って……ごほん。
読み飛ばしてもOKです。

まあ、R - 15には遠く及ばない程度だとは思いますが、一応。
という訳です。

次話は、明日か明後日を予定中で御座います。

では、どうぞっ！

「立って？」

「うん」

椅子の後ろに移動したシェリアナは、アレイシアの腕を持って立ち上がる様に促した。

シェリアナの隣に立ち、背を向けたアレイシアは、髪を左側に寄せて右側の項^{うなじ}を見せる。

今まで数回、吸血のために噛まれた事はあるだろう。しかし、アレイシアの項には傷一つ無く、綺麗な白い肌があるだけだった。

逃げられない様にと、シェリアナは肩をがっしりと掴み、アレイシアの首筋を指で撫で上げる。血管がある場所を探り当てているのだ。

実はこの前、ヤマカンで細い静脈を当ててしまったシェリアナは、あまり血が出ない上に動脈の美味しさが足りないと、何度も何度もアレイシアに噛み付いた事があったのである。それを無くすためにも、シェリアナは血管を探り当てる事にしたのであった。

「……ここだ！」

指先に伝わる鼓動。温かい動脈の血が、確かにそこにあるのを確認した。

「いい？ いただきます！」

御丁寧にも、食前の挨拶をしたシェリアナは、首筋の血管の位置に牙を当てる。

「あ……ちょ、くすぐったいから……」

プツッ

吸血鬼の鋭い牙は、いとも簡単にアレイシアの皮膚を貫いた。そして、上手く動脈の血管を探る事に成功したのか、紅い鮮やかな血液が彼女の首から溢れ出す。それをすかさず舐めとると、口をアレイシアの首に密着させた。

吸われてばかりではどうも悔しいアレイシアは、首を回して相互吸血に入ろうとする。

しかし、首を回すと同時にシェリアナも動き、どうしても彼女の首に噛み付く事が出来ない。

「私にも、吸わせてよ……」

「……ふはっ！ だめ。アリアはこの前も私の血を吸ったでしょー」

一旦口を離れたシェリアナは、そう言うときまた首筋に顔を埋める。そして、先程よりも強く、思いつ切り血を吸った。

「っ……あー!!」

ちゅっ……

それと同時に身体から力が抜けて、アレイシアはついその場にしゃがみ込んでしまう。

勿論、その程度で吸血を止める筈も無く。シェリアナは、アレシアをうつ伏せの状態に寝かすと、その上から覆い被さる様な形で血を吸い続けた。

「ねえ？」

「ハア、何よ……」

「私の血、吸いたいの？」

再び口を離れたシェリアナは、アレシアの顔を見てそう言った。何だかんだ言っても、シェリアナはアレシアに血を吸われないのかもしれない。或いは、一緒に吸った方が美味しく感じるのか。どちらにせよ、アレシアが言すべき答えは一つだけだ。

「うん……吸わせて」

「じゃあ、ほら」

シェリアナは、髪を結んでいた紐を解き、アレシアと同じ様に髪を左側に寄せた。

今度は、シェリアナが後ろにいる形では無く、互いが向かい合う形だ。床に座ったアレシアは、シェリアナの上体を引き寄せると、首の後ろに顔を埋めた。

そして、すぐに始まる吸血。

服が血で汚れようが、床に血の池が出来ようが関係無い。ただ、互いの血を貪り尽すだけだ。

顎と首を伝った血は、服の内側に入り込んで朱い染みを作る。それが床に擦れると、かすれた筆で線を描いた様な血痕が広がって行

く。

だが、吸血鬼も人間と同じ様に、血液を失えば気絶してしまう事もあるのだ。互いの血を吸い続けて数分。二人は失血が原因で、突然強い眩暈に襲われた。

ドサッ……

部屋の床に、抱き付いたままの姿勢で倒れるアレイシアとシェリアナ。しかし両者とも、まだ首筋からは口を離していない。

??否、離せないのだ。

吸血によって身体に力が入らない上に、血液不足がより気怠い感覚をつくってしまう。

そして、床に倒れ込んだ二人を見ていたりセルはというと?????

「……吸血鬼って、凄いな」

「貴方も、吸血鬼に適合してれば……ハア、良かったのに……」

「正直後悔してるよ。でも、あと十年はこのままだな」

??吸血鬼にならなかった事を、どうやら本気で後悔しているらしい。

最終的には、そのままの姿勢で気絶してしまった二人を、リセルはベッドまで運んで行った。

03 - 10 閑話（後書き）

感想評価や誤字脱字の報告など、いつでも大歓迎しております！是非、Web拍手の方からもコメントをお寄せ下さい！

〵〵感想評価の主題による華麗でもない謎コーナー〵〵

アリア「感想評価、入れて行ってくれないと……」

セリア「アリアが泣くって！」

アリア「泣かないから！！」

クレア「ふふつ、感想評価、遠慮なく送って下さいね！」

アリア「ああ……先に言われちゃったじゃない！」

セリア「お待ちしております」 目指すは日間ランキング二十位
！」

アリア「……もういいわ。そういえば、ランキング最高二十五位まで上がったんだよね？」

セリア「そう！ だから、読者様の応援で上げて行きたいなと思って」

アリア「という訳で、いつでも感想評価を待ってるからね！」

セリア「ではまた次回〜！」

03 - 11 プレゼント

窓から差し込む朝日に照らされ、アレイシアは目を覚ました。

身体を動かして横を見ると、シェリアナが穏やかな寝息を立てて眠っているのが見えた。

少々血に濡れた金色の髪を撫でると、彼女は僅かに声を漏らす。薄く開いた瞼の隙間に、真紅の瞳を見る事が出来た。

アレイシアは寝返りを打ち、反対側に目を向ける。すると、そこには何故カリセルが眠っていた。眠っているだけなら何も問題は無い。しかし、二人の少女と同じベッドに寝ているという事は大問題だ。

アレイシアはもぞもぞとリセルに近寄って行き、脳天を狙った拳を御見舞する。

ガッツ！

「いだっ??!!」

「何で貴方が一緒に寝てるの」

「……ね、寝る場所が無くてな」

リセルはそう言うと、右手で痛そうに頭をさすりながら、もう片方の手で眠そうに目をこする。

巨石をも砕く一撃を頭一つで受け止めて『痛い』だけとは、思ったよりも竜人は侮れない様だ。

「ソファにでも寝とけば良かったじゃない」

「それは酷いぞ……」

リセルはそう言っただけで立ち上がり、そのままリビングの方へと歩いて行ってしまった。

まだ眠くて低血圧のアレイシアは、誘われる様に再び毛布の中へと戻って行く。シェリアナの体温が心地良く、そう時間も掛からない内にアレイシアは眠りに落ちてしまっていた。

????あれ、私は……？

気付けばアレイシアは、どことも見当たらない木造家屋の中にいた。それを不思議に思い、辺りをきょろきょろと見回す。

やっと自身が床に倒れている事を自覚したアレイシアは、すぐ隣に鎮座しているそれなりの大きさの木机に手を乗せて立ち上がる。倒れている事に気が付くのに少々時間が掛かり過ぎた気もするが、それは一先ず思考の隅に置いておく。何故なら、机を挟んで向こうの扉から途轍もなく大きな気配を感じ取れたからだ。

普通の人間なら立ち竦み、あるいは一瞬で気絶する程の気迫。しかしアレイシアは、気配を感じ取った時からそれが誰かに気付いていた。

「お久しぶりね、黒美さん。……って、名前いい加減教えてくれない」

い？」

カチャ、キイイ?????

その扉は軋みを上げて開き、アレイシアにとってはすっかりお馴染みの人物が顔を出す。仮称、黒美さんである。

今日は布を体に巻きつけた様な不思議な服装をしている。色は潔白を象徴する白だ。

「久しぶりっていう程でも無いけどね」

「まあ、何かと密度の濃い日が続いたから」

ここの所のアレイシアの日常は、闘技大会があったり、盗賊を壊滅させたり、極め付けは祐と再会リセルしたりと、かなり密度の濃いものであった。そのせいか、以前黒美さんに会った日がかなり前の事に感じるのである。

「用件は何？」

「そうね。貴方が正式に、職業死神として登録されたわ」

「……あ、いつぞやの申し込み用紙」

「そう、それぞれ！ あと、それに関して渡すものがあった……」

黒美さんはそう言い、手を空中に翳かざした。すると、突然現れた黒い穴。アレイシアが使った亜空間魔法と同じ様な物だろう。

彼女はその中に手をつ突っ込むと、何かをガサガサと探し始めた。

「……と、これだ」

穴から手を抜いた黒美さんは、その手に握られた三つの道具らしき物をアレイシアに見せる。傍目に見れば、安い雑貨にしか見えなような物だ。

「これは？」

「私からのプレゼントよ」

得意げな表情でそう言った黒美さんは、手に持たれた黒い棒をアレイシアに手渡す。長さは十五センチメートル、太さは二センチメートル程だ。

「これ、靈力を込めると死神の鎌になるのよ。やってみたら？」

「うん」

アレイシアが強く靈力を込めると、黒美さんが言った通り、その棒は長さ六テルムの柄に刃渡り四テルムの弧状の刃が付いた、巨大な鎌へと変貌を遂げた。

「あの一、私の身長よりおおきいんですがー」

「……それは、貴女と同程度の身長の人で死神やるって聞いた事無いし」

「あ、分かった。私の身長が低いからいけないんでしょう、そうでしょう？」

どこか怖い笑みでそう言うアレイシアの様子に、思わず後ずさる黒美さん。

「身長が今低いだけなら問題無いのよ。ただ、私はずっとこのままなの」

「うう……ごめんね……」

「いいわ。絶対に、身長を伸ばす魔法でも開発するから」

そう言つと、再び黒美さんの掌の上に目を向けた。次に目に付いたのは、学園証と同じ位の大きさの銀色の板だ。

恐らく、死神として働いている人の証明書の様な物だろうかと見当を付けたアレイシアは、再び黒美さんに問おうとするも言葉を遮られる。

「これは、天界に自由に出入りしてもいいという許可証よ。有効期限は八十七年後ね」

「……期限長つ!?!」

自身の予想が外れた事よりも、有効期限のあまりの長さにつつまむアレイシア。

天界は基本的に、数百万千もの年月を生きて来た神々が集う世界だ。そんな中で八十七年と言っても、彼らにとってはそれ程長いものではないのかもしれない。

「まあ、人外なら仕方ない……」

「そういう事よ。最後に、これを貴女に」

紫色の箱。それが、黒美さんの掌に最後に残されたものだ。
アレイシアはそれを受け取るうと手を伸ばす。しかし?????

「だめよ。後ろを向いて目を閉じててね」

「う、うん」

言われた通りにアレイシアは目を閉じる。すると、首元に僅かな重圧が掛かるのを感じた。まだ、それが何なのかは分からない。

「はい！ 開けて良いよ」

言われた通りにアレイシアは目を開けた。と、それと同時に黒美さんは手鏡をアレイシアの目の前に掲げる。

鏡に映った己の姿。首元には、美しい十字架の首飾りが掛けられていた。

「これ……！！」

「私が作ったのよ。どう？」

銀色に輝く十字架に入れられた、黒のラインはまるで夜空の様。それよりも更に細く入った金のラインは、優しい満月の光を思わせた。

「凄い！ 作れるんだ……」

アレイシアは完全に首飾りに魅入っている様だ。

しかし、十字架に入れられた色合いは全て、アレイシアの髪と目

の色まで計算し尽くした結果なのである。彼女が身に付けてこそ、真の美しさを発揮する様に出来ていたのだ。

「ありがとうー!!」

「うわっ!？」

感極まって黒美さんに抱き付いてしまったアレイシアは、念話の夢から覚めるまで、ずっとそのままだったという。

その時アレイシアが聞いた話なのだが、この木造家屋は夢の中で想像から創り出したものなのだそうだ。何でも、夢の中では想像を実体化する事が思い通りに出来るのだという。

「じゃあ、またね！」

「ありがとうっ!!」

最後の最後まで感謝の言葉を述べたアレイシアは、薄くなる意識に身を任せて現実へと引き戻されて行った。

03・11 プレゼント（後書き）

感想評価や誤字脱字の報告、いつでも大歓迎しております！
Web拍手のコメントもどうぞ御気軽に^^

くちょこつとした謎コーナーく

アリア「ふっふっ♪ 感想評価を入れて行ってくれないと……」

セリア「アリアが貴方の元へ、血を吸いに行きます！」

アリア「行かないから!!」

セリア「では読者の皆様、感想評価を心よりお待ちしております
！」

アリア「遠慮せずに送って下さいねー!!」

03 - 12 王都へ出発！（前書き）

今日は私が乗っ取ったわ！

七篠言平の『Twitter』とか『つぶやいたー（すぴばる）』
も、今日だけでも私の物だからねっ！

じゃあ、遅れたけど本編どうぞー！

03 - 12 王都へ出発！

アレイシアが二度寝をしてから一刻が経ち、やっと彼女は目を覚ました。

布団の中で足を動かし、寝返りを打つと、アレイシアの右手に何か硬質な物が当たる。重い瞼を開いて手の先を見ると、そこには黒美さんから貰ったプレゼントが置かれていた。

やはり、何故ここに置いてあるのかと小一時間問い詰めたい気持ちにさせられるが、そこでアレイシアはある事に気が付く。十字架の首飾りが、自身の首に掛けられているのだ。

自身の傍に置かれているだけならともかく、首にまで掛けるとは文字通り、まさに神業なのだろう。

それから着替え終わったアレイシアは、ベッドの上に目を向けた。シェリアナは既に起きているのか、彼女が眠っていた場所の毛布は大きく捲られている。それを見たアレイシアは、鎌の棒と銀の許可証を机の上に置いてリビングへと歩き出した。

「おはよー！ あ、クレアも居たんだ」

「はい。昨日セリアさんがここにいて、帰る気にはなれなかったんです」

クレアはそう言い、側を歩いていたシェリアナを捕まえる。既に出掛ける準備は済んでいるのか、白い普段着の上から学園のローブを身に付けていた。

「それと、私は今日から王都に行ってくるけど……連れて行けなくてごめんね」

「いえ、大丈夫ですよ」

「じゃあ御土産買って来て？」

御土産をねだるシェリアナの様子に、アレイシアは一瞬考えた様な表情になると、何か思い当たる事でもあったのか、僅かに間を空けてから話し始める。

「……なら、御土産に何が欲しい？　少し位なら欲張った注文も大丈夫だから」

その会話を聞きつけたのか、ほとんど使われていない台所からフイアンが顔を出す。右手に持っていたジュースの瓶を台に置き、アレイシアの方へと走って来た。

「私は……杖系の魔導具で良さそうな物があつたら欲しいです！」

「分かったわ。あと、二人は？」

「あ、ええと……」

アレイシアが言った、少し位なら欲張った注文も大丈夫という言葉。
葉。

杖でも大丈夫という、予想外な許容範囲の広さにクレアは驚いた様だ。

「……私は、短剣がいい！　魔力伝導率の高いやつ！」

「短剣ね、大丈夫よ」

シエリアナの希望も、あっさりと受け入れるアレイシア。

実は彼女、以前から短剣が欲しいと言っていたのだ。しかし、彼女が欲しい魔力伝導率の高い物は、学園街のどこを探しても見つからなかったのである。

なので、手に入れるなら今しかないと、シエリアナはアレイシアに頼む事にしたのであった。

「クレアは何が良い？」

「私は……」

「何でも良いのよ？ 二人は魔導具が良かったみたいだけど、アクセサリー類でもいいし」

「なら、アリアさんに任せます。私に良いと思う物を買って来て下さい」

「分かった、これで三人分ね」

アレイシアはそう言い、ベルトの右側に下げられたホルダーからメモ帳を取り出す。そして、備忘録の欄に日本語で書き込み始めた。

「あと、リセルはいる？」

「さっきもう行っちゃったよ？」

「そ、ならいいわ。リセルの御土産も考えようと思ったのに……」

アレイシアはそう言ってメモ帳をホルダーに仕舞う。
しかしこの発言が後々『リセルはアリアの彼氏説』を増長させる
羽目になるとは。彼女は全く思いもしなかった事だろう。

「私、行つて来るからね」

「いつてらっしゃーい！」

校舎の入り口の前で、アレイシアは四人に見送られる。四人はこれから授業があるのだが、アレイシアはこの依頼のために、休日を取る許可を学園長直々に貰っていたのであった。

これからアレイシアは、ギルドの前で待機している馬車に乗って王都へと向かう。

学園の革靴と緋色のドレス風ワンピース、首に掛けられた十字架の首飾り。腰に巻かれたベルトの右側には、魔導書とメモ帳が入れたホルダーが下げられている。更に左側には、アレイシア愛用の刀があった。それでも、アレイシアなりの正装なのだ。

しばらく学園の道を歩き、ギルドの前に辿り着くと、既に待機していたのか十台程の馬車がアレイシアの視界に入ってきた。
受付のグルーヴも、アレイシアの姿を見るなり大きく手を振ってきた。

「アレイシア、おはよう！」

「おはよー！」

『元気な挨拶』を交わした二人は馬車の隣に立つと、早速と言わんばかりに話し始める。

「この馬車が、君が今回乗るやつだな。荷物とかはあるか？」

「無いわ。必要最低限しか持って来てないし」

「そうか、なら大丈夫だな」

どうやらアレイシアが乗る馬車は、屋根まできちんと付いている、それなりに頑丈な造りのものらしい。所謂『幌馬車』の類が優勢なこの国ではあまり見かけないが、それでも貴族であるアレイシアは、幼い頃から非常に良く見ていたのであった。

??しかし、これにも問題はある。

何かを改善すれば、結局は他の要素が欠ける原因にも成り得るのだ。

この様な馬車は貴族が保有している場合が多く、金目の物を狙った盗人に狙われやすくなるのであった。

とは言っても勿論、アレイシアの実力を持つてすれば、数百人構成の巨大盗賊を相手にしたとしても簡単に勝つ事が出来るだろう。

ゆえに、本当なら他の馬車を用意して貰いたい所だが、彼女としてはどうでもいいという判断になってしまふのであった。盗賊に運悪く当たってしまったのなら、当然タダでは起きずにギルドで報酬を貰おうという考えだ。

「で、いつ頃出発するの？」

「これでも昨日から準備してたからな。君が出たいと言つのなら、今すぐにも出れるぞ?」

「そう、到着は早い方が良いわ。すぐに出ましょう!」

「……だそうだ。お嬢様がお呼びだな」

グルーヴが冗談めいた口調でそう言うと、その馬車の御者席から青年が顔を出す。人間で言えば十五歳程度の見た目だが、それが役に立たない事もあるのがこの世界だ。

「始めまして、御者さん」

「ああよろしく。……ほら、乗りな」

「ありがとう」

御者さんは馬車の扉を開け、アレイシアに中に入るよう促す。

それに従って馬車に乗り込んだアレイシアは、思いのほか柔らかい素材で出来ていた椅子に感嘆のため息を漏らす。前面には机もあるため、魔導書を開いて作業をしても良いだろう。言ってみれば、まさに至れり尽くせりの馬車だった。

「行つて来ます!」

「おう!」

アレイシアとグルーヴの会話を切っ掛けに、御者さんは馬車を走らせる。

これから丸一日馬車の中だが、快適に移動出来るだろうと、アレ
イシアは安心して魔導書を机の上に広げた。

03 - 12 王都へ出発！（後書き）

感想評価や誤字脱字の報告、入れて行ってくれると嬉しいわ。

入れて行ってくれないと、本当に寂しいんだからね？

だからお願いっ！ 入れて行って！

……そうそう、作者がサイトを作ってるみたいだから、期待せずに待っておいてくれると尚嬉しいわ。

また次回！

4 / 1で作者を乗っ取ったアレイシアでした〜！

03-13 ユーニスの剣（前書き）

遅くなりましたが、更新です！

サイト作成に奔走していた所、遅くなってしまいました…… ^^ ；

そして、読者の皆様に感謝です！

総合評価が2,200も超えました！！

では、どうぞーっ！

03 - 13 ユーニスの剣

馬車の机の上で魔導書を広げ、刀を外して自身の横に置くアレイシア。これから丸一日、馬車の中で過ごす事になるのだが、どうやって暇を潰そうかと考えを巡らす。

「……そうだ！」

アレイシアは机の下に手を潜らせ、そこに亜空間への入り口を開く。そして、中からユーニスの剣と数個の鉱石を取り出した。

その鉱石は、先日アレイシアが壊滅させた盗賊からかつばった物であり、本来は盗まれ元の鉱石採掘員の物だ。

しかし、報酬として鉱石を貰える事になっているため、その分が減ると考えれば全く問題は無いだろう。アレイシアは剣と鉱石を机に置くと、まずは鉱石に含まれる成分を見極めるべく、一つの黒い鉱石を手にとった。

コトツ?????

最終的には鉄鉱石だけを机の上に残し、他の鉱石を亜空間の中に仕舞う。勿論、全ての鉄鉱石を使う訳では無いため、亜空間の中で鉄鉱石とその他を分割しておいた。

鉄鉱石に神力を流し、己の意思で矛盾を発生させる。内容は、特定の元素のみの瞬間移動だ。

これによって、風系統と火系統を合わせた業火で熱し、不純物を取り除くといった非常に骨の折れる過程を省略出来るのだ。アレイシア自身も、自分の能力にこんな使い道があるとは始めこそ思い付

かなかったのだが。

頭の中でしっかりと、鉄の形を想像する。ここで言う形とは元素の構造の事だ。

当然正確なイメージは出来ないが、これで意思と能力を繋ぎ合わせる精度が上がる筈だ。

そして、アレイシアは能力を発動させる。

????動けッ!!

ゴトッ!

強い意志に、鉄鉱石の中から純度百パーセントの鉄のみが抽出されて机の上に落ちる。

元々鉄を含んでいた筈の鉄鉱石は、不純物の塊となってサラサラと砂の様に崩れ落ちた。

「うわぁ……」

自分で行った事ながらも、目の前で起こった事に驚いたアレイシアは、作業を進めるべく抽出された方の鉄塊を持ち上げる。

それに飛行魔法をかけた後、更に神力を込めて再び能力を発動。鉄は常温で溶けるといってごく単純な矛盾を付加させた。

飛行魔法によって空中に浮かんだ鉄はドロドロと溶け出し、光を反射する液状の球と化す。これで、鉄を加工する際に高温の炉を使わずに済む。

能力で空気から炭素を分解、それを鉄に混ぜ込んでより強度の高い鋼を作って行く。

更に、超高純度の鉄は錆びにくい。これを使えば、世界中の鍛冶屋が夢見る最高の剣が作れるだろう。

アレイシアが作業をやり始めてから二刻程。剣の方も同じ過程を経て、後はヒビの入った部分に鉱石から作った鋼を入れるだけとなった。

ここまでくればもう簡単。能力でぱーっと剣の穴を埋めてしまえばいい。

「お、終わった……」

アレイシアは疲れたのか、腕を伸ばしてそのまま机に突っ伏してしまふ。その目は既に眠そうだ。

????あ、片付けなきゃ……

机に散らばった鉱石を亜空間の中に投げ込み、剣は自身の刀の隣に置いておく。

崩れた不純物の砂は、風魔法で外へと飛ばしておいた。

そして、前方に座る御者さんに向けてアレイシアは話し掛ける。

「あの、御者さん？」

「ん？」

「貴方って、国王から送られて来た人？」

「ああ、そうだが……？」

御者さんは首を傾げ、質問の意図が分からない事を示す。

彼女は寝る前にこの質問によって、この御者さんが信頼出来る人物なのかどうかを確かめたのであった。

寝ている間にまた心臓を刺されました??となっては流石に冗談じゃ済まされないからだ。

未だ首を傾げている御者さんをよそに、アレイシアはどこか安心した様な表情でそのまま眠りに落ちた。

「おい、起きろー!」

「んあ……」

涎を垂らして眠るアレイシアを起こそうと、御者さんは彼女に声を掛ける。

しかし、帰って来たのは寝言だけ。全く起きる気配は無い。

「おい!」

つんつんつん。

「ん、んう、んうあ、なに……?」

数度の呼びかけと頬をつつく事によってやっと目を覚ましたアレイシアは、御者さんに眠たげな視線を送る。

先日の吸血によってアレイシアは、すっかり低血圧で寝起きが悪

くなってしまったのだ。

「寝かせてよ……」

「いや、もう王都に着いたぞ？」

「え、もう？」

その言葉でアレイシアは、一気に眠気が覚めて行くのを感じた。慌てた様に刀を手にとると、すぐにそれを左の腰に差す。

「ああ、イルクス王都ギルドの馬車停留所だ」

「あ、ありがとう！」

「どういたしまして。それと、これからどうするんだ？」

「そうねえ……」

アレイシアはそう言われ、考え込む様に腕を組んだ。その仕草一つ一つが可愛いとは口に出さない。

「なら、ちよつと国王に会って来るわ」

「……そうだったな」

その後、御者さんはギルドの受付で手続きを済ませ、アレイシアの元へと戻って来た。

どうやら、これから一日この場所に馬車を止めておく許可などを取ったららしい。

アレイシアは御者さんに挨拶すると、遙か離れた場所に見える城へと走り出す。

建物の多い中心街からでも見えるその城の大きさと存在感は、やはり他とは群を抜いていた。

城の跳ね橋前に辿り着いたアレイシアは、以前来た時と同じ様に両側に立っている兵士に話しかける。

「あの、国王様に謁見する御時間を頂きたいのですが……」

普段の活発な少女らしい雰囲気は何処へやら。アレイシアが兵士に話しかけるその様子は、誰から見ても完璧な貴族令嬢の样だった。……いや、事実彼女は貴族令嬢なのである。彼女が持つ元々の性格が、そんなイメージを遠のけて行っているだけなのだ。

「君は……ああ、いつかのアレイシア嬢！」

「ぶっ!？」

アレイシア嬢。

その言葉に彼女は思わず吹き出してしまった。まさか嬢などと呼ばれるとは思ひもなかったのである。

「ど、どうした？ 大丈夫か？」

「……大丈夫ですよ。ただ、嬢とか呼ばれ慣れていないだけで」

「そうか、すまない……」

兵士はそう言うが、互いに気まずい雰囲気へと移り変わっているのがわかる。

その状況を打ち破ったのは、兵士の後ろから突如現れたレオル王子だった。

「お、アレイシア！ 来てたのか！」

「……あ」

王子の存在に気付いたアレイシアは、すぐにそちらの方へと駆け寄って行く。

当然、アレイシアが進んで向かって行きたいと思う相手では無いのだが、この気まずい状況よりはマシだと考えたのだろう。

「謁見がしたいんだっか？」

「そうよ」

「なら、俺が今から頼み込んで来ても良いぞ？」

「ありがと、お願いするわ」

アレイシアはそう言うと、王子と一緒に跳ね橋を渡って行ってしまった。

兵士はそれを止めようとするが、二人の仲の良さそうな光景を見ていると自然とそんな気持ちも失せてしまう。

勿論、彼女だけで王の間に突っ込んで行っても謁見は出来ただろう。しかしこれは、あまり問題を起こしたくはないという彼女の本音によるものであった。

そしてアレイシアはレオル王子と一緒に、二度目となる謁見の間へと向かって行った。

03 - 13 ユーニスの剣（後書き）

感想評価や誤字脱字の報告、アドバイスをいつでも大歓迎しております！

Web拍手の方からも、コメントをお気軽にどうぞ^^

アリア「感想評価を入れて行ってくれないと……」

セリア「私も悲しいんだからっ！」

アリア「……で、ではまた次回！ と言いたい所だけど、七篠言平の製作中のサイトがここで公開されているわ」

<http://sites.google.com/site/festingonbeii/>

セリア「工事中だけでも良いという方は見に来てね！ 小説にはまだ載せていない絵も、こちらでは先に公開する予定なんだって！」

アリア「では、感想評価をお待ちしております♪」

セリア「次回も待っててねっ！」

王子に案内されて長い廊下を進んでいくと、大きな木の扉が二人の前方に見えて来る。国王がいる部屋への入り口だ。

「この奥に……」

「分かってるわ」

王子の説明をバツサリと切り捨て、アレシアは扉に対して体を斜めに向けると左手小指を当てた。

以前と同様、何でわざわざこの様な事をするのかといえば、あえて挙げられるアレシアの弱点が小指だからだ。

体自体は幼いとはいえ吸血鬼。一般的な人間の成人男性を遥かに超える身体能力を有している。

しかし、運が悪い事にアレシアの身体は十二歳止まり。小指の先まで鍛える事は非常に困難だ。今まで何回突き指したか……と思えば嫌な思い出は尽きない。

ゆえに、彼女は少しでも身体能力が上がる事を願って、たまに扉を小指一本で開けてみる事にしたのである。

「よしっ！」

「ちょ、待てっ……」

バンツ！！ ギギイ……

アレシアがやろうとしている事を察した王子だが、咄嗟に止めに入るも間に合わなかった。中にいた国王は突然の事に驚き、やは

りそのまま固まってしまう。

「国王、たのもーっ!」

「何事じゃっ!? ……あ、アレイシア殿、来ていたのか? それと今はまだ朝じゃぞ?」

再起を果たした国王は、前に謁見をしていた者が丁度部屋を出た後だったという事に安堵する。

それに対しアレイシアは、若干敬称が増えているのは気のせいかと疑問に思った。

「国王、重要な知らせがあるわ」

「む、なんじゃ?」

「その前に、隣部屋に案内してくれる?」

「うむ」

国王は立ち上がり、接客室の方へと向かって行く。それにアレイシアは着いていくと、部屋の中へと入ってから後ろ手に扉を閉めた。部屋の中にいた従者数名は、二人が入室した瞬間、客人に出すアテを淹れるために奥の部屋へと消える。

「さて、話というのは……」

「あの件じゃろう?」

「そうよ。ちょっと聞きたい事があって」

国王がソファに座ると同時に、早くもアテが従者によって運ばれて来た。机にカップとミルク、砂糖などを置き、一礼した後に颯爽とその場を立ち去って行く。

「私、あれからギルドで盗賊関係の依頼を二つ受けたの」

「ふおっふおっふおっ……本当にやったんじやのう」

「それで……単刀直入に言うわ」

アレイシアは話の重要な場所に差し掛かると、一旦間を置いてから話し始める癖がある。

彼女は今も間を置いた。国王はその癖を理解しているのか、普段以上に真剣な面持ちになる。

「ソルフは、貴方がクアルシに送ったスパイなの？」

「……ふむ？ どの様な経緯があつてその質問に辿り着いたのかは分からぬが……別に、その様な事は無い筈じゃぞ？」

「なら逆に、ソルフはクアルシから送られて来たスパイの可能性があるわね」

「何故じゃ？」

そこで、アレイシアは依頼を受けた時の事を順を追って説明して行く。

隠れ家の奥に囚われていた人達の事や、盗賊の長を倒した所まで。本当に、必要無いのではと思わせる程に細かくだ。

そして話は、アレイシアが長を倒した所まで進む。

「これには正直私も驚いたんだけど、あの盗賊は全員元奴隷だったのよ」

「何？ そうだったのか……」

「それで、私は長から聞いたの。彼らはどうやら、クアルシの大臣であるソルフに買われた人達らしいわ」

「……！？」

ソルフの名が出た瞬間、国王の動きが固まる。

この国の優秀な大臣の一人の名がクアルシの大臣として出て来るとは、全く思いもなかった事だろう。そして、思いもしない内容だったがゆえに、自然と脳内はそれを否定しにかかる。

「……ふむ、その長が嘘を述べたという可能性は」

「無いわ、よっぽどの事が無い限りね。魔力の揺らぎで大抵の嘘は見破れるわ」

国王が絞り出した精一杯の否定文句を、間髪入れずに押さえ込んでしまうアレイシア。

国王はそれに驚くも、続けてさらに問う。

「ならば、ソルフが嘘をついた場合は」

「推測になるけど、かなり確率は少ないわね。この場合、自身がクアルシの大臣だと嘘をつく利点が全く無いもの」

「……確かに、それはそうじゃな」

文字通り、頭を抱える国王。この件は下手すれば、二国間の戦争にさえ発展しかねない事だからだ。その悩み様は、アレイシアの想像を遥かに超えるだろう。

「うむ、分かった。しかしどうすれば良いんじゃ……」

「そうね……」

未だに悩んではいる様だが、国王は一先ず、この件については整理が付いた様だった。

もしも仮に、ソルフがイルクスに送られて来たスパイであり、クアルシの大臣であるのなら、国際問題化は確実だろう。しかし、どうやってソルフがクアルシ側の人間だと証明出来るのが重要になって来る。

「なら、私が行って来ようか？」

「それは危険じゃ。ソルフがそなたを殺そうとしているのなら尚更……」

「私、そう簡単にはやられない自信あるけど？」

アレイシアは真紅の瞳で、国王の目を真っ直ぐと見つめた。

彼女自身は意識していないのだが、何処までも深い血の様に真っ赤な双眸は、見る者をあつという間に虜にってしまうのだ。

それは、優しさと高貴さを一度に感じさせる独特の威圧感となつて、相手に彼女の存在感を強く印象付けさせる。

「……分かった。アレイシア殿なら、素晴らしい結果を運んで来てくれる事じゃろうな」

「ありがとう」

高貴さの印象は時に、他の者を圧倒して自身の我を通す事が可能となる。

アレイシアの印象は、本来は上の位である国王相手にさえ通用した。これは何故かといえば、実際の地位とその者が持つ位が全くの別物だからだ。

百年以上を生きる吸血鬼のアレイシア、歳数十年の人間のイルクス国王。これだけで、二人が持つ威厳に圧倒的差が生まれるのである。

国王の言葉を聞き、瞳を閉じて軽く頭を下げたアレイシアは、アテを一口飲んでから窓の外に目を向ける。

????まだ、解決までは遠そうね。

アレイシアはそう考え、これからの予定を組もうとメモ帳を取り出した。クアルシに行くにしても、今回の様にあまり学園を休む訳には行かないからだ。出来れば、空いている休日が望ましい。

全ては、アレイシアの身長が伸びない原因の一端を作った者を見つけるために。アレイシアは、三月二十四日と書かれた場所に大きく丸を描いた。

03-14 国王と再び……（後書き）

感想評価や誤字脱字の報告、勿論アドバイスなどもお待ちしております！

Web拍手がやや減少気味ですので、どうぞ押してコメントも残して下さいと思います。

アリア「感想評価、いれて行ってよね！」

セリア「短いとあまり多くの人に見てもらえないんじゃない……」

アリア「……それもそうね。それなら、Web拍手の方もお待ちしております！」

セリア「また次回、お会いしましょう！」

03 - 15 王城内の騒乱（前書き）

更新が遅くなり、すみませんでした m (|) m

では、本編をどうぞっ！

03 - 15 王城内の騒乱

アレイシアと国王は一先ず話を終え、接客室から出る事にした。また明日、続きを話す予定となっている。

飲み終わったアテのカップを従者の一人に手渡し、アレイシアは立ち上がる。国王に一度視線を向けてから、アレイシアは彼より先に部屋を後にした。

カチャツ??

「あ、レオル王子」

「アレイシア、話は終わったか？」

レオルは扉の前で待っていたのか、部屋から出て来たアレイシアに近寄って行く。そして、優しく彼女の右手を取った。

……しかし、アレイシアの表情からして、若干嫌々と手を握られている状態だというのが伺える。

「俺と少し来てほしい。話したい事があるんだ」

「……求婚以外なら幾らでも」

「それは残念だ」

そう言って笑うレオルに対しアレイシアは、求婚の件は国王の独断で言い始めた事では無かったのかと、若干身の危険を感じて身を震わせた。

アレイシアがその様な事を考えているとは全く知らずに、レオル

は彼女に対してある提案をする。

「なら、リーシェに会ってくれないかな？」

「それなら、する事も無いし良いけど？」

ギィィ……

アレイシアのその言葉と同時に、接客室とは反対側の扉がゆっくりと音を立てて開く。

そこには、アレイシアの方をじっと見つめるリーシェの姿があった。心なしか、以前よりも可愛らしく飾られた服を着ているのは気のせいだろうか。

彼女は早速アレイシアの方へ駆け寄って行き、唐突にも彼女を強く抱き締めた。

「アレイシア、待ってたわ！」

「ぐ、苦しつ……！！ 離し、て……」

ガクッ。

「あ。……つて、大丈夫！？」

リーシェがアレイシアを固く抱き締めた直後、彼女は力無く首を後ろに傾ける。

それを見て、まさか気絶してしまったのではないかと考えたレオルだが、そこでリーシェはあまりにも予想外な言葉を発した。

「わ……だめっ！ 死んじゃだめ……！」

「誰が死ぬかつ！」

そんなリーシェに反応し、アレイシアは首を一瞬で元の位置に戻すとツツコミを入れる様に彼女の額を軽く叩いた。

仲良く漫才をしている様にしか見えない二人の様子に、レオルは呆れのため息を吐く。

「あー……アレイシア？」

「何？」

「今日は、泊まって行く気は無いかな？」

始めの呼びかけには無愛想に答えたアレイシアだが、今日の宿を取っていない事を思い出すと途端に真剣な表情になる。

確かに、以前泊まった宿でもギルド三階の宿でも、王都を探せば幾らでも宿屋は見つかるだろう。しかしこの際、イルクス城に泊まって行っても中々面白そうだとアレイシアは考えたのだ。

「泊まって行く気は、どちらかと言えばあるわね」

「そうか、なら……」

「儂^{わし}からしっかりと伝えておこう」

先程の接客室から出て来た国王は、三人の目の前に立ちそう言った。

リーシェが何やら、最高の客室を用意してあげたと国王に言っているが、アレイシアはあまり迷惑は掛けたく無いと、その話に割っ

て入る。

「あ、私はそんなに」

「大丈夫！ 迷惑が掛かるとか思ってるんでしょ？」

「う……べ、別にそんな事は」

「あるんでしょ？」

あまりに息がぴったりなアレイシアとリーシェの会話。

二人の様子を国王は、良い友達が出来た様で何よりだと思い見守っていた。

「そういう訳じゃ、準備させておこう」

「はあ……」

その後アレイシアは、自身が生まれ育った屋敷の部屋よりも大きな客室に通された。

如何にも高級品と分かる机と筆筒^{タンス}、窓を縁取る緋色の鮮やかなカーテン。しかしそれらには全く目もくれず、奥にあった寝室の、これもまた上質な毛布が敷かれたベッドにダイブした。

ポフッ！

「んんー……」

肌触りの良い布に頬擦りをし、両手両足を動かしてその心地よい触感を堪能する。

寝返りを打ち、体を大の字に伸ばしたアレイシアは、腰のベルトを外すとそのまま毛布の下へと潜り込んだ。

馬車の中では寝足りなかったために、彼女は一先ず寝ておく事にしたのである。

「おやすみ……」

誰に言うても無くそう呟いたアレイシアは、髪を傷付けない様に右に寄せ、対物理魔法障壁を自身の周囲張ってから眠りに落ちた。

アレイシアがベッドに入ってから六刻が経つ。少しずつ日は傾き始め、空に浮かんだ太陽は王都を橙色に染め上げる。

そんな黄昏時に、イルクス城の屋根の上に一つの人影があった。

長めの白髪を首元で結えたその男は、そこから屋根を蹴って大跳躍し、アレイシアがいる部屋の窓へと滑り込む。

彼は部屋の奥、アレイシアが眠っている寝室へと入って行き、無防備な姿を晒すアレイシアの隣に立った。彼女は現在、折角の最上級の毛布を暑さのせいか胸の下辺りまで剥いでしまっている。

そのままでは風邪を引くと考えた彼は、アレイシアの胸の下の毛布へと手を延ばし……？

バチッ！！

「……ッ！？」

あともう少しで毛布に手が届くというところで、彼の手は見えない壁によって弾き返された。アレイシアが自身に掛けた対物理魔法障壁だ。

「何……？」

彼が障壁を感知しつつも再びアレイシアに手を延ばしたところで、彼女は運悪くも目を覚ましてしまった。

アレイシアは、ベッドの脇に立つ人物が誰なのかを理解し、眠そうな声で彼の名を呼ぶ。

「……リセル？」

「そうだけど」

「……ッ！！ 貴方、今何しようとしてた！？」

「つと、ちょっと待った。アレイシア、これはだな……えーと」

彼は丁度、結界に注意しつつも布団に手を伸ばした所なのだ。

その途中で目覚めたアレイシアが見た光景は、リセルの手が自身の胸の上にかざされている所。例え、風邪を引くと思いい心配してやった事でも、その光景は傍から見れば、容易にあからさまな勘違いを生む物であった。

「貴方まさか……わ、私を弄ろうとしてる訳じゃ無いだろうな……！」

「い、いや、それじゃ風邪引くと思って……ほら、そこに」

リセルは、つい素の口調を出してしまったアレイシアに、毛布のかかっている場所を指差して示す。

「……んむーっ!!」

バサッ!

顔を赤くし、布団を掴んだアレイシアは勢い良くそれを被り直した。それは、勘違いをした自分を恥ずかしく思ってた事なのかもしれない。その言葉が嘘では無いという事も、アレイシアは既に確認していたのだ。

ただ、リセルはかなり強い。嘘を隠蔽する術を持っていたとしても全く不思議な事では無いのだが????

「最悪だ……」

「機嫌直してくれて……そうだ、ちょっと王都の街を見に行ってみないか?」

「ん……まあ、いいぞ」

どうも口調が直らないアレイシアだが、リセルは部屋のソファに腰掛けるとアレイシアの方に向かって一言、準備待ってるぞ、と言う。

それに反応し、アレイシアはベッドの上から飛び降りると、横に置かれたベルトを腰に巻きつけた。彼女の準備はこれだけだ。

「それで良いのか?」

「私はこれだけ」

「なら良い、出発しよう」

リセルはそう言い窓に足を掛けた。これから彼が何をするつもりなのか悟り、アレイシアもその横に並んで窓に足を掛ける。

そして二人は夜の王都へと身を投じ、今まで隠していた翼を大きく広げて空高く舞い上がって行った。

03 - 15 王城内の騒乱（後書き）

感想評価や誤字脱字の報告、勿論アドバイスなども大歓迎しております！

評価は特に、私が執筆する上での重要な原動力となりますので、どうぞよろしくお願いします^^；

セリア「感想も待ってるから！」

クレア「どうぞ遠慮無く、入れて行ってください！」

アリア「では、作者が第一部から改訂作業をしているみたいだけど、次話で会いましょうね！」

03 - 16 厄介事は降りかかる（前書き）

すみません、またまた更新が遅くなりましたが、現在始めから小説の全面改定を行っています^^;

理由はというと、矛盾を見つけたからでしょうか？

あとは描写不足の箇所もあったので、そこに改定を入れたいと思っています。

では、どうぞっ！

03 - 16 厄介事は降りかかる

ひんやりとした風を受け、アレイシアとリセルは王都の上空を飛行する。

眼下に見える景色は、いつか闘技大会で二人が学園を上空から見下ろした時よりも更に明かりが多くて煌びやかだ。

特に、城門へと繋がる中心街は、多くの商店と酒場でかなりの賑わいを見せていた。

「……どこに降りればいいんだ？」

「路地裏とか？」

「そうだな」

これ程までに人が多いと、自然と着地出来る場所は限られて来る。誰にも見られずに着地しようと思ったら、路地裏に降りるしかないかったのだ。

絶対にスカートの中を見せまいと、これまでさり気なくリセルの後ろを飛行していたアレイシアは、翼の角度を調整し、受ける空気の抵抗を減らして一気に降下し始める。……勿論、スカートを両手で強く押さえながら。

タタッ！

着地したアレイシアに続き、リセルも地に足をつける。右を振り返って見れば、明かりの多い中心街が遠目に見えた。

アレイシアとリセルは適度に離れつつも横に並び、翼を収納してから中心街へと歩いて行く。

「ここは、酒場だな」

二人は暫く歩くと、ついに火系統魔法のランプが多く設置されている中心街へと出た。

リセルが言う通り、二人が出たのは酒場の裏だっただけ。酔っ払った男達が、酒場の屋根付きのテラスでてんやわんやの大騒ぎを起こしている。

「あ、厄介事フラグ」

「そう言っただよ……なるべく考えない様になっているんだから」

騒ぎ立てる男達をよく見てみると、中心にある何かを囲うように動いているのが分かった。さしずめ、何かしらの野次馬が集まっているのだろつ。

「よっしやああ！ 茶髪の奴が勝ったぞおお！！」

人集りの中央からその声が聞こえて来ると同時に、両手を上げて喜ぶ物もいれば、頭を抱えて床に崩れ落ちる者も？？？

「……賭け事だ」

「なんだ、やって見たかったり？」

「私はそついうの嫌いだから」

アレイシアはそう言うが、路地裏に立って酒場の中に目を向ける少女少女というのはどうにも目立ち過ぎた。

二人は何時の間にか、酒場の呑兵衛のんべえの注目の的となってしまうていた。そして、話は変な方向へと向かって行く。

「俺とこの女、どっちに賭けるか!？」

「へへっ、そりゃあお前に決まってるだろ!!」

「待て、私が何時やると言った？」

口調が戻りっぱなしのアレイシアの言葉は、話に集中する男達の耳に全く届かない。

その時アレイシアが驚いたのは、意外とリセルが乗り気だったという事である。

「ならアレイシアに……銀貨一枚賭けるよ」

「ちょ、リセル何を!？」

銀貨一枚を賭けると聞き、男達の表情が明らかに変わった。

「……そりゃあ面白い! 始めようぜ!!」

一番手前にいた男がそう言うと、周りの男達も同意する様に大声を上げる。

それをきっかけにし、ルトスはアレイシアの方へと思いつ切り殴り掛かった。

????あ、死んだなこいつ。

この場の誰もがそう考えた。

しかしリセルだけは、一言一句違わず同じ考えを持っていたにも拘らず、全く正反対の事を考えていたのだ。

「食らえやああー!!」

「……うるさい」

雄叫びを上げるルトスに対し、むすつとした表情でそう呟いたアレイシアは、迫り来る右手にそつと左手を添える。

「うお、あ……!？」

アレイシアが手を添えた場所から痺れが広がり、ルトスは一瞬にして体の自由を奪われた。

全身が硬直して動かせない。そんな状況に彼を追いやったのは、アレイシアが手を添えた場所に流し込んだ魔力だった。

左手を流れる様な動作で後ろにやると、アレイシアは続け様に風魔法『ブレットガスト気弾』を発動。

麻痺した体では指先を動かす事すらままならず、ルトスはその攻撃によって大きく吹き飛ばされた。

ザザアアッ!!

「あぐあっ!!」

地を滑り、建物の壁に当たってやつとルトスは静止した。

アレイシアの狙いが上手かったのか、それともただの偶然か。通行人や店には全く迷惑が掛かっていない。

だらし無く足を伸ばすルトスに視線を向けると、アレイシアは呆

れた様に口を開いた。

「……攻撃がストレート過ぎる。やるなら、もっと凝った攻撃を入れればいいのに」

「まだ戦……！」

「だめ、面倒だし」

余りにもキツパリと戦いを断るアレイシアの様子を見て、ルトスは完全に戦意を失ってしまった。

彼としても、幼い少女相手に本気で戦うのは気が引けたのだろう。例え、口元に見えた牙から彼女が吸血鬼だと分かっていたてもだ。

「……戦意喪失でお前の勝ちか？　なら、賭けの三倍の銀貨三枚でどうだ」

「いらない。精々ここで楽しく飲み明かしなさいな」

そう言い残し、リセルの腕を掴んでアレイシアは逃げる様な早足で歩き出した。何故なら、店の周囲に人が集まって来てしまっているからだ。あまり騒ぎを起こすと下手すれば、この区域の警備兵に御目にかかれるかもしれない。

……ただこの時、ルトスがアレイシアのポケットに銀貨一枚を滑り込ませた事に、彼女は全く気が付かなかった様だ。

それから暫く。談笑を交えつつも二人は歩き、中心街から少し離れた広場に辿り着いた。

それなりの広さを持つ広場の中央から、円を描く様に並べられた煉瓦の幾何学的模様が美しい。

「さっき、あの男の動きを封じるのはどうやったんだ？」

「魔力を軽く流し込んだだけ。心臓や肺は停止させない様にするの」

「……それ、滅茶苦茶難しくないか？」

何時の間にやら話題に登っていた先程の戦闘について、二人は会話をしながら木のベンチに座る。

少しずつ元に戻って来たアレイシアの口調。どうやら、感情の起伏に影響されて変化する物らしい。

ベンチに座った所で一旦話を切り、リセルは気になった事をアレイシアに問い掛ける。

「そう言えばその首飾り……」

「えーと、まあ、某ワルキューレの人に貰った物よ」

「成程、理解した。やっぱりあいつか……」

アレイシアの胸元にある十字架の首飾り。

それは、黒美さんが彼女にプレゼントとして渡した物だ。それは今も、広場の街灯の仄かな明かりを反射して弱い輝きを放っている。

「その人の名前知ってる？」

「知ってるが、アレイシアには教えられないな……」

「それは酷い」

「仕方無いんだ、約束だからな」

リセルのその表情から、言いたいけど言えないという感情が伝わって来た。アレイシアが、

黒美さんの本名を本当に知りたがっているという事が理解出来たからだろう。

「……吸血鬼に十字架つて良いのかなあと」

「良いんじゃない？ 吸血鬼が十字架嫌いって言う考えが生まれたのはそもそも宗教上の問題だと思うし。それに、神と吸血鬼がこうして近くに居るのが何よりの証拠よ」

アレイシアはそう言うつと、飛び上がる様にして勢い良く立ち上がった。
つた。

佑は竜人^{リセル}に適合しているとはいえ、神としての存在はきちんと保たれているのだ。言わば『竜神』であり、神力を持っている事もこの証明になる。

「私、その辺の武器屋見て来るわ。フィア達に御土産も買わなきゃだし」

「そうか、行つてらっしゃい」

「……違つ、貴方も来るの」

リセルの腕をガシツと掴み、アレイシアは引つ張る様にして走り出した。

見た目の割に彼女の力が強かったせい、リセルは半ば予想外な物事が起こったと同じ状態になる。つまり、彼はアレイシアを止める事が出来なくなったのだ。

「うあ、待てっ！」

「あ、見つけた。その武器屋とか良さそう！」

遊園地に来た子供さながら腕を引くアレイシアは、以前もこんな事あったかなと思いつつも広場の隅の武器屋へと入って行った。

03 - 16 厄介事は降りかかる（後書き）

感想評価や誤字脱字の報告、改定すべき点などのアドバイスを宜しく願います！

Web拍手の方からでも遠慮無く送ってやって下さい^^

アリア「実はこれからの改定で、私と繋がり強いキャラが一人増えるらしいけど……？」

クレア「そうらしいですね。名前はまだ決まっていなそうですが」

アリア「そう痛い所突かないでよ……」

クレア「では、感想評価をお待ちしております！」

アリア「次回も見えてよねっ!!」

03-17 御土産お買い物！（前書き）

お待たせいたしました！

少々更新を放置してしまって、本当に申し訳ありません……あ、空き缶を投げないで下さいお願いしますorz

作者の忙しさが倍増した上に、改定も進めていますので（現状02-01まで）。大目に見てやってくれると幸いです^^；

……ですが、お気に入りや評価をいれて下さった方もどうやらいる様でっ！

総合評価も2,400を超えました！！ どうもありがとうございます御座います！

03 - 17 御土産お買い物！

「いらっしゃーい！」

店の奥から陽気な男の声が聞こえて来る。

そこら中に並べられた武器や防具などに視界を遮られ、アレイシアとリセルが立つ場所からその姿を確認する事は出来ない。

どうやら、それなりの有名店と言った所か。店内の何処を見ても、武器を片手に慎重な防具選びをしている者や、壁に固定された槍を手取る者などが目に映る。

「これは、きっと正解ね」

「そうだな、品揃えがそこらの店とは桁違いだ」

店に関する他愛の無い会話をしつつ、両脇に危なっかしい程剣が並べられた通路を抜けると、アレイシアはその先から強い濃厚な魔力を感じ取った。

空気中に霧散した類の物ではない。魔導具などに込まれた魔力の感触だ。

「……あ、そこにある」

アレイシアが指差す先には、魔導具と武器の長所を両立させた様々な武器が置かれていた。その中には杖や短剣など、フィアン達が御土産に欲しがっていた物もある。

「どれが良いか？」

「さあ？」

「貴方も探しなさいよ」

他人事なりセルの言い様に鋭い言葉を入れ、短剣が置かれた棚を物色する様に見て行くアレイシア。

と、早速良さそうな物を見つけたのか、彼女は棚の一番上へと手を伸ばす。

「あ、届か……ないっ！！」

身長が足りずに、彼女の手は宙を切るに留まった。

そんな微笑ましさを感じさせるアレイシアの行動を見て、リセルは彼女が取るうとしていたであろう短剣をひょいと手に取りアレイシアに手渡した。

「はい」

「ん……」

アレイシアは短剣を受け取るも、何処か不満そうな表情をしている。

それもその筈。彼女が嫌いな事は、自身の身長の低さを自覚させられる事なのだから。

「……セリアが欲しがっていたのは魔力伝導率の高いやつ。一度魔力を流してみるのが早いと思う」

「売り物だぞ？」

リセルが止めるも間に合わず、極限まで押さえ込んだ魔力をアレイシアは短剣の刃に流し込んだ。

それを恐々と見守るリセル。彼女がどれ程魔力の制御が出来るのかを殆ど知らないからだ。最悪、魔力割れを短剣の内部で起こして木っ端微塵に吹き飛びました、となる事も全くあり得ない訳では無い。

「……で、どうだ？」

「それなりに良い物ね。柄に流した魔力が先端部で二割程しか失われてない」

「よく分かるなあ……」

リセルは密かにホツと胸を撫で下ろす。どうやら彼女は、かなり優れた魔感を持っている様だ。

アレイシアが言った二割という数字。それが多いのか少ないのかは彼女自身も分からないが、魔力を纏わせる事しか出来ない他の武器に比べたら大分優れているという事だけは分かる。

すっかりアレイシアの得意技となった風刃でさえ、基本的に魔力を刀の周囲に纏わせて発動するものなのだ。

「えーと……それと、あとそこ……と、一番上の短剣も取って！」

「ちょ、何か自分使われてる気が……」

「大丈夫、気のせいだから」

「いや、これは絶対に気のせいじゃないだろっ！」

リセルを扱き使うアレイシアは、そんな彼の反応を見て小さく笑い、両手に持たれた合わせて三つの短剣を受け取った。

ここでアレイシアが選んだ物は、彼女の周囲三百六十度に発生させた魔力波の跳ね返りが比較的少かった物である。跳ね返される魔力が少ないという事は、それだけ魔力伝導率が高いという事だからだ。

アレイシアはその事をリセルに説明すると?????

「何時の間にやったんだ……気が付かなかったぞ？」

「うん。さっき短剣に魔力を流してた時、気付かれない様にやった」

「成る程……」

リセルは木の壁に寄り掛かり、考え込む様な仕草をする。その隣ではアレイシアが、手に持った短剣を一つずつ魔力を流して細かく分析して行った。

そして、三本目の短剣をアレイシアが手にした時。彼女は思わず驚きの声を上げる。

「……これ凄い！」

「ん、どうした？」

「素材は何か分からないけど、魔力が殆ど失われずに先端部まで届いてる！」

アレイシアが言うのは、刃渡り一・三テルム（三十センチメートル）程度の片刃の短剣だ。

刃の部分は全体的に青みがかっており、その素材が何なのか全く

見当がつかない。

「これで先ずは決まり。次は杖だけど……」

「ここにある」

リセルは両手を後ろに回すと、まるで手品をするかの様に数本の杖を取り出した。

木で出来ている物や、金属で出来ている物など。杖と言っても種類は様々だ。しかし、彼が取り出した杖は殆どが木製であり、言ってしまうとかなり地味な物であった。

「……さ、さて。ファイアにはどれが良いか？」

「さあ？ 魔力波を拡散して、伝導率が高そうな杖を亜空間に落として取り出したただけだし」

「成る程……」

今度はアレイシアが、腕を組んで考え込む様な仕草をする。これは、先程リセルが考え込んだ結果かと思いつつ、亜空間魔法の新たな使い道かとも考えた。

「ファイアに似合いそうなのはきつとこれ。碧い石が……」

「眼の色と合う、と？」

「うん。私の刀も柄が紅と黒だし、それと同じ様にね」

アレイシアの身長程もある木の杖。その先端に埋め込まれた石の

色が、フィアンにとても似合いそうな気がしたのだ。

確認してみれば、内包出来る魔力量も申し分無い。猫人の平均を大きく上回る魔力を持つフィアンでも、これなら問題無く扱えそう
だ。

「フィアの分はこれで、クレアには何が良いか？」

「彼女は……魔力の制御が異常に上手かったと思うけどな？」

「だから、足りない魔力を補うために、彼女に私の魔力を供給する
魔道具を渡せば、って？」

クレアの魔力量は、アレイシアを含めた他三人と比べても少々低
めだ。しかし、やはり種族がエルフだという事もあってか、彼女は
アレイシア以上に正確な魔力制御を行えるのであった。

リセルはその辺りまで考えた上で、魔力制御の正確さを無駄にし
ない程の魔力を彼女に与えるには、魔道具を渡すのが一番手っ取り
早いという結論に辿り着いたのである。

「何で分かった……」

「顔に書いてあった……というのは冗談で、私も日頃からその事に
ついては考えていたから。……探さなきゃ」

走り出すアレイシアを追う様に早足で歩くリセル。

二人は最終的に、雑多な魔道具が並べられた店の一番奥で、クレ
アに似合いそうなブレスレット型の魔道具を発見した。

……と言うよりも、この店ではこれしか残されていなかったの
で
ある。

「これで良いわ。二つで一セット、送る方と受ける方ね」

「お揃いって、やっぱり良いんじゃないか？」

「そうだけど……セリアが嫉妬しないか不安」

「ああ。そう言えば、君を尊敬しているみたいだったしな」

リセルが言う通り、元々シェリアナはアレイシアに尊敬の念を抱いていたのだ。

最近こそ、半ば恋愛と勘違いしてしまいそうな程に彼女とアレイシアは仲が良いのだが、それは恐らく今も変わらない事だろう。

そこでアレイシアが、クレアとお揃いのブレスレットを身に付けていたらどうか。シェリアナは少なからず、クレアに対して嫉妬を感じてしまうだろう。

「……まあ、それは後で考えるとして。取り敢えずこの三つで良いか？」

それに頷いて肯定を示したりセルは、アレイシアと共に店長が居るであろう方向へと歩いて行った。

短剣と杖とブレスレット。合計銀貨十三枚だった御土産を購入した後、それらをアレイシア自身が装備して店を後にする。

そして二人は、王城での夕飯の時刻も近い事も考慮して、すぐに人目の無い路地裏へと入り王城へと翼を広げて戻って行った。

03・17 御土産お買い物！（後書き）

感想評価や誤字脱字の報告、アドバイスなどはいつでもどうぞ！
Web拍手の方からも、コメントをお気軽に！

アリア「さっ！（板を高速で持ち上げる音）」

セリア「……どれどれ？」

『更新遅れてすみません……（by 作者）』

アリア「……暫くは色々忙しいんだって」

セリア「ありや……大丈夫だね？」

アリア「ま、数週間は忙しいそうよ。……で、では、感想評価を待
ってます！」

セリア「……じ、次回も期待して待っていてね！」

クレア・フィア（どもりすぎですよ……）

- ## アレイシア、シェリアナ（絵：みよーめー様）

画廊です！

本編の改訂を進めている間、今まで上げられなかった頂き物の絵などを上げて行きます。

で、今回の二枚の絵ですが……

私としては、長い間UP出来なくて申し訳無いと思っています。掲載が遅れてすみませんが、素晴らしい絵なのでこれは見るべきです！

では、一枚目。

まずはアレイシアちゃんの方から^^；

> i 2 4 9 6 0 — 2 1 0 7 <

→クリックでみてみんへ！

服装は、二枚重ねの下に着ている方のドレスを意識しているそうですが……

実は『03 - 07 やることは沢山ありました』で、アレイシアが強制的に着替えさせられた服に採用してしまいました（笑）

良いのかどうかは不安でしたが、大丈夫な様で良かったです^^;

二枚目、シエリアナちゃんの絵です！

> i 2 4 9 6 1 — 2 1 0 7 <
→クリックでみてみんへ！

これは良い絵！

私の要望により翼付きです！

……こんなわがままな願いを聞いて下さり、本当にありがとうございます御座います^^;

シエリアナは将来的にはそうなるのかきつとそういう事は（以下略）

みよーめー様、素晴らしい絵を二枚もありがとうございます！ m
（ （ m

P r - 0 1 プ ロ ロ ー グ (前 書 き)

どうも、この度ユーザ登録をしてしまった七篠言平と申します。

まだまだ拙作しか書けないと思いますが、37 程度の生暖かい目で見守ってくれると幸いです。

そんなのはイヤーという方は、ブラウザの戻るボタンを押してみるのが幸せへの近道ですよ（笑）

2011/1/24 追記：

一部の文章、及び改行を改訂しました。

2011/6/22 追記：

再投稿と全面改定を行いました。……とは言っても、プロローグに大きな違いはありません^^；

P r - 0 1 プ ロ ロ ー ゲ

ある夏の夜、一人の少年が塾の屋上へと登って行く。今は既に夜の十時頃、屋上には当然人間の一人も居なく、銀色に輝く満月が屋上を照らしているだけであった。

そんな人気ひとけの無い屋上に一人、先程の少年が軋む鉄扉を押し開け屋上へと出て行く。

彼は名を中峰東次ナカミネ トウジと言い、毎回塾が終わると屋上に月を見に来る、ということが習慣になっていた。彼の友人の多くは全く可笑しい習慣だと笑っていたが、彼自身は、夜空に浮かぶ月を見上げるそのゆつくりと流れる時間が好きなのだ。

いつもと同じ様に、屋上を囲うフェンスに肘をついて月を見上げる。既に夜の十時も過ぎているからか、綺麗に円を描く月は既にかなり高い位置にまで登り夜の町を妖しく照らす。

と、そこで彼はふと、見上げていた月が揺れ動いている事に気が付いた。普通なら有り得ないその現象を疑問に思っ**て**しばし思考に耽る。

屋気楼でも起こったのかと思った彼はそのせい**か**、月ではなく自分が立つ屋上の床が動いている**という事**に全く気付けなかった。

彼の塾が入っている建物は、その新築の様な見た目の割には築十五年**という**実際はかなりの年代物である。更に、上へと二回も建て増ししているため、接合部が弱**ってしまっ**ているのだ。故に、彼の居る屋上はかなり脆いと言えた。

そして彼は遂に、後に歴史に刻まれる事となる大地震に成す術もなく、折れたフェンスと共に地面へと堕ちて行くのであった。

P r - 0 1 プローグ（後書き）

どうだったでしょうか？

まだプロログなのでかなり短いですが^^；

感想評価や誤字脱字の報告、改善点やアドバイスなどはいつでも大歓迎しております！

下のWeb拍手からもコメントをお寄せ下さい。

P r - 0 2 プ ロ ロ グ 2 (前書き)

2 0 1 1 / 1 / 8 追記：

感嘆符（！？）の後にスペースを入れました。
若干の訂正をしました。

2 0 1 1 / 1 / 2 4 追記：

一部の文章を改訂しました。

2 0 1 1 / 6 / 2 2 追記：

全面改訂、再投を行いました。

Pr - 02 プロローグ 2

何処の世界にも属さない、世界の狭間に存在する空間。気付けばそこに東次は居た。

正確に言うならば、世界の狭間には空間など存在しない筈なのだが。彼は自然と、今自分がいる場所??場所と呼ぶ事でさえ正しいのかは分からない??が世界の狭間だと理解する事が出来た。

足や腕の感覚も全く無く、周囲はどの様な色ともつかない奇妙な色で覆われている。

何時の間にかその奇妙な色の空間は白一色に変わり、手足の感覚も戻っていた。

辺りを見回すと、後方かなり離れたところに人影があり、こちらに近づいてきているのが見える。

先程までは手足と同様に有るのかどうかも分からなかった口を動かし、東次はなんとか声を発した。

「……あ、此処はっ、何処なんだ?」

その問い掛けに近づいて来ていた人影は立ち止まり、

「きつと分かっているとは思うが、君は死んだんだよ」

と、質問の内容とは的外れではあるが、短くそう言った。

彼はその言葉に驚きはしたものの、これは夢かもしれないという希望を持ち、再びその人影に問おうとする。しかし、それは人影の言葉に阻まれた。

「僕は死後の魂を送る職についているんだけどね、今回の死者のり

ストを見て驚いたよ。まさかこの地震の日が東次の命日だったとは思ひもしなかった。だからこの世界の狭間に小さい空間を創って魂を呼んだんだよ」

そこで彼は気が付いた。その人影は学校での親友である赤石祐アカイシ ユウのものだという事に。丁度今日も、彼が学校で会った筈の人物だ。

何故ここにいるのか。それともやはり、これはただの夢なのか。疑問は募るばかりだ。

「あ……あれ、何で祐がこんな所に？」

「ああ、言ってなかったけど実はさ、七ヶ月程前に行方不明になっていた時があると思うけど」

「そういえばあった様な……」

「丁度あの時、神になるスカウトがあったから実は乗ったんだ。…魂の器が既に神になるにも相応しい程あるとか言ってたな。一期行方不明になったのは、異世界を旅して信仰集めと修行をしていたから。学校に行かせるーって何度も言っただけど、上が聞かなくてね」

「神ってスカウトするものなんだ……しかも縦社会」

東次は呆れたように祐に言い返したが、祐は何食わぬ顔で言葉を続ける。

「あ、一応これは夢じゃないから。だったら今日塾に行っていたであろっ一日もすべて夢ってことになるんだから」

「……じゃあ何？ やっぱり自分死んでる？」

「そうだってさっき言ったじゃないか……因みに、今の君は魂と精神だけの状態。……あ、大丈夫、転生させることも出来るよ。スルウトの時の条件の一つとして挙げられていたんだ。友達一人まで、
って」

その言葉を聞いた東次は、心の内で希望と喜びに歓喜しながら祐に質問を投げかけた。

「じゃあ、ファンタジーな世界も？」

「もちろんいいぞ？ 所謂チート、最強とかもやりたいなら、必要な時に天界の手伝いをするという条件付きで許可すると言っていたけど」

「やりますやります！ 祐様、喜んで手伝いをさせて頂きますッ！
！」

祐は、物凄い迫力で迫る東次の様子にかなりうろたえるも、祐様って何さと呟く。

「……じゃあ能力や名前とかは此方で考えるから一思いに生まれ直して来なさいな。悪いけど、流石に能力は自由に決められないよ。それと、見ていて面白いし暇つぶしになりそうだからとか言う神もいるけどいいかな？」

「それでも十二分、本当にありがとう。二の次三の次に、絶対神様達も楽しませるからな！！」

そう最後に告げた東次の足下に祐は相当量の神力を消費する陣を描き、言った。

「魂、精神転送、世界番号二二七九、輪廻転生の輪」

次の瞬間には、東次の魂と精神は世界の狭間から消え、祐が『世界番号二二七九』と言った世界の輪廻転生の輪へと入って行った。

P r - 0 2 プ ロ ロ ー ゲ 2 (後書き)

感想評価や誤字脱字の報告、アドバイスや改善点などをお待ちしております！

感想を送りにくいという方も、下のWeb拍手からコメントを送れますのでどうぞ御気軽に^^

01-01 生誕（前書き）

主人公の名前を考えるのに大体合計三、四時間程かった。疲れ
た……

書くべき文字数として提案してくださった三千文字、思ったより
長くて驚きましたw

2011/1/8 追記：

感嘆符（！？）の後にスペースを入れました。

若干の訂正をしました。

2011/6/23 追記：

全面改定と再投を行いました。所々、セリフや描写に差異が出て
ると思います。

あれからどれ程の刻が経ったのかと、微睡む意識まどろの中で考える。確か、東次は『世界の狭間』の中に創られたという真っ白な四角い空間にて、神を名乗る祐と話をしていた筈である。

ならば此処は何処なのか。

まさに朝、これから目覚めようとする時の感覚にそっくりである。やはりあれは夢だったのかと、そう考えた所で急に辺りが明るくなるのを感じた。例えば瞼を閉じていたとしても、それ位は瞼を通して感じ取る事が出来るからだ。

「来た、女の子だ！ 吸血鬼の間の子なんて数ヶ月ぶりだぞ！！」

そこで突然、誰とも分からない男の叫び声が聞こえて来る。

東次はその内容を必至に理解しようとするが、彼が知っている限りのどの言語にも当てはまらなかった。

そして彼は、何故か息が出来ないためについ泣き出してしまう。記憶の中に『産まれたばかりの赤ん坊は泣くことで呼吸を得る』という物はあったのだが、この状況に全く落ち着けなかったが為に、その様な事一つでさえ思い出すに至らなかった。

「良かった……女の子だってよ。一人目は女の子が欲しいって願いが叶ったじゃないか」

「はあ、ふう……良かったわ。彼方、名前は既に決まっているんでしょう？」

「少し前に神様からのお告げがあったんだそうだよ。名前は『アレ

イシア』にするが良い、と」

嬉しそうに話す二人だが、東次、いや、アレイシアには、それが何の話なのか欠片も理解出来ずにいた。

唯一分かった事は、どうやら異世界に転生する事に成功した様だという事だけ。冷静な判断が出来る様になり、やっと思い出した知識の中から引つ張り出した、産まれたばかりの赤子の視力はあまり良くないという事から推測出来た。

「え？　じゃあ私が前に提案したメルヴィナは採用してくれないの？　神様のお告げじゃ仕方がないか……」

「んー……だったらミドルネームに入れてみるのはどうだ？」

「このままだと少し長いから、呼ぶ時はメルでいいかしらね……？　ふふつ、あなたの名前はアレイシア・メル・ラトロミアよ。よろしくね」

そう言う母親に抱きかかえられたアレイシアは、母親の喋る理解出来ない言語の中から自身がアレイシアと名付けられた事を推測する。

妙に女らしい名前だと疑問に思うも、すぐにその考えは飛んでしまふ。何故なら、これから来る新しい人生に期待を膨らませていたからであつた。

刻は遡り二年前。

イルクス王国外れのベルムと呼ばれる貴族が治める領地にて、後

にアレイシアの両親となる二人は出会った。イルクス王国は、多種族が比較的友好に暮らしている事で有名であり、勿論吸血鬼も言わずもがなである。

二人は、両者共にかなり力のある吸血鬼の貴族として広い範囲で有名だ。ここで言う有名とは別に悪名という訳でもなく、イルクス王国に多種族への平等を訴えた戦争があった時に、非常に活躍したと言っただけの話である。

彼らが出会ったのは、お遊び感覚で参加したパーティーで偶然同じワイングラスを取ろうとした所からであり、互いに遠慮しあうも何時の間にか意気投合して仲良くなって行った、というものだ。

ちなみに二人共、人間で言う十四歳程度の身体をしているが、実際の年齢は母が百二十四歳、父が百二十七歳だ。吸血鬼は所謂エルフなどと同じく長寿な種族としても知られている為、実年齢が見た目の十倍という者でさえかなりいるのであった。

????そんな中で比較的年齢が近い二人だからこそ、互いに惹かれ合っ行ってたという節もあるのかもしれない。

彼らはパーティーの参加後暫くしてから吸血鬼が多く集うイルクス国内の街、クラードに居を共にし始め、結婚時には家名をラトロミアに変更する事となる。

家名がラトロミアになったのは実は、アレイシアの名前を決めた神による仕込みだったという事は誰も知らない。

アレイシアが産まれてから二日後の夜。出産のパーティーを催す事となり、流石貴族、と言わせる様な屋敷の中庭には続々と人が集ま

って来ていた。

貴族でありながらもあまり格差を気にしない二人が催す物だからか、その人混みの中にはちょっとした他所行きの服を着た平民も混じっている。

???? 勿論その平民も、吸血鬼の中の一だ。

その中庭の隅、料理が積まれている机が直線状に並べられているその場所に、母のナディアと父のオーラス、そして二人の間には今日の主賓とも言えるアレイシアが籠の中で寝かせられていた。

オーラスは、穏やかな寝息を立てるアレイシアの腕に触れる。確かに存在する命に、彼はふと笑みを零した。

丁度その頃、アレイシアは夢を見ていた。他でもなく、それは神が念話の応用で見せている物だ。

「う……また？　ここは何処だ？」

「こんにちは、転生は無事に成功した様で何よりだわ」

「……誰？」

アレイシア

東次は前回の時と同じく真っ白の四角い空間に居るものだから、てつきり祐が来ると思っていたのだが。目の前に立つ黒髪で緋色のドレスを着た美人さんは、そんな期待を大きく裏切ってくれた。

「あ、私？　これでも神界で、最近あまり仕事の無いワルキューレやっていますが何か？　祐に念話で伝える事だけ伝えろって頼まれたから」

「……そうですか。で、その伝える事とやらは？」

「えっと、気付いて居ないみたいだけどまず、あなたは吸血鬼の女の子として産まれました。都合があつて今は東次の姿を取らせているけど」

そう告げた美人さんの言葉に絶望の表情を浮かべた東次^{アレイシア}だったが、すぐに立て直す。

「何で女に産まれなければ……女らしい名前だとは思ってたけど、それ位は決められないの？」

「ごめんっ！ その辺りはランダムで決めないといけないって決まりだったから」

「まあ、いいか……な？ いいのか？ ……で、祐が言っていた能力にはどんな物が？」

東次は、^{アレイシア}そう言えば祐が能力もこちらで決めると言っていたの思い出し、まずは聞いて見る事にした。

その言葉に、彼女は一度顎に手を当て、考える様な仕草を取る。そして、何かを思いついた様に話し出す。

「能力はですね……矛盾を操る程度の能力に決まりました！」

「ちょ、その言い方は……東の方の世界じゃ無いって!!」

「あれ？ おかしいな……祐がこうやって言うと、あいつは喜ぶって言ってたけど？」

「誰が喜ぶかいつ！ ……つと、待て……？」

某東の方の物語の様な能力発表に突っ込むも、よくよく考えて見ればかなり強力な能力であると言う事に気付き、問いてみる。

「……その能力ではどんな事が可能なのか、聞いてもいい？」

「勿論よ。この世でパラドックスと言われていた事を現実にしたたり、最強まで究めれば存在を消したり、無から物を創り出したりも出来るわ。勿論、始めは全然使いこなせないと思うけどね。始めから使いこなせる能力を創れるほど神は全能でも無いし」

「分かった、ありがとう。精々頑張って使いこなして見せますよ」

笑いながらそう言う東次^{アレイシア}に軽くどういたしましてと返し、そう言えばと思い出した様に続ける。

「産まれた時点の魔力、気を一般的な吸血鬼の十倍ほど、本来持ち得ない筈の微量の霊力、妖力、神力も使えるからそれも試してみるといいわ。訓練すれば増やせる……らしいし？ 何歳でも好きな時に強く念じれば不老になれる上に、体も死にくくなるからね」

「うーん……何かサービスが良すぎない？ かえって怪しいんだけど……」

「いーのいーの！！ こっちとしては神界の勢力強化にもつながるし、見ていて娯楽にもなるから！」

かなり焦って怪しむ誤解を解こうとする彼女。神界では仕事が無

く、暇つぶしを求めているという事実を東次は知らない。^{アレシア}

「そう言えば、佑もそんな事言ってたっけ？ 必要な時に協力すればいいんだっただよね」

「あ、そうよ。必要な時は私から念話で呼ぶから。……と、そろそろ時間だから、じゃあね！」

「あ、待って！ 貴女の名前は何て……！！」

そこまで言いかけた所で急に意識が遠のき、名前を聞きそびれてしまう。

次に会う事があつたら絶対に聞くと決心し、彼は消えてゆく意識に身を任せた。

01-01 生誕（後書き）

アドバイスや誤字脱字の報告、感想評価をお待ちしております！
下のWeb拍手からでも、コメントを気軽に送ってやってくれる
と幸いです^^

01-02 成長して行く彼女（前書き）

2011/1/8 追記：

感嘆符（！？）の後にスペースを入れました。
若干の訂正をしました。

2011/6/24 追記：

全面改定と再投を行いました！
結構、変更の強い場所も出て来ています。

（元タイトル：魔法魔術の学習書）

01-02 成長して行く彼女

アレイシアが産まれてから三ヶ月が経ったある日。

少しずつだがこちらの世界での生活に慣れて来ていたアレイシアは、今日もいつも通りに?????

?????母親の乳を飲んでいた。

始めはやたらと授乳を嫌い、すぐに赤ん坊らしからぬ驚愕的な速度のハイハイで逃げていたのだが。どうしても空腹だけには抗えず、母乳を仕方無く飲まざるを得なかった。

最近は慣れて来たとは言え、やはり未だ進んで飲む気にはなれない。

その様な変わらない毎日を過ごして行く中で一つ、気付いたことがあった。それは言語の習得速度である。

誰だつて、幼い頃の言語学習の早さには目を見張る物がある。しかもその学習には、言語を習得しようとする必要も無く、気付けば何時の間にかその言語を使いこなせる様になっていた、と言う感覚だろう。

もともと習得しようと思う必要の無い事を『習得しようとする意思』と共に学習すればどうなるか。答えは単純、学習速度が飛躍的に高まるという事だけだ。

例えば、母親が己を指差して何かを喋ったとすれば、この場合は『母親』の意味を持つ言葉、或いは母親自身の名前^あでほぼ間違いないだろう。この様な思考回路を既に持っていたアレイシアは、生後一ヶ月を過ぎる頃には日常会話がある程度成り立つ様になっていたのである。

お陰で周りからは、神童だの邪神の生まれ変わりだの、もてはやされたり恐れられたりと大変だ。尤も、声帯の発達が人間より速かったと言うのも理由の一つだろう。

「ふふっ、アレイシアはきっと将来美人になるわよ」

「そんなこというなっ！」

「あらあら怒っちゃって、かわいいわね」

このような対話は毎日の様に繰り返されている。しかし、普通なら喋る事もままならいであろう赤子相手に会話をする母親というのはもの凄くシニールに映る事だろう。

実際、屋敷の使用人達が休憩時間に雑談していると『アレイシア様とナディア様の会話』という話題で持ち切りだ。

最近では、父の書斎にある本を漁って母が簡単な本を読み聞かせている為に、更に言語を覚える速度は上がっている。

ただ、アレイシアは現在大きな悩みを抱えていた。それは、言語習得に伴う口調である。

元々男として生きて来た身としては、女口調で喋るのは憚られる。学習中の言語の中には日本語で言う『僕』『俺』『私』などの性別によって使い分けられる事の多い一人称の単語も多く存在した為に、その悩みは尚更強いものとなっていたのだ。

今は妥協策として、一人称を『私』とし、中性的な口調で喋る様にしている。最悪気は進まないが、少しずつでも女口調に移行すれば良いだろう。何より吸血鬼の生は永いのだから、あまり急ぐ必要は無いのであった。

ちなみに、最近アレイシアは髪が伸び目立つ様になって来たため、その綺麗な黒髪は誰から来たものだろうねと父と母で話をしている事もある。

父は茶髪、母は金髪であり、親族に黒髪の人誰も居ない。こればかりはアレイシアも疑問に思ったのだが、どうせ神の悪戯だろうと軽い気持ちで切り捨てた。

ある日の夜、アレイシアが産まれてから二年が経ったその日、彼女は始めて町の外に出た。何故かと言うと、誕生日に欲しい物としてアレイシアは珍しく本をねだったからだ。

アレイシアが住んでいる町、クラードには図書館や本屋は少なく、本を求めるなら隣町であるラ・レティルに行くのが普通となっていた。

ラ・レティルにはこのイルクス王国で一番大きな図書館があり、本屋も充実している。まさに学問の町、と言った感じだ。多くの魔法魔術研究者達が貴重な文献を求めてこの町を訪れる。

馬車に揺られて到着した、町の中心部にあるこの町でも有数の本屋にて。両親とアレイシアは激闘を繰り広げていた。何故なら？
??

「母様！ あの本でもいい？」

「ああ……アレイシアちゃん、ちょっと待って待って！ ……つてそれは魔導書じゃない！」

「……まあ、買ってあげてもいいんじゃないかな？ 君もアレシアの大きな魔力に気付いていただろう？ どう成長するか見守るのも良いと思うし」

「そうは言っても、だってまだ二歳よ？ ……ほら、またあそこの店員さんが睨んでいるじゃない！！」

産まれてから一年程で走る事も出来る様になっていたアレシアのせいで、先程からこの様な事がずっと続いている。

そのため、いつ店長が出て来て店を追い出されるか分からない恐怖に耐えながら、両親はアレシアの買い物に付き合わされている状態なのだ。

「じゃ、母様。この四冊の本でよろしく」

床に積んである本の山に両手を置いて笑うアレシアに促され、本のタイトルを見てみれば、

『魔法魔術超初心者用 前編』魔導の心得』

『魔法魔術超初心者用 後編』詠唱術式の基礎』

『魔法魔術初心者用』詠唱術式の応用』

『魔法魔術詠唱術式全集』初級から上級まで 第三版』

と、あった。

この素晴らしすぎる本の陳列に、優秀な娘で良かったと軽く泣く父親に対して、まだ魔法魔術を勉強するのは危険だと言う母親。どちらも一理ある意見だ。

結局、アレシアが用意した本の山をそのまま買い、馬車で屋敷へと戻って行った。

アレイシアは二歳になるまで全く気になかったのだが、どうやらこの世界での一日と言うのは元々東次が居た世界よりも長く、大体二十八時間に相当するらしい。そして、一日を十六に分割した時間を『一刻』と数える様だった。

一日が長いので眠くなりやすいかと彼女は考えたのだが、基本的に吸血鬼は夜に活動するためあまり気にはならなかった。

とはいえ、元々一日が二十八時間と言う環境で進化して来た生き物だからこそ、これが当たり前だとも言えるだろう。因みに一年は三百六十日、二十四日を一月とした計十五ヶ月によって成り立っている。

本を買って来たアレイシアは起きている間中、一日の内八刻は本を読むようになり、大の大人を遥かに凌ぐ速度で魔法魔術の知識を蓄えて行った。

しかし、母親に八歳になるまで魔法魔術の使用禁止令を出されている為に、残念ながら実践した事は一度も無い。そのため、実践用の本である『魔法魔術詠唱術式全集』初級から上級まで 第三版』はアレイシアの部屋の角で埃をかぶってしまっている。

アレイシアが知った魔法魔術の知識によると、魔法は基本的に存在する物を動かしたり変質、変形させる事によって生まれ、魔術はどちらかと言うと作り出す方に当たる様だ。

魔法には催眠、物質の遠隔操作、念話が当てはまり、それに対し魔術は火を出したり、風を起こしたり、と言った感じである。

ただ、最近では両方合わせて魔法と言うのが一般的になっている。何故なら近年、根本を辿れば魔法も魔術も全く同じ理論で発動されるという発見があったからだ。

アレイシアが魔法を勉強していて特に驚いたのは、魔法の詠唱に使うエングライシアと呼ばれる古代語である。

エングライシアというのは要するに、東次の居た世界での英語に近く、詠唱用に若干文法が異なってはいるものの内包する単語はほとんど英語と一致する。

本に書いてあった資料によると、千年以上もの昔、とある異世界から数千人もの魔法使いに協力してもらい、異世界転移の術式の稼働に成功した魔法使いが来たという。

当時はあまり普及していなかった魔法をより多くの人が使える様に、エングライシアによる詠唱、記号による術式という新しい概念を取り入れて世界に広めて行った。

今では、皆その人を賢者と呼ぶ。その賢者が英語を扱える地球出身の人物の可能性も否定は出来ないが、地球には魔法が存在しなかった筈だ。そのために、この辺りはまだまだ謎であった。

ただ、魔法の詠唱にエングライシアが使われているのなら都合がいい。何故なら、新しい魔法の開発にはエングライシアの解読が必要不可欠であり、エングライシアが元々ある程度理解できるアレイシアは、その点に関してかなり大きなアドバンテージを握っていると言えるからだ。

八歳になったら絶対に魔法魔術の研究を始めてやると意思を固め、今日も彼女は勉学に励む????

01-02 成長して行く彼女（後書き）

より良い小説を書くためにも、読者様の感想やアドバイスを
お寄せ下さい^^

それを参考に、直せる所から改善して行こうと思いますので！

ではまた次回っ！

01-03 パーティにて（前書き）

文章の全面改定と再投を行いました！

描写が増えたためか文字数も多くなり、二話に分ける事になりました。

……改定が二日空いてしまいましたが、アレイシアの絵を描いていたためなのです。

ん？ 前も同じ様な事があった気が……そしてあの頃は絵を描くのに挫折してた気が↑

では、本編をどうぞ！

01-03 パーティにて

今日はアレイシア八歳の誕生日だ。

彼女の身長も既に四テルムを超えており、長めで腰まで届きそうな黒髪がとも映えている。テルムと言うのはこの世界における長さの単位であり、大体四テルムが一メートルに相当する。

勿論、アレイシアが八歳の誕生日を迎えて何も行わない筈が無い。他の吸血鬼達とも安心して触れ合えさせる年齢になったという事で、パーティーを催す事に決まっていた。

今回のパーティーには、平民貴族関係無しに多くの？人？が集まるといふ。アレイシアの両親がパーティーで知り合ったという事もあるからか、事ある毎に大人数を呼び、パーティーを開こうとする習性の様な物を持っているのだ。

この辺りでは神童と有名なアレイシアを一目見ようと訪れる者も多く、その中にはイルクス王国の国王が来るという話もあった。母親は『何かコネを作っておいて王子様と結婚しちゃえば？』と薦めたものの、勿論アレイシアは興味が無いので完全に無視していた。

パーティーが始まる前。アレイシアと両親は、二階まで吹き抜けとなっているシャンデリアが輝くホールに集まっていた。

アレイシアは既に純白の子供用ドレスを着用しており、胸元にはルビーの嵌め込まれたネックレスを付けている。

そしてこの場が妙に騒がしいと思えば、周りの従者三人程が見ている中で、アレイシアはある種の言葉責め、お説教を受けていたのだ。

「いい？ 国王様や他の多くの貴族が来る今回のパーティーで、いつも通りの話し方は控えた方が良いわ」

「ほら。以前言ったとおりに、礼儀正しく、お淑やかな話し方をすれば良いんだ」

「う……そうは言われても……は、恥ずかしいし？」

実は彼女、一年前から口調をもっと上品にする様に言われているのだ。しかし、いざ喋ろうとすると、女口調を使う事への恥ずかしさがどうも先に出てしまう。いつか時間をかけて、ゆっくりと移行すれば良いという考えはどうやら甘かった様だ。

「ほら、いつも通りの会話を……」

「えあ……わわ、私は、ちょっと……」

「んー、可愛らしくすればいいのに。教えた通りに話すだけよ？……さっきの会話の続きでいいから、ね？」

そう言われ、頬を紅く染めながら俯くアレイシア。

これは女子として普通の事。頭では分かっているけど、身体？？特に口？？が動かないのだ。

と、彼女も思い切りを付けようと思ったのか、一度肩を震わせ前に向き直った。

「……か、母様、今日のパーティーには何人程が集まる予定なのですか？ あ、あ、あああーっ……」

少々言葉が足りないながらも、両親が教えた通りの口調で会話の続きを述べたアレイシアは、言い切ると同時に突然顔を赤くして床を転がった。

何の事はない。ただ、自身が発した言葉に対し悶絶しているだけだ。

「……大丈夫？」

「大丈夫だから……っ！……じゃなくて、はい。大丈夫です……」

床から起き上がる時、思わず戻った口調を慌てて訂正する。
アレイシアがナディアの方に目を向けると、口元を押さえて小さく笑っているのが見えた。これが所謂『上品な笑い方』^{いわゆる}なのかと思いつつも、微笑ましく見られていたのかも知れないと推測し、少々恥ずかしい気持ちになる。

「それなら何とか通用するかな……先ずは今日だけでも、その口調を維持してくれば良いからな」

「はい、分かりました、父様。……ううう」

ホールから中庭に出て、両親と別行動を始めたアレイシアは、さり気無く人の少ないテーブルを選んでジュースを手に取った。

????この時、テーブルが自身の目線より高く、ジュースを取

るのに少し手間取ったというのは内緒である。

このジュースはパーティのために用意された物で、モルという果物から取れるという。モルは高い木に生っている林檎程度の大きさの実で、体力回復にも優れている。そのため、モルジュースは多くの冒険者達によって飲まれているのだ。

魔法薬の原料としても有名なため、アレイシアとしては是非とも飲んで見たかった。味は地球で言う所の、葡萄と林檎を合わせて更に酸味を足した感じである。

と、アレイシアがモルジュースを味わっていた時。急にそのテーブルの前に、オーラスと長めの白い髭を持つ男が現れた。その髭男の後ろには三人程、鎧を身に付けた兵士が立っている。

「アレイシア、国王様がお見えになった。口調には気を付けて」

「あわ、分かりましたっ！」

オーラスの言葉によれば、どうやらその髭男は国王の様だった。国王はアレイシアの顔を見るなりすぐに歩み寄って来る。

「君がアレイシアで間違いないかね？」

「はい、私がアレイシアです。……もしも私が違ったら、父様がこちらに案内しないと思いますか？」

「ほほっ、そりゃあ全くの正論じゃな」

緊張と恥ずかしさを必至に抑え込むアレイシアは、愉快じゃ愉快じゃと笑う国王に若干冷めた視線を送り、モルジュースを口に含む。

国王の後ろに佇む兵士達から僅かな殺気が放たれた。

「ふおつふおつ……！？ そんな目で見ないでくれるかの？」

「むうう。……私に、今回は何の用でこちらに？」

アレイシアは一先ず、無駄な話はやめて本題に行こうと促した。
ただでさえ今日一日中、女口調を続けなければならない上に本を読めない、彼女は少々苛立っているのだ。

「十二歳になったら、儂^{わし}の息子の嫁に来て欲……」

「いえ、断らせて頂きます」

「す、既にオーラス殿とナディア殿には話し……」

「それでも断ります」

「将来王妃に成……」

「断ります」

「何故じゃああ！」

間髪入れず断るアレイシアの様子に、遂に国王が叫ぶ。

アレイシアとしては、この誘いを断るのは当然の事だった。それは、アレイシアの前世が男だったからでもあるが、王の息子とは即ち王子。この国の王子は一人だけで、歳は二十五程度だった筈である。

????そう、決してアレイシアの歳に近い訳では無いのだ。

「その王子はロリコンかつ!!」

「……………ロリコンとは何じゃ？」

「……………あ。し、失礼しましたっ！……………えと、それは古代語を語源に持つ素晴らしいと言う意味の言葉です」

思わずツツコミに走り元の軌道を取り戻すも、不敬罪を当てはめられないかと内心冷や汗をかいていた。

アレイシアが慌てて取り繕った『ロリコン』という言葉、確かに古代語と言うのは当たっている。何故なら、ロリータコンプレックスという英語、もといエングライシアの省略形なのだから????

「む？　そうか。何処か納得がいかぬのじゃが……………」

「気のせいでしょう？　それに、私は王妃に成りたくはありません」

どうせなら王になりたいものね、と何故か女口調を使って脳内で付け足し、アレイシアはその場を離れようとする。

しかし彼女は、一歩踏み出した時点で国王に呼び止められた。

「待ってくれ！　なら、十二歳になったら国立の魔法魔術学園に入るといのはどうじゃ？　儂からのお墨付きという事で、最高のレベルのクラスで入学する事も……………」

「……………それには興味があります！」

「なら、考えておくと良い。もし行く気があるのなら、儂から学園に書類を出そう」

「はい、父様から手紙を出してもらえば大丈夫ですね。……では！」

そう言い残し、今度こそアレイシアはその場を離れて行った。勿論、オーラスに魔法魔術学園の件を話すためだ。

????この時、女口調を少しずつ無理なく喋れる様になっていたという事に、彼女自身全く気付いていなかった。

その後アレイシアは、そのままの口調でオーラスに魔法魔術学園の件を伝える。どちらかと言えば、魔法魔術学園の件よりも王子との婚約を断った事に驚かれた彼女だが、何故かそれ以上に丁寧な女口調で話している事に驚かれていた。

「アレイシア？ その口調は……大丈夫なのか？」

「んんー……少しは慣れました。でも内心、まだそこら中を転げ回りたいくらいに恥ずかしいですが」

「……なら、それはそれで良かったかな？ 無理はしなくても少しずつで良いんだぞ？」

「分かった。少しずつで良ければ私も楽し」

「あ、戻った……」

このままの口調を続けると言われないか若干心配していたアレイシアは、少しづつでも大丈夫だと言われて安心する。

「では、私はあちらの机にいますね」

「……え？」

そう言いアレイシアは、悪戯をするような無邪気な笑みを浮かべてパーティーの席へと戻って行った。

01-03 パーティにて（後書き）

読者様の感想やアドバイスを参考に、直せる所から改善してして
行こうと思います！

感想評価や誤字脱字の報告、いつでも大歓迎です。

ではまた次回っ！

01-04 初めての魔法魔術（前書き）

今回は短めになります。

……というよりも、前回は長くなってしまったので、切って二つに分けた感覚です。

あ、絵も描いていますよ！

塗りを少しずつ進めております^^；

01-04 初めての魔法魔術

さて、歳の頃八歳といえど何がある日だったか。それは、母親による魔法魔術使用禁止令の解除である。

パーティーの翌日。^{アレイシア}東次は、ファンタジーの醍醐味と言える魔法魔術を扱える様になるという事で、六年間待った甲斐があると非常に喜んだ。そして、部屋の角で埃をかぶっていた本『魔法魔術詠唱術式全集』初級から上級まで 第三版』をすぐに引っ張り出して来たのである。

幸い、六年間でこの本の第四版は出版されなかったため、本を新しく買いなおす手間は省けた。

魔法魔術は全て母であるナディアが教えるという事になっており、アレイシアは中庭で待っている母の元へと本を持って駆けて行く。その小さい体に不釣り合いなほど大きい本に、たびたびアレイシアは床に転んでしまいそうになる。いくら力のある吸血鬼とはいえ、幼いうちは人間と変わらない程度の力しか持たないからだ。吸血鬼が圧倒的な身体能力の向上を見せるのは、吸血衝動が起こり始める頃とも言われている。

「母様！」

「アレイシアちゃん！ やっと来たわね。準備は出来てるわよ」

なんとかナディアの下に辿り着いたアレイシア。そこには直径十メートル（二・五メートル）程度の大きな魔法陣が描かれている。

魔法陣とは最も有名な術式の一つであり、結界など、魔法を固定すべき場所には比較的良く使われているのだ。

例えば、敵襲や災害に備えて建物に張る強化の結界を固定するものもあれば、炎に対する防御に特化した火事知らずの結界もある。

アレイシアが立っている魔法陣は、魔力を感じやすくなる結界を張るためのものであり、これから魔法を習おうとする全ての者に共通する『体内、自然に存在する魔力を感じ取る』という過程を成功しやすくするものだった。

これからアレイシアは、結界によって鋭くなった感覚でナディアが放つ魔力を感じ取り、体内や自然から似た？モノ？を探し出すという最も一般的な方法を行う。

「じゃ、大丈夫ね。魔法陣に魔力を流すわ」

「分かりました。遂に……っ！」

そこまで言いかけた所で、突然視界が真っ白に染まる。何があったと考えるも、気付けば身体中が痛みだし、痺れたような感覚に襲われそのまま意識を手放した。

何時の間にか、アレイシアは辺り一面真っ白な四角い空間に立っていた。そして、目の前にはあの黒髪の美人さんが立っている。ちなみに今回は、青と薄緑のドレスを身につけていた。

「こんにちは、今日もいい天気ですね」

「……それは置いておいて、まずは質問に答えて。何で私はまたここに？」

「それは魔力に対する耐性が不十分だったからよ。ただでさえ常人よりも遥かに鋭い魔力に対する感覚、感覚鋭敏化の魔法が合わされば、少しの魔力でも身体中に激痛が走るでしょうね」

「……なるほど、それで私は気絶してこの夢を見せられていると」

アレイシアはうんざりした様に言うが、それ程アレイシアの感覚が優れているという事に他ならないのだ。

普通の人間や吸血鬼でさえ、殆どがこの方法で魔力の感覚を掴むのだから。

「大丈夫、もうじき目は覚めるから。あと、この事を伝えるためにも呼んだんだけど、矛盾を操る能力は十二歳頃に使える様になる予定だからね」

「少しずつ能力に目覚める、みたいな？」

「そうよ。あと、感覚鋭敏化の魔法陣を使わずに先程の方法を試してみるといいわ」

「ん、分かった。それと、貴女の名前は何て……」

そこまで言いかけた所でまた意識が遠のき始める。最後に「私の名前は絶対に教えないんだからねっ！」と聞こえた気がした。

「起きて！ アレイシア！！」

アレイシアの耳に、何処か悲痛な声量で自身の名を呼ぶ声が届く。呼んでいるのはどうやらナディアの様だ。霞んでしまっていて、声はあまり良く聞こえない。

「あう……母様？」

「よかった……いきなり倒れるから心配したわ……何でかしらね？」

かなり心配そう、かつ不思議そうに聞くナディアにアレイシアは答える。

「うん……きつと感覚が元から鋭過ぎたんだと思う。何か魔力が痛かったし。……だから、魔法陣を使わないで魔力を出してみて」

アレイシアにそう言われ、ナディアは鋭過ぎたとか自分で言わないでよ、と呟きつつも、ナディアの利き手である左手から魔力を出す。

そして、アレイシアはその魔力を逸早く感じ取った。

「……へえ、これが魔力」

「え、分かったの！？」

驚くナディアを無視し、アレイシアは感覚を掴んだばかりの魔力を操り、知識だけで持っていた詠唱を始める。

火系統魔法の基本中の基本、魔法魔術を学ぶ者なら誰もが一度は練習する魔法だ。

「願ひよ届け。我、魔法が行使されん事を望む。火よ!!」

そう言った瞬間、アレイシアの目の前に巨大な焰ほのおが現れる。

その焰球は、アレイシアの目の前を一直線に突き進み、中庭の裏、森がある方向へと二百メートル（五十メートル）に渡って焦土へと変えた。

その状況を見ていた屋敷の多くの人達は、そのあまりの威力に恐怖を覚えたという??

「……へ？」

魔法を放った張本人のアレイシアでさえこの反応だ。

彼女はこの時、始めての魔法の行使で、その便利さと恐ろしさを実感したのであった。

01-04 初めての魔法魔術（後書き）

読者様の感想やアドバイス、参考にさせて頂いてます！
感想評価や誤字脱字の報告、いつでも大歓迎です^^

01・05 吸血のジレンマ

アレイシアとナディアは茫然としていた。

それも当然である。実践を一度もした事の無い全くの初心者が、初めて使った初級中の初級の火炎魔法で二百テルム（五十メートル）に渡って焦土に変えたのだから。

ただアレイシアは、魔法を放ったのが屋敷側ではなく裏庭の森側であり、誰もいなかったのを良かったと思っていた。草木や虫、もしかしたら居たかもしれない小動物達に対しては御愁傷様、と言うべきだろうか。

「あ、母様？ どうすれば……」

「……もしかして、私に内緒で魔法の練習してた？」

「いや、そんな事は無いって！」

そう言いつつも、激しく頭を横に振るアレイシア。長めの黒髪が顔面に当たり、それを若干鬱陶しそうに横に分け直す。

「……それはそうか。練習してたらこんなに魔力を暴走させないだろうし。それに、既に屋敷がボロボロになっているわよ」

「う……」

「よし、とにかく今はそのあまりにも多い魔力を上手く制御出来る様になりましょうね！」

「あ、待って！ 引っ張るな、服が伸びる！！ うわっ！？」

ナディアは、アレイシアの着ている服の襟元をがしつと掴むと、引きずりながらある場所へと向かって行った。

その様子を見た者は皆、先程の恐ろしい光景を見せつけられながらも微笑ましいと見守っていたという。

「ちょっと待っ……！！　ここは、どこ？」

アレイシアがナディアに連れて来られた場所。そこは、魔力式ランプが壁際に並べられた、無機質でとても広い部屋だった。

ランプが置いてある以外特に物は無く、アレイシアの叫ぶ声が空間にこだましている。

「ここは、屋敷の外れにある地下室よ。対魔法の強力な結界が張つてあるから、思いつき魔法を使つていいからね。……魔力を上手く扱える様になるまで出さないわ」

「誰が何の為にこんな所に結界を……あと制御出来るようになるまで出さないって何で……！！」

アレイシアは、ナディアの魔力を制御出来る様になるまで出さない宣言に落胆した様子だったが、やはりそれは当然の事だ。何故なら？

「だって、あんな威力の魔法を何度も放たれていたら屋敷がもたないでしょ？　だから、制御出来る様になるまでここでみつちりと練習を付けてあげますからねッ！」

「ええっ！？　だ、ただっ、大丈夫だから！　あ、ちょ、離して…

…!!」

先程下って来た階段めがけ、アレイシアは全速力で走り出す。しかし、すぐに胴をナディアに掴まれてしまい、地に付かない足が宙を空回りするだけとなった。

それでも尚、じたばたと足を動かし続ける辺り、彼女は地下室から出る事を諦め切れない様だ。

「むー……」

「はい、始めましょうね!」

それから、アレイシアの修行は十刻にも及んだという。

まずは先程の初級火炎魔法を放ち、魔力使用量の効率化、加減などを覚えた。その時に対魔法結界が何度も壊れそうになった事を除けば、特に事件は起こらずに修行は進んだ。

実の所『たったの』十刻で魔力のコントロールが出来る様になるという方が異常とも言えるのだが……

ただ、アレイシアは自身の膨大な魔力の全てをを操る事は不可能なため、母親の協力のもと魔力封印の術式を使用した。この術式は魔法陣と詠唱の混合によって発動し、自身の魔力を任意の数に分割する事が出来るものだ。

アレイシアは魔力を七つに分割し、状況に応じて段階を変更する事にした。勿論普段は一段階だけの開放であるが、それでも一般的な吸血鬼の一・五倍程度の魔力を使用する事が出来る。

念じるだけで簡単に二段階、三段階と変更して魔力を開放できる

辺り、複雑な割には手軽で便利な魔法だった。

「これで大丈夫ね」

「母様、ありがと」

「ふふっ、どういたしまして！」

ナディアはアレイシアを抱き締め、頭を優しく撫でた。少し恥ずかしそうに声を漏らしたアレイシアだが、されるがままと言った感じで母親の腕の中から逃れる事はしなかった。

「眠い……」

「……あ、もうお昼ね」

吸血鬼の基本活動時間は夜である。

そのため、屋敷の地下室に来た時はまだ夜だったのだが、今頃地上は日が高く登っている事だろう。この様な時間であるがゆえに、吸血鬼のアレイシアが眠たくなってしまうのも極普通の事だった。ただでさえ、これまでの修行でかなり魔力を消費しているのだから。

「……部屋に戻ったら寝てもいい？」

「勿論よ。それとも、このまま寝たい？」

「うん……おやすみ」

どうやらアレイシアは、寝ばけると年相応以上に振る舞いが幼くなってしまう様だ。

ナディアの胸元に体を預けたアレイシアは、所謂？お姫様抱っこ？の形に抱え上げられる。塞がった両手で器用にアレイシアの本を手にとると、ナディアは地下室から地上へと戻って行った。

それから更に三年が経つ。十一歳になったアレイシアは、三年前と比べると身体面と精神面で大きく成長していた。

身長は五テルム（一・二五メートル）程度となり、長い黒髪は遂に腰の下まで届く。腕を肩から真つ直ぐと下に向けていても、サラサラとした触り心地の良い自身の髪に触れる事が出来る位だ。

更に、何時の間にか自身の胸部に僅かな膨らみが出来ている事に気付いた彼女は、余計な考えを全て捨て置いて純粹に喜んだという。これは、精神面でも成長したという事を示している？？？のかもしれない。

八歳の頃に始めた魔法魔術に関しても、彼女は素晴らしい才能を発揮していた。本来は習得するまでに五年以上かかる筈の中級魔法を、わずか三年で、それもほぼ独学で、ある程度使える様になっていたのである。

今では始めの様に魔力を暴走させる事も無くなり、任意に大量の魔力を初級魔法につき込んで、上級魔法にも引けを取らない威力を発揮させる事も可能になっていた。本来、初級魔法はあまり多くの魔力を受け付けられない筈なのだが、そこを大量の魔力の力押しでそれを可能にしまっている。

それを知った父、オーラスは、娘の魔法魔術に対する素晴らしい才能に喜ぶでも無くただ呆れていたという。

彼女が成長したのは勿論これだけではなく、礼儀作法に関してもだった。

最近では少々多めに女口調を使う様になったアレイシアは、ある日の夕食??とは言っても時刻は早朝だ??にて、今度は食事の作法を教えられていた。

足を椅子から垂直に下ろし、太腿ふとももの間に両手を重ねて置く。これが、食事中的基本的な座り方なのだという。思いのほか普通の座り方で拍子抜けだとアレイシアは思ったが、なら普通じゃない座り方って何なのよ、と密かに自分に突っ込みを入れる。

「エフィクは利き手に関係無く右手に持つのがマナーよ。アレイシアちゃんも、私と同じ左利きだからここは注意ね」

「分かりました」

「肉を切る時は左側面で、刺す時は上から斜めに下ろす感じで。…そうそう、食べやすい大きさに切り分けてね」

力チャッ!!

「あ……」

「……次は、音を立てない様にやってみましょうか? もう一回」

「はい、母様」

エフィクと呼ばれる、地球のフォークとナイフが合わさった様な食器を使って、切り分けた肉を口に運ぶ。今度こそ音を立てない様にと、自然と動作が慎重になる。

塩胡椒とフルーツだけで味付けされたその肉を口に含み、口内に広がる風味を楽しんだ後、アレイシアはそれを鋭利な犬歯で噛み切った。

「つて、また生焼けじゃん……」

「私は、それくらいの生焼けレアが美味しいと思うけど？」

「……苦手。主に血の匂いが」

「吸血鬼でそれが苦手なのは珍しいって、前も言った筈だぞ？」

「あー、私はまだ血がダメで……」

今までにも数度、この様に生焼けレアの肉を食べては苦手だと突き返す事があった。アレイシアの両親曰く、吸血鬼なら十歳にもなれば皆食べている物だそうだが、彼女は独特な？血の風味？がどうしても好きになれなかった。

「これで吸血衝動が起これば良いと思ったんだけど……」

「……ふえ？」

ナディアの言葉を疑問に思い、そのためか変な声を出してしまう。そんな彼女にナディアは顔を寄せると、若干心配そうな面持ちで言った。

「……十三歳頃までに吸血衝動が起こらなかつたら、それで降魔力枯渴状態になりやすくなって危険なのよ。基本的に、吸血鬼同士で吸血を行う場合が多いわ」

「へえ……って、私はどうすれば!？」

「まあ、待つしか無いわ。十歳を過ぎる辺りで吸血衝動が起こるのが平均ね」

魔力枯渇状態になりやすくなるとは言っても、魔力量が通常の吸血鬼を大きく上回るアレイシアが吸血しなかった場合にどうなるかは分からない。しかし、吸血鬼として普通の事が起こらないアレイシアを心配するのは両親として当たり前的事だ。例え、今のところ平均をたった一年遅れているだけだとしても。

その後アレイシアは、血を吸わなければ危険なのに血は吸いたくないジレンマと、いつか起こり得る吸血衝動に対して考えを巡らせながら、少々無理にレアの肉を口に突っ込んだ。

01-05 吸血のジレンマ（後書き）

元々は人間だった者が吸血鬼になった時。その者は、吸血せざるを得ない状況とジレンマに陥る筈なのです。

改定前は完全に入れ忘れていた心情の描写でしたが、上手く伝わっていれば良いなあと思います^^；

読者様の感想やアドバイス、いつでも大歓迎しております！

お気に入りや評価を入れて下さっている読者の皆様に感謝ですm

（
—
）m

01-06 飛行魔法（前書き）

……さて、新展開（笑）

どこまで矛盾を無くせるかという、私自身との勝負っぽいものです。

今回は、比喩や背景の描写を少し入れてみました。

これがかえって裏目に出ないか心配ですが、書いてみないと何も上達しないですよ……ね？

では、本編をどうぞ～！

01-06 飛行魔法

ある日アレイシアは、すっかり彼女の魔法魔術研究所となつてしまつた屋敷の地下室にて、飛行魔法の研究をしていた。

何故この様な突拍子も無い研究を始めてしまつたのかといえ、話は三ヶ月程前にまで遡る。

いつも通り、自室で魔法魔術関連の大本をテーブルの上に広げた時、たまたま目に入つたのが飛行魔法の研究の項目だった。

その本によればどうやら、この世界に飛行魔法は存在しないらしい。人型で空を飛べるのは、獣人の中でも鳥人や、獣人の最強種である龍人と竜人のみなのだという。

極東の地に住まう？ヨウカイ？という人外の中には、人型で空を飛べる者も居るといふ噂だが、その辺りの真偽は全くの不明である。

「そうかあ……」

項目を一通り読み終え、飛行魔法が存在しないという事実に着地した表情を浮かべるアレイシア。ついでに、腕を前にだらしく伸ばして本の上に突っ伏してしまう。

身一つで魔法を行使して飛ぶどころか、御伽話おとぎばなしの様に箒に跨つて飛ぶ事も不可能なのだ。

魔法にこの様な期待を少なからずしていたアレイシアは、ならどうすべきか、と考えを巡らせた。結果、現在の研究を始めるに至つたのである。

最初は、下から吹き上げる風で自身の体を浮かせられないかと考え実行に移した。スカートが大きく捲れ上がったものの、足が僅かに浮いた状態を五秒間維持する事が出来たのだ。これで希望の光が

見えたと思い、アレイシアは更に研究を続けた。

そして今日、スカートの件の反省を活かし、風を弾く結界を自身の周囲に張るという結論に辿り着いたのである。

「願ひよ届け。我、宙を舞わん事を望む！ 飛行！！」
aviate

ゴォッ……！！

アレイシアが一から作った完全オリジナルの魔法であり、東次による地球の物理学の知識をフル活用した飛行魔法は？？？

……ガッン！！

「……痛あつ！！」

一瞬浮かぶもすぐに頭から落ち、失敗に終わってしまった。

アレイシアは涙目で頭をさすりながら何がいけなかったのかと考える。そして、アイデアが記された卓上のノートに手を添えた。

「んー……」

羽ペンで描かれた、円の中央にある棒人間の絵と、その周囲を覆う幾つもの矢印。恐らく、円が風を弾く結界、棒人間がアレイシア、矢印が気流を表しているのだろう。

アレイシアは、円の上部の矢印に指を走らせていた。そこでは、上向きから下向きに矢印の方向が変わっており、結界を包み込む様に風を流すという意図が感じ取れる。

ただ、彼女は考えた。この上部の下向きの風が、自身の落下を引き起こしたのでは無いかと。上昇に合わせて気流も上へと昇らなければ、風によって床へと押し戻されるのは当然の事なのだ。

思い立ったが吉日。気流を見直さなければと思い、すぐに研究机へと向かって行った。目標は飛行魔法で世界を見て回り、いずれは極東の地へと海を超えて行く事だ。

それから数ヶ月。満月の下、テラスで本を読んでいたナディアは驚きの光景を目の当たりにする事となる。

「か、あ、さ、ま!!」

「……え？ あ、アレシアちゃんどうしたの!？」

「ふふつ、飛行魔法が完成したので、外に出たくて来てみただけです」

浮かんでいるアレシアのその言葉にかなり驚いたナディアだったが、すぐに驚きを何倍も通り越してしまったため……

「……はあ、行ってらっしゃい。二刻以内に戻って来てね」

と、幾分呆れを含めた声量でそう言った。

「分かりました、行って来ます!」

そう言い残し、アレシアはその場を離れて行った。

「失礼します」

イルクス城の王の間に、一人の男が扉を開け中へと入って行く。その男は茶髪混じりの濃い金髪を持ち、一目で貴族と分かる様な豪勢な服装に身を包んでいる。中央の王座に座るのは、三年前にアレシアの断る断る攻撃を受けたイルクス国王だ。窓には全て緋色のカーテンが掛けられており、王の間は全体的に薄暗くなっている。王座の手前。段差になっっている場所に立ち止まった男は、立ち膝の姿勢を取ると視線を上げ、国王に向かって何の前置きも無く話し始める。

「アレシアは、物凄い才能を持つ少女だ。国の上層部に入れられればなかなか有用な人材だろう」

「確かにそうじゃ……しかし、三年前に息子の嫁にと思って誘った時も断られてしまったから、誘い事は難しいじゃろう」

「何！？ 国王の誘いを断っただと？」

広間全体に男の声が響き渡る。彼は国の政務の一部を任される者であり、国王に従う者の一人だ。その様な立場上、国王の誘いを断るなど言語道断だと思うのは当然の事であった。

「……しかし、彼女の種族が何だったかという事くらいはお主も分

かつておるじやろう？」

「……吸血鬼……！！」

「そうじゃ。今となつてはこの国の中心となつてゐるのは人外の貴族。例え相手が幼い少女であろうとも、吸血鬼の貴族であるという時点で容易く無理を強いる事は出来なくなるんじゃないよ」

国王の言葉に男はどこか追い詰められた様な表情になる。それはまるで、アレイシアが国王に従わなければ己が不利になるかの様な反応だった。しかし国王は、その事を少々疑問に思ふも気のせいだったかとそのまま話を続ける。

「それに彼女は……あの二人を両親に持つておるんじゃない。オーラスとナディア、家名をラトロミアと変えて十何年か前に結婚しておつた」

「あの二人、反乱側の……！？アレイシアは、そうだったのか……」

「まあ、彼女が素晴らしい才能を持つのも納得じゃな。しかし、アレイシアが息子の嫁に入ってくれればのう……」

国王の憂いを含めた声が響き、王の間は再び無音の空間となる。返答を出しにくい国王の言葉と、男の感情から来る気まずさが、二人が話し出すのを邪魔している様だった。

「……では、私はそろそろ失礼しても？」

「ああ……」

静寂を先に割ったのは男の方だった。彼は立ち上がると、失礼しました、と一言残して王の間を去って行った。

国王は勿論、これが後に悲劇をもたらす事になるとは思ひもしなかっただろう。

01-06 飛行魔法（後書き）

今回、大丈夫だったでしょうか……？

読者様にはこの文がどの様に映っているのか、指摘を頂けたら幸いです^^；

では、感想評価をお待ちしております！

01-07 急襲（前書き）

更新遅れました、すみません……m（――）m

今回は文章全体を書き直してしまいました。

初の戦闘描写とあって、改定前の方は納得の行かない箇所が多々あったからです^^；

まあ、少しでもこの小説を読者様に楽しんで頂ければ幸いです。
第一章七話、どうぞー！

アレイシアは今年で十二歳になる。

彼女が十一歳の頃に創り上げた飛行魔法は、一応周りには公表しないという事になった。何故かと言えば、アレイシアがあまり有名になっても困る上に、飛行魔法を悪用されたくないという両親の願いがあつたからだ。

このような新技術は必然的に、人のためになる事もあれば、人を殺める事にもなりうるのだ。長く生きた経験からか、アレイシアの両親はその事を良く理解しているのだろう。

また、彼女は十二歳になったばかりの一月十日から、国王が直々に誘つて来た魔法魔術学園に入学する事が決まった。現在は一月六日、誕生日の一月七日を翌日に控えている。

当然、魔法魔術学園に入学するとなれば準備すべき物も多く、学園指定のローブに靴、自身の魔導書となる白紙の厚い本など、他にも多くの物が必要だった。これらの買い物は既に済ませてあり、荷造りもほぼ終えて今すぐにでも行ける状態になっている。

白紙の厚い本の表紙には英語で『エンゲライシア the Grimoire of Alysia』と、要するに『アレイシアの魔導書』と書かれており、アレイシアが作った飛行魔法含め二十を超える魔法が術式化されて収められていた。

……つまり、この時点で既に白紙ではなくなっているのだ。学園に白紙でない魔導書を持つて行つて良いのかは分からないが、これでも自分で創り上げた重要な魔法魔術の資料。彼女にとっては、学園に行くからと言って屋敷に置き去りに出来るほど軽い物では無いのである。

学園は、アレイシアが二歳の頃、始めて本を買った時に行った町

であるラ・レティルの先の山脈を超えた場所にある。大体道中馬車で丸一日といった所か。アレイシアは夜明けと共に馬車で出発、夜明けと共に学園に到着という予定になっていた。

アレイシアは、魔法魔術学園ではどのような事をするのかと非常に楽しみにしていた。確かに、今まで独学で魔法魔術の勉強を進めて来たが、この世界の基準としてどのような勉強をするのかと思うと、アレイシア東次は自然と動悸がする程の興奮を覚えたのだ。これまでの日々であまり友人と呼べる？ヒト？が居なかったのも原因の一つだろう。学園は全寮制になっているため、どのような友人が出来るのかと心底期待しているのかもしれない。どうせなら、他の吸血鬼とも仲良くなりたいと彼女は考えていた。

学園ではどのような事が起こるのか。どのような友人に会えるのか。そもそもどのような場所なのか。アレイシアは想いを馳せながら、地下室の卓上に魔導書を広げる。

「ふう……あ、あれ……？」

小さなため息に続き、眠たそうな疑問の声を発するアレイシア。魔導書に書かれた全ての文字が歪んで見えたのだ。

「……な、なんで……ねむ……あ……」

ガタツ！

突然襲って来た睡魔に、アレイシアは卓上に倒れる様にして眠ってしまった。

何故眠くなったのか。その理由を考える暇も与えられずに彼女はこの時眠りに落ちてしまった。

次の日の昼。通常なら起きる筈も無い時間に彼女は目を覚ました。辺りを見回し、自身が地下室で眠っていた事を自覚する。更にそこから記憶を辿り、昨日の夜、突然の睡魔に襲われ思わず眠ってしまった事を思い出す。

椅子に座ったまま上体を起こし、昨日眠ってしまった理由を考える。

体中がやけに重く、肉体的な面と精神的な面で疲れた様な倦怠感。それに加え????

「……魔力？」

自身の体内に、誰のものか分からない魔力が極微量存在しているのが分かった。アレイシアは、このような状態に心当たりがある。

催眠魔法??これを使われてしまった場合、行使者の魔力が体内に少し残されるために後遺症として数日の不調が付き纏うのだ。

これなら、昨日の研究中に突然眠ってしまった事も、現在の気怠さにも説明がつく。問題は催眠魔法を何時^{いつ}、何処^{どこ}で掛けられたかという事だ。そこで強い不安を感じたアレイシアは、辺りを見回し、服装が乱れていないかを細かく確認する。

「問題なし、っと……」

身の安全を確認し、立ち上がった彼女は、おぼつかない足取りで階段へと向かって行く。勿論、机の上に置いてあった魔導書も忘れずに抱える。

誰が何のために催眠魔法を使ったのか、と考えると嫌な予感は尽きない。襲撃の可能性もあるこの事態に、よろけながらも急いで屋敷へと戻って行った。

「闇壁！！」
Radpakkhees

現在は昼のため、未だ日光に慣れないアレイシアは、日を遮る小さな闇の壁を魔導書を用いて出現させた。

上空六テルム（一・五メートル）程度の位置に現れた円状の闇壁は、アレイシアの上をすーっと滑る様についてくる。催眠魔法の後遺症が残る中でもアレイシアは闇壁を軽々と扱うが、それでも難易度としては中級魔法の上位に当たるものなのだ。

屋敷の中へと裏庭の扉から入るが、どこを向いても人の気配は全くと言っていい程無い。屋敷の廊下は完全に静まり返っており、何かがあったのは確実だろう。

しかし、人物だけが消滅するなんて？余程の事？でも無い限り有り得ない。絶対何処かには居る筈だと考え、再び魔導書である魔法を発動した。

「探索！！」
seek

この魔法は名前の通り、周囲に存在する物体や魔力を察知する事が可能だ。半径二百メートル（五十メートル）程度は既に察知出来る様になっているため、一応屋敷の全体を把握する事が可能なのである。

この時アレイシアは、位置としては厨房の奥に眠っていると思われる沢山の気配を感じ取る事が出来た。その中でも特に大きい魔力を感じ取れる四人の内二人は、恐らくナディアとオーラスだろう。誰かが分からないもう二人は、厨房の入り口に近い場所をうろろろとしていた。

アレイシアは走り出す。少し前に使える様になった身体強化魔法で更に加速し、魔法をいつでも発動出来るようにと準備しておいた。不思議な事に、催眠魔法の後遺症はこの時既にかなり薄くなっていた。

????ガタンツ!!

僅か数秒で厨房に辿り着き、両開きの扉を勢い良く開け放つ。すると、周囲の状況を確認する暇も無く突然小さな火の玉が目の前に現れる。

咄嗟に張った魔法障壁で火球を防ぐも、その直後、隙を与えず真上から剣の一閃が迫る。少々剣に掠りながらも勢い良く横に転がった彼女は、攻撃を仕掛けて来た張本人の姿を捉える。

振り下ろした剣を持ち上げ、アレイシアと視線を合わせる男。見た目から判断すれば、どこにでも居そうな金髪の青年といった感じだ。

「……貴方は、誰？ この屋敷に何の用？」

「お前に言う事は無い。俺はただ、雇われているだけだ」

冷淡な返答に、アレイシアは少々怒りを覚えながら再び男に問おうとする。しかし、発そうとする言葉に無意識に力が籠こもってしまうため、一旦気持ちを落ち着かせてから話し始めた。

「雇われて……？ 誰が貴方を雇っているの？」

「……それと言うと思ったか？ 俺が言われた事は、この屋敷に住む黒髪の少女を斬り捨てる。それだけだ！！」

言い終わると同時に、男が持つ剣からバチツと空中に一筋の光が走った。無詠唱で雷魔法を剣に纏わせたのだ。

これで剣の斬れ味を良くし、更には攻撃範囲を広げ、一度喰らえば体が痺れるという効果まで付加する事が出来る。

「……！？ 平和的に話し合いで解決した方が互いに得策だと……きやつ！？」

「お前と話す事など無い！！」

胸を横に薙ぎ払う様な一撃を、ギリギリの所で後ろに移動して回避する。その時、思わず出してしまった声にアレイシアは恥ずかしさを覚える。

横薙ぎの一閃から前へと踏み込み、アレイシアへの接近を図る男。それに対し、武器と言える様な武器を全く持たないアレイシアは、剣から逃げる様に離れつつも、お返しと言わんばかりに初級魔法を弾幕の如く連続で放つ。

????しかし、初級魔法を多く相手に放った所でそう簡単にダメージを与えられる筈も無く、殆ど男の魔法障壁に防がれてしまっている。

アレイシアは困っていた。このまま男に大魔法を放てばダメージを与えられる事はほぼ確実なのだが、屋敷に被害が出る上に、厨房の奥で眠らされている人達も居る。避難でもさせない限り、自身の魔法の流れ弾で使用人や両親を傷付けかねない。

ガタッ！！

「扉……！？」

剣を避けている内に、何時の間にかアレイシアは行き止まりに追いつかれてしまっていた。前方には木製の扉があり、その先に部屋がある事は分かるのだが、どうやら鍵が掛けられており行き止まりも同然だ。

背後で男が立ち止まる音。アレイシアは扉に背を向け、男の方を振り返る。

「もう行き止まりだ。そろそろ諦める」

「……その程度で、諦めると思った？」

アレイシアは逆手で扉の錠前を鷲掴みにすると、身体強化魔法を付加した怪力で錠を扉もろとも破壊した。

？？バキンッ！！

錠前が付けられていた扉の右側は全体が木片と化し、崩れ落ちる扉と共にアレイシアは奥へと移動した。

「……っ！？」

そこは、天井と壁が石で覆われた食料庫と思わしき場所。しかし、それは重要では無い。アレイシアの両親と屋敷の使用人達全員がそこで眠らされて居たのだ。

アレイシアの思考が停止する。それは僅か数瞬の間であつたが、彼女が隙を見せるには充分過ぎる時間だ。

雷を纏った剣の突きが、背後からの確にアレイシアを捉え、彼女がその攻撃に気付いた頃には時既に遅し。それ程の至近距離では勿論、魔法障壁を張る事も回避する事も間に合わず????

????サクッ……

その剣は、アレイシアの心臓を貫いた。

驚きの表情を浮かべ、床に倒れ伏すアレイシア。その時に剣が抜け、傷口から多量の血が溢れ出す。

男は何を言うでも無く、剣を振るつて血を払い落とすとそのまま食料庫から去って行った。食料庫の中には、眠らされた屋敷の住人達と、血に濡れたアレイシアだけが残される。

????神様……っ、あ……たす、け……！！

彼女は朦朧とする意識の中、ただただ、助けを求めて声を発そうとしていた。

01-07 急襲（後書き）

はい、Bad Endで終わりという訳ではありません（これ重要）

まだまだ先はありますよ！

感想評価や誤字脱字の報告、是非ともお気付きの点があれば送って下さると嬉しいです。

では、次で恐らく第一章の終わりでしょう。

乞うご期待です！

（→使い方、合っていますよね？^^；

意識がだんだんと曖昧になって行く。手足の感覚も薄れ、痛覚が弱まってきたのか、胸元の傷の痛みまで引いてきた。

何とかこの状況を打開出来る方法は無いかと、彼女は薄れ行く意識の中で考えを巡らす。しかし当然、はっきりとしない意識の中ではまともな思考を保つ事は困難だ。

高い自然治癒力を持つ吸血鬼でも、少なくとも百年は生きなければ心臓を貫かれて回復するという荒技は難しい。治癒魔法を使つて回復を促す事は可能かもしれないが、現在のアレイシアは治癒魔法をそれ程良く使える訳でも無いため、あまり頼れるものでは無いだろう。

「う、えええ……けほつ……」

何もすることが出来ない自身への悔しさで、自然と涙が込み上げて来る。二度目の人生があるという時点で充分贅沢な話なのだが、それを無駄にするのは全ての死者に対して失礼な話だ。だから、彼女はここである決意をした。

一か八か、生きる死ぬか、二択に一つ。何もやらなければ死は免れないため、わずかな希望だけでも見える行動に出る事にしたのだ。それは、永遠に現在の容姿を保ち続ける不老になる事だった。そうすれば死ににくい身体になると、あの黒髪美人さんが言っていた筈である。

注意しなければいけないのは、不老は決して？不死？では無いという事。アレイシアは、もしかしたら今も自身を見ているかもしれない神に向けて、叫ぶ様なつもりで強く念じた。

????？今、お願いだから不老にして……っ！！ 私にはまだや

る事があるはずな……

感情的に訴えられた彼女の言葉はしかし、意識の暗転とともに最後まで言い切られる事は無かった。

ただ、彼女が意識を失う直前。どこか楽しそうな声量の、とても懐かしい声を聞いた気がした。

「う……？」

たった今まで、夢を見ない眠りのように何も感じていなかった彼女。瞼をうつすらと開き、暗い視線の先に見える指で床に触れる。

そこには木の材質を思わせる凹凸があるものの、触り心地はどうかべつたりとしていて、まるで長時間空気に晒されて固まった血の様な……？

「……あ、ああっ！！……っ、そうだ、私は……」

気絶する前の事を思い出し、一瞬で意識が冴え渡る。アレイシアは上体を起こし、思わず胸部に左手で触れた。

そこに傷らしき箇所は見当たらず、衣服に空いた大きな穴から血濡れた肌が覗くだけだ。この時彼女は、自身が完全に不老になったのだと確信した。

不老になれば死にくくなるとは言っても、心臓に空いた穴を治す程とは流石に驚いてしまう。ただ、身長にしる胸にしる、もうこれ以上成長しないのかと思うとどこか寂しく虚しい様な気持ちにさせられる。

しかし、今は自分の事よりも、この場で未だに眠っている人達を起こす方が優先だ。恐らく、何処かに設置されている催眠魔法の魔法陣を破壊すれば、彼らは目を覚ます筈であった。その魔法陣を逸早く見つけて解除するため、両親がいる場所の隣へと歩み寄って行く。

ガタッ！！

「……あわっ！」

二歩前へと進んだ瞬間、突然前日と同じ様な睡魔に襲われた。どうやらこの先は魔法陣の範囲内の様だ。咄嗟の判断で体重を後ろに掛け、背中から床に倒れ込む。

ここでもしも前に倒れていたら非常に危険な所だったが、お陰で正方形の頂点を取るように設置されている魔法陣をすぐに発見する事が出来た。

アレイシアは魔法陣に手をかざし、多量の魔力を一気に流し込む。これで魔力の回路を破壊し、魔法陣を無力化する事が出来るのだ。

そして、四つ目の魔法陣に魔力を流した時????

「……んっ、ここは……?」

「あ、母様!」

「……アレシアちゃん!! ……な、何でそんなに血が……大丈夫!」

アレシアは勢い余り、目を覚ましたナディアに抱きついてしまう。母親は血塗れの娘を心配している様子だったが、当のアレシアは母親に抱き付いたまま離れない。

何時の間にか父親のオーラスも起きていたのか、アレシアの服の背にぽっかりと空いた穴に視線を向けては疑問の表情を浮かべている。

その後も続々と起き出す屋敷の使用人達。何が起ったのか理解出来ずに混乱している者が殆どだった。

「……何があつたんだ?」

「あ、父様。説明はするけど……その前に風呂に入って来ても良い?」

「まあ、そんなに血がついていたらな……」

「ありがと、ついでに着替えてくるわね」

もう既に夜のため、暗い食料庫の中では確認が難しかったのだが、彼女は自身がなかなか凄まじい格好をしているという事にようやく気が付いたのだ。アレシアは食料庫を後にし、クローゼットから

黒い服を取り出して風呂場へと向かって行った。

????その後、風呂上がりのアレイシアが両親による質問攻めを喰らったというのは当然の話である。仕方無く誤魔化した部分もあったが、催眠魔法で眠っていた事、自身を殺そうとする者がいた事、食料庫で血を流したのは自分だという事は素直に伝えた。

何かと大変な事件はあったものの、今日はアレイシアの誕生日だ。その日はアレイシアが眠ってしまうまで、夜通しならぬ昼通しで祝いをしたという。

01-08 急襲 2（後書き）

はい、前回の後編になります！（結局今回で一章は終わらなかった……）

色々と、改定前の二倍くらい描写の量が膨らんでしまっただ変です……が、それだけ描写の力が上がっていたら良いなあとポジティブに考えてみる事にしましょう^^；

次回で第一章終幕、その後はやっと魔法魔術編ですね。

次の更新こそは早くしよう……っ！

では、感想評価をお待ちしております！！

一月九日の夜明け頃。この日からアレイシアは魔法学園に向かうため、普段なら柔らかいベッドにダイブしている筈のこの時間に、眠い目を擦りながら馬車に乗り込んでいた。

学園初日の服装という事もあるからか、彼女が現在着ているのは好みに合わせた新品だ。ロングスカートのワンピース、色は全体が黒のシンプルなもので、二日前の事件でボロボロになった服と似た様な造りをしていた。

彼女は馬車に乗ると、トランク二つ分に纏められた荷物を荷台では無く自身の足下に置く。横幅は広く、座席にそのまま寝転がって眠る事も出来そうだ。向かい合って設置された反対側の座席を挟み、中央には魔導書を広げられる程の大きさの机もある。

彼女は幾度と無く座り直しては座り心地を確かめ、なかなか居心地の良さそうな馬車だと思い、両親が立っている方の窓から身を乗り出した。

「父様、母様、そろそろ出発するわね……眠い」

「……馬車の中で寝て行ってもいいんじゃないかな？」

「ダメ……この御者さんも国王から寄こされたって言うけど怪しいわ」

「そんな懐疑的になつては……」

必要以上に警戒するアレイシアを父親が心配しているが、一度死の寸前まで追い詰められたともあれば仕方の無い事だと言えた。

「ま、学園でも頑張つてきなさい。行つてらっしゃい！」

「分かりました、行つて来ます!!」

アレシアのその声を受けて馬車はゆっくりと走り出す。彼女は窓から身を乗り出したまま、両親の姿が見えなくなるまでずっと手を振り続けていた。

その後、クラウドを出た辺りで彼女は魔導書と羽根ペンを机の上に広げ、地平線まで続く広大な草原を窓からのんびりと眺める。時折、思い付いた様に羽根ペンを手に取れば、魔導書に術式やアイデアを書き込んで行った。学園に着くまでの間、恐らくずっとそうしているつもりなのだろう。

丸一日の道の先、学園ではどのような事が待っているのかと、アレシアは期待に胸を膨らませていた。

01-09 学園へ（後書き）

……短くてすみませんでしたっ！

これから第二章なので、もっと執筆のペースを上げなければと思います。このままだと

なかなか、元の場所まで追いつけませんからね^^；

次話からは次章に突入です。

アレイシアの魔法魔術学園での生活に乞うご期待！（↑また今ひとつ自信の無い言葉を……）

感想評価や誤字脱字の報告、いつでも大歓迎しております！

追記：

実は、予約投稿の日付を間違えて二日も遅れてしまったなど（苦笑）後になって気付いて再設定しました、と言うよりも、今から再設定します。遅れてすみませんでした！

02・01 魔法魔術学園（前書き）

今回から第二章です。

文字数が多くなったので二話に分割する事にしました。

改定前に入れていなかった描写も、結構増えているのかもしれない
せん（笑

では、どうぞー！

アレイシアが馬車に乗り込んでから丁度丸一日が経つ。一月十日の早朝、彼女が乗る馬車からは、朝日に照らされた何十もの棟が建ち並ぶ魔法魔術学園が見えていた。

あれから結局一睡もしていない彼女は、かなりのペースで目を擦り、何度も欠伸^{あくび}を繰り返している。

????ガタツ！ ガタガタ……

町を離れてから砂利道続きだった道路は一変、石畳で舗装された頑丈な道に変わった。道路脇には街灯が並び、学園の門までずっと伸びている。その様子は何処と無く自身を迎え入れてくれている様に見え、アレイシアは少々の嬉しさを覚えた。

学園の正門に到達する直前、彼女は一瞬だけ寝た様なそぶりを見せる。何故かといえば、本当にこの馬車の御者は信頼出来る人物なのかを確かめるためだった。もしかしたらこのタイミングを見計らい、アレイシアを襲うつもりでいるかもしれない。

「……よしっ」

すると案の定、御者の男は馬を走らせたままアレイシアの乗る車に滑り込む。何処に隠し持っていたのか、男は短剣を右手に持つと彼女を狙って振り下ろした。

??パシッ!!

しかし、アレイシアは男の腕をいとも簡単に鷲掴みにする。実際

は身体強化魔法を使っているため、余裕と言える程でも無いのだが。

「……貴方も、依頼されたのかしら？」

「な……があっ!？」

掴んだ男の手首を捻って馬車の壁に押さえつける。勿論その際に、短剣を取り上げる事を忘れない。

「……そうだった、馬を止めて？」

「あ、ああ、分かった……」

その後アレイシアは、御者の男を馬車に積まれていた縄で縛り、学園の正門警備員に事情を伝えて預けた。アレイシアとしては何かと心配な事もあったのだが、一応これで大丈夫だろう。

このような小事件はあったものの、やっと学園に到着したのだから、まずは入学手続を済ませなければならない。アレイシアは正門に停めた馬車から二つのトランクを引っ張り出し、重そうに両手に抱えて正門を通り抜ける。

両側に木の植えられた、煉瓦造りの鮮やかな道路。アレイシアと同じ新入生だと思われる者も何名か歩いており、大きい荷物を抱え、同じ方向を目指している。

「うわぁっ……」

しばらく長い道を進むと、中央に高さ二十メートル（五メートル）

程度の噴水がある円形の広場に出た。今まで辿って来た道と同じく煉瓦造りで、アレイシアが来た方向を含め四方に道が伸びている。

そのあまりの広さに思わず声を漏らした彼女だが、今でなくても後に飽きるほど見る事が出来ると、入学手続が行われるという右の教職員塔方面の道へと向かった。

すると目に入って来るのは、？棟？ではなく？塔？と呼ぶに相応しい、この世界では非常に稀な八階建ての建物。この中に、職員室、事務室、校長室などの設備が入っているのだ。

「すみません、入学手続はどこですか？」

「ん？ お嬢さん、ここの扉を入れて、廊下を真っ直ぐ進んだその突き当たりに部屋がある。入学手続はそこだ」

「ありがと。……あと嬢さん言うな」

「……………え？」

アレイシアが質問したのは教職員塔の入り口に立っていた男。彼は、アレイシアが発した言葉は空耳だったかと疑問に思った。

「ふう……………涼しい」

？？実はここまで、早朝の弱い日光に少々我慢しながら歩いて来たというのは内緒である。

アレイシアが着いた部屋の前には、新生だと思われる人が多く集まり列を作っていた。一口に？人？とは言っても、尖った耳を持

つ者や、尻尾が生えている者など、厳密に言えば人でない者も多く伺える。

列の最後尾に着き、アレイシアは自身の順番が来るのを待つ。よく見てみれば部屋の奥まで列は続いており、長机の前に座る四人の教師が順番に新入生の入学書類を見ていた。

「えー、次の方？」

「はい」

トランクの中から入学書類を出して待っていると、遂にアレイシアの番が回って来る。彼女はすぐに返事をする、トランクを引き摺る様に慌てて教師の下へと移動した。

「えー、まずは入学書類を見せて下さい」

「これですね？」

「そうです」

教師の男は、受け取った書類を一枚一枚開いて確認して行く。書類の中には国王の推薦状や、アレイシアについての情報が記された紙などが入っている。

時折『ほおー』やら『うーむ』などと声を漏らし、間もなくアレイシアに薄い金属板と一枚の紙を手渡した。

「……これは？」

「その板は学園証と呼ばれていて、この学園の生徒だという事を証明する物だから、くれぐれも失くさないように気を付けて。あと、

寮の部屋番号もその学園証に書かれているからね」

板をじつと見つめてみたり、裏返してみたりと、興味深げに学園証を観察するアレイシア。そんな彼女を見て、教師は付け加える様に言う。

「それと、紙の方にはこれからの動きと学園の規則が書かれているからよく読んでおくように。僕は教師をしているフィズ・エイレル。またいつか、学園で会つかもしれないから覚えておいてくれると助かるよ」

「説明ありがとう、よろしく願いします」

「ははっ、この場で説明するのは僕の仕事だから。……と、出る時には左の扉からな」

「はい」

再びトランクを抱えると、すぐに机を離れ、入って来た方とは別の扉から部屋を出た。

フィズ先生、と呼んで良いのかは分からないが、彼から貰った紙を広げてこれからの行動を確認する。すると、この日はもう何もやるべき事は無いと分かり、アレイシアは安心して寮へと向かう事にした。

教職員塔を出た後、学園全体の地図が描かれた看板の前でアレイシアは立ち止まる。その地図によれば、寮は教職員塔からまっすぐ進めば着く様だった。それを確認した彼女は、加えて学園全体の設備にも目を通して行く。

学園の入り口は東側、中央に噴水の広場があり、一番奥に当たる

西側には多くの生徒が学ぶ校舎があった。校舎の両脇には更に、四つの実践魔法用闘技場、ギルドの学園支部、多くの店が揃う学園街までもがある。北側は教職員塔、南側はアレイシアが今から向かう寮だ。

何故これ程充実した設備が整っているのか。それは恐らく、学園から一番近くの町でも馬車で三刻以上かかってしまうからだろう。アレイシアはその地図の内容を軽く覚えると、再び寮へと向かって歩き出した。

教職員塔から歩き始めて四半刻。ようやく寮のロビーに到着し、胸のポケットに仕舞ってあった学園証を取り出す。その右側を見てみると、名前などの項目の並び、下から二番目に？寮番D204？と書かれていた。

「……ここかな？」

寮の地図で場所を確認して進んでいくと、二階の一番奥に当たる部屋の前に辿り着く。どうやらここがアレイシアの寮室の様だ。扉の横に設置されていた機械？？まるでホテルの電子ロックの様な形をしている？？に学園証を差し込み、ゆっくりと扉を押し開ける。

「誰ですかー？」

「……あ、あれ？　ここは二人部屋なの？」

扉が開くと同時に顔を出したのは、茶髪で猫耳と猫尻尾を持つ、如何にもお嬢様といった感じの少女だった。彼女はその猫耳を合わ

それでもアレイシアの身長に及ばず、互いを見上げたり見下ろしたりという形になっている。

「……もしかして、この部屋で一緒に住む人ですか？」

「そうなるわね……これからよろしく。私はアレイシア・ラトロミアよ」

「あ、私はフィアン・エンレイスです。よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げたフィアンに部屋の中へと促され、中央の机を囲うソファに二人で座った。全体的に木で造られた箇所が多いこの寮室は、大きな窓もあって明るい印象だ。

「で、フィアンは今何年生？」

「まだ昨日来たばかりです。多分一年生になると思いますよ」

「なら、私と同級生かな。……これからどうする？」

アレイシアはソファの背もたれに深く腰掛け、渡された紙に書いてあった説明を思い出す。一週間後にあるクラス選定の試験まで、自由という名の暇が続くのだ。

「後で学園を見て回りませんか？ 昨日は疲れていて、まだ部屋を出ていないんですよ」

「そうね、後で……今は眠いから寝るわ。学園を見て回るのは夕方からでもいい？」

ここまで我慢してきたものの、アレシアの眠気はもう限界だ。ソファに腰掛けたまま、横に崩れ落ちる様に寝てしまう。

「夕方からでも良いですが……大丈夫ですか？」

「うん……学園に着くまで丸一日、一睡もしていなかったから。それに、私は吸血鬼よ……」

「……あ、吸血鬼だったんですか。私で良ければ献血しますよ？」

フィアンの優しい言葉は結局アレシアの耳に届かなかったが、実は吸血される事に対する好奇心があつたのは事実である。

当のアレイシアは既に夢の中。相当疲れていたのか、夕方になるまで八刻に渡って眠り続けた。

……あれ？

描写の密度を上げたせいか、少々グダグダ感も否めなくなっ
てしまったような……今度は逆に、無駄な描写を削る方法を考
えて行かなければです。

感想評価やお気に入りを入れて下さっている方に感謝です^^
アドバイスや改善点をお待ちしております。

02・02 一日目の買い物（前書き）

今回は（何故か）長めになります！
短い時の二倍近く、五千字程度です。

アレイシアとフィアンの学園生活一日目、学園の話がようやく始動します。

02・02 一日目の買い物

「アレイシアさん、朝で……じゃなくて夕方ですよ！」

「う、あと少し……半刻だけ」

夕方になり、カーテンの隙間から橙色の夕日が差し込む頃。フィアンはアレイシアを起こそうと、幾度となく彼女を揺すり続けた。

しかし、先程から寝坊の典型的文句である『あと少し』を繰り返して、寝返りを打ってはまた眠りに落ちてしまう。そんな彼女を見て、フィアンは遂にアレイシアの耳元で叫んだ。

「起きて下さーいっ！！」

「わきやあっ!?!」

突然の事に思わず声を上げたアレイシアは、じんじんと痺れる右耳を抑えながらフィアンの方へと向き直る。

「も、もうちょっと優しく起こして……」

「優しく起こしても起きなかったんです……」

「……ごめん」

フィアンの声で完全に目を覚ましたアレイシアは、トランクの中から黒いワンピースと魔導書を取り出す。そのすぐ隣では、フィアンが水色を基調とした装飾の付いた服に着替えていた。

「これから行く場所は学園街でいいですね、買い物もしたいですか」

「うん、私も買いたいものがあるから探してみる」

この時点でフィアンは着替え終わり、所持金が入っているとかわれる袋を手にとっていた。アレイシアは今からワンピースを着る所なのだが、その時フィアンは首を傾^{かし}げる。

「あの、ちょっと……」

「何？」

「同性なのに何で隠れて着替えているんですか？」

「なっ……そ、それは別に……!!」

顔を赤らめながらも着替えを済ませたアレイシアは、ワンピースの上から茶色のベルトを腰に巻く。財布、魔法薬などのホルダーにもなる非常に便利なもので、今回は財布だけを腰の右側に固定した。魔導書を手に取り玄関へと向かうと、待っていたフィアンは感心した様にアレイシアの服装を観察する。

「ワンピースの上からベルトというのも良いですね……参考に見ましようか」

「私はいつもこんな感じよ」

「へえ、そうなんですか」

「そうなんです、とか言ってる暇があったら早く行きましょう?」

「そうですね。……あわ、待ってー!」

高揚した気持ちで思わず駆け出してしまったアレイシアは、後から着いてきたフィアンと足並みを揃え、二人で学園街へと向かって行った。

二人が到着したのは、道の両脇にありとあらゆる店が並ぶ場所だ。食材、洋服、武器、果てには魔導具まで、様々な物をここで揃えることが出来る。

この場で食材も売っているのは何故かといえば、全ての寮にキッチンが付いていて自炊も可能となっているからだ。しかし後に、アレイシアもフィアンも料理にはほぼ縁が無いという事が分かり、結局は寮の下のレストランで食べる事になるのだが。

「本当に何でも売っているわね……こんなに賑やかなのは久しぶり」
「私もです」

女二人の買い物の割には衣服関連の店に行く様子は無く、ずっと本屋や魔導具店を回る。アレイシアは本屋で、フィアンは魔導具店で、他の客とは違った食い付きようを見せた。

辺りも暗くなり、フィアンの腹の虫が鳴いた頃。最終的には海鮮専門のレストランで食事を取る事となった。二人は向かい合うよう

に座り、一つしかないメニューの板を覗き込むように見ている。

「ここは、魚介と山菜のスープが美味しいそうですよ?」

「なら……私はその一つ下で」

「えーと、貝尽くしプレート? ……美味しそうですね、私もそれにしてみます」

「呼ぶよ? すみませーん!」

アレイシアが選んだ貝尽くしプレート。値段は高くなく、どちらかと言えば安い程だったというのに、出て来た料理は予想外の大きさだった。

初めは食べ切れるか心配だったのだが、フィアンがもういっぱいと言うと、アレイシアはその残りまで全て平らげてしまった。それでもアレイシアは、常識の範囲内で良く食べる方なのである。

「……ふえ、食べ切っちゃったんですか?」

「うん、美味しかったわ。私もいっぱい」

席に座ったまま支払いを済ませ、二人は寮への帰路に着く。この日は結局何も買っていない事に気が付いたのだが、フィアンはまた来る時こそは買おうと変な意気込みを見せていた。

その日の夜。アレイシアは二段ベッドのある寝室で、机に向かっ

て何やら作業を行っていた。卓上に魔導書を広げ羽根ペンで書き込んで行く彼女の様子は、どこか近寄り難いような鬼気迫る雰囲気醸し出している。

「ふうー……」

??ガチャッ

「アレシアさん？」

ひと段落着いたのか、アレシアが椅子にもたれかかった時。寝る準備を終えたフィアンが部屋の中へと入って来た。

「……何をやっているんですか？」

「魔法の研究よ。中級魔法の効率化が出来ないかと思って」

「それは、凄いですね……」

暫しの沈黙。紙と羽根ペンが擦れる音だけが聞こえて来る。

「あの、寝なくても大丈夫なんですか？　いくら夜派だとはいつても、一学期が始まる頃には直さないといけませんよ？」

「きつと、少しずつ直して行くから多分大丈夫だとは思ってるわ。……恐らく」

「……かなり、自信が無いんじゃない？」

「………うん」

屋敷にいた頃は常の事としてやってきた、吸血鬼としての夜型の生活。学園が始まる頃には直さなければいけないというのに、どうもアレイシアとしては直せる自信が無いのであった。

「フィアンは先に寝ていて？ 私はきつ……とじゃ無くて、絶対に大丈夫だから」

「はい、おやすみなさい」

「ん、おやすみ」

フィアンが二段ベッドのはしごを登って上層に乗ったかと思うと、気付く頃には静かな寝息が聞こえて来ていた。

その後、深夜の零刻を過ぎた所で休憩を取るアレイシア。喉が乾いているのか、水がなみなみと注がれたワイングラスを傾けていた。口の端から水が滴り落ちているが、それを気に留める様子は無い。

「……つぶはあ！」

彼女は学園に来てからずっと気になっている事があった。それは、十二歳になれば使えるようになると言われていたあの能力の事である。

？矛盾を操る？とは言っても、どのような感覚を掴めば良いのか分からないため、練習のしようが無いのだ。まさか、何も分からないこの状態から方法を見い出さなければならぬのか。そう考えると、能力の使用は絶望的にさえ思えてくる。

こうして、どうすれば能力が使えるかと思案を巡らせている内に、アレイシアは何時の間にか眠りに落ちてしまっていた。

「おい」

「……う？」

何やら聞き覚えのある声が聞こえた気がしてアレイシアは薄っすらと目を開ける。すると?????

「……あ、わ、顔近いっ!!」

「やっと起きた……寝起きが悪いわね。ちょっと伝えたい事があったから催眠をかけて呼んでみたの」

「……今日こそは名前を教えて貰うわ」

「私の名前は教えないわよ？」

またか、と呟きつつもアレイシアは腰を上げ、ここに来る度に会うこの神の目の前に立つ。黒髪の美人さん、略して黒美さんとも呼べばいいのか、と少々違った方向に頭が働いた。何故なら、呼び名の一つも無いのは流石に不便だからだ。

「で、重要な知らせって？」

「えーと……まあ、順を追って説明して行くわ。まず、全ての世界は一つの神界、六つの魔界、そして次元を跨る無数の現界と区別される。これは分かった？」

「え、あ、分かったわ」

あまりに唐突な説明への導入に、アレイシア少々困惑気味だ。

これは要するに、彼女が知っている二つの世界以外にも、数えられないほど沢山の世界が存在するという事である。その中には俗にパラレルワールド言う、並行世界や異次元といったものもあるのかもしれない。

「これを踏まえた上で、魔界について。魔界にあるいくつかの国は、既に神界と……えー……分かりやすく意識すると、平和条約を結んでいるのよ。攻め入るな、争うな、仲良くあれ、という簡単な約束事」

「……でも、その魔界の国が必ずしも平和条約を守るとは言えないんじゃない？」

「そうね、察しがいいわ。中には神界と物流のある国まであるんだけど、条約を結んでいない、あるいは条約を守らない国もある。今回の件は、魔界のいくつかの国が協力して神界に攻め入る不穏な動きがあったから、戦力確保のためにも、なるべく早く貴女に能力を使いこなせるようになってもらいたくて」

「まだ私は能力を全く使えないけど……」

たった今まで気にかけていた事ゆえに、アレイシアは心配そうな面持ちで言う。

「貴女の魔導書に魔法陣を追加しておいたわ。その魔法陣を使えば私の家まで引つ張ってあげられるから、特別にレッスンを付けてあげる」

「ありがと、細かい事は後にして起きたら行ってみるわ。……あ、あれ……」

と、この時アレイシアは何処かに引つ張られて行くような不思議な感覚を覚え、間も無く意識は再び眠りへと落ちて行った。

「アレイシアさーん！　またですか……朝ですよー！！」

フィアンの叫び声が寝室内に響き渡る。アレイシアは机の上に突っ伏したまま、また昨日と同じ寝起きの悪さでフィアンの手を煩^{わづら}わせていた。

「うー……あと少し……半日だけ……」

「起きて下さいーいー！！」

結局アレイシアは、フィアンの猫パンチに殴り起こされ、まだ眠いにもかかわらず寮一階のレストランで朝食を取ることとなる。今回もまた、二人揃ってオススを頼まなかった事を除けば特に何事もなく食事を終えた。

「あ、今日はちょっと出かけて来るわ。夕方までには帰るんだけど大丈夫？」

「はい、大丈夫ですけど……学園内なら一緒に着いて行っても？」

「ん、あー……そうね、でも学園の外の用事だから」

学園どころか世界の外かも分からないわ、とアレイシアは脳内で付け足す。これから向かう場所は、黒美さんが待っているであろう神界だからだ。

寮の部屋へと戻って来たアレイシアはすぐに準備を始める。ベルトに魔導書と魔法薬のホルダーを装着し、寝室の机の上に置いてあった魔導書を回収した。

魔導書を見てみると、アレイシアは一番後ろの方のページに見覚えの無いしおりの様なものが挟まれている事に気付く。緋色のリボンで飾られた、彫刻入りの洒落たしおりだ。

そのページを開いてみれば、上級者向けの書籍でも見たことが無いほど、複雑で入り組んだ形状の魔法陣が描かれていた。その幾何学的な美しさと入り組んだ記号の精密さ、その全てに息を呑んで圧倒される。これが恐らく、黒美さんが追加したという魔法陣だろう。

「……凄い、けど、これは書き写さなきゃ……」

これほど大規模な魔方陣となると、本からそのまま魔法を発動させる訳には行かなくなってしまう。発動させるにしても、魔力の損

失が非常に多くなってしまうからだ。

それを抑えるため、？絶縁紙？と呼ばれる魔力を通さず弾く紙に、魔力伝導率の高い？魔導インク？で魔法陣を書き込んで行く必要がある。

幸い、アレイシアは母親の御下がりとも言える絶縁紙と魔導インクをトランクの中に詰めて来ていたため、それを用いて正確に魔法陣を書き写して行った。

それから一刻後、魔法陣の九割方を写し終えた所でフィアンが寝室の中へと入って来る。今日は出かけると言いながら、未だに出かけようとしないうアレイシアの様子を見に来たのだ。

「……それは、何ですか？」

「あ、フィアン。これは、えーと……場所を伝えるための魔法陣よ」

「もしかして、それで誰かを呼んで今日は出かけるんですか？ ……

…それにしても複雑ですね」

「違うわ、どちらかというと私が呼ばれる方……出来たっ」

写し終えた魔法陣の紙をアレイシアは床に敷くと、その上に裸足で立った。三テルム（七十五センチメートル）四方の薄い紙、破れてしまわないか心配でもあるのだが、魔法陣の中央に人差し指と中指を添えると一気に大量の魔力を流し込んだ。

「うわ……」

魔力は周囲にも影響を及ぼし、フィアンは少し気分が悪そうにへたり込む。アレイシアは更に二段回目の魔力を開放、一点に魔力を

詰め込むような気持ちで魔法陣に集中させた。

しかし、一般的な魔法使いを優に上回るその魔力量でも、魔法陣はまだ発動する兆候を見せない。

「す、凄い魔力ですよ！ 明らかに十二歳で出せる魔力じゃ……」

「……三段回目も開放しなきゃ。っ、来た！！」

アレイシアが三段回目の魔力を開放した瞬間、彼女を白い光が包み込み、フィアンは目を開ける事すらままなくなる。しかし一秒と経たない内に光は収まり、フィアンが気付く頃にはアレイシアの姿は完全に消え去っていた。

02・02 一日目の買い物（後書き）

感想評価はいつでも大歓迎です！

誤字脱字、描写のアドバイスなどもお待ちしております。

途中、地味に展開が加わっている^^；

改定後の総合評価が三千を超えました！

読者の皆様、本編の続きを待たせてしまつて申し訳ありません。

そして、ありがとうございますっ！m（　）（　）m

眩い光が収まると、アレイシアは何時の間にか白い石畳の上に立っていた。太い柱が何本も上へと向かって伸びており、流石は神の住まう家、神殿と呼ぶに相応しい荘厳さだ。

上に広がる何処までも澄みきった青い空は、ここより上には何も無いという不思議な感覚を覚えさせる。小高い丘の上に当たるのが、外に広がる景色はただっ広い青々とした草原だ。

石畳の先、一段高くなっている場所に、黒美さんは仁王立ちしてアレイシアの方を見つめていた。今までは夢の中でしか会話をした事がないため、直接会うのは始めてである。

「私の家にようこそ、早速始めましょうか」

「……これはまた、変わった服装ね」

「そう?」

黒美さんは、白い布を体に巻き付けたような奇抜な服を着ていた。神話を描いた絵画などで見受けられる? 神らしい服装? そのものである。黒美さんは疑問の表情で裾を持ち上げると、はっと気付いたようにアレイシアの顔を凝視した。

「着替えて来るの忘れてたっ!!」

「それって、普段着?」

「そうよ。最近は現界の文化に影響される神も多いけど、私はこれが好きだから。着てみる?」

「あ……い、今は遠慮します」

風変わりな神の装束に興味はあったアレシアだが、このままだと着替えさせられる未来に予想が付いたため、恥ずかしさを覚えて今はよしとした。

手を引かれて案内されたのは、石畳の更に先、本殿に当たるであろう立派な大理石造りの建物だ。二人は巨大な扉から中へと入り、広いホールの周囲を周って右の廊下へと進む。廊下とは言っても、天井はかなり高い上に横幅も異様なまでに広い。明かりはどこにも見当たらないが、屋内にしては妙に明るく不思議な感覚だ。

「さて、ここでやりましょうか」

そう言うと、黒美さんは腕を胸元の高さまで持ち上げ、両手の指先に高密度の神力を集中させ始めた。アレシアには聞こえない程の小さな声で、何やら呪文のような言葉を早口に唱えている。

しばらくすると神力の重圧で空間に穴が空き、更にその穴を神力が満たして一つの亜空間が生成された。しかしその直後、空間の穴はしばむように小さくなり見えなくなってしまう。

「……あれ、あの中に入るんじゃない？」

「そうよ。今から転移であの空間に入るわ」

？？パチンツ！

黒美さんはアレシアを抱き寄せると指を鳴らし、それと同時に二人は亜空間へと瞬間移動した。

床も壁も分らない。呼吸こそ出来るものの、この空間で下手に

移動するのは危険だと、アレイシアは思わず目を瞑って黒美さんの腰周りを抱きしめる。

スタツ?????

ふと、そこで地に足が着く感覚。不安定だった身体も重力に押され、しっかりと硬質な床の上を踏み締める。

「よし、もう大丈夫よ」

声を掛けられて瞼を開けると、何故かそこは木で造られた小屋の中だった。部屋の一角、十字の木枠付きの丸窓の外には、不思議なことに木の生い茂る森が広がっていた。アレイシアが目を瞑ったわずか数秒の間に、何も無かったこの空間にこれだけのものを創り上げたのだろうか。

「ほら、こっちに座って。説明してあげるわ」

部屋の中央の小さなダイニングテーブルに促され、啞然と立ち竦んでいたアレイシアは黒美さんと向かい合うように座る。聞きたいことが積み重なり、彼女は幾分混乱した様子だ。

「えーと……ここはどういう空間なの？」

「良い質問ね。世界の狭間に空間を作ったあの時とは違って、既に存在している空間に重ねて別の空間を存在させているの。別次元でありながらも同じ三次元に存在しているから安全よ。ちなみに、この中での一ヶ月は外での一刻になっているわ」

「んー、なるほど、多分把握した」

本来の四百倍近く時間を圧縮しているということは、それだけ多くの修行を出来るということでもあり、時とともに成長する魔力や神力の量もそれだけ早く大きくなるという事だった。

ただ、その早さで歳を取るという意味ではとても安全とは言いがたいものがある。アレイシアが不老であるからこそ、このような手法が可能となったのだ。

「この空間では何日くらい過ごせば？」

「一ヶ月、つまり二十四日間よ。外では丁度一刻が経ったあたりね」

「それくらいなら、分かったわ。よろしく願いしますっ！」

こうして、アレイシアは黒美さんの指導の下、一ヶ月の集中的な修行を行うこととなった。この後の話し合いで能力を使いこなすことを一番優先的に行うと決め、二人は修行のために小屋の外の森へと向かって行った。

修行を始めてから九日が経つ。結果から言えば、アレイシアは修行を始めてからわずか

一日で能力の感覚を掴むことに成功していた。今はまだ、自身が能力を持っているということを自覚出来る程度だが、そこまで行くにも四日はかかると踏んでいた黒美さんは非常に驚いていたそうだ。

そして今日は、二人は本当に亜空間なのかと疑いたくなるほど綺麗な湖の畔に来ていた。ここは森の外れに当たり、小屋から真っ直

ぐと森の中を進めばすぐに到着する場所である。

ここに来たのは別に、アレイシアが泳ぎたいと言った訳でも無ければ小屋に風呂が無くて水浴びにという訳でもない。ただ、修行しながらも気分転換にと外に出ただけなのだ。

「さて、神力の修行をやりたいつて言ってたわね？」

「はいっ！」

実は、精神力が必要な能力のための、瞑想や自己暗示ばかりの修行に彼女は少々飽きていたのだ。なのでこれからは、実践練習を含む神力の修行をしたいとアレイシアは黒美さんに頼んでいたのである。

神力はまさにアレイシアにとって宝の持ち腐れそのものだ。丁度そのことに勿体無さを感じていた頃、良いタイミングで修行出来る環境に来れたとも思っていた。

「まず始めに、魔力を貴女が感じ取ったのと同じ方法で神力を感じ取ってもらうわ。その辺りは敏感だからね、上手く行く筈よ」

黒美さんはそう言うときアレイシアの手を取り、視線の高さを合わせるように屈みこんで神力を流し始めた。触れ合う手から伝わる神力を感じ取ろうと、アレイシアは全神経を集中させる。

「……………どう？ 何か分かった？」

「んー。やっぱり異物感はあるけど、何処か安心するような感覚も……………これが？」

「そう、それが神力ね。安心するような感覚というのは恐らく……………」

何と説明すれば良いのか分からないけど、全てを創った原初みたいなものだからだと思っわ」

興味深そうに、触れていない方の手をじっと見つめるアレイシア。魔力の時のように、自身の中にもある同じようなモノを確実に掴むことが出来た。

「あれ？ 試し撃ちで暴発させないの？」

「……………さすがに学ばわ。それに、神力に関してはまだ使い方が分からないから」

アレイシアは微笑み返してそう言う。これだけ綺麗な湖畔を荒らすのは勿体無い、という考えも勿論あったのだが。

その後、神力は魔力の代用として効率良く使えるということを教えられ、慣れるまでは魔法を神力で発動させるのも良さそうだと彼女は提案する。魔力の操作と同じように行けば良いけど、と少々不安な考えも頭を掠めたが、それならまた練習して覚えるまでだと強く意思を固めた。

修行期間である一ヶ月が終わり、初めと比べれば神力もだいぶ大きくなった。その上アレイシアは、能力の実用的な用途を一つだけ見出すことが出来た。止まっているのに移動するという矛盾を一瞬だけ正当化し、瞬間移動をするというものである。

「あなたの能力ね……………極めれば万能よ？ 成長も早いし、そのうち

世界だって創れるようになるかも」

「管理が大変そうだからやめておくわ」

「……ま、それはそうね。もう出ましようか？」

「はいっ！」

二人は亜空間から神界へと戻り、黒美さんによってアレイシアはすぐに寮の部屋へと送られた。次に亜空間で修行するのは一週間後となっており、その頃には既に学園も始まっているはずだ。

ただ、この時一つだけ問題が起きてしまった。

「ごめんなさい、私が悪かったから言葉責めはやめて……」

「別に言葉責めはしていませんよ？」

「言葉に棘がある………なら、その魔法陣をいくらでも見ていいから、ね？」

アレイシアが到着したのは出発の時に描き写した魔法陣の真上だった。そのため、魔法陣を観察していたフィアンの真上に運悪くものしかかってしまったのである。

結局、アレイシアが魔法陣をフィアンに貸すことでこの件は落着いた。しかし、これが後に予想外の結果を引き起こすことになる?????のかもしれない。

02・03 亜空間修行（後書き）

やっと投稿できました……

時間を見つつ少しずつ書いたので、繋がりのおかしい所があるかもしれません。

誤字なども見つけ次第、伝えて頂けると嬉しいです^^；

すっかりハロウィンも近いですが、ハロウィンといえば、魔女よりもゾンビよりも吸血鬼……ですよね？（だと思いたい）

なので、ハロウィンに向けていくつかの短編と番外編を同時に執筆中です。

描写力が上がっているか心配、あとは一人称にも挑戦して行こうと思います。

ではまた、次話か番外編で！

02-04 女の子だから?? (前書き)

Trick or Treat!!

ハロウィンに書き上げずして(略) と思ったので更新です!

番外編は遅れていますが、現在は絵などもやっています……。
下手なりにハロウィン仕様のアレシアを描き続けてようやく塗り方がわかった所なので、しっかりと描いてみようと思います!

と、小説が先ですね、はい(汗

02 - 04 女の子だから??

学園に来てから一週間。入学式を翌日に控えたアレイシアは、同じく明日入学するフィアンの猫耳を弄くりながら雑談を交わしていた。椅子に座ったフィアンの後ろに立つ形で、アレイシアは猫耳のふにふにとした触り心地を堪能している。

この時二人は、入学に必要な準備を終わらせ暇を持て余していた。出来れば何かしたいと思っではいるものの、入学前にやりたいことはここ一週間でやり尽くしてしまったのだ。

「そっといえば、アレイシアさんってそういう……黒い服を良く着ていますね？ それも装飾のほとんど無い」

「これは母様の好みで着せられていたからよ。もう慣れたわ、最初は嫌だったけど」

肘をつき、少々呆れたような調子で言うアレイシア。初めて母のナディアにこのような服を着せられたのは二、三歳頃だったかと彼女は回想する。

「どうせなら、もっとお洒落してみませんか？ その、可愛いのに勿体無いですよ？」

「嫌だ、と言いたい所だけどそれも確かに……」

アレイシアは悩んでいた。前世、東次だった頃は他人にどう思われていたかは別として、自身の容姿を良く見せようとしたことは無かったのである。それが今はどうだろうか。衣服や装飾品で着飾る価値はありそうだと、自分のことながらもアレイシアは思ってしまった。

っていたのだ。

しかし、これでも元は男だった身。あまり自身を着飾らせるといふことは、何か別の、男として持っていたプライドが崩れ落ちるような感覚さえ覚えてしまう。それでもアレイシアは、この容姿を持ちながらお洒落の一つもしないのは流石に損というものではないかと思い直した。

「……分かったわ。学園で着る服を学園街に見に行ってくるわね」

「あ、私も連れて行って下さい！」

魔導書を脇に抱えた標準装備で玄関へと向かうアレイシアをフィアンは追い、二人は学園街へと服を探しに出かけて行った。

学園街の中心部で、二人は服屋を片っ端から当たって行く。既に探し始めて半刻ほどが経つのだが、アレイシアが納得できるものはなかなか見当たらない。

「無いわね……」

「次はあの店はどうですか？」

少々落胆気味のアレイシアは、フィアンが指差した先の店に目を向ける。すると思わず、入り口付近に掛けられた服に目が留まった。

「あれは……！」

「何かあったんですか？」

先ほど同様、駆け出すアレシアをフィアンは追いかける。

店へと近付いて行くに連れてはつきりと見えて来たその服は、身長の小さいアレシアにも丁度良い大きさだと分かった。そのことを確認すると、アレシアは服の肩の部分を両手に持つ。

「これですか……黒のドレスだから良く似合うと思いますよ？」

その服は、上下の別れたドレスのようなものだ。スカートの裾と袖口には薄くフリルがあしらわれ、肩の部分はやや膨らんだ形状になっている。

「黒ゴス……………」

「え、何ですか？」

「……別に何でも？ この服は気に入った、買うわ！」

やけに気合の入った様子で奥の椅子に座っていた店長を呼び、アレシアはその服を半ば押し付けるように手渡した。先程の会話で何かが吹っ切れたのか、彼女は服を買うことに楽しみを見出しているようだ。

「これをお願いします」

「はい、つと。この服は嬢さんに良く合うと思うし、少し安く銅貨七枚のところを五枚半枚でどうだ？」

突然の値下げが相手から提案された。アレシアはもちろんこれを断る理由も無いため、ベルトに掛けられた財布の袋から銅貨六枚

を取り出す。それでも実は、結構高いと言える値段なのである。

「ありがと、良い服を見つけれられたわ」

「それはどういたしまして。はい、お釣りの鉄貨六枚！」

この国では、鉄貨十二枚で銅貨、銅貨八枚で銀貨、銀貨十二枚で金貨、金貨二十枚で白金貨と定められている。

アレイシアは始めこそ、誰がこんなに面倒臭い通貨単位を作ったのかと思ったのだが、これらの価値一つ一つを覚えるにもそれほど時間はかからなかった。何事も、要は慣れである。

「ありがとうございますー！」

店員の一人に見送られ、二人は服に似合うアイテムを求めて更に店を探し回った。

日が傾き始める頃には髪に付けるリボン用の黒い紐、緋色のブローチなどを手に入れ、アレイシアは非常に満足した様子で寮への帰路についた。

入学式当日の早朝、起床時間を正したお陰でフィアンの猫パンチを喰らうこと無く起きることが出来たアレイシアは、先日買ったばかりの新品の服に着替え始めていた。この服を下ろすのは、入学式である今日にしたかったのである。入学式までまだ二刻以上はあり、着替えを始めるには少々早すぎるのだが。彼女はそれだけ服を着ることと、入学式を楽しみに思っていたのだろう。

寝巻きとして使っている薄手のワンピースを脱ぎ捨て、まずは新

品の服のスカートの部分を身に付ける。アレイシアに合わせて作られたかのようにぴったりのサイズで、スカートが太腿に触れる感触も心地良い上質な布で作られていた。

上半身の部分に袖を通し、胸元を蝶結びで留め、同じように髪にもアクセントとして黒い紐を結びつける。最後に襟の下部をブローチで留めれば着替えは完了だ。

ちょうどその時、どうやら先に起きていたらしいフィアンが部屋の中へと入って来た。

「アレイシアさん、着替え終わ……」

「あ、フィアン。いま着替え終わった所よ」

「……凄く似合ってます！」

「あ、ああ、うん、ありがとう」

急に似合っていると言われ、慣れないアレイシアは慌てて左斜め下四十五度を向いて紅潮した顔を隠す。内心嬉しかったということは、表に出すに出せなかった。

「え、えーと、朝食をレストランで食べたらすぐに、入学式のある校舎北の大ホールに向かうという事でいいんでしょうか？」

「……貴女は、気が早いわね。まだ一刻半はあるのに」

「あ……で、でもそれを言うなら！ アレイシアさんもまだ着替えなくて良かったと思いますよ？」

「……………完全にお互い様だった。そのことに気付いたアレイシアは、

そうね、と小さく笑いながらベッドの淵に座り、また何気ない会話を交わしながら時間を潰すのであった。

02-04 女の子だから?? (後書き)

これから学園編なので、過去の感想を参考に、出来るだけ矛盾の無い設定を組んで行きます。

では、誤字脱字の報告やアドバイスなどをお待ちしております！

……あ、もしもアレイシアが「お菓子くれなきゃいたずらするぞ！」って来たら、お菓子は隠して血を吸われてあげてくださいね。

Happy Halloween!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0560p/>

神の暇つぶし 吸血鬼の饗宴 ~ Le Festin de Vampire.

2011年10月31日19時00分発行